

公益財団法人 東洋文庫
現代中国研究班 編

『新編 明治以降日本人
の中国旅行記（解題）』

2025 年 3 月
公益財団法人 東洋文庫

目 次

はじめに	i
2023 年増補版 はじめに	iv
2021 年補遺（戦後篇） 解説	v
1980 年版 はじめに	vii
凡 例	ix
本 文 戦前の部	1
本 文 戦後の部	95
本 文 LT/MT 貿易関係資料 旅行報告書	224

はじめに

本書は、市古宙三を中心とする東洋文庫近代中国研究委員会が1980年に刊行した『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（非売品。以下「1980年版」）に、現代中国研究班が補遺・増補版を作成し、併せて一体としたものである。もともと、1960年代はじめから近代中国研究委員会が蒐集した旅行記約400冊は研究室に別置されていたが、現在は書庫に混排されている。現代中国研究班は1980年以降に東洋文庫に収蔵された旅行記を含めて、改めて書庫の悉皆調査を行い、戦前・戦後に印刷あるいは刊行された旅行記をリストアップし、解題を作成した。これが2021年の補遺（戦後篇）版（第1期）と2023年の増補版（第2期）である。さらに、2023年度には東洋文庫蔵本と新規入手本の解題を作成し、増入した（第3期）。新編では1980年版と併せて575冊の旅行記の解題を収録したことになる。

なお、1980年版では付録に「『朝鮮満州 支那案内』抄」が収められていたが、本書では割愛した。また、著者別索引も削除した。

収録文献の推移は以下の通りである。（増補の過程で解題が重複した文献は1980年版の方を削った。）

	「新編」採録数 (重複を除く)	戦前	戦後	重複	合計	備考
1980年版	399	163	236	18	417	
第1期	40	0	40	1	40	※80年版との重複
第2期	68	21	47	1	70	※第1期との重複
第3期	68	31	37	0	68	
合計	575	215	360	20		

1980年版と本書（新編）には、編集の上でいくつかの違いがある。

1. 1980年版では収録文献の刊行期限を1979年としていたが、本書では1980年までとした。その理由は増補版「はじめに」に記した通りである。
2. 1980年版の蒐集対象は印刷・刊行物に限られていたが、本書では範囲を若干拡大し、稿本・写本・手書きノートの種類も採録した。また、戦後の時期については、古書として入手した若干冊を新たに登録の上、採録した。
3. 本書では東洋文庫収蔵の文献以外に、国会図書館デジタルコレクションで利用可能なものを10種ほど加えた。また、愛知大学国際問題研究所が所蔵する「LT/MT 貿易関係資料」のうち、内部向け旅行報告書17点を巻末にまとめて収録した。

4. 1980 年版の解題執筆者は匿名となっているが、本書で増補した解題は末尾に執筆者名を記した。
5. 配列を 1980 年版が旅行年順としていたのを、本書では刊行年（刊行年未詳の場合は訪中年、また稿本や手書きノートの場合は執筆年）順に改めた。

さて、1980 年版の「はじめに」で市古宙三は「明治以来日本で刊行された中国旅行記全体の数に比べれば九牛の一毛にすぎない」という。ほとんどゼロから始めた旅行記蒐集だけに、制約も大きかったことであろうし、入手したくてもできなかったものも多かったに違いない。われわれも、2018 年に補遺の作業を始めたときは、そう思っていた。東洋文庫に収蔵されている文献という前提があるにせよ、およそ 100 余年にわたる日本人の旅行記を探し出せば、1980 年版 400 冊のゆうに 2 倍、3 倍の数にのぼるのではないかと。しかし、作業を始めてみると、とうてい倍には及ばないことが判明してきた。現在、蒐集すべくしてしきれなかった（入手できていない）旅行記が 30 数種あることはわかっているが、それらを併せても、狭義の旅行記は 700 冊をこえることはないだろう。もちろん、蒐集の対象が刊行物（書物や冊子）であり日本人が書いた旅行記に限られるという条件が、採録範囲を狭めている可能性は大いにある。

たとえば、1980 年版は、1945 年から 1949 年までの日本人中国旅行記がほとんど存在しないことを示している。これは、本書の採録方針からすれば、また、GHQ による検閲という時代性に鑑みれば、当然の帰結であるが、当時の日本人は中国に対する興味関心を失ったわけではなかった。このように定義の仕方や各時期の状況に応じて、日本人中国旅行記の範囲には振れ幅が存在する。しかし、だからといって、1980 年版にある「九牛の一毛」とはオーバーな表現である。大雑把な推測になるが、本書は明治初年以來 1980 年までに書かれ刊行された旅行記の 8 割方を網羅しているのではないかと。読者あるいは利用者は、本書を通じて、近現代中国を旅した日本人の記録を、一つの総体＝資料群として解読することができるはずである。

また、1980 年版「はじめに」は「1962 年の覚書貿易の開始」が訪中者増加の転機となったというが、これも再考が必要である。たしかに LT 貿易覚書の締結により、日中間の人的往来が増えたことは事実である。中国に長期滞在する日本人も 1960 年代なかばには増加した。ただし、それ以前にも、中国共産党中央政治局がより広範な各界の日本人を抱き込む政策（「対日政策活動に関する方針と計画」、1955 年 3 月）を打ち出したことにより、1956～58 年が日本人訪中の最初のピークをなしたことは見逃せない。「1962 年の覚書貿易の開始」は戦後日本人訪中者の第 2 のピークをもたらしたと言い直すべきだろう。さらに、1960 年前後には中ソ対立の激化にともない、日本人専門技術者の訪中が中国側の重視するところとなったことも、本書からは読み取りにくいかもしれないが、すでに先行研究の指摘がある。

採録にあたり、一番頭を悩ませたのは、旅行記の定義、すなわち採録の範囲である。増補版「はじめに」に記したように、「狭義の旅行記のみならず、訪問・視察・短期滞在・留用などの記録、また写真集なども採録した」ものの、「回想録や調査記録、旅行案内書、中

国訪問をもとにした評論などは除いている」という方針を立ててはみた。だが、厳密な線引きは思いのほか難しかった。1980年版では旅行記の範囲をやや狭く設定しているようである。これに対し、条件をやや緩めた（長期滞在記の類も採録した）本書の増補作業では、しばしば判断に迷ったケースがあることを告白しておかねばならない。さらに、一部ではあるが、非刊行物（稿本や手書きノート）を加えたことには異論が出るかもしれない。この点については、東洋文庫に来れば現物を見られるという1980年版の原則を優先したことを、読者・利用者は諒とされたい。なお、本書の「中国」には、台湾・香港・マカオを含まない。

本書の解題執筆および編集作業に当たったのは、増補版と同じく、池田尚広、久保茉莉子、関智英、辻直美、中村元哉、村田雄二郎、山口早苗、吉見崇の8名である。相原佳之、青山治世の両氏には校正にあたり格別の配慮を賜った。

愛知大学国際問題研究所には「LT/MT 貿易関係資料」の利用と複製の許可をいただいたことに、この場を借りて深甚の謝意を表する。本書が近現代の日中関係史に新たな関心と興味を呼ぶ端緒となり、研究や社会教育の深化に資することになれば幸いこれにすぎるものはない。ひろく江湖の利用と批正を乞う次第である。

2025年3月

東洋文庫現代中国研究班
村田雄二郎

2023 年増補版 はじめに

東洋文庫超域アジア研究部門に置かれた現代中国研究班国際関係・文化グループは、2018 年度に『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（東洋文庫近代中国研究委員会編，1980 年刊。以下「本篇」）を補充するプロジェクトを立ち上げ、「本篇」未収録の戦後刊行物について新たに解題を作成し、「補遺（戦後編）」として 2021 年 3 月に PDF 版をウェブに公開した（第一期）。

その後、本プロジェクトのさらなる進展と充実をめざし、2021 年度から戦前・戦後を含む時期の悉皆調査を行い、リストの追補と解題執筆の作業を継続した。結果として、新たに加えられた旅行記のリストと解題を第一期の成果と併せ、増補版としてここに公開するに至った（第二期）。

第一期の「補遺（戦後篇）」が 40 冊（1981 年以降の 3 冊を削除），第二期の追補でさらに 68 冊が加わり、「本篇」の増補版としては計 108 冊（文献 1 件を 1 冊とカウント）を収録することになった。増補にあたっては、以下の方針を定めた。

- ① 戦前（明治以降 1945 年 8 月まで）の旅行記を含め、1980 年刊行の「本篇」に採録されなかった（あるいは「本篇」刊行後に購入・寄贈された）東洋文庫蔵本を対象にした。その中には、稿本や写本の類も含まれる。これにより採録の範囲は若干拡大することになった。
- ② 採録時期（出版年）の下限を第一期では暫定的に 1979 年としていたが、第二期では便宜的に 1980 年に改めた。その理由は、1981 年以降、訪中旅行記の数が激増し、その性格（ひいては日中関係のあり方）が大きく変わったと考えるからである。
- ③ 第一期と同じく、狭義の旅行記のみならず、訪問・視察・短期滞在・留用などの記録、また写真集なども採録した。ただし、回想録や調査記録、旅行案内書、中国訪問をもとにした評論などは除いている。
- ④ 東洋文庫に収蔵される書籍以外に、戦後部分については、国立国会図書館で閲覧可能な日本人中国旅行記も加えることとした。
- ⑤ 解題の作成にあたっては、第一期同様、記名方式を取り、末尾に解題執筆者の氏名を掲げた。

以上の方針にもとづき、2021 年度より追補本のリストと解題の作成を進めた。作業にあたったのは以下の 8 名である。池田尚広，久保茉莉子，関智英，辻直美，中村元哉，村田雄二郎，山口早苗，吉見崇。

本プロジェクトは、次年度に向けてさらなる計画を立てている。「本篇」と今回公表する増補版と一体化して統合版とし、テキストベースでウェブ上に公開して利用者の便に供することである。すでにデジタル・テキスト化はほぼ完了し、目標としては2024年度以降に東洋文庫のメディア・レポジトリに統合版の解題全文を公開することを予定している。メタデータの作成やデザイン上の工夫など、技術的な問題を含めて検討すべき課題は少なくないが、なるべく早い時期の公開をめざして、「明治以降日本人の中国旅行記」データベースを完成させる所存である。

2023年9月25日

東洋文庫超域アジア研究部門
現代中国研究班 国際関係・文化グループ
村田雄二郎

~~~~~

## 2021年補遺（戦後篇）版 解説

1980年3月、東洋文庫近代中国研究委員会は1960年代から蒐集した日本人の中国旅行記を整理し、各冊に解題をつけて『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』（以下、本篇）を刊行した。中心となったのは市古宙三で、1874年から1979年までに刊行された旅行記400冊余が年代順に収録されている。

1874年といえば、近代的条約である日清修好条規が締結されて3年目、また、1979年といえば、日中両国が平和友好条約を結んだ翌年にあたる。戦前戦後をまたぐ120余年の日中関係の歴史を、日本人の中国旅行記を介して通観しようという試みは、中国ブームが日本で巻き起こった1970年代末の状況に照らしてみると、まことにタイムリーで意義深い試みであったように思われる。

それから40年を経て、日中関係は大きく様変わりし、かつての「友好」と「反省」という枠組みにはとうてい収まらないほどの錯綜した状況を呈している。そうした中で、日本では資料の公開などにも後押しされて、戦後の日中関係が歴史研究の対象になりつつある。現代中国研究班（国際関係・文化グループ）ではそのような状況に鑑みて、戦後日中関係を研究するための基礎的作業の一環として、本篇には未収録（旧近代中国研究室別置書以外のもの、またはその後購入したしたもの）である戦後の中国旅行記をリストアップし、解題をつけるプロジェクトを立ち上げた。2018年度のことである。作業にあたったのは、総括の村田雄二郎のほか、以下の6名である。池田尚広、久保茉莉子、関智英、中村元哉、山口早苗、吉見崇。

補遺は本篇と同じく〔正確には「本篇と異なり」、第二期にて訂正〕刊行年順で並べた。滞在記や写真集など、厳密に言えば、旅行記ではないものも含まれるが、日本人による中国滞在の記録とみなせるものは広く収録した。その結果、補遺に挙げたのは、1953年から1979年前後まで刊行された41冊〔正確には40冊、第二期にて訂正〕の旅行記である。（補遺には一部本篇と重複したものおよび1980年以降のものが含まれる。）

本来であれば、補遺を本篇と一体化し、かつ現在まで網羅的に収録すべきであろう。だが、1980年代以降は爆発的に中国旅行記の類の出版物が増えること、また、旅行の質や形態も大きく変貌することなどを考慮して、補遺はとりあえず1979年を一つの区切りとすることにした。また、本篇との一体化は技術的に困難なので、便宜的に本篇のPDFファイルをアップすることにした。

現代中国研究班（国際関係・文化グループ）では、今後、より網羅的な旅行記の収集と分析につとめ、補遺を適宜バージョンアップしてゆく所存である。また、内容分析やデータの補充を行うことで、戦後日中関係の研究に新たな視野を拓いていきたいと切望している。広く江湖の理解と協力を仰ぐ次第である。

2021年3月15日

東洋文庫超域アジア研究部門  
現代中国研究班 総括  
村田雄二郎



## 1980 年版 はじめに

明治以降、日本人の中国を旅行するものは多く、かれらが残した中国旅行記の数も少ない。ところが 1945（昭和 20）年以来、日本の敗戦、中国の内戦、中華人民共和国の出現、日中の不和と相ついで、20 年近くの間は日本人の中国を旅行するものは、1955～58 年を除き、寥々たるありさまであった。

この状態を変えたのは、1962 年の覚書貿易の開始である。この前後から中国を旅行する日本人はだんだんとふえていって、「四つの現代化」以来は、中国旅行が日本における一種のブームとさえなった。そしてこれらの旅行者は、ほとんど例外なしといっていいほどに、訪中報告、印象記、感想文を書いているので、最近では毎月何冊というペースで旅行記が刊行されている。

私たちは、中国旅行に回復のきざしの見えはじめた 1960 年代のはじめごろから、日本人の中国旅行記をできるだけ集めてみようと思志した。その結果、1967 年までにある程度集めることができたので、同年の秋、東急百貨店日本橋店で開かれた「東洋文庫五十周年展」には、日本人の新中国旅行記 135 部を展示した。その後、中国旅行ブームがおこるに従って、研究室に別置される中国旅行記の数は増して行き、今日では、明治・大正・昭和 3 代を通じての旅行記は、400 を越すまでになっている。

勿論この数は、明治以来日本で刊行された中国旅行記全体の数に比べれば九牛の一毛にすぎない。しかしここいらで近代中国研究室に集まったものを一応整理し、旅行記蒐集の一つのステップにしたいと考えた。かくして編集、刊行されるにいたったのが本書である。

本書は、東洋文庫近代中国研究室に別置されている、明治以降日本人の中国旅行記に解題を付したものである。排列は旅行の年代順（旅行記発行年順ではない）にした。解題は、旅行の目的・時期・場所、内容の特色など、基本的なこと、わりあいに客観的に書けることだけにとどめた。『近代中国研究センター彙報』4, 5, 13 に載せた「新中国旅行記」の解題はそのままとり、他の解題の作成には、本庄比佐子・蜂屋亮子・飯田隆子と私とが当たった。なお見出しの最後の〔 〕内の数字は、近代中国研究室別置図書のリクエスト番号である。また本文の末尾に著者別索引（251～263 頁）をつけた。

巻末に『朝鮮満州 支那案内』を抄録した。これは、鉄道院（国鉄の前身）が 1919（大正 8）年 10 月に発行した旅行案内である。縦 16 センチ、横 10.5 センチ、縦 2 段組、本文 494 頁、付録 52 頁という、小型の分厚い本で、発売所は東京市麹町の丁未出版社、定価は金五円である。恐らくよく読まれたのであろう、初版は 10 月 1 日に発行されたのだが、10 月 15 日には再版、11 月 1 日には 3 版が印刷発行されている。なお本書の編集経緯や構成、内容については、複製した「緒言」「目次」に詳しいから、それを見てほしい。

私たちが清末、民国初年の文献を読んでいると、北京や南京などの都市にある官衙・学校・寺院・会社・商店や公園・街路の名前にしばしば出会すが、それが何処にあるのか、なかなかわからなくて困る。ところが本書には都市の状況（1919 年現在）が細かに記されているので、こんな場合に役立つかと思い、北京・天津・漢口・南京・上海・広東（広州）の部だけである

が、ここに抄録した。また現在は中国旅行ブームであるが、北京・天津などの都市を訪れて、本書をひもときながら、60年前の状況と比較してみるのも面白いかと思い印刷した。なお、挿入した各都市の地図は、原地図が多色刷であった点を除けば、大きさ、記載事項などすべて元の通りである。

1980年2月1日

市古宙三

## 凡例

- ◆ 書誌情報は、書名・編著者・出版地・出版者・出版年・総頁数・東洋文庫請求記号、そして解題の順に並べた。また、末尾に解題執筆者名を記した。解題執筆者名のないものは、1980 年版である。
- ◆ 請求記号のないものは、東洋文庫に未収であるが、国立国会図書館デジタルライブラリーで閲覧可能な文献である。
- ◆ 並びは出版年順としたが、出版年が不明、または非刊行物（稿本など）の場合は、訪中年を出版年と置き換えた。同一年の場合、編著者の五十音順に配列した。
- ◆ 収録文献の下限は 1980 年（刊行年）とした。
- ◆ 文中に現れる人名については、すべて敬称を省略した。
- ◆ 文中の漢字は、原則として日本の常用漢字・人名漢字を用いた。1980 年版にあった「厦」「峯」「甯」「砒」「烟」「竜」の文字は、それぞれ「廈」「峰」「寧」「鉍」「煙」「龍」に揃えた。
- ◆ 1980 年版には漢字送り仮名や仮名遣いにばらつきがあるが、あえて統一しなかった。また、「記念」/「紀念」等の表記もそのままにした。
- ◆ 1980 年版の地名表記には一定していないもの（例：哈爾濱/哈爾浜/哈爾賓/ハルビン/ハルピン）があるが、すべて原文のままとした。1980 年版にある「満州」の表記はすべて「満洲」に統一した。
- ◆ 1980 年版の解題は西暦の後に元号を併記しているが、増補した解題は西暦のみ表記した。
- ◆ 1980 年版の明らかな誤字や誤記は断りなく改めた。また、今日の時点から適宜表現を改めた箇所もある。補充が必要な箇所は【 】にて示した。
- ◆ 1980 年版にあった「中国旅行記著者索引」および「『朝鮮満州 支那案内』抄録、都市地図 6 葉は削除した。

## 戦前の部

1874

乗植日記／衣笠豪谷著

写本 1874-75（明治 7-8） 1 函 6 冊 [XI-6-B-d-24]

筆者は備中（岡山）窪屋郡白楽村（いまの倉敷市白楽町）出身の日本画家。名は済，字は紳卿。1873 年に中国画を学ぶために清国に渡り，翌年まで滞在した。漢文で綴られた日記であり，稿本ではなく，複数名の手で浄書された写本の彩色複写版である。管見の限り，稿本は第 4 冊のみ岡山県立美術館に蔵する。

明治初期に中国を訪れた日本人は少なくない。ただ，記録や著書で江湖に広く知られた事例はわずかである。その中で，上海を拠点に，蘇州・杭州・鎮江・南京・揚州・寧波・天津・北京・漢口・岳陽など一年半にわたり中国を跋涉した本書は，刊本ではないものの，近代日本の中国旅行記としてほぼ最初期のものと言えよう。各地では文人墨客との交流や書画骨董の蒐集の様子がつぶさに綴られる。著者は，現地では専門の画業のほかに，農業方面の研究調査に力を注ぎ，帰国後は勸農局に勤め，養鶏法や孵卵法の普及に努めた。

衣笠が遺した絵画は主に岡山県立美術館に収蔵される。なお，本書の紹介文として張明傑「明治初期日本書画家の中国体験：衣笠豪谷の未刊日記を中心に」（『知性と創造——日中学者の思考』第 6 号，2015 年 2 月，日中人文社会科学学会）がある。（村田雄二郎）

1875

北支那紀行／曾根俊虎著

1875（明治 8） 2 冊 [2421]

前篇は，「天津総説」（1～49 頁）・「紀行」（51～252 頁）・「雑誌」（253～300 頁）及び「別録江蘇浙江二省紀行」を収む。「紀行」は 3 篇あり，1875（明治 8）年 7 月 4 日～8 月 9 日の，天津－盛京間を往来した「遼東馬賊割拠セル地方ヲ探視セン」とする旅（51～168 頁），同 9 月 25～27 日の，「新城，大沽，北塘等ノ諸砲台ヲ探視セン」とする旅（169～218 頁），及び，同 10 月 15～25 日の，「登州蓬萊関ノ鎮台ヲ探り」また「朝鮮ノ内地ヲ諳知セル者ヲ得ン」とする旅（219～252 頁）の旅日誌で，みな天津が出発点である。何れにも通過した村々の地形や気候，遊んだ名所旧跡のスケッチがある。「別録」は 1875 年 12 月 11～28 日，上海－杭州を海路で往来した旅のスケッチ入り日誌で，町田実一海軍大主計が同行。「雑誌」は，旅行中に得た橋，道路，旅舎，物価，各地点間距離などに関する記録である。

後篇は，1876 年 4 月 9 日～6 月 10 日にわたる，上海・南翔鎮・嘉定県・太倉州・常熟県・福山口・通州・如皋県・唐湾鎮・泰州・興化県・阜寧県・安東県・沭陽県・海州・日照県・膠州・即墨県・平度州・萊州府・黄県・大辛店・煙台港・営子港・大沽・天津などのスケッチ入り旅日誌で，前海軍士官町田実一が同行。巻末には，通過した各地における，さまざまな商品の値段や気温，各地点間距離が，まとめている。

## 1883

清国漫遊誌／曾根俊虎著

東京 續文舎 1883（明治16） 107頁 [6962]

著者は、広東・香港・上海・天津・遼東などを前後6回訪れている。本書は、「清国漫遊誌 第1編：西湖之部」とも題され、1874（明治7）年12月11日～28日に、町田柳園と寧波人芝亭（通訳）を同行者に、上海から西湖に遊んだときの記録である（著者は1874年に上海に渡り、同地に寓居していたという）。

一行は、12月11日に上海の申城を出発し、航路で龍華港・青浦県・朱家角・西塘・嘉興府・石門県などを経て、16日に杭州に着いた。西湖のほか、浄慈寺、岳飛の墓などを訪れているが、浄慈寺の僧からきいた長髪賊つまり太平天国のくわしい話や、同僧からもらった1858年付の洪秀全以下諸王の名の檄文のコピイの全文を記録している。20日には杭州を発ち、寧海州・海塩県・乍浦城・平湖県・西塘・茅夜橋などを経て、28日に上海に帰った。折々興にのって得た詩文や、各地の眺望が記され、また、各地の地形・物産や『摺紳全書』から得た行政官の名などが記されている。

## 1884

西航漫吟／莊田胆齋著

東京 1884（明治17） 1冊7丁 [XI-6-B-d-1005]

莊田胆齋（1815-1876）は幕末・明治期の書家。本名は忠坦、字は君平、胆齋は号。会津藩士の家に生まれ、藩校日新館で学び、後に上京して巻菱湖に師事、藩の祐筆に取り立てられる。維新後は福島県や文部省に勤めるが辞職を繰り返し、清国に渡って書家と交わり、帰国後は東京で書塾を開いた。本書は、1873年7月横浜を発ち、上海－寧波－上海－蘇州－杭州－上海を巡った際の旅行記で、題名の通り、旅先で詠んだ漢詩と帰国後に羽峯南摩・谷口藍田・小笠原午橋・草場船山が寄せた評語を含む。前3者は旧会津藩士であり、胆齋の知友であった。羽峯南摩の序と馬島杏雨（同じく旧会津藩士）の跋がある。（村田雄二郎）

## 1885

在清国見聞随記／後藤昌盛著

1885（明治18） 1冊 [1882]

著者は、日本人留学生として、清仏戦争の最中に上海に着いたようである。まず1884（明治17）年の上海における商品の相場が1883年のそれとくらべて簡単に記されている。つぎに大沽の砲台、大沽湾兩岸の農家、天津の兵営、天津から通州に至る間の田園、馬耕、運搬車、農家の食糧のこと、十三陵・八達嶺の印象などが記されている。

後半は「清国内地旅行記——鳳凰山及松江府之部」と題される漢文。著者は1885年2月11～15日に、白尾春翠・森春電とともに鳳凰山・松江府を旅行した。そのときの漢詩入り旅日誌である。

### 第一遊清記／小室信介著

東京 1885 (明治 18) 54 丁 [2436]

著者は、清仏戦争の戦況を視察するために 1884 (明治 17) 年 8 月 27 日に東京を発ち、同 11 月 2 日には長崎に戻る。中国滞在は 2 ヶ月ほどで、本書はその間の見聞を記憶によって書き下したものだ。まず上海に 1 ヶ月ほど滞在し、9 月 27 日に天津を発ち、10 月 4 日天津から通州に向かい、さらに北京に入り、10 月 9 日に北京城内を一遊し、10 月 12～15 日は長城旅行をし (十三陵・八達嶺を訪れ、臥仏寺・碧雲寺もみて、万寿山・円明園をめぐる北京に戻る)、10 月 19 日北京を発ち天津を経て上海に戻り、10 月 31 日上海を発って帰路についた。

当地における清仏戦争は、日本で想像していたような重大な戦事ではなく、これは「意想外ノ第一着」であったし、実地にみたものと『申報』『滬報』の報道をくらべると、中国人の書くものに真実は 10 分の 1 か 20 分の 1 しか含まれておらず、中国人のホラの大なることは聞きしにまさるものであったという。また清仏開戦や戦争遂行の仕方からみて中国人のすることには色々と「意想外ノ」ことが多かった、中国要人の多くは政情に迂遠な頑固者で人物というべきは李鴻章のみである、それでも中国には国情に「慷慨悲歌ノ士」も多かろうとの想像もこれまたはずれた、中国人は概して「貪欲愛錢ノ小人ノミ廉恥モ知ラズ忠義モ無キ只私利ヲ営ムコトニノミ營々汲々ト」している、清仏戦争中も売国者が多かったなどと記す。また北京城内の印象はまず不潔、つぎが塵埃の多さであり、道路は悪く乞食が多い、等々と記す。

## 1888

### 漫遊見聞録／黒田清隆著

1888 (明治 21) 2 冊 [398]

著者は、病を理由に官を辞して各地を漫遊したいと申し出たが、後者の件のみ許され、また 1885 (明治 18) 年 2 月 25 日に天皇から清国に行くならフランスと交戦中故見聞したことを逐一上奏せよとの命令を受け、同年 3 月 6 日横浜を出発した。香港・広東・澳門・西貢・新嘉坡・福州・澎湖島・淡水港・鶏籠港・上海・天津・大沽・北京・宣化・張家口を訪れ、上海に戻り、揚子江を、鎮江・安慶などで下船しつゝさかのぼり、漢口に至り、さらに宜昌まで行った。同年 9 月 5 日、横浜に帰る。

本書上篇は、清国の政体・風俗・度量衡および貨幣・関税・船舶・運河・黄河・貿易・兵事について報告し、また上海については、主として商業・製造業・貿易に関するこまごまとした事実や数字をあげて説明している。下篇は、芝罘・天津・漢口・鎮江・蕪湖・九江・宜昌・福州・淡水・広東・香港などの記録で、主として貿易の状況を品目や数字をこまかくあげて説明し、さらに「亜細亜東部各港里程表」・「上海ヨリ長江ヲ沿リ四川重慶ニ至ルノ里程表」を載せる。巻末に日記があり、今回漫遊の全期間の気候・気温をはじめ、どこへ何で着き、同行は誰で、訪問先はどこで、誰と会見し、何をしたかということを簡単に記す。

### 北清見聞録／仁礼敬之著

東京 亜細亜協会 1888 (明治 21) 224 頁 [2984]

仁礼敬之 (にれ・たかゆき、1861-1896) は薩摩藩士の出で、初期アジア主義団体である興

亜会（1880 年設立）、およびその後身の亜細亜協会（1898 年に東亜同文会に吸収）の会員。興亜会の支那語学校で中国語を学び、1883 年に海軍の留学生として上海に渡った。福州では清仏戦争で揺れる現地社会を実見し、本国に報告書を書き送った。84 年秋には北京に、85 年には天津に移り、86 年に帰国した。農商務省に勤めた後、95 年に台湾に移って総督府民政局殖産興業部商工課心得となり、翌年民政局参事官に任命された。

本書は「原ト北支那商況觀察録ト名ケ北清地方商業ノ実況ヲ輯録スルヲ以テ主旨ト為スト雖モ亦タ往々其政治経済ノ概勢ヲ附説シ以テ閱者ノ参照ニ便ス」（凡例）とあるように、北京・天津一体の商業を主とした現地事情紹介書である。書題は榎本武揚の揮毫。また、黒田清隆の題字と長岡護美の序がある。目次は以下の通り。

第一編 北京銀行（附貨幣制度）、放帳局、天津塩商、天津銀行

第二編 天津当舗、天津洋行、五金（附鋁業概説）、牙行、応差（附徭役）、貸借訴訟、商事慣例

第三編 関税、厘捐、田賦、契税（附保甲）

第四編 郵政、道路、運輸、打包、商家（附各種書式）

第五編 市場（附慣行）、度量衡、貨幣図解、物価、鴉片

第六編 招商局、電報局、鋁務局、国家経済（附結論）

ただし、本書は第三編で終わっており、第四編以下は途絶した。著者には、本書のほかに『清仏戦争日記』（春陽堂、1894 年）、『清国商話』（経済雑誌社、1895 年）の著がある。また、研究論文として久保亨「仁礼敬之の『北清見聞録』と黎明期のアジア主義」（『アジア学の宝庫、東洋文庫——東洋学の史料と研究』勉誠出版、2015 年）がある。（村田雄二郎）

## 1892

### 支那漫遊実記／安東不二雄著

東京 博文館 1892（明治 25） 200 頁 [2373]

著者は、1891（明治 24）年 9 月に東京を発ち遠洋航海の途にのぼり、各地を漂泊の末、中国に渡り、主として長江流域を数ヶ月漫遊してその実情と富源について考察し、その志なかばにして 1892 年夏、徴兵検査のため帰国した。本書はその間に随聞随録した『国民新聞』『教育時論』などへの通信を、時事関係をはぶき、また加筆訂正のうえ、1 冊にまとめたもの。欧米の実情については微細なことまで知りたがる日本人が、隣接する中国の実情・地誌について、なんと冷淡なことか、まともな案内書・地理書もない、という批判と、日本国民は「南北東西に商業線、航海線を拡張する所の勇敢なる遠征的国民」たれ、という熱望をこめて、まずは見聞を記した、という。中国の各省別面積、人口、政府の収入、貿易額などについて、既存の統計書による簡単な概観をなし、衣服、飲食、家屋、商店組織、取引の仕方などについて見聞を記し、商業活動のやり方からみれば、「勤勉、節儉、耐忍にして能く其業を永續し、同業者の一致団結心に富むゆえ「支那人怖る可し」、と観察する。中国の地勢を論じ、とくに、天津・牛莊・芝罘・上海・鎮江・蕪湖・九江・漢口・宜昌・重慶・寧波・温州・福州・廈門・台湾・打狗・淡水・雞籠・広東・汕頭・瓊州・北海・香港の各貿易港について、その特徴を論じている（必ずしも行ったわけではないらしい）。また、婚姻、葬礼、祭祀、寺院の生活などについて

て、民俗学風な記述がある。随所で、中国各地にいる数少ない邦人の生活や活動にふれている。

#### 観光紀遊／岡千仞著

東京 1892 (明治 25) 10 巻 [II-11-A-53-0]

岡千仞 (1833-1914) は仙台藩出身の漢学者。号は鹿門。江戸の昌平黌で学び、幕末には勤王を唱え、投獄された。明治維新後、一時官職に就くが、1880 年以降は在野の漢学者として家塾綏猷堂を開いた。門生に原敬、片山潜、尾崎紅葉、北村透谷らがいる。また、1877 年、東京に清国公使館が開設されると、館員たちと交流を重ね、79 年『普法戦紀』(1873 年刊)の著書で日本でも知られていた王韜の来日時には親交を結んだ。

岡は 1884 年 6 月から 85 年 4 月まで上海・江南・北京・広東を遊歴、漢文による日記をまとめて刊行したのが本書である。内容は、巻一「航滬日記」、巻二「蘇杭日記巻上」、巻三「蘇杭日記巻下」、巻四「滬上日記」、巻五「燕京日記巻上」、巻六「燕京日記巻下」、巻七「滬上再記」、巻八「粵南日記巻上」、巻九「粵南日記巻中」、巻十「粵南日記巻下」からなる。岡の遊歴は偶々清仏戦争の時期に当たり、当地の人々と時勢について議論する記述が少なくない。また、旧態依然の中国への批判的言辞も度々見られ、とくに「煙毒〔アヘンの害〕」と「六経毒〔経書墨守の害〕」が指摘される。『小方壺齋輿地叢鈔』十二帙補編十二帙再補編十二帙(第五帙)に所収。また『幕末明治中国見聞録集成』第二十巻(ゆまに書房、1997 年)所収。

(村田雄二郎)

## 1894

#### 長城游记／大鳥圭介著

東京 丸善書店 1894 (明治 27) 74 頁 [4283]

著者は、1889 (明治 22) 年以来北京に駐在していたが、ようやく 1892 (明治 25) 年 4 月 21 日から 29 日にかけて忙中閑を得て、万里長城を一見したいとのかねての念願を果すを得た。本書は、その道中記した風俗景勝の印象記であり、興のまゝに得た著者の和歌詩文を含む。鄭永昌(交際官試補)・田中信敏(書記生)・船津辰一郎(私費生徒)および従僕の中国人 2 人が同行。旅程は、まず湯山に向かい、離宮を訪れ、昌平州を経て明の十三陵を訪れ、かくて長城の南口に達し、さらに八達嶺に向かう。また、大覺寺、臥仏寺、碧雲寺を觀て、西山に向かい、2、3 の名寺を訪れ、北京に戻った。

#### 支那時事／高橋謙著

東京 日清協会 1894 (明治 27) 169 頁 [4278]

著者は、1884 (明治 17) 年以来清国に在って、「南ハ百粵ヨリ北ハ燕趙ニ至リ又西ノ方遠ク巴蜀ニ遊ビ親シク其人士ニ交リ熟ラ其人情風俗ヲ察シ」た、という経験をもち、日清開戦という不幸に際し、日清両国の「唇齒輔車」の関係樹立への願いを托して清国の内情を世に知らせようと、16 省に及ぶ自己の紀行の一部を、ここに公刊した、という。前半が「紀行」、後半が地理・歴史・制度などについての概述である。著者は、上海に 4 ヶ月滞在して中国の風俗にやや通じ、つぎに、揚子江一帯の地方を視察しようと、通州・江陰県・鎮江府・南京・蕪湖県・安慶府・九江府・廬山・武漢三鎮を遊歴する。漢口に 1 年余滞在ののち、再び揚子江の上流各



地を視察しようと欲し、新堤鎮・沔陽・岳州府・沙市・南昌府・夔州府・万県・忠州などを経て重慶に入る。再び上海に戻り、今度は時間をかけて南方各省の内地漫遊をしようと思い、嘉興府・杭州府・徽州・景德鎮・饒州府・南昌府・吉安府・贛州・南安・韶州府・仏山鎮・広州府などを遊歴する。上記のほかにも通過する村や中小都市がすべて列挙され、その間の距離・地形・物産・人口・政情・風俗・故事などが、「紀行」の部にはこまごまと記されている。

#### 亜細大陸旅行日誌并清韓露三国評論／原田藤一郎著

1894（明治27） 454頁 〔4775〕

著者は、1881（明治14）年の北海道官有物払下げ事件をキッカケに、大陸の人情風俗・農商工の実況を調査して邦人に知らせようと、大陸漫遊の志を抱き、以来十有余年、大陸に関する情報はつとめて手に入れる一方、さまざまな職業を転々として労苦に耐える身心をつくり、ついに家も妻子も捨てて、1891年に北海道に渡り、1892（明治25）年1月11日に大陸に向かうべく小樽を発った。爾来1年8ヶ月かけて前後4回の旅行をするが、本書はその旅行記。第1回、第2回が清国旅行（後半朝鮮）で、第3回は朝鮮旅行、第4回は露国旅行。実業家・外交家の役に立つことを志した著書であるという。

第1回の清国旅行は、上海（3月26日まで50日余り滞在）・鎮江・瓜州・揚州・清江・沔陽・沂州・済南・德州・天津（5日滞在）・北京（5月16日～9月2日滞在）などを漫遊した。第2回の清国旅行は、9月2日に北京を発って、通州・永平・山海関・營口・牛莊・奉天・興京・通化・懷仁・寛甸・九連城（10月31日到着）など満洲各地を漫遊し、さらに朝鮮に入り京城（11月20日到着、2ヶ月滞在）まで足をのばした。本書の日誌の部分は道中の体験・観察が主で、評論の部分は、清国関係についてのみ言えば、清国の商勢・工業・物価・風俗・農業・行政官の実況・陸軍の現状・水軍・対外策・道路・通貨・洋煙の害などについて論じた末、日本が清国から一港をも開港せしめていないのは、わが対清外交の失策である等々、8点にわたって、日本の失策を論じている。

### 1895

#### 清国事情探検録：一名清国風土記／宮内猪三郎著

東京 清国事情編輯局 1895（明治28） 42頁 〔2213〕

著者は、1892（明治25）年7月に東京を発ち、長崎から清国に向かい、「楚水呉山之風月」を楽しむという日々を久しくすごしたのち、長崎に帰り、また日本各地を旅して、1894年4月に帰京した。清国は「今や紀綱衰頹し万国の嘲侮する所たり」といえども「今日の支那、政治に貿易に或は軽忽視す可から」ず、との立場から、清国の事情を簡述したもの。執筆態度を明らかにした「総説」以下、国都、版図、内閣及び政法、邑鎮及び村、気候、性質、言語の別、宗教、官衙、祠廟、寺院、海陸軍及び八旗兵、兵營砲台及び軍艦、物産、名所古迹、土木工事、会館、農商、塩政、刑罰、船舶、招商局、書信及び工部書信局、鉄道及び電信、新聞、教育及び学校、考試及び官吏登用、揚子江及び黄河、牧畜及び漁獵、家屋器具及び起居、海関、醸造、飲食、頭髮、衣服、保守、洋行及び銀行、長年老者、商業品、育兒院、旅舎、浴舎、茶館、茶園、魯宋票、記号及び当、贈答、車馬、轎、爆竹、阿片煙、纏足、司法警察、南船北馬、行路難、婚姻、葬喪、逆党、物価、度量、錢貨、毒虫、莊樓館、手為の差、年賀、簿記算数、外国

学の行否，筆話，学士文人，鶴亀，婦人，医師及び薬舗，僧侶及び道士，陰陽師，芸娼妓，園  
廁及び肥料，車夫船丁及び乞丐，という 77 項目にわけて解説している。

## 1899

### 支那漫遊談／中村作次郎著

東京 切偲会 1899（明治 32） 81 頁 〔Q640〕

著者は道具屋。中国の道具屋の有様を視察し，中国の美術品や愛玩の器物を研究するために，  
1898（明治 31）年 4 月 12 日新橋を発って中国に向かった。朝鮮を数日めぐったのち，芝罘・  
大沽・天津・北京・上海・蘇州・杭州の道具屋，名勝旧跡，日本人居留地を訪れた。北京・上  
海・蘇州・杭州ではとくに道具屋を丹念にみてまわったが，日本人好みの宋・元・明などの古  
い時期のよいものはあまり中国にはなく，むしろ日本に多い，中国の道具屋には清朝期のもの  
が多い，と結論する。北京では，天文台・孔子廟・隆福寺をみ，さらに万寿山・玉泉山・碧雲  
寺・五塔まで足をのぼし，蘇州では寒山寺詣でを名物の船に乗って行い，杭州では西湖に遊び，  
上海では茶館で遊んだ。日本人は頭は働くが忍耐強くなく，中国人は極めて忍耐強い，したが  
って，中国へ行った日本人は忍耐強さで競争しては駄目で，中国人を使うようでなければ成功  
しない，などと結論している。

## 1900

### 清国巡遊誌／教学参議部

京都 1900（明治 33） 247,4 頁 〔404〕

西本願寺の新門主大谷光瑞（門主光尊の長子）は，武田篤初（教学参議部総裁）・朝倉明宣  
（奉仕局用係）・本田恵隆（参議部録事）・永池三章（奉仕局雇）・中島裁之（同）・市川達  
譲（同）・従僕 2 名を随員に，1899（明治 32）年 1 月 19 日に神戸を発って清国巡遊の途にの  
ぼり，同年 5 月 3 日神戸に戻った。本書は，帰国後に，随員の本田恵隆等が主として執筆した  
もので，5 分の 1 ほどは，清国に仏教を布教するという課題と今回の新門主清国巡遊の意義を  
説いたもので，残りが地誌をかねた旅日誌である。写真が多い。

めぐった地点は，まず，香港・九龍・広東・上海・杭州・南京・武漢三鎮を航路で，つぎに  
車馬で漢口から信陽・開封・衛輝・順徳・保定などを経て北京に入り（3 月 15 日～4 月 7 日），  
長城や名山名寺名園を訪れ，4 月 24 日に帰途につき，天津・大沽・上海を通過した。目的は仏  
教布教のための視察であって，在留の仏教界邦人の多くと会っているが，現地駐在の日本人高  
官とも行く先々で会い，また，それぞれの地点で名勝旧跡を訪れている。

### 支那漫遊燕山楚水／内藤虎次郎（湖南）著

東京 博文館 1900（明治 33） 10，322 頁 〔5513〕

著者は，1899（明治 32）年 8 月 30 日に新橋を発ち，神戸（出港は 9 月 5 日）から芝罘・大  
沽を経て，天津・北京・天津・上海・杭州・蘇州・上海・武漢・南京・上海の順に漫遊し，同  
年 11 月 29 日に神戸に着いた。北京では長城とその周辺の名勝旧跡を遊観し，杭州では西湖に  
遊び，蘇州では虎丘，寒山寺などを歴訪するという，典型的な日本人好みの観光コースを辿っ

てはいるが、他方、天津では嚴復・王修植と、上海では陳錦濤・蔣国亮・文廷式・張元濟などと会談して時局を論じており、その筆談が本書の「禹域鴻爪記」に録されている。

「禹域鴻爪記」はこの筆談のほか、道中の地形、景色、会った人々、歴訪した名勝旧跡の形状、由来などについて記した博学な印象記。本書にはまた漫遊中感じたこと、知ったこと、考えたことなどをトピックス別に断片的に記した「鴻爪記余」と、漫遊のまえとあとに書かれた中国論・中国時局論風の「禹域論纂」（14篇）を収める。

#### 清韓紀行／村木正憲著

1900（明治33） 14, 241, 68丁〔4767〕

著者は、清韓両国の通商上の体制を視察する任務をもって、上村鋼一郎を伴って1900（明治33）年4月12日新橋を発った。上海から揚子江を遡り、通州・鎮江・南京・蕪湖・九江・漢口・沙市などを通過しつつ（そのすべてに上陸したわけではない）、宜昌に至り、再び上海から、蘇州・杭州に行き、もう一度上海から、芝罘・大沽・塘沽に航路で行った。さらに鉄道で天津・北京に行き、再び芝罘から、5月19日に仁川に入り、朝鮮各地をまわって、5月27日帰京した。上述したような各都市について（足をはこばなかった重慶も含むが）、著者自ら観察して得た知識のほか、乗船した諸汽船会社の乗組員、同船した清国官吏や、現地で会った在清韓の邦人官吏などから聞いたところを基にして、日記風なスタイルで、地形・交通（航路・鉄道）通信（電信や郵便）網の実情（機構や料金なども含めて）・関税・物産・地方行政・風俗・在留邦人の活動や邦人居留地の実態などについて、こまごまと記し、日本が新しく基地にすべき地点や中国人の特性などについても考察している。附録に、「長江通商規程」ほか、関税や交通通信に関するさまざまな規則・章程・約款・命令書などを全11件、収めている。

### 1901

#### 満洲旅行記：一名白山黒水録／小越平隆著

東京 善隣書院 1901（明治34） 252頁〔7887〕

本書は、1898（明治31）年4・5月及び1899年4～7月の2回の満洲旅行における記録である。著者は、揚子江を遡って湖北宜昌から四川に入り、打箭鑪からチベットの一端を窺い、更に咸陽・洛陽を歩き漢口に戻り、更に山東に遊ぶ、という体験ののち、1898年4・5月に第1回の満洲旅行をする。このときは、営口・遼陽・奉天・興京・旺清門・海龍城・朝陽鎮・磨盤山・煙筒山・吉林・長春・懷徳・奉化・八面城・金家屯・通江子を視察し、鉄嶺・奉天・営口を経て山東に戻った。北京に行き1年滞在し、ロシアの満洲経営が着々と進んでいることを思い、その実情を視察すべく、1899年4～7月に第2回の満洲旅行をした。このときは、山海関から徒歩で、錦州・新民庁・奉天・鉄嶺・開源・伊通州・吉林・鄂摩和索羅・琿春をまわり、数日北韓を視察した後、寧古塔・三姓・白楊木・賓州・阿勒楚哈・哈爾賓・呼蘭城・齊々哈爾に至る。帰路は、嫩江を下り松花江を遡り、伯都訥・豊安・長春・伊通門・朝陽堡・奉化・昌図・金家屯・法庫門・新民庁・海城・遼陽を通して営口に戻る。満洲の実情とロシア人の経営ぶりを観察し得たと自負する。満洲最大の顕象は南満洲鉄道の敷設にあり、とみて、この件とロシア人を詳しく紹介し、また満洲の交通手段について論じ、前述の各通過地点について、その緯度経度・地形・資源的特徴・歴史的由来あるいは政治的経済的意味などを論じ、更に満洲

全般の人口・風俗・産業・風土などに説き及び、最後に、いわば満洲史のようなものを付している。

くまで／東洋生（神田正雄）著

稿本 1901（明治34） 線装7冊 〔貴17256〕

自序によれば、様々な文献や見聞を熊手のように掃き集め「人間の肥料」とせんとしたという。内容から見て、1901年に四川省に入った著者が、揚子江上流域に関する案内書として書き溜めたものと思しい。序には「（1901年）8月10日」の日付があり、また目次前には「Through the Yangtze Gorges」（三峡を過ぎて）とある。目次は以下の通り。第一章 緒言／第二章 上海宜昌間／第三章 宜昌及び附近／第四章 宜昌以上／第五章 四川省／第六章 重慶行／第七章 重慶／第八章 重慶二／第九章 重慶三／第十章 下航／第十一章 漢口／第十二章 揚子江流域に於ける自然地理／第十三章 新しき宏大の急流／第十四章 汽船による最初の上航／補遺。

なお、第1冊には「四川省概観」を棒線で消して「西清事情」とする目次があり、1905年刊『西清事情』のそれと一致することから、本書はその稿本であると考えられる。（村田雄二郎）

## 1903

満洲旅行日記／植村雄太郎著

東京 偕行社 1903（明治36） 25頁 〔Q903〕

著者は、山形衛戍地に勤務する陸軍歩兵少佐。1903（明治36）年8月5日から9月25日まで夏期休暇をとって満洲を旅行し、その見聞概況を上司の聯隊長に書き送った。本書は、この通信をまとめたもの。当時すでに日本の政府・軍部はロシアとの開戦を準備しており、休暇旅行とはいえ、著者の関心はもっぱら満洲各地におけるロシアの軍情に向けられている。すなわち、ウラジオストック、ハルビン、營口、旅順、大連などのロシアの軍事施設や軍隊の配備、また、著者の目にしたロシア人兵士の様子、演習の模様などを、簡単に記している。

東亜旅行談／戸水寛人著

東京 有斐閣 1903（明治36） 278頁 〔7127〕

著者は、学術研究上の資料の蒐集を目的に、1902（明治35）年8月29日に東京を出発し、ウラジオストック滞在後、9月17日に哈爾濱に着いた。旅順・大連・芝罘・牛莊・錦州・山海関・秦皇島・天津・北京・張家口などをまわり、3日間ほど蒙古にも入り、また11月14日に朝鮮に入るなどして、11月18日に長崎に着いた。ウラジオストック＝天津までの旅行中は、松永峯治が同行した。

哈爾濱・旅順・大連では、いかにロシア人が日本人を制圧しているか、ということ、日本人の満洲旅行への禁止や制限、地図携帯禁止、在留邦人の土地使用に対する厳しい措置などを例に語り、日本人はこんな風に小さくならず、もっとロシア人に対して挑発的になって、日露開戦を辞さぬ方向で進むべきだ、と随所に唱え、また、山海関には日本の軍隊が偉大な勢力を張っているから在留邦人は皆肩巾広く闊歩している、「満洲ニ日本兵ヲ入ルレバ皆此通ニナルノデセウ」、と語る。こういう関心から著者は、もっぱらロシアの満洲統治の実情、哈爾濱

の広大さと戦略的地位の大きさ、物産・貿易・関税の状況、交通手段、各地の土地使用上の争い、在留邦人の実態（人口、職業）などを、つとめて具体的数字的にとらえようとしており、関連する公文書を色々収めている。明の十三陵をみたほかは所謂名勝地には関心を示していないが、賞味した食物については色々と言っている。ウラジオストークについても多く語るが、朝鮮については、滞在が短かった故「朝鮮デ見聞シタ事ハ御話致シマセヌ」という。

## 1904

**征塵録／小山田淑助（剣南）著**

**東京 中野書店 1904（明治 37） 149 頁 [7883]**

本書のうち紀行は、「初めて大陸に遊ぶ」「西征記」「南征記」の 3 篇で、他に「殉難六烈士」「支那労働者の境遇」「わが見たる支那風俗」の小論 3 篇を収む。

著者は、3 度渡清した。第 1 回は、1900（明治 33）年 5 月末に新橋を出発して、長崎から上海に向かい、2 日逗留ののち、漢口に行き、数ヶ月で義和団事変となって、帰国した。1902 年 4 月、再び渡清し、北京に数ヶ月逗留し、また古琴台（漢陽府古集賢村）に遊ぶ（以上、「初めて大陸に遊ぶ」の内容）。

1902 年 7・8 月、土倉鶴松の勧めで陝西省三原県の宏道大学堂で教鞭をとることとなり、10 月 1 日馬関を出帆した（3 度目の渡清）。北京で数ヶ月過ごしたのち、1903 年 1 月 9 日に北京を発ち、正定まで鉄道で、あとは騎馬で、獲鹿・平定・寿陽・祁県・介休・洪洞・平陽・安邑・蒲州・潼関・華州・渭南を経て、同月 27 日に三原県に着いた。「西征記」の前半はこの道中の記録であり、後半は、中国内地旅行の心得、道路・車馬・気候・城市についての考察、古長安（西安）・咸陽・龍門遊記などである。

1903 年末、宏道大学堂教習の任を辞して、帰路につく。藍田・商県・龍駒寨までは騎馬で、寨からは船で荊紫関・老河口・襄陽・漢口と沔江・漢水を下り、漢口から揚子江を下って、1904 年 2 月 6 日上海に着き、10 日ほど逗留ののち、帰朝した。「南征記」の大半は、その道中の記録であるが、文末に、西安漢口間の里程表や漢口龍駒寨関の釐金局一覧などがある。

**北清見聞録／高瀬敏徳（花陵）著**

**東京 金港堂 1904（明治 37） 146 頁 [2215]**

著者は、1902（明治 35）年 8 月 28 日神戸港を発ち、芝罘・大沽で途中下車して、街路の不潔、一般人民の不潔、労働者・苦力は乞食の如く汚れ、一般人民は無感覚である、などの観察を下しつゝ、北京に入る。北京では、北京東文学社で教鞭をとる。北京入りするや、城壁に一驚し、紫禁城の壮麗さを認めるが、市街を歩き、俵・馬車・轎子などの交通手段について観察し、北京の道路は不完全の標本、とみる。但し、交民巷に入れば別世界。こゝで、中国の下等社会の豚以下の不潔さと、中以上の、奢侈を極めた生活を考察し、健全な中等社会を欠くことに中国の不健全さの所以をみる。中国の婦人は一様に、化粧に専念して働かぬ、とみ、中国人の早婚・蓄妾の風、家庭内に悦楽を求める生き方、交際術の巧みさなどを、日本人と比較して論じ、また当時広く信ぜられていた迷信を紹介し、教育制度の不完全なことをいう。北京の四季の鮮かさ、冬の厳しさ、暖のとり方などを紹介している。さらに、1 月某日（1903 年か？）に、弟子の父たる某大官の邸内で行われた観劇の宴の経過をのべ、演劇そのものより、それを

みる客の談笑動作の様が面白い、とこまごま記している。また、3月に盧溝橋に、5月に長城・十三陵にハイキングをしたといい、それらのたゞずまいについてのくわしい記述とともに、道中目に映じた中国人の風俗に関するこまごまとした観察がある。最後に、中国を論じて、中国に国家なく、4億の個人と4千年来の習慣あるのみ、亡国に瀕するのは当然、として、他国の、とくに我国の教育家・宗教家の教化活動、実業家の商業活動強化の必要を説く。

## 1905

### 西清事情／神田正雄著

東京 農事雑報社 1905（明治38） 191頁 〔7935〕

「西清」とは当時も今もあまり使われない地域名だが、四川省、古の巴蜀の国を指す。あるいは福沢諭吉『西洋事情』をもじり、タイトルに掲げたものか。もとは「四川省概観」としていたのを出版に際して改題したことが、稿本『くまで』からわかる。作者の神田正雄（1879-1961）は、早稲田大学卒業後、1901年に四川省重慶府の達用学堂の教習として赴任し、現地に3年滞在した。その際の見聞を「内外人の著書旅行記等」と照らし合わせて、総合的な地域事情案内書としたのが本書である。ただし、参考にした書籍名は一切掲げられていない。

「例言」によれば、著者は本書のために6か月省内各地を旅行したという。重慶の対外開港は1891年であり、日本領事館の設置は96年である。日本人による四川旅行記としては、竹添光鴻（進一郎）『栈雲峽雨日記』（1879年）に次ぐ早期のものと思われる。全11章から成り、四川の自然地理から風俗人情、歴史制度、教育宗教の万般を網羅する。目次は以下の通り。第一章 諸論／第二章 天然／第三章 地理／第四章 住民／第五章 人情／第六章 風俗／第七章 歴史／第八章 制度／第九章 教育／第十章 宗教／第十一章 結論。巻頭に大隈重信、長岡護美、十文字信介の序、巻末に四川省全図を付す。同じ著者に『四川省綜覧』（東京、海外社、1936年）の作もある。なお、『くまで』と題する線装本7冊（貴17256）の一部は、本書の原型をなす。（村田雄二郎）

### 湖南／安井正太郎編著

東京 博文館 1905（明治38） 718頁 〔159〕

安井正太郎は明治・大正期に活躍したジャーナリスト。生没年不詳。経歴も不明であるが、『博文館五十年史』（坪谷善四郎、1937年）によれば、1912年に博文館が看板雑誌『太陽』とは別に「財政、経済専門の大雑誌」として『地球』を創刊する際、主筆本田精一の助手に安井を迎えたという。実際、『地球』に国際情勢や日本の海軍政策に関する論評を数篇掲載している。

本書は実業家として知られる白岩龍平（1870-1943）の委嘱で湖南省をつぶさに調査した際の記録であり、当時としては最新で最詳の百科事典的性格をもつ案内書である。出版後間もなく、アジア主義団体の機関誌『東邦協会会報』（第127号、1905年9月）は新刊紹介の欄でこう述べる。「本書は白岩龍平氏の校閲安井正太郎氏の編著にして清国湖南方面の産業、水路、航業、名勝、人物等を細大漏らさず熟察し極めて正確に記述せられたるものなれば一読して身親しく其地に遊ぶの感あらしむるは恠〔あやし〕むに足らず」云々。付録に、佐々木信綱「短歌二十七章」「南清風景談」、鳥居龍蔵「苗族は現今如何なる状態にて存在するや」「苗子の

笙」「武陵桃源」，水野梅暁「湖南仏教視察報告」，英人オーソリヴァン「湖南省探験旅行記」，「粵漢鉄道条約，同追加条約」を収める。また，巻頭に西園寺公望の題字，野口寧斎の題詞 2 首，巻末に永井久一郎（禾原）の跋詩がある。さらに，湖南省全図は岸田吟香の手沢になるという。『幕末明治中国見聞録集成』第十六巻(ゆまに書房，1997 年)所収。（村田雄二郎）

## 1906

### 七十八日遊記／徳富猪一郎著

東京 民友社 1906（明治 39） 348 頁 [8376]

著者は，伊達源一郎とともに，1906（明治 39）年 5 月 26 日新橋を発ち，釜山・京城・平壤・義州を経て，安奉鉄道で奉天に入り，市街や名勝旧跡を歩き，さらに昌図府へ行き，満鉄で大連まで直行し，市街を馬車で見物し，旅順では日露戦争の跡を見学し，営口の設備を視察し，北京に入り，城中城外を視察して政情・生活・思想などについて考察をめぐらすほか，旧跡をめぐってその零落荒廃に一驚し，明の十三陵・長城・万寿山・玉泉山などに遊び，芝罘から航路上海に行き，長江を遡って漢口・長沙をおとずれ，湘潭まで足をのばし，また洞庭湖に遊び，南京に行き，再び上海から杭州・蘇州に行き，西湖や虎丘その他名勝で遊び，8 月 4 日，上海から帰途についた。

本書の前半は，「過眼記程」と題され，道中ハガキに記し送った即興の印象記をそのまま収めたものであり，後半は「触目偶感」と題された「支那及支那人」についての寸評集である。中国には国家観念なく，中国人の共通性を強いてさがせば，文弱，女々しさ，進攻における拙劣さ，断念の哲学を有することなどあげられるが，その裏には，利害の打算にさとく，便宜主義に徹した我利我利が認められる，などといった中国論中国人論が展開されている。

## 1907

### 遼東修学旅行記／東京高等師範学校修学旅行団記録係

1907（明治 40） 730 頁 [4410]

東京高等師範学校の，職員 21 名（那珂通世など）・生徒 168 名・傭人 3 名合計 192 名の修学旅行団は，文部省と陸軍省の援助を得て，「遼東に於ける日露戦役の跡を視察する」目的で，他の数校の職員・生徒達とともに，1906（明治 39）年 7 月 13 日に新橋を出発した。7 月 18 日に大連に上陸し，大連・旅順・奉天・鉄嶺・遼陽・営口・金州・柳樹屯を旅行して大連に戻り，8 月 5 日大連を出発して，同 11 日新橋に戻る。本書は，参加した生徒が記録したものを編集したもので，国語漢文部の荻原弘「遼東修学旅行記」（13～210 頁），英語部の印象記（211～226 頁，英文），地理歴史部の分担執筆による旅行記（227～446 頁），博物部の動・植物地質鉱物農業観察記録（447～577 頁），数物化学部の印象記（579～621 頁）を収め，関心の示し方や記述にそれぞれの専攻からくる特色がある。附録として，三沢信一稿の「公議会」「金州政治考略」「馬賊」の 3 篇を収める。

### 満韓修学旅行記念録／広島高等師範学校

1907（明治 40） 1 冊 [4336]

1906（明治 39）年 7 月 1 日に文部省・陸軍省は、各学校に対し今夏満韓地方を旅行する学生に便宜を与える、と通牒した。広島高等師範では、校長北条時敬以下職員・生徒の志願者 141 名を以て、これに参加し、7 月 19 日に、東京帝大はじめ約 10 校の学生とともに、総数 600 人余となって、宇品より出帆した。7 月 23 日に大連に上陸し、旅順・奉天・撫順・鉄嶺（校長以下職員 8 人は、こゝから昌図府まで日帰りする）・遼陽・営口をめぐり、こゝから 2 隊に分れ、本隊は金州・柳樹屯を旅行して大連に戻り、支隊は朝鮮をめぐった。本隊は 8 月 8 日大連を発ち、帰路につく。

生徒は、学部ごとに、英語部は社会一般、地理歴史部は地理歴史、国語漢文部は文学、数物化学部は戦争、博物学部は博物学に関する事項、予科は戦時中の事蹟並びに一般状況を特に留意して観察した。本書の約 5 分の 3 は、生徒の報告を日記風に記したもの。ほかに、教授春山作樹の、出発前に行った講義「満洲の教育」、教授新見吉治の「昌図紀行」、韓国經由支隊の報告記事 2 篇などあり、附録として、陸軍少将伊崎良熙講話「南山戦況講話筆記」他 2 篇を収む。

## 1909

### 伊犁紀行／日野強著

東京 博文館 1909（明治 42） 2 冊 [5219]

著者は陸軍歩兵少佐。1906（明治 39）年 7 月下旬に「某筋より新疆視察の内命を受け」、まず新疆についての知識を一通り図書によって得ようと、同年 9 月 7 日東京を発ち、北京に直行した（9 月 20 日到着）。北京で知り得ることを知ったのち、10 月 13 日北京を発ち、保定・鄭州・滎陽・河南府・潼関・西安・咸陽・長武・蘭州・涼州・肅州・安西（1907 年 1 月 18 日到着）を経由して、1 月 25 日猩々峽を越え、新疆に入った。新疆では、哈密・吐魯番・烏魯木齊・西湖・塔爾巴哈台・西湖・伊犁・寧遠・喀喇沙爾・庫車・阿克蘇・喀什噶爾の順に踏破して、1907 年 8 月 28 日葉爾羌に到着した。葉爾羌滞在を以て、新疆旅行は終りとし、9 月 15 日に同地を発ったが、そのまゝ崑崙・ヒマラヤ両山脈を、43 日という例外的な短期日で越えて、英領インドに入った。すなわち、10 月 27 日にスリナガル（カシミヤ王国の首府）に到着し、さらに、アグラ・カルカッタなど各所をまわって、香港・上海を経由して、12 月 24 日神戸に帰着した。鄭州までは汽車であったが、あとはほとんど騎馬（および海路）であった。

本書上巻は「日誌之部」と副題され、分刻みの行動記録と観察研究記録であり、下巻は「地誌之部」と副題され、地勢・風土・住民・風俗・宗教・教育・産業・交通・行政・兵備・歴史などに章別され、観察と記述は詳細であり、「其事実に至りては毫も欺くこと無きは予の特に明言するを憚らざる所」と著者は自負している。

### 巴蜀／山川早水著

東京 成文館 1909（明治 42） 410 頁 [5058]

これは、四川紀遊の書であり、後遊者の旅程作成上の便のためにと日記体で記した部分と、見聞・史蹟を個別に論じた部分から成る。前者には、「入蜀」（1～91 頁）・「自蜀赴秦駁程」（229～246 頁）・「峨眉山遊記」（259～331 頁）・「出蜀」（355～404 頁）があり、後者には、「成都滞在記」（92～163 頁）・「城内史蹟」（164～170 頁）・「城外史蹟」（171～202



頁）・「成都府領史蹟」（193～223 頁）がある。

著者は、1905（明治 38）年 3 月（2 月の誤りか）18 日に神戸を発ち、22 日に上海で、同行者草野金松・陳瑄（四川省双流県人）と合流し、3 月 2 日に宜昌（湖北省）に着いた。宜昌を四川紀遊の起点及び終点として、万県・成都・嘉定・峨眉・成都・新都・彭県・灌県・漢州・羅江・魏城・梓潼・劍州・広元・嘉定・重慶などの順に四川各地を巡遊し、1906 年 7 月 4 日、宜昌に戻った。

写真と史実の引用と史蹟に連想される漢詩を豊富にちりばめる。また観察は詳細で、禹域中の名区特絶とされる四川の全容を読者に伝えようという周到な努力が払われている。

## 1910

### 鉄胆遺稿／石川安次郎編

東京 平井茂一 1910（明治 43） 47+36+48+52 頁 [10613]

本書は阿川太良の遺稿であり、表紙には「鉄胆阿川太良」とある。「鉄胆遺稿」として「支那実見録」「暹羅東海巡遊記」を収めるほか、「鉄胆書翰（四十通）」、編者石川半山（安次郎）による「友人阿川鉄胆」を付す。

阿川太良（1865-1900）は長州萩の士族の出で、馬島春海に漢学を学び、福岡にも遊学した。早世した父親に代わり、母弟妹養育のため郡役所の書記として出仕した後、1890 年衆議院の第一回選挙で当選した吉富簡一議員の書記に雇われ上京し、『庚寅新誌』の編集・出版の責任者を務めた。1893 年 9 月に清国に旅立ち天津に到着、翌月上海に移り、宗方小太郎と親しく往来した。94 年 6 月には上海からシャムに移動し、一時帰国を経て、96 年バンコクに日タイ貿易商社の閩南商会を開業した。1900 年マレー半島調査に赴き病を得て、シンガポールで客死。（以上、石川半山「友人阿川鉄胆」に拠る。）

「支那実見録」（全 47 頁）は阿川が一年余り天津と上海に滞在した折々に『庚寅新誌』に書き送った記録であり、当地の「貿易」「海関」「貨幣」「棧房」（以上、天津）、「己〔已〕革及游勇之事」「苗族之事」「哥老会之事」「到清の変遷」「〔日清貿易〕研究所卒業生の薄運」「内地旅行者の艱苦」（以上、上海）の内容を含む。「支那実見録」は『幕末明治中国見聞録集成』第十三巻（ゆまに書房、1997 年）所収。（村田雄二郎）

### 清韓漫遊余瀝／勝田主計〔述〕

1910（明治 43） 430 頁 [397]

著者は、大蔵省から派されて、1909（明治 42）年 5 月 4 日に東京を発ち、釜山経由で京城・平壤などを視察ののち、安東から奉天に入り、大連・旅順・営口・哈爾濱・長春・鉄嶺・奉天・山海関・秦皇島・昌黎・開平・塘沽・北京・南口・武漢三鎮・大冶・南京・上海・杭州・蘇州の順にまわり、上海経由で 7 月 14 日に帰京した。

大蔵省が与えた視察目的は、清韓の産業・貿易・経済・財政などについて研究し、また中国側の大官となるべく多く会見して中国事情を聴取する、ということであつたらしいが、はじめから上述のコースでまわろうと予定したわけではなく、鉄道や内陸水路をできる限りのりまわしてみようという著者の問題関心によって、行く先々でつぎの行先を決めたようである。なお奉天では錫良（総督）・張錫鑾（度支司）などに、北京では慶親王・肅親王などに、南京では

端方（総督）などに、それぞれ会見できた。

本書は漫遊によって得た見聞を、「韓国所見」「満洲所見」「支那本部所見」に大別し、それぞれ論題をはっきりさせて、具体的かつ实际的に述べている。もともと『東洋時報』に十数回にわたって連載されたものを、小冊子にまとめたそうである。巻末に、「清韓両国ニ関スル参考書類」160余点が列挙されている。

#### 南国記／竹越与三郎著

東京 二西社 1910（明治43） 374頁 [5924]

著者は、南人の北進は自然の大勢に逆行するものであり、島国が大陸に発展しようとするのは亡衰の端緒である、との見解を歴史上の例をあげて披瀝し、満洲に向かおうとする日本の北進政策は自殺的なものであって、日本の将来は、南方、すなわち海洋への発展にある、とする。この信念をもって、1909（明治42）年盛夏、上海・香港・広東・シンガポール・ジャワ・蘭領東インド諸島・仏領インド支那・台湾を旅行し、同年冬帰国した。「水陸の道程1万余里、船を更ゆること13回、驕陽に苦しみ、巨濤と戦」かった苦難な旅であった。本書は、その道中における「触目の風光、歴遊の山川、男女の人情、政治の組織」など、驚きの眼に映じた見聞を、こまごまと記したものであるが、読物としては、分量的にも内容的にも、シンガポール、ジャワ、蘭領東インド諸島、仏領インド支那に重点が置かれている。写真がよく、また数も多い。

#### 一日一信／東亜同文書院第七期生編

上海 東亜同文書院 1910（明治43） 447頁 [5816]

東亜同文書院は、「毎年夏期休暇を利し、第三年生を支那二十二行省各地に分派し、一は支那百般の事情を調査し、二は支那の衣食住に慣熟せしめ、依て以て他日対清経営に従ふに当り遺憾なからしむるを期す」ことを旨として、第5期生よりこれを実施した。旅行のあと学生たちは調査報告書を学校に提出するとともに、これとは別に旅行中の体験や感想を綴った紀行文をまとめた。最初の2回、すなわち第5、6期の紀行文は書院の学友会会報に掲載されたが、会報の発行停止にともなって第7期生以降の紀行文は1冊の本として毎回公刊された。本書はその第1冊目にあたる第7期生の旅行記である。かれらは、1909（明治42）年夏に上海調査班飯島光以下4人を残し、71名が13班に分れて3、4ヶ月にわたって以下のような旅行をした。

塩路樹雄以下5人の関内外蒙古班は、7月7日上海を発ち、天津・北京・熱河・平泉・建昌・赤峰・建平・朝陽府・錦州・山海関・大連・旅順をまわって、10月3日帰路につく。柿原愛二以下8人の北京駐在班は、7月3日上海を発ち、南京・九江・漢口をまわって、鉄道で彰徳府・保定を経て北京に入り、通州・貫市などにも足をのぼし、さらに十三陵・八達嶺・張家口に行ったり、長春から哈爾濱に行くなどして、9月中旬帰途につく。本田佐八以下8人の晋燕班は、7月1日上海を発ち、九江・漢口・清河鎮・沢州・高平・陰城・蔭安・潞安・沁州・太谷・太原などをまわり、9月13日に北京に向かった。田中漸以下6人の秦晋班は、7月1日上海を発ち、芝罘・大沽・天津・北京を経て、太原・汾州・呉城・永寧・呉堡・綏徳・清澗・延安・延長・鄜州・三原・西安・潼関・河南府などをまわって、10月26日漢口経由で帰途につく。勝田憲治以下4人の皖北豫鄂班は、7月3日上海を発ち、南京・和州・蕪湖・廬州・六安州・固

始・光州・羅山・信陽・駐馬店・舞陽・裕州・南陽・鄧州・老河口・襄陽・安陸・漢口（9月21日到着）などをまわる。本城清規以下7人の西鄂巴蜀班は、7月1日上海を發ち、漢陽・宜昌・歸州・巴東・巫山・万県・重慶・合州・保寧・沔県・漢中・老河口などをまわり、10月24日歸滬した。松島浜三郎以下3人の両江班は、7月4日出發し、松江・嘉興・南潯・湖州・漢口・崇明・通州・泰州・揚州などをまわり、10月10日南京行きを最後に、歸途につく。中村卯八以下7人の皖南贛閩班は、7月1日に出發し、蕪湖・寧国・徽州・休寧・鄱陽・撫州・新城・邵武・洋口・延平・福州をめぐり、10月4日、廈門に着いた。田中元千代以下5人の漢口廈門班は、7月3日出發し、武漢三鎮・南昌・撫州・建昌・広昌・石城・寧化・汀州・連城・永安・寧洋・漳平などをめぐって、9月14日に廈門に着いた。島田菊太郎以下5人の三江班は、7月2日出發し、香港・広東・徳慶・石龍・東莞・陳村・太良・江村・馬寧・江門・新会・香山・澳門をまわり、9月17日、香港行きの船に乗る。林正春以下5人の桂黔班は、7月5日出發し、九龍・香港・広東・梧州・潯州・柳州・融州・古州・三脚・貴陽・重慶（10月16日到着）をまわり、漢口を経由して歸滬の途につく。佐々木高俊以下5人の海南粵西班は、7月2日出發し、香港・梧州・潯州・南寧・欽州・廉州・瓊州をまわり、8月21日香港に歸着。河上律一以下5人の鎮南百色班は、7月2日出發し、香港・広東・梧州・藤県・南寧・龍州・百色をまわって、9月15日広東に戻る。

#### 観光私記／永井久一郎著

東京 1910（明治43） 75丁 〔XI-4-1001〕

永井久一郎（1852-1913）は尾張出身の官僚・実業家、漢詩人。号は禾原。永井荷風の父。アメリカ留学後、日本郵船の上海・横浜店長を歴任した。本書は1910年5月から6月にかけて日本郵船社長近藤廉平や東京・京都・大阪・横浜・神戸の実業家と朝鮮・中国を遊覧した際の旅行記であり、全文が漢文で記されている。一行の行程は、下関－釜山－大邱－京城－仁川－平壤－新義州－安東－草河口－奉天－撫順－大連・旅順－營口－天津－北京－張家口－漢口・武昌－九江－南京－鎮江－上海－蘇州－杭州－上海で、南京で開催中の南洋勸業博覧会を見学することが最大の目的であった。文中、訪問先で詠んだ自作の詩を多く披露し、北京では董康と學術を語り琉璃廠に足を運ぶなど、漢学に造詣の深い著者の一面を垣間見せる。一行が各地で中国高官や有力者の招宴に応じたり、在住日本人の歓迎を受けたりするさまは、当時の両国の政治・経済関係を映し出す貴重な記録になっている。『幕末明治中国見聞録集成』第十九卷（ゆまに書房、1997年）所収。（村田雄二郎）

## 1911

#### 支那印象記／小林愛雄著

東京 敬文館 1911（明治44） 222頁 〔6122〕

著者は西洋文学を専攻した人。中国の現状を、老酒や阿片の香に浸って「人の眠ってゐる国」であろうと想像し、かつてその国により育くまれたことを忘れて「人の醒めてゐる国」なる西洋を拝み模倣して得意になっていた若者の一人として、「きっとガリヴァーが小人国へ行ったやうだらう」と思って同国旅行を思ひ立ち、その予想に反して、同地で新しい思想の抬頭を發見し、同国の覚醒の暁を考えて心に興奮を感じて歸国した、と序文に記す。1908（明治41）年

12月21日に神戸を発ち、上海・蘇州・南京・鎮江・漢口・北京・天津・奉天・旅順・大連を1ヶ月間で旅し、張園・愚園・孝陵・古鶏鳴寺・天壇・孔子廟・北陵等々詩文などで知られる名所旧跡を訪れ、また、商務大臣盛宣懷・両江総督端方・北京の公使館・天津領事館など、日中の高官のところで歓待を受けている。青山という医学博士が同行した模様。森鷗外・服部宇之吉・佐佐木信綱の序文を得ている。風景・風俗・建築・料理・女性美など、目に入るものについて、おのずと日本・西洋との対比が浮かぶらしく、風俗・建築などには中国は西洋と近似している点が幾多あり、羨ましい、と観察し、他方在中邦人の家屋も料理も商店も、貧しく寒々としている、とみる。だがなお、「支那を愛する心」をもって、邦人は続々と中国に往き、同地で事業を発展させるべし、と論じている。同時期に同じところを旅行した寺崎広業・横山大観の風景画10葉余と、写真20数葉を収む。

#### 南清紀行／佐藤善治郎著

東京 良明堂書店 1911（明治44） 304頁 〔Q637〕

著者は、1910（明治43）年7月28日横浜を発ち、上海・南京・武漢三鎮・蘇州・杭州をめぐる、8月23日上海を発って帰途につく。清語をまったく解さずに旅をし、かつ苦しまずして単独旅行をなした、という。行く先々で、領事を訪れ、新聞記者を尋ねて、まず知識を得て、それから各所をまわった。本書は、多くの人々に南清旅行をすすめ、その際の案内書となることを眼目として書かれたもので、旅行中は『横浜貿易新報』に通信し、帰朝後は2、3の雑誌に出したものを、修正増補したもの。上海・南京・武漢三鎮・蘇州・杭州について、地理・歴史・経済等についてまず概説的説明をし、つぎに自分が見物した名勝旧跡をこまごまと説明し、さらに中国人の国民性を、利己的で虚偽に充ち、独立自營的で、不潔・無頓着にして、文弱で、諦観に貫かれている、などの諸点において分析し、最後に、旅行上の実際的な注意を記している。

#### 満韓観光団誌／下野新聞主催栃木県実業家満韓観光団

宇都宮 1911（明治44） 425頁 〔7142〕

下野新聞社は1907（明治40）年に、満韓の視察研究を目的とする団体旅行を企画し、1909年8月に公募した。矢板武（下野銀行頭取）以下、栃木県下の実業家・名望家34名が応募し、4班からなる観光団を結成し、下野新聞社員2名を同行に、1909（明治42）年9月4日に新橋を出発した。釜山・京城その他朝鮮各地をまわって、安奉鉄道で9月16日に奉天に入り、長春・哈爾濱・撫順・遼陽・営口・大石橋・大連・旅順をまわって、9月27日に大連に戻り、同地で9月30日を以て観光団は解散した。なお北京行きの2グループが残り、甲組は、天津・北京・保定・漢口・九江・南京・蘇州・上海・杭州をまわって、10月28日に長崎に帰り、乙組は、北京・武漢三鎮・南京・蘇州・上海をめぐる、10月18日に長崎に帰った。

本書は、その一部始終についての記録であるが、旅程、行く先々での歓迎者のリストや歓迎宴のありさま、訪問した事業所や諸機関などについての詳しい記述や歴訪した名勝旧蹟の解説のほか、実業家の眼からみた満韓の工鉱業・商業・貿易・通貨あるいは政情、風俗などについての記述も多い。なお、「北京行き」の経過は、附録として記されているが、こちらのほうはより物見遊山的である。

### 海外行脚／坪谷善四郎（水哉）著

東京 博文館 1911（明治44） 370頁 [3332]

著者は、見聞をひろげることが楽しみで世界各地を旅行したものらしく、本書には、シベリア方面の旅行記2篇（1910年）、「朝鮮縦貫記」（1905年）・「北韓巡航記」（1910年）、アメリカ大陸西海の旅行記2篇（1907年）、地中海方面の旅行記（1908年）など順不同に収めているが、このなかから中国に関するものを順を追って並べれば、つぎのようになる。1900（明治33）年9月～10月、すなわち義和団事変の直後に、大沽・天津・通州を航路で行き、さらに馬車で北京に入るまでのことを記した「白河遡航記」、北京に入ってから、北京城内、紫禁城、万寿山見物などを記した「事変中の北清遊記」があり、1903年秋に、琉球・淡水港・廈門・汕頭・香港・台湾を一循（約1週間）した「南清遊記」、1904年の日清戦争中のことである「遼陽従軍記」がある。また著者は、1907年9月4日に横浜を発ち、アメリカ・ヨーロッパ各国・ロシアをめぐり、シベリア鉄道に乗って長春（1908年3月22日到着）に入り、営口・大連・旅順をかけぬけて、3月31日馬関に到着したが、その間のはがき通信をまとめた「世界裸道中記」が、巻末に収められている。

### 旅行記念志／東亜同文書院第八期生編

上海 東亜同文書院 1911（明治44） 462頁 [2314]

上海の東亜同文書院第8期生65人は、11班に分れて、1910（明治43）年度の中国事情調査の夏期旅行を行った。豊島彦四郎以下5人の山東班は、1910（明治43）年7月6日上海を発ち、青島・高密・諸城・沂州・蒙陰・新泰・泰安・済南・周村・博山・青州・濰県・昌邑・灰埠・萊州・磯口・龍口・芝罘・上荘・威海衛・劉公島をまわり、9月24日芝罘にて、調査任務を終える（「古齐鲁行」、1～31頁）。岩井光次郎以下5人の楚鄂班は、6月30日に出発し、漢口・沙市・常德・辰州・永順・永定・石門・津市・長沙・湘潭・漢口・広水砦・応山・徳安・随州・棗陽・樊城などの順にまわって、漢口・南京を經由して、10月15日に帰滬した（「湘鄂線隊日記」、32～76頁）。渡辺三郎以下9人の北満駐在班は、6月30日出発し、大連・旅順・長春・吉林・哈爾濱・齊々哈爾・鉄嶺・遼陽・営口などをまわり、9月14日、任務完了して天津に向かう（「北満紀行」、77～126頁）。堀内干城以下2人の北京駐在班は、6月29日に出発し、青島・済南・天津をまわって8月19日に北京に入り、万寿山・十三陵・八達嶺まで行き、11月6日に北京を去り、漢口・武昌・南京をまわって、11月14日に帰滬した（「北京駐在班」、127～144頁）。田村某以下6人の贛粵班は、6月30日に出発し、漢口・通山・義寧・万安・南昌・吉安・贛州・韶州・広東・香港をまわり、10月6日帰滬した（「贛粵班旅行記」、145～176頁）。松田某以下6人の海開班は、6月30日に出発し、南京・揚州・淮安・清江浦・海州・沭陽・宿遷・徐州・蕭県・陽山県・歸徳・寧陵・睢州・杞水・陳留・開封・洛陽・北京・天津をまわり、9月22日に任務完了した（「海開班旅行記」、177～211頁）。山東実以下8人の燕晋班は、6月30日に出発し、南京・漢口・石家荘・太原・忻州・代州（五台山にのぼる）・山陰・応州・大同・豊鎮・張家口・宣化・八達嶺・北京・湯山・順義・孫家荘・密雲・平谷・蘇州・遵化・豊潤・開平・唐山をめぐり、9月29日天津に着いて、任務終了した（「燕晋班阿呆日記」、212～253頁）。岡本喜代治以下6人の錦愛班は、6月30日に出発し、大連・営口を経て、錦州・朝陽・阜新・柳樹台・小庫倫・呉家店・彰武・康平・鄭家屯・洮南をまわり、9月9日鄭家屯に戻って、任務を終えた（「蒙古遊記」、254～298頁）。岩月

某以下 7 人の北満旅行班は、7 月 16 日に哈爾濱を發ち、呼蘭・北団林子・三姓・寧古塔・浦塩をまわり、船で釜山へ、更に京城を経由して、9 月初に奉天に至る（「松水韓雲」，299～338 頁）。藤井栄左衛門以下 6 人の雲南四川班は、7 月 1 日出發し、香港・海防・河内・老開・河口・蒙自・阿迷・宜良・雲南・東川・昭通・叙州・自流井・嘉定・峩眉・成都・重慶・宜昌・當陽・漢口・南京をまわって、11 月 15 日、歸滬した（「滇山蜀水」，339～396 頁）。村山某以下 5 人の甘肅鄂爾多斯班は、7 月 28 日出發し、漢口・洛陽・潼関・西安・邠州・涇州・平涼・固原・靈州・寧夏・石嘴子・包頭・歸化・張家口・北京などをまわり、天津・營口・大連・旅順を歴訪しつゝ歸途につき、11 月 8 日歸滬した（「甘肅鄂爾多斯班記」，397～434 頁）。本書は、参加者による報告文集であり、巻末に各班の旅行経過表がある。

## 1912

### 支那風韻記：附朝鮮滿洲小景／川田鉄彌著

1912（大正 1）序 24，175 頁 [5084]

著者は高千穂学校長。本書は「支那小観」，「支那風韻記」，附「朝鮮滿洲小景」の 3 部と写真 10 葉からなり、奥付なし。1912（大正 1）年中の旅行であろうと思われる。「大陸に新植民地を有し、遠く海外に雄飛しつゝある母国の責任は（中略），極めて重且つ大なるを、深く自覚」しつゝ，「新領土朝鮮」と滿洲一帯を視察し、天津・青島・曲阜・開封府・北京・漢口・洛陽・長安・咸陽・武昌・長沙・南京・鎮江・揚州・蘇州・杭州・上海を旅行した。北京ならば北京城・孔子廟・天壇・雍和宮・白雲觀・万寿山・十三陵・万里の長城，南京ならば南京城・紫禁城・孝陵といった旧跡を歩き，また泰山・洞庭湖・西湖をめぐり，揚子江を日清汽船会社の船で下るなど，典型的な観光旅行である。中国は貨幣が不統一で，風致保存の心を欠き，苦力は牛馬さながらで，中国人は迷信的で雷同的で悠長で，利己主義一点張りで，男尊女卑の国柄で，色んな点で論語の説くことと正反対である，といった觀察が展開されている。滿洲では奉天・遼陽・湯崗子で名所旧跡を歩き，營口には見るべきものなく，大連は市街の整頓見事で，旅順では日露戦争の遺跡を訪れたとある。

### 孤帆双蹄／東亜同文書院第九期生編

上海 東亜同文書院 1912（明治 45） 458 頁 [1694]

本書は、東亜同文書院第 9 期生が 1911（明治 44）年夏，11 班に分れて行った旅行の報告である。すなわち，榊原直矢以下 6 人の湖南四川班は、6 月 25 日上海を發ち、漢口・宜昌・施南・咸豐・黔江・酉陽・龔灘・涪州・重慶・成都を訪れ，11 月 24 日歸途についた（「入蜀紀行」）。吉川清治以下 5 人の北京駐在班は，7 月 1 日に船出し，5 日目に北京に入り，9 月 12 日までさまざまなものをみる（「北京の話」）。岩城愛輔以下 5 人の天津循環班は，7 月 1 日に船出し，漢口・衛輝・邯鄲・広平・冀州・河間・天津・滄州・武定・濟南・曲阜・濟寧・曹州・開封・北京・天津をめぐり，10 月 15 日歸途につく（「燕齊紀行」）。分部鼎以下 6 人の江蘇山東班は，6 月 26 日に上海を發ち，通州・塩城・海州・青島・即墨・平度・沙河・萊州・龍口・黄県・登州・福山・棲霞・萊陽・芝罘をめぐり，9 月 9 日歸途につく（「吳水魯山記」）。松島庄一郎以下 6 人の江寧武昌班は，7 月 1 日上海を發ち，南京・廬山・漢口（到着 8 月 13 日）をめぐった（「沿江記」）。望月義光以下 6 人の湖広循環班は，7 月 1 日上海を發ち，漢

口・武昌・蒲圻・宝塔州・岳州・長沙・湘潭・湘鄉・安化・益陽・沅江・常德・安鄉・沙市をめぐり、9月26日帰途につく（「湖広遊記」）。鈴木泰以下3人の寧波鎮江班は、6月29日上海を發ち、鎮江・無錫・常熟・蘇州・紹興・寧波・南匯・奉賢をめぐり、7月30日帰途につく（「都廻り」）。浅野岩次郎以下6人の寧波廈門班は、7月1日上海を發ち、杭州・寧波・奉化・寧海・台州・海門・温州・瑞安・平陽・福鼎・沙埕・福州・永福・德化・永春・泉州・廈門をめぐり、9月5日帰途につく（「越水閩山」）。高野幹一以下6人の江陰廈門班は、6月29日に船出し、江陰・蘇州・杭州・蘭溪・金華・処州・龍泉・浦城・建陽・建寧・延平・沙県・永安・寧洋・龍岩・漳州・廈門をめぐり、9月8日に帰途につく（「南下録」）。中西義一以下6人の汕頭広州湾班は、7月5日船出し、香港・海南島・雷州・石城・高州・江門・新会・新寧・広州・汕頭・潮陽・廈門・台北をめぐり、10月7日帰途につく（「南越遊記」）。鈴木秀雄以下6人の清化県漢中班は、6月29日船出し、大連・天津・北京・清化鎮・沢州・陽城・翼城・絳州・安邑・解州・蒲州・華州・咸陽・乾州などを経て漢中に至り、洋県・石泉・梅湖・紫陽・興安・洵陽・白河・鄖陽府・均州・襄陽・宜城などを通り、革命のさなかの武漢三鎮もまわり、11月7日帰途につく（「漢中隊」）。巻末に、「支那内地旅行便覧」を収む（8つの班の作成した、通過地点毎の「交通・道路・旅店・言語・通貨・食物」などについての一覧表である）。

## 1913

### 蘇浙見学録／来馬塚道述

東京 鴻盟社 1913（大正2） 16, 218頁 [3729]

著者は禅宗の宗教家。宗教家の目から中国を研究し、とりわけ天童寺を参拝したいという宿願をもって、1913（大正2）年3月17日に門司を發ち、上海・杭州・蘇州・鎮江・南京・寧波を時間をかけてまわり、4月17日神戸に着いた。同門の東京巢鴨高岩寺住持来馬道雄が同行し、また南京までは東洋書画家神木鷗津が同行した。

本書は帰朝後の講演「蘇浙巡訪談」「天童育王及普陀参拝談」（旅行案内を兼ねた旅行印象談）、巡遊先で毎日『中外日報』や知人に書き送ったのをまとめた「蘇浙巡訪一日一信」および「見学余談」（「支那仏教の現状」「道教に就いて」「予の支那人観」など）などから成り、各地についての写真・略図があり、巻末には8頁の「蘇浙見学録索引」がある。

仏教の見地からみた旅行案内がないという現状認識があつて、巡遊の先々での地理・地形・名勝についてこまごまと記すとともに、歴訪した寺については個々に詳細に描写している。

### 楽此行／東亜同文書院第十期生編

上海 東亜同文書院 1913（大正2） 346頁 [2315]

上海東亜同文書院第10期生による、同院恒例の夏期調査旅行（1912年）の、各班別報告文集である。参加者は11班78人、辛亥革命直後の旅行という時の恵みを得た。経過地点がおもに海岸線であることが、従来の調査旅行と特色を異にする。

永井洵一ほか1名の北京駐在班は、7月11日に上海を發ち、漢口に立ち寄り、参議院を傍聴するなどして、北京に入り、市内を歩き、万寿山、十三陵へ行くなどして、9月14日、辞京した。奥山政治郎以下7人の青島・秦皇島班は、7月1日に上海を發ち、青島・即墨・金家口・

海陽・崆頭・屯家齊・千金・芝罘・威海衛・文登・石島・王家庄・俚島・榮城・寧海・龍口・虎頭崖・羊角溝・上家道口・楊家橋・馬窩・塩窩・黄昇店・霑化・海豊・慶雲・塩山・滄州・馬廠・天津・塘沽・唐山・秦皇島（9月6日）を經過した。山本恒三郎以下8人の通州・濟南班は、7月1日に上海を發ち、通州・四呂場・余東場・石港・掘港・豊利・拼茶・角斜・富安・東台・塩城・阜寧・安東・新安・板浦・海州・青口・青島・膠州・濰縣・周村・濟南などを經過し、8月16日、濟南で解散した。堀江信次以下7人の南京・天津班は、7月2日に上海を發ち、南京・浦口鎮・滁州・鳳陽・南宿州・徐州・利国・滕縣・兗州・曲阜・泰安・濟南・灤口・濟河・晏城・禹城・平原・德州・東光・青縣・静海・天津・大沽を經過し、8月20日、大沽で解散した。伊地知吉次以下7人の江蘇・安徽班は、7月1日に上海を發ち、吳淞・宝山・溜河・崇明・海門・通州・如皋・泰州・揚州・清江浦・鎮江・漢口・蕪湖・江陰・福山・潯浦・常熟・崑山・太倉・嘉定を經過し、8月13日、上海に向かった。磯三喜三以下6人の杭州・九江班は、7月4日に上海を發ち、杭州・富陽・桐廬・嚴州・蘭溪・龍游・衢州・常山・玉山・河口鎮・戈陽・貴溪・余干・南昌・吳城・德安・九江・漢口を經過し、9月3日、上海に歸った。檜木野恣以下8人の福建班は、7月4日上海を發ち、福州・閩清縣・水口・尤溪・大田・漳平・龍岩・連城・汀州・寧化・清流・歸化・沙縣・順昌・邵武を經過し、9月24日、歸途につく。伊藤進以下8人の寧波・廈門班は、7月1日に上海を發ち、寧波・定海・象山・石浦・寧海・海門・太平・玉環・樂靖・温州・瑞安・平陽・福安・三都澳・羅源・連江・福州・福清・興化・惠安・泉州・同安・廈門を經過し、9月15日、廈門で解散し、一同台湾に向かう。床井庄左衛門以下8人の廈門・香港班は、7月3日に上海を發ち、廈門・石碼・漳州・漳浦・雲霄・詔安・黃岡・南澳・汕頭・金廂・陸豊・海豊・舖心・三多祝・惠州・博羅・広東・香港を經過し、8月28日、香港で解散した。加藤日吉以下9人の九龍・北海班は、7月4日に上海を發ち、香港・九龍・大浦・深圳・石龍・汕村・広東・江門・陽江・織篋・上洋・沙汊・儒洞・電白・水東・梅萊・吳川・黄坡・遂溪・安舖・北海を經過し、8月30日、北海で一応解散した。松本昌之輔以下8人の香港・北海班は、7月4日に上海を發ち、香港・広東・九江・三水・肇慶・禄歩・悅城・六都・羅定口・都城・封川・梧州・藤縣・白馬・平南・潯州・貴縣・南寧・横州を經過し、8月22日、三水で一応解散したが、さらに台湾・琉球・沖繩にまで足をのぼした隊員がいた。

#### 支那大陸横断遊蜀雜俎／中野孤山著

東京 1913（大正2） 302頁 〔3033〕

著者は広島県立中学校で教鞭をとっていたが、四川総督錫良が教育振興政策をとり、教育家の派遣を日本に求めたとき、知人のすゝめでこれに応募した。家族を東京に残し、まず上海に向かった。1906（明治39）年10月3日に上海に着き、6日に上海港を出帆し、長江をさかのぼり、11月2日万県に着いた。万県からは陸路で成都に入った。成都では、1906年7月6日に開学した補習学堂兼優級師範学堂の教習の地位を得て、1909年まで在職したらしい。その間、1907年7月12日～8月3日に峨眉旅行を行い、峨眉・嘉定の名勝旧跡をみている。成都を去る年（多分1909年）の12月に、水路で矢の如く嘉定・叙州・瀘州を下って重慶に入った。翌年1月に重慶を發ち、1910年春には東京牛込に帰っている。

本書は、上海－成都の旅程・峨眉旅行・重慶行きの、当時の日記を省略記述したらしい部分と、上海・漢口・成都での、のちに記したらしい見聞記（とくに成都の風俗は詳しい）と、長



江沿岸の都市や港についての沿革・地勢・貿易・気候・人情・風俗などの概述と、四川省の産物や植物などについての研究的叙述などが、全 21 章に分けられ入り混って収録されている。長江流域こそ世界的富源であり、四川は天下の宝庫であるとの認識をもって、とにかく中国といえど華北か華南を語る日本側の認識に対して、四川の事情を詳しく知らせようという観点から記したものらしい。四川特産白蠟についての研究的記述がある。

## 1914

### 沐雨櫛風／東亜同文書院第十一期生編

上海 東亜同文書院 1914 (大正 3) 460, 20 頁 [2316]

上海東亜同文書院第 11 期生の、1913 (大正 2) 年夏の、恒例の中国各地調査旅行の報告集である。参加者は 9 班 73 人。

立石登以下 7 人の甘肅・四川班は、6 月 29 日に上海を発ち、大連・天津・北京・洛陽・新安・鉄門・澠池・硤石・陝州・靈寶・閿郷・潼関・渭南・臨潼・西安・咸陽・醴泉・乾州・永寿・邠州・長武・涇州・平涼・静寧・会寧・蘭州・渭源・鞏昌・西和・成県・略陽・広元・昭化・南部・順慶・定遠・合州・重慶 (11 月 15 日到着) を経過し、同 28 日に重慶を発ち、万県・宜昌・漢口を経由して、12 月 13 日上海に向かった。浦川秀信以下 10 名の津浦・京漢班は、6 月 30 日に上海を発ち、南京・浦鎮・臨淮・蚌埠・固鎮・臨城・鄒県・曲阜・泰安・固山・済南・禹城・平原・德州・天津・北京・正定・石家荘を経過し、8 月 9 日同地で解散した。森田龍太郎以下 7 人の北京駐在班は、6 月 29 日に上海を発ち、南京・漢口・洛陽・鄭州を経由して、7 月 12 日に北京に入る。8 月 28 日同地で解散するまで、北京城内各方面に調査に出かけ、万寿山・八達嶺・十三陵などへも観光に出かけている。青木克雄以下 8 人の安慶・宜昌班は、6 月 30 日に上海を発ち、安慶・桐城・舒城・廬州・寿州・正陽関・潁州・太和・周家口・鄆城・泌陽・唐県・襄陽・宜城・荊門・当陽・宜昌・岳州・新堤・漢口を経過し、10 月 17 日、帰滬した。小菅宏平以下 8 人の汕頭・長沙班は、7 月 3 日に上海を発ち、香港・汕頭・潮州・大埔・峰市・上杭・水口・汀州・瑞金・会昌・雩都・贛州・南康・南安・南雄・江口・韶州・樂昌・平石・郴州・永興・耒陽・新城・衡州・淥口・株州・萍郷・湘潭・長沙・漢口・大冶・南京を経過し、10 月 22 日、上海に着いた。村本伝蔵以下 8 人の蕪湖・沙市班は、6 月 30 日に上海を発ち、蕪湖・南陵・涇県・三溪・旌徳・績溪・徽州・祁門・浮梁・景德鎮・饒州・南昌・九江・漢口・長沙・沅江・龍陽・常德・安郷・沙市を経過し、3 ヶ月目に帰滬した。牧野武樹以下 9 人の長沙・福州班は、7 月 1 日に上海を発ち、漢口・長沙・株州・醴陵・萍郷・袁州・樟樹・南昌・撫州・建昌・新城・杉関・光沢・邵武・順昌・洋口・下洋・延平・黄田・水口・閩清・福州を経過し、9 月 19 日に帰滬した。志村悦郎以下 9 人の京漢・津浦班は、6 月 31 日に上海を発ち、漢口・瀾口・孝感・広水・信陽・確山・和尚橋・鄭州・開封・北京・天津・済南を経過し、7 月 31 日、済南で解散した。保木本利治以下 7 人の陝西・四川班は、6 月 29 日に上海を発ち、大連・旅順・金州・天津・北京・洛陽・宜陽・永寧・盧氏・雒南・商州・藍田・西安・咸陽・扶風・鳳翔・宝鶏・留壩・褒城・漢中・沔県・寧羌・広元・昭化・劍閣・綿州・羅江・徳陽・漢州・新都・成都・嘉定・峨眉山・叙州・瀘州・富順・自流井・隆昌・榮昌・永川・重慶・漢口などを踏破し、12 月 8 日に上海に帰った。巻末に各班旅行経過表がある。

#### 支那周遊図録／鳥谷又蔵（幡山）著

東京 周遊図録発行所 1914（大正3） 15, 167, 118, 10頁 [5085]

著者は書道家【画家】で寺崎広業の弟子。本書は、前半が「支那周遊図録」にあたり、1913年2月15日に神戸を発ち同年6月9日に釜山を発って帰国の途につくまでの旅行日誌のようなもので、行く先々で書いた山水画92葉が配されている。後半は「随感録」と題され、115項目にわたる中国論である。周遊した地点を列举すれば、台湾・廈門・鼓浪嶼・潮州（韓公祠廟・開元寺・金山書院・小西湖）・香港・広東・九龍・上海・杭州（西湖・林和靖廟・岳飛廟・靈隱寺・三潭印月・白雲庵・浄慈禅寺）・蘇州（孔子廟・滄浪亭・双塔寺・北寺の宝塔・寒山寺・楓橋）・南京（北極閣・鼓樓・明の故宮と孝陵・雨花台・朝天宮・孔子廟・貢院）・鎮江（甘露寺）・漢口・三峡（三遊洞）・南沱・宜昌（東山寺）・岳州（洞庭湖）・長沙（岳麓山・岳麓書院）・武昌（武昌城・黄鹤樓・漢陽製鉄所）・九江・廬山（東林寺）・鄭州・河南府（洛陽城跡・北邙山・龍門・潜溪寺・龍華寺跡）・汜水・開封府（鉄塔・契円の碑・太液池龍亭・繁塔）・北京（宮殿）・天津・大連・旅順（白玉山）などで、実地にみたものの印象、歴史的・政治的由来などが丹念に記され、また巻末には上記の先々での同行者や世話になった人々のリストがある。後半「随感録」は、中国は不統一・不潔・個人主義的で苦力・乞食・飢民にあふれ、「人間の相貌を備えたる動物と同視」して扱って当然といった感想と、食物・風俗・景色・建築物・美術・言語などの中国的特徴の紹介とが主な内容である。

#### 赴清実業団誌／赴清実業団誌編纂委員

1914（大正3） 243頁 [1767]

赴清観光実業団は1910（明治43）年4月17日に、東京・大阪・京都・横浜・神戸・名古屋などの各地から推薦された団員により成立し、5月5日に成団式挙行後、馬関を発った。メンバーは日本郵船会社社長近藤廉平（団長）・大阪商業会議所会頭土居通夫（旅行には不参加）・横浜商業会議所会頭大谷嘉兵衛・川崎造船所社長松方幸次郎・東京商業会議所副会頭大橋新太郎・神戸商業会議所会頭滝川辨三・名古屋商業会議所副会頭鈴木惣兵衛・横浜商業会議所特別議員永井久一郎・三井物産会社理事福井菊三郎・日清汽船会社取締役白岩龍平・京都商業会議所議員島津源蔵・東京商業会議所書記長白石重太郎の12人であり、団長随員日本郵船会社西郷午次郎・同川村景敏が同行した。

一行は、釜山・京城・安東などにたちよって邦人実業家や韓国高官と交歓ののち、5月14日奉天に入り、撫順・大連・旅順・営口・天津・北京・張家口・漢口・大冶・九江・南京・鎮江・上海・蘇州・杭州をめぐって、各地の邦人実業家・在清高官や清国側高官・実業家と交歓し、6月末から7月上旬にかけて帰国した。本書は行動日程や各地での歓迎者、歓迎会での双方の演説要旨などをおもに書きこんだものであり、巻末に、近き将来に実現のはずの清国側の赴日考察実業団の組織と出発延期の事情が記され、また沈仲礼（上海商務総会議董・中国紅十字会総董）以下65人の赴日考察実業団団員のリストが収められている。

## 1915

#### 遇戦閑話／勝田主計〔述〕

1915（大正4） 477頁 [2495]

勝田主計は退官後、中国欧米漫遊を思いたち、1914（大正3）年6月8日に東京を発ち、中国を皮切りに、シベリア経由でヨーロッパ・アメリカをまわり、同年11月17日横浜に帰る。ロンドン滞在中に第1次世界大戦が勃発し、戦時における諸現象や変化（特に政治財政上の）を目撃するところとなる。戦争によって当初の旅行目的の多くは達せられなくなったが、他国での戦時下の見聞は世に伝える価値があると考えて、1915年2月5～18日に口述したのが本書である。中国については40頁余りしかない。

上海経由で中国入りしたが、上海には6月13～15日滞在し、前回（1909年）きたときの印象と対比すると、短い年数の間に大きな変化があったと観察する。今回の中国旅行の目的は、津浦鉄道沿線と山東省をみることにあったとし、それぞれに約20頁を割いている。津浦鉄道については、浦口から天津まで乗ってみてイギリスとドイツの競争的経営ぶりをみた。途中下車もし、曲阜で孔子廟を拝み、泰安府で泰山詣でをした。山東では山東鉄道、岱山・坊子両炭坑および青島の貿易を主として視察し、ドイツの経営は世に喧伝されているほど恐るべきものではなかった、といった観察を下している。

#### 山東遍路／遅塚金太郎（麗水）著

東京 春陽堂 1915（大正4） 294頁 [7175]

紀行文家として知られる著者の旅行記の一つ。1914（大正3）年12月、海路を青島に向かい、そこから山東鉄道で済南まで行き、同じコースを辿って帰国した。青島・済南の町の様子、青島近郊の農民の生活、山東鉄道沿線の風景、曲阜で途中下車して孔子廟に詣ったこと、泰山に登ったこと、などを軽い筆致で描いている。

当時はドイツの租借地であった青島・膠州湾地域を第1次世界大戦の勃発に伴って日本軍が占領して僅か1ヶ月、という時期で、著者の旅行の目的の一つはこの日独戦後の状況観察であったらしい。青島では軍人に案内されて戦場跡をみてまわっており、また軍政の状態、市の整頓が済むまで入市を許されずにいる日本人の国旗組の様子、などにもふれている。

#### 我が観たる満鮮／中野正剛著

東京 政教社 1915（大正4） 394頁 [5970]

著者は1907（明治40）年に満洲旅行をし、1911年辛亥革命勃発に際して上海に行ったことがある。1913（大正2）年8月22日京城に来ていたが、10月13・14日に大連で開催される満鮮商業連合会の大会に出席する朝鮮側の代表者が、京城に集合して大会前に満洲視察旅行をすることになり、同行する。一行19人は9月29日京城を発ち、奉天（9月30日着）・長春（10月2日着）・吉林（10月3日着）・哈爾濱（10月5日着）を旅行し、10月7日奉天に戻り、更に大連・旅順の間を放浪し、10月15日に京城に戻った。本書は、1913年8月来「一年有半満鮮の野に放浪」した著者が、「社会政策と植民政策とを以て、国威の発揚に資すべき車の両輪なり」との立場から、「我對外発展の遲遅たるを憂」いて筆をとったもので、自ら記す如く紀行文とも議論文ともつかない朝鮮・満洲論である。満洲関係は「満洲遊歴雜録」「如何に大鉦を振ふ」（満鉄と官僚及び政党）「大国大国民大人物」（満蒙放棄論を排す）の3篇で、全体の約半分である。奉天ではいわゆる三頭政治（関東州都督府・満鉄公所・総領事館）の弊害を体験し、その不安定・不定見・無方針および冗員を非難し、文官都督府による統一の必要を論じ、長春では邦人の活気と通貨危機を観察し、鉄道附属地行政のあるべき姿を論

じ、吉林では吉長線を例に日中合辦事業は不都合なりと観察し、更には従来の日本の満洲政策は中国側の利権論を顧慮しすぎた故に失敗であると断じ、また長春を四通八達の要衝たらしむような鉄道政策を提言する、といったような内容である。

#### 大陸修学旅行記／広島高等師範学校

1915（大正 4） 236 頁 [4408]

1914（大正 3）年夏、広島高等師範学校英語部 3 年生 8 人、他学部生徒 3 人および引率教官金子健二からなる旅行隊は大陸修学旅行を決行した。すなわち 7 月 19 日に広島を発ち、上海・南京・大連・旅順・奉天・安東・平壤・京城・釜山をまわり、8 月 8 日帰校した。本書はそれを記念して編集されたもので、金子健二「所感」（上海・南京への感想と南満朝鮮の教育についての所感をのべたもの）、校長幣原坦「殖民地教育と南満洲」（講演）「殖民地教育展覽会概況」（1914 年 12 月 5～9 日に同校臨接地で開かれたもの）を除く 8 篇は参加生徒の手によるものである。

「庶務部報告」は旅行の企画から帰国までの簡単な経過報告であり、「旅行日誌」が旅行日記・見聞記のようなものである。教育機関への見学もあったが、旅行の大方の時間は名所旧蹟の見物に費されたようである。やゝ特異な見聞記としては、「教育状況一般」「大連中央試験所参観記」などがあり、他に「通信部報告」「衛生部報告」「会計部報告」（旅行中の毎日の支出の記録と、中国の貨幣制度についての雑感など記す）がある。

#### 青島游記／松浦厚著

1915（大正 4） 163, 21 頁 [4445]

本書は貴族院議員松浦厚（伯爵）による、ドイツから奪って間もない 1915（大正 4）年 3 月における山東の「政治的視察」の記録であり、附録に、同行の文学博士建部遯吾による「山東経営策」を収めている。文学士葛西某も同行した。

青島守備軍司令部・海軍要港部・青島軍政署・山林局などを訪問し、最高責任者たちから青島の近状、教育状況、沿岸の漁業や植林事業などの実情をきき、また砲台堡壘（ドイツの）を訪れて戦跡を見物し、旅順の要塞（ロシアの）とそれを比較考察し、あるいは市内の苦力市場・屠獸場・天文台などを視察し、更に青島在住の邦人実業家主催の招宴で青島実業の形勢をききとる。なお李村・九水・済南府・大明湖に遊んでいる。遊記の最後に、青島処分についての松浦の意見書が附けられている。

### 1916

#### 南支那之一瞥／岡田忠彦著

東京 警眼社 1916（大正 5） 226 頁 [2366]

著者は長崎に赴任して 2 年余になる官吏で、「其間長崎港と最も関係の深い上海其他長江一帯の地を是非一見したいとの希望を持って」いたが、遂に上司の許可を得て、1914（大正 3）年 8 月 3 日に長崎を発ち、上海・蘇州・南京・漢口に行き、石灰窑・大冶鉄山も視察するなどし（杭州も予定したが、果さず）、8 月 20 日長崎に帰った。行くに際して色々と勉強したらしく、巻末に参照した書目を 25 冊ほどあげている。本書は旅行中の行動や観察を克明に記した

旅日記であると共に、上海・蘇州・南京・武漢三鎮・大冶鉄山、および予定していた杭州について、歴史・現状・貿易・交通などの解説書ともなっている。スケッチが多数挿入されている。記述は事実に詳しく、実際的かつ簡潔である。

#### 暮雲暁色／東亜同文書院第十三期生編

上海 東亜同文書院 1916（大正5） 570, 15頁〔2152〕

本書は、1915（大正4）年夏期の、東亜同文書院恒例の中国各地調査旅行の、各班別の旅日記的報告集である。参加者は10班67人。西村充之以下7人の湖南班は、6月28日に上海を発ち、漢口・長沙・衡山・衡州・祁陽・永州・東安・新寧・武岡・城步・綏寧・靖州・会同・洪江・黔陽・沅州・晃州・省溪・銅仁・麻陽・鳳凰・乾州・永綏・保靖・永順・辰州・桃源・常德・岳州・漢口をめぐり、南京見物もして、11月4日上海帰着。宇治田直義以下7人の山東・盛京班は、6月28日に上海を発ち、浦口・蚌埠・曲阜・泰安・濟南・青島・濰県・天津・北京・塘沽・唐山・開平・灤州・秦皇島・山海関・連山・葫蘆島・錦州・新民府・奉天・鉄嶺・撫順・長春・大石橋・營口・大連・旅順・ハルピン・浦塩をまわり、9月上旬、浦塩で解散した。中尾慎三以下7人の江西東線班は、6月29日に上海を発ち、南京・漢口・九江・湖口・饒州・樂平・万年・東郷・金谿・建昌・南豐・広昌・寧都・瑞金・会昌・長寧・興寧・嘉應・三河司・潮州・汕頭・香港・広東・澳門・台湾をまわり、9月中旬に上海に向かう。新田一男ほか1名の北京駐在班は、6月30日に上海を発ち、漢口・北京・天津・張家口・濟南などをまわった。平尾精一郎以下7人の浙江・江西班は、6月28日に上海を発ち、寧波・奉化・天台・台州・温州・青田・処州・縉雲・永康・武義・金華・蘭溪・嚴州・淳安・徽州・屯溪・祈門・浮梁・景德鎮・彭沢・湖口・九江をまわり、9月11日、九江で解散した。井上漸以下9人の山西班は、7月2日に上海を発ち、青島・大連・天津・北京・門頭溝・房山・坨里・石家莊・井陘・平定・孟県・寿陽・太原・徐溝・太谷・榆社・沁州・屯留・潞安・高平・沢州・清化・焦作・新郷・開封をめぐり、9月24日開封で解散したが、5人はその後、漢口・大冶・南京で遊んで、10月5日、帰滬した。柳原敏一以下9人の安徽・湖北班は、6月28日に上海を発ち、蕪湖・廬州・六安・霍山・潜山・黃梅・九江・武穴・大冶・蘄水・羅田・麻城・黃安・黃陂・漢口をめぐり、一部はさらに武昌・漢陽・咸寧あるいは長沙などをまわった。石川虎雄以下6人の山東・直隸班は、6月29日に上海を発ち、浦口・兗州・濟寧・安山駅・東平・東阿・東昌・臨清・武城・德州・連莊・興濟鎮・静海・天津をめぐり、8月25日同地で解散し、一部は營口や大連・奉天などに足をのぼした。小西茂以下9人の江西西線班は、6月29日に上海を発ち、漢口・九江・廬山・湖口・南昌・豐城・樟樹・臨江・新淦・峽江・吉水・吉安・泰和・万安・贛州・信豐・龍南・定南・和平・連平・長寧・仏崗・從化・花県・新街・広東・香港をまわり、9月27日に帰滬した。野口小三以下4人の陝西班は、6月27日に上海を発ち、陽曲・太原・清源・交城・文水・汾陽・中陽・石楼・永和・延川・延長・宜川・洛川・中部・宜君・同官・耀州・三原・涇陽・咸陽・西安・臨潼・藍田・商州・龍駒寨・商南・荊紫関・浙川・老河口・襄陽・鐘祥・仙桃鎮・漢口をめぐり、10月30日に上海に帰った。巻末に旅行経過表を附す。

#### 支那旅行記／藤山雷太著

出版地・出版者不明 1916年（大正5）序 110頁〔XI-6-B-d-23〕

藤山雷太（1863-1938）は佐賀県出身の実業家。長崎師範学校・慶應義塾を卒業後、長崎県

会議員となる。1892 年福沢諭吉の紹介で三井銀行に入り、三井財閥の改革にあたりとともに、芝浦製作所所長に就任。1902 年に三井銀行を去り、東京市街電鉄・日本火災・帝国劇場の創立に参加。09 年渋沢栄一に乞われて日糖疑獄後の大日本製糖の社長に就任して再建を進めるなど手腕を発揮し、藤山コンツェルンを築き上げた。1923 年貴族院勅選議員。1917 年から 25 年には東京商業会議所会頭を務めた。政治家の藤山愛一郎は長男。

本書は「旅行日誌」と「視察概記」の二部からなる。藤山にとっては 1889 年、1906 年に継ぐ 3 度目の訪中であり、「朝野の有力者と会見して意見を交換する」(48 頁)ことを目的にした旅行であった。期間は、1915 年 9 月～11 月の約 2 か月である。旅程は、釜山－京城・仁川－平壤－安東－奉天・撫順－大連・旅順というなじみのパターンであるが、大連から船で青島に入り、続いて済南－天津－北京と回ったのがやや珍しいか。北京からは、漢口・武昌－九江－南京－上海－杭州－上海と、これもよく見られる中国旅行定番のルートである。

本書の特徴は、各地で面会した中国の要人から贈られた写真や揮毫を多数掲載していることである。主な人物を挙げると、袁世凱、陸徵祥、梁士詒、馮国璋、王占元、段之貴、張作霖、周子熙、靳雲鵬、朱家宝、周自齊、孫宝琦、唐紹儀、鄭孝胥など、時世柄、北洋系の政治家・軍人が多い。また、馮麟霈(京師総務商会総理)、朱葆三(上海総商会総理)、蘇錫岱(南京総商会総理)ら経済界の有力者の揮毫もある。「視察概記」には「山東鉄道」「砂糖市場」「取引一斑」など、砂糖業に関する記述があり、実業家らしい関心と観察が記される。藤山の手になる旅行記としては、ほかに『鮮支遊記』(1930 年)、『満鮮遊記』(1935 年)、『台湾遊記』(1936 年)などがある。(村田雄二郎)

## 1917

### 風餐雨宿／東亜同文書院第十四期生編

上海 東亜同文書院 1917(大正 6) 642, 18 頁 [1695]

上海東亜同文書院第 14 期生の、1916(大正 5)年夏期の調査旅行の報告文集で、参加者は 11 班 77 人。牧野重利以下 6 人の四川班は、6 月 26 日に上海を発ち、漢口・孝感・雲夢・応城・徳安・京山・安陸・宜城・襄陽・老河口・均州・鄖陽・白河・洵興・興安・紫陽・城口・太平・東郷・綏定・三匯場・渠県・広安・合州・重慶・宜昌・漢口をまわり、11 月 11 日に帰滬した。千田吉固以下 6 人の河南・山西班は、6 月 26 日に上海を発ち、漢口・鄭州・洛陽・新安・澠池・陝州・靈宝・閿郷・潼関・蒲州・虞郷・解州・運城・安邑・聞喜・油沃・翼城・沁水・陽城・沢州・懷慶・武陟・鄭州・開封・歸徳・徐州・済南をまわり、8 月 20 日済南で解散、3 人は青島経由、3 人は北京・満鮮を経由して帰滬する。山田儀四郎以下 6 人の江蘇・直隸班は、6 月 25 日に上海を出発し、鎮江・儀徴・六合・天長・盱眙・五河・泗州・靈璧・宿州・永城・歸徳・蘭封・開封・延津・衛輝・道口・龍王廟・臨清・故城・滄州・天津・北京をまわり、9 月 11 日天津で解散した。森俊雄以下 10 人の京漢班は、6 月 27 日上海を発ち、漢口・信陽・確山・駐馬店・遂平・鄆城・周家口・許州・禹州・和尚橋・鄭州・洛陽・開封・彰徳・豊楽鎮・鴨鵝營・臨城・琉璃河・周口店・良郷・坨里・北京・天津をまわり、8 月 7 日天津で解散した。高山邦臣以下 8 人の北満班は、6 月 28 日に上海を発ち、大連・旅順・奉天・長春・陶頼昭・新城・杜爾伯特・多耐站・昂々溪・齊々哈爾・訥河・嫩江・通北・海倫・綏化・呼蘭・哈爾賓・撫順・青島をまわり、9 月 13 日青島で解散した。伊沢信以下 4 人の広西班は、7 月 2 日に上海

を発ち、香港・広東・肇慶・梧州・潯州・武宣・象州・柳州・柳城・慶遠・河池・東蘭・泗城・百色・南寧・貴県をまわり、9月初頭、梧州へ戻って調査の旅は終わった。平野銀次以下7人の江蘇・山東班は、6月25日に上海を発ち、鎮江・揚州・高郵・宝陰・淮安・清江浦・桃源・宿遷・郟城・沂州・蒙陰・新泰・萊蕪・博山・淄川・張店・周村・済南・泰山・曲阜・金嶺鎮・青島・濰県・昌邑・萊州・黄県・龍口・登州・芝罘・大連（9月4日到着）をまわり、大連で解散した。毛塚佶助以下7人の江西・福建班は、6月26日に上海を発ち、漢口・大冶・九江・南昌・安仁・弋陽・広信・玉山・常山・江山・浦城・建寧・延平・閩清・福州・興化・仙遊・泉州・同安・漳州・廈門・汕頭・潮州・香港・広東・台湾をまわり、10月2日に台北を発った。茅野定次以下8人の直隸・山西班は、6月26日に上海を発ち、大連・天津・北京・張家口・懷安・天鎮・陽安・大同・朔平・平魯・朔州・寧武・静楽・太原・石家莊・正定・順徳・南和・鶏沢・威・臨清・清平・齊河・済南・青島をめぐり、9月4日、青島で解散した。水野芳治以下8人の農工科湖南班は、6月26日に上海を発ち、九江・瑞昌・興国・通山・崇陽・通城・羊楼洞・新庭・新堤・岳州・長沙・醴陽・萍郷・漢口・大冶をめぐり、8月中旬、大冶で解散した。鈴木謙吉以下7人の関外班は、6月7日に上海を発ち、大連・撫順・奉天・三面船・法庫門・彰武・義州・朝陽・赤峰・圍城・多倫・独石口・張家口・北京・天津をめぐり、9月15日天津で解散した。

巻末に、経過各地点の里程、交通機関、道路、旅店（宿屋・宿料）、通貨、言語、食物などについての、各班別の一覧表がある。

#### 支那漫遊五十日／山本唯三郎著

東京 1917（大正6） 63頁 [7172]

著者は実業家、商用で中国に往来すること20数回、天津で経営に従事すること10数年という経歴をもつが、はじめて小閑を作り中国漫遊を思いたち、妻・娘と森一兵（写真撮影）を同行者に、1917（大正6）年2月14日に東京を発ち、釜山・京城を経由して天津・北京・八達嶺・十三陵・漢口・南京・杭州・上海をめぐり、同年4月3日東京駅帰着。途上日記あるいは書翰風に記した短文が『国民新聞』『岡山新聞』『中央新聞』に通算26回に亘り掲載され、それらに地図・日誌・写真（全体の4分の1ほどの分量）をつけて非売品として刊行したのが本書である。

観光旅行でもあるが、天津では開灤炭坑の各工場を視察し、開灤鉱務局長メジョル＝ネーソンと歓談している。北京では大總統黎元洪・農商総長谷鍾秀・交通銀行総裁曹汝霖に会見し、上海では孫逸仙・唐紹儀を訪問し、両人の議論を伝えている。

## 1918

#### 満蒙の旅囊／飯田耕一郎著

1918（大正7） 787頁 [1892]

満鉄の鉄道技術家である著者は、満蒙各地の調査旅行を行い、その印象および見聞事項を逐次「満日又は遼東の新聞」に掲載したが、それら全10篇を一括して刊行したのが本書である。旅行の年をほとんど記していないので、大体推測してまとめれば、以下のようなになる。「金安旅行記」は、1915（大正4）年5月ごろ20日間に亘って、金州・貔子窩・莊河・青堆子・大孤

山・大東溝・安東を調査旅行したときの報告、「普蘭店より貔子窩まで」は、1916年3月末までの調査結果が記してあるから、そのころの、表題の地点での調査旅行、「大石橋より大孤山まで」も同じころのもので、岫巖での調査も報告している。「開原海龍撫順通化間の旅」は時期不明で、表題の地点のほか、北山城子・営盤・興京の調査もしている。「復州まで」は、7月28日に同行者2名と大連を発ったとあり、年度は不明（多分1916年）、普蘭店から海路で五湖嘴に行き、それから復州に行った調査旅行である。「遼西の旅」は一行4人で、大連から奉天を経由して、錦州・連山湾・義州・阜新を調査旅行した報告で、1917年2月頃らしい。「遼中の旅」は、他に同行2名あって、1917年12月16日に大連を発ち、全旅程14日で遼陽・遼中の調査旅行をした報告である。「西安県大疙疸まで」は、同行者3名で、1917年9月5日に大連を発ち、四平街・掏鹿・大疙疸を調査旅行した報告である。「東蒙の旅」は、1917年10月1日に同行4名で大連を発ち、朝陽・建平・赤峰・開魯・阜新・蒙古鎮・清河門・哈拉套街・小庫倫・大廟・彰武・新民府などの調査旅行の報告で、大連から新民府まで62日間かゝったとある。「吉会の旅」は、1918年2月26日に、他に4名の同行を得て、大連を発ち、吉林・額穆・敦化・天宝山・銅仏寺・延吉・龍井村・会寧で、やはり62日かゝった調査旅行の報告である。

調査は地勢・人口・産物・商店・物価・金融機関・貿易・交通通信事情・治安・行政・教育機関・在留邦人・民情などについて詳細であり、また前述した地点のほか、通過した地点についても印象・見聞・体験をこまごまと記している。

#### 支那文明記／宇野哲人著

東京 大同館書店 1918（大正7） 414頁 〔4703〕

著者は1905（明治38）年から2年間清国に留学し、その間に中国の風俗・習慣、社会の事情、名所旧蹟などについて日本に書き送った。本書はそれらを1冊にまとめたもので、したがって全体が旅行記というのではない。本書には3篇の旅行記が含まれており、「山東紀行」「長安紀行」「長沙紀行」がそれである。

「山東紀行」は、1906年秋に著者が芝罘から青島・済南・泰山を経て河南省の開封まで旅行した時の記録である。著者が訪れた所についてそれぞれ地誌的説明と著者の印象が記されているが、なかでも詳しいのは、雨中を泰山に登った時の模様と、孔孟関係の史蹟——曲阜聖廟・至聖林・孟子墓など——を訪れたことである。

「長安紀行」は、1907年秋、河南省の清化鎮から洛陽に出て、そこから西へ現在の隴海鉄道に沿って馬車か騎乗で旅をした時のことを記している。長安は著者の宿願の地であつたらしく、数多くの史蹟を見て歩いている。さらに著者は西へ足をのぼし、漢武帝の茂陵、唐太宗の昭陵なども訪れたのち、同じ途を洛陽まで引き返してそこから鄭州を経て漢口へ出ている。

漢口から長沙へ船の旅をし、長沙でいくつかの名所を訪問したことを記録したのが「長沙紀行」である。そこでは、宋代に創建された岳麓書院（著者訪問時には湖南高等学堂といった）を訪れたことが比較的詳しく述べられ、また葉德輝訪問にもふれている。

最初に述べたように、以上3篇の旅行記のほかに、本書には北京・武漢・南京・鎮江・蘇州・杭州の名勝案内があり、また著者が北京滞在中に見聞した同地の風俗、中国社会および中国人についての社会学的考察を記した文章などが含まれている。これらのなかで本書の中心をなすのは、旅行記と名勝案内から成る史蹟めぐりであるといつてよく、その点で本書は有用なガイ



ド・ブックの役割を果たしている。

### 燕雲楚水／釈宗演著

鎌倉 東慶寺 1918 (大正 7) 216 頁 [XI-4-1002]

釈宗演 (1859-1919) は臨済宗の僧。越前国高浜の生まれ。字は洪嶽、号は楞伽窟、幼名は常次郎。1870 年京都妙心寺で得度し、78 年鎌倉円覚寺の今北洪川に参じた。慶應義塾に学び、卒業後スリランカに留学した。92 年円覚寺派管長。93 年シカゴで開かれた万国宗教会議に出席し、欧米社会に禅を紹介した。1900 年建長寺派管長も兼ねたが、05 年両派の管長を辞し東慶寺住職となった。06 年からヨーロッパ・インドを歴遊。14 年臨済宗大学 (現花園大学) 学長となり、16 年には円覚寺派管長に再任された。著述は数多く、『釈宗演全集』全十巻 (平凡社、1929-30 年) がある。

本書は、晩年の釈宗演が 1917 年に中国を訪れた 79 日間の手記である。徳富蘇峰と国府犀東が漢文の序を寄せる。漢文で書かれた「燕雲楚水」「遊支詩艸」と自作の和歌「支那のみち草」 (全 57 頁)、および知友から寄せられた漢詩文・和歌を集めた「方来詞華小纂」 (全 15 頁) に加えて、同行した二条穀堂の「随行日誌」 (全 216 頁) を付録として収める。全行程は、釜山－大邱－京城－安東の朝鮮経由で、奉天－北京－天津－大連－青島－済南－泰山－曲阜－徐州－鄭州－偃師 (嵩山少林寺)－洛陽 (龍門石窟)－漢口・武昌－南京－鎮江－蘇州－上海－杭州－上海。寺院・名蹟や人物の写真を多数載せ、大正期の日中仏教界の交流の記録として貴重である。『大正中国見聞録集成』第四卷 (ゆまに書房、1999 年) 所収。 (村田雄二郎)

### 西隣游記／関和知編

1918 (大正 7) 179 頁 [2762]

大隈信常・横山章・頼母木桂吉・桜井兵五郎・原文次郎・関和知の一行 6 人は、中国問題は帝国の死活問題であり、中国の研究・視察は帝国自身の研究・視察と等価値である、という政治的意識をもって、中国旅行を試みた。即ち、1917 (大正 6) 年 10 月 13 日に下関を発ち、釜山・京城・平壤を経て同月 16 日奉天入りし、大連・旅順・長春・天津・北京・漢口・武昌・九江・蕪湖・南京・上海・杭州などを旅行し、同年 11 月 18 日長崎港に帰る。本書は前半がその旅日誌で、「西隣游記」と題され、後半が「隣游余録」と題された印象記である。巻末に横山章「不可解の支那国民」、大隈信常「支那土産談」、関和知「支那と列国の共同保障」という短文と、旅先の各地で世話になった日中各層の人々のリストがある。

約 40 日の駆け足旅行であるが、一行は甚だ精力的に各地で邦人事業を視察し、政情・世情を観察し、各地の日中要人と会食・歓談し、且つ典型的な観光旅行者風に行く先々で景勝地・名所旧跡を見物している。なお会見した中国要人中、和碩肅親王・奉天省長兼督軍張作霖・財政総長梁啓超・交通総長曹汝霖・総理段祺瑞・大總統馮国璋・元老徐世昌・内務総長湯化龍・教育総長范源濂、あるいは岑春煊・柏文蔚・孫洪伊・戴天仇など南方派の人々の印象や会談内容がやゝ詳しく記されている。全体として観察がこまかく、記述は簡潔で要領がいい。朝鮮についての記述もかなりある。

### 利涉大川／東亜同文書院第十五期生編

上海 東亜同文書院 1918 (大正 7) 554, 26 頁 [1696]

上海東亜同文書院第 15 期生の、1917（大正 6）年夏期恒例の調査旅行の報告であり、参加者は 14 班 60 人。毘舍利善資以下 6 人の京津駐在班は、6 月 25 日に上海を発ち、漢口・鄭州を経由して洛陽（河南府）・北京・天津に滞在した。そのうちの一人はさらに旅順に行き、肅親王に謁している。本田霧嶺以下 4 人の江蘇・直隸班は、6 月 25 日に上海を発ち、崇明・海門・通州・江陰・常州・無錫・宜興・溧陽・溧水・南京・蚌埠・懷遠・鳳台・蒙城・渦陽・亳州・開封・鄭州・徐州・濟南・青島・天津・北京（8 月 15 日到着）をまわった。北見五郎以下 5 人の貴州第 1 班は、6 月 25 日に上海を発ち、漢口・宜昌・万県・重慶・涪州・彭水・龔灘・沿河・徳江・思南・龍泉・湄潭・開州・貴陽・清鎮・平霸・安順・鎮寧・募役司・貞豊・興義・西隆・百色・南寧・潯州・梧州と、四川・貴州・広西の各省をまわって、広東・香港にも立ち寄り、10 月 28 日に帰滬した。高橋夢存以下 5 人の福建・香港班は、6 月 24 日に上海を発ち、福州・三都澳・霞浦・福安・寿寧・政和・松溪・建寧・延平・閩清・福清・涵江・莆田・興化・泉州・安海・廈門・同安・金門・汕頭・潮州・香港・広東・澳門・台湾をまわって、9 月 30 日に帰滬した。浜田唯喜以下 5 人の内蒙古班は、6 月 25 日に上海を発ち、青島・大連・奉天・長春・密門・農安・洮南・鄭家屯・白音他拉・莫力廟・開魯・奈曼王府・下窪・海力王府・赤峰・熱河・北京・天津をまわって、9 月 14 日天津で解散した。沖津保平以下 5 人の江蘇・山東班は、6 月 25 日に上海を発ち、鎮江・瓜州・揚州・宝応・淮安・清江浦・陳溪・灌雲・海州・臨洪・歡墩埠・沂州・莒州・諸城・青島・膠州・淄川・博山・周村・濟南・曲阜・泰安・濰県などをまわり、9 月 1 日に芝罘で解散した。金沢平陸以下 3 人の貴州第 2 班は、6 月 24 日上海を発ち、香港・広東・梧州・柳州・長安・三江・古州・都江・八寨・都勻・貴定・龍里・貴陽・修文・遵義・仁懷・赤水・合江・合津・重慶・宜昌・漢口をめぐる、10 月 21 日、帰滬した。河野和一以下 6 人の山西・陝西班は、上海を 6 月 24 日に発ち、漢口・沙市・宜城・襄陽・老河口・鄧州・内郷・浙川・荊紫関・商南・龍駒寨商・藍田・西安・潼関・聞喜・平陽・霍平遙・太原・正定・北京（8 月 30 日）をめぐる、天津で解散した。佃正一以下 5 人の雲南班は、6 月 24 日に上海を発ち、台湾・香港・海口・北海・海防・河内・老開・雲南府・楚雄・下関・順寧・永昌・騰越・八莫・マンダレー・ラングーン・ピナン・シンガポール・香港をまわって、11 月 10 日、帰滬した。川口憲一以下 5 人の河南・直隸班は、6 月 24 日に上海を発ち、漢口・鄭州・開封・蘭封・東明・開県・清豊・南楽・大名・臨漳・成安・肥郷・永年・南和・任県・唐山・柏郷・高邑・趙県・欒城・藁城・正定・定州・安国・博野・蠡県・高陽・安県・容城・新城・北京・通州・天津をめぐる、8 月 27 日、上海で解散した。宗内鴻ら 2 人の政治科班は、6 月 26 日に上海を発ち、漢口・鄭州・洛陽・北京・天津をめぐる、9 月 2 日天津で解散した。野島豊以下 3 人の農工科第 1 班は、6 月 25 日に上海を発ち、漢口・信陽・鄧城・許州・鄭州・開封・蘭封・考城・東明・濟南・曲阜・泰山・博山・淄川・青州・青島・濰県・昌邑・掖県・黄県・福山・芝罘・牟平・威海衛・芝罘をめぐる、9 月 5 日大連に向かう。飯塚雅蔵以下 4 人の農工科第 2 班は、6 月 26 日に上海を発ち、大冶・漢口・武昌・漢陽・信陽・鄧城・周家口・許州・鄭州・開封・蘭封・考城・東明・曹州・鉅野・嘉祥・濟寧・兗州・泰山・曲阜・泗水・費県・沂州・莒州・諸城・高密・青島（8 月 13 日到着）をまわった。清水長陽ら 2 人の農工科第 3 班は、6 月 26 日に上海を発ち、南京・太平・蕪湖・繁昌・廬山・大冶・漢口などをまわり、8 月 27 日に解散した。

本書は、以上の各班の、日記風の報告書からなり、巻末に、通過地名、里程、交通機関、旅店の種類と値段、通貨、言語、食物などを記した「旅行経過表」がある。

**支那漫遊記／徳富猪一郎（蘇峰）著**

**東京 民友社 1918（大正 7） 556 頁 [4004]**

著者は、1917（大正 6）年 9 月 15 日（東京発）から同年 12 月 9 日（神戸着）まで、玉生武一郎（遊歴地図作成）・山崎猛（写真撮影）を同行し、2 度目の中国漫遊をした。本書は前半が「禹域鴻爪録」と題する日記で、後半が「遊支偶録」と題する感想文である。ともに中国人民士に向けて、『国民新聞』に逐次掲録された。孔子の『春秋』における態度を理想的な新聞記者のものとして倣い、中国を観察したと自負する。行程は京城にはじまり、奉天・哈爾濱・長春・吉林・大連・旅順・營口・山海関・秦皇島・北京・十三陵・南口・青龍橋・八達嶺・張家口・大同・北京・漢口・九江・南昌・廬山・南京・揚州・上海・杭州・蘇州・曲阜・泰山・濟南・青島に及ぶ。「禹域鴻爪録」には、名所旧跡を訪れた感想、風俗・政情への観察などのほか、訪問した中国要人・名士についての寸評が多い。それらの人々とは、奉天督軍張作霖・吉林督軍孟恩遠・肅親王・総理段祺瑞・総統馮国璋・段芝貴・梁啓超・交通部総長曹汝霖・内務部総長湯化龍・徐世昌・外交部総長汪大燮・察哈爾都統田中玉・湖北督軍兼省長王占元・江西督軍陳光遠・南京督軍李純・孫洪伊・戴天仇・柏文蔚・岑春煊・譚人鳳・浙江省長齊耀珊・沈曾植・姚文藻・李梅菴・李經邁・山東督軍張懷芝など。「遊支偶録」は、86 項目に及ぶさまざまなトピックスで、中国と日中関係を論じたものである。上述の人々の大半の肖像写真をはじめ、多くの風物写真が収められている。

**満洲より歸りて／内藤豊著**

**東京 玄文社 1918（大正 7） 136 頁 [4962]**

著者は大学一年生で、1918（大正 7）年 6 月末に中国研究を志し、7 月 20 日頃から 8 月 20 日頃まで、南は旅順・大連から、北は長春・哈爾濱・吉林へと、「鉄道のある限り」駆けまわり、南満洲における邦人の生活、中国の人情風俗について観察し、印象の生々しいまゝに纏めたという。稲葉君山が序文を書いている。

在満邦人の生活様式（和洋二重による無駄が多いこと）や心的特性・特技からみて、南満洲においては邦人は農業・商業方面では発展の見込みなく、工業に活路を求めるべきであるとか、大連における公設市場は日本でも試みるとよいとか、植民地としての大連は日本の弱点も強点も拡大して映し出しているが、特に自治制度の不毛振りは情けないなど、日本の新開地・植民地としての満洲を論じたものが多い。中国の風俗については、「煙館見物記」「老鉄山の鶉」「山東苦力と支那官憲の排日思想」など、短いルポルタージュがある。全体の 3 分の 1 ほどを写真が占める。

**世界の富源支那印象記／安本重治著**

**東京 東洋タイムス社 1918（大正 7） 302 頁 [6121]**

著者は東京府嘱託。1918（大正 7）年 6 月 14 日に長崎を発ち、36 日間かけて上海・杭州・蘇州・南京・蕪湖・九江・漢口・武昌・北京・天津・濟南・青島を訪れた。その旅行目的は、財政経済に通じた眼でもって主として長江一帯と山東を、「支那の中心といふべき長江一帯に於ける日英の競争は如何であるか、日本人はどれほどの地歩を、支那の各地に占めつゝあるか、その真に根帯ある移殖的發展を期するに必要な教育と衛生の施設は、どうなっているか、英米

の文化事業は、如何に大袈裟を極めつゝあるか、日本商品の声価は如何であるか、支那の工業は如何に成長しつゝあるか、山東は如何に日本化されつゝあるか」という問題意識のもとに具体的に観察することにあつた。各国の対華発展の状況、租界の有様、日本商品の流通ぶりや工鉱業鉄道経営ぶりなど、多くの事実が歴史的経過と数字をおりまぜて詳しく説明されており、また行く先々の風俗や自然の特徴や、更には旅行のルートや所要時間まで、細々と記されている。日本人の対華発展は、在華日本人や商店などの数でこそ増大しつゝあるが、その規模や構想においてイギリス、アメリカなどにはかなわないこと、特に中国人への教育・医療機関の設立などの文化事業に対する金と熱意の注ぎ方においては、イギリス、アメリカ、特にアメリカは驚く程であり、中国人の感謝も大きく、この点日本人のそれらへの無配慮に近いおそまつさは、将来的には重大な問題であろうこと、更に日本人の中国人への無神経さもあって、排日感情が著しいこと、など観察されている。巻末に 1916 年 6 月 29 日～7 月 24 日の満鮮旅行中の短信が収められている。

## 1919

支那に遊びて／河東秉五郎（碧梧桐）著

東京 大阪屋号書店 1919（大正 8） 320 頁〔4388〕

著者は俳諧師。1918（大正 7）年 4 月から 7 月末まで、南は広東より北は北京に至る、中国内地を旅した。本書はその華南に関する旅行記で、香港・上海・杭州・寧波・蘇州・鎮江・南京での体験・観察・印象が記されている。香港では、家並みと自然が激突しており、広東には狂燥と混濁が、杭州には現実離れのした清澄があり、南京には息詰る陰気さがあり、長江の大観は、絵にも詩にも、写真にもならない、などと、そのような印象を与えた微細な事柄がよく記されている。また杭州では、西湖を一望におさめるところに雷峰塔を建てた「昔の支那人の頭の働き」に驚嘆する。全体の 3 分の 1 ほどが、寧波にあてられ、道元を生み雪舟も訪れた天童寺の現状に深く失望し、大小数百の寺で埋まる普陀山では、中国に永く住みたい切なる心に動かされ、紹興・蘭亭趾・禹陵・王陽明祠などを歴訪するが、おしなべて中国の名所旧跡は、名ばかりで、過去がよく保存されていない、と嘆く。しかし 4 ヶ月の中国の旅は、神経症的でコセついた、人為臭にみちた日本と比して、中国には「総てがやり放しな、成るがまゝに捨ててある、人為的整理よりも天然の整理に任してある、其の剥ぎ出しな大まかさ」があつて、懐かしい親しい「伯父さん」に再会した如くの印象を与えた、と序文に記される。なお広東では、大総統府に孫文を訪ね、「一般的な生温い対面」をし、また、督軍代理莫英新の「顔を見」る一時を得た。写真 20 数葉を収む。

虎風龍雲／東亜同文書院第十六期生編

上海 東亜同文書院 1919（大正 8） 502 頁〔5230〕

東亜同文書院第 16 期生の記念調査旅行の記録。旅行は、安徽・河南班、京津班といった具合に 13 班に分れて、1918（大正 7）年 7～10 月の 2～3 ヶ月間に実施された。各班の旅行先を総合すると、北は吉林省、南は広東省、東西は沿岸諸省から山西・四川省に及んでいる。そして本書には班毎の旅行日誌と感想文を収めている。感想文は、純然たる旅情をうたったものもあれば、見学した炭坑や女学校のことを述べたものあり、また地誌的な記述もあれば、南北戦

争の影響や各地方の社会風俗を語ったものであり、さまざまな内容を含んでいるが、いずれも断片的である。これら紀行文のほか、本書には論叢として 8 篇の短い論文が収録されており、なかには調査旅行の成果の一端を示したものもある。8 篇のうち 4 篇は中国人の民族性について、2 篇は中国の前途について、他は中国研究について、および中国のキリスト教会について論じたものである。

#### 支那を観て／細井肇著

東京 成蹊堂 1919（大正 8） 145, 260 頁 [4389]

著者は、1919（大正 8）年 5 月 2 日に神戸を発ち、台湾を経由して、廈門・汕頭・広東・上海・南京・漢口・北京・張家口・天津・済南・青島・大連・撫順・奉天・長春・哈爾濱・吉林をめぐり、京城を経由して、7 月 13 日に帰京した。同行は伊藤義蔵、著者が東京朝日新聞社に在職していたときの同僚らしい。

本書の後半が「大亜遊記」と題された旅日記であり、前半は「支那を観て」と総題された論説集であって、「日支共存の大義」「支那政界の分野」「排日運動裏面の真相」「山東論」「東三省論」「苦力と労働統一」「朝鮮半島論」の 7 篇を収める。中国南北各地を歴遊して、「新支那の元気の中核は、今次の排日運動と共に確実に青年学徒の手中に緊握せられたること」、中国は「民衆の群居せるに外ならざるが故に、支那を国家として待遇せんよりも、厖大にして猥雑なる漢満蒙回蔵五族の社会と見るを事実と近しとす、故に支那と親善し支那を誘導し、真に日支兄弟の実を挙げて両国の同栄共存を体现せんとせば、支那元気の中核たる支那青年と抱合すると共に、是等の国民と握手せざるべからざるを痛感したること」など、10 項目に亘って、感想を深めた、と記している。

## 1920

#### 秘密之国西藏遊記／青木文教著

東京 内外出版 1920（大正 9） 463, 10 頁 [3320]

1910（明治 43）年春、チベットの教王ダライラマは、清蔵戦争の結果ラッサを脱出して、インドに現われたが、そのころ著者は、西本願寺法主大谷光瑞に随行しての仏蹟巡拝を終えて（大谷光瑞はロンドンに向かい）、カルカッタで霊蹟調査の準備中であつた。著者は光瑞の命令でダライと会見し、西本願寺としての親交の意を伝え、こゝにダライがチベットの僧正を西本願寺に留学生として派すことになった。著者はその世話役となって日本に帰り、僧正がダライに呼びもどされたときは、ダライの許（そのとき、在印中）まで同行した。清蔵戦争の帰趨はきまらず、ダライは情報解説者として著者の価値を認め、入蔵を許した。かくて著者は、チベット人の案内者兼従僕を得て、蒙古人やチベット人に変装して、1912（大正 1）年 9 月 9 日、グウムを発ち、ネパールを経由してタラシカ（チベットの一村落）に入り、サル・ティンギゾン・スイキム王国の領土などを通過し、10 月 10 日に後蔵（西部チベット）の都シガツェに入り、さらにロン山峽経由でチュンコルヤンツェに入り、ダライに拝謁する。清朝が倒れ、袁世凱はダライと妥協し、1913 年 1 月 12～22 日に、ダライはラッサ（前蔵〔東部チベット〕の都）に凱旋し、著者はそのまゝダライに従ってラッサに入り、1916 年 1 月 26 日まで、同地に滞在し、ダライの賓客として遇されるのである。著者はそこでチベット語と文章学・文法・史学などを

学び、学位を贈わる。

本書は、入蔵・出蔵の道中の体験・観察・考察が記されているほか、チベットの歴史・政治・宗教・風俗についての詳細な、観察をふまえた解説書・案内書ともなっている。

#### 中華三千哩／東京高等商業学校東亜倶楽部

東京 大阪屋号書店 1920（大正 9） 305 頁 [4237]

東京高等商業学校東亜倶楽部の部員一行（教官 1 人・生徒 29 人）は、1919（大正 8）年 7 月 20 日に神戸を発ち、上海（7 月 23～27 日滞在）・蘇州・南京・漢口・漢陽・大冶・武昌・北京・八達嶺・天津・済南・淄川・青島・大連・旅順（8 月 21 日到着、同地で解散式）をまわり、市街見物、名勝旧蹟めぐりのほか、上海では絹糸紡績工場・上海紡績工場・株式取引所・東亜同文書院、また、漢陽鉄廠・漢冶萍公司・湖北氈呢總廠（休業中）などを、見学している。蘇州・南京・北京では、ほとんど名勝旧蹟めぐりであるが。

本書は、兵藤世平・松本五郎・間野暢籌・坂本潤五郎ら部員の、旅日記あるいは考証・考察などを編輯したものであり、記述にムラはあるが、大体行ったところ、見たものについて、こまごまと説明している。なお時節柄、とくに上海や済南では排日のポスターがよく目についたようであり、巻末に、松本五郎記の「排日問題」という一文がある。

#### 支那我観／松永安左衛門著

東京 改造研究会 1920（大正 9） 117, 142, 39 頁 [4233]

1918（大正 7）年 10～11 月の 1 ヶ月半、北はハルビンから南は上海まで、奉天・大連・長春・天津・北京・漢口・南京などの中国各地を旅行し、帰国後、「対支政策」「支那小遊」の 2 編を著わした。本書は、これら 2 編のほかに対支政策に関する議会での質問演説を含めて 1 冊としたものである。

「支那小遊」は、旅行中の見聞と印象を記したものであるが、財界人である著者は、中国在留日本人の経済的施設の状況を聴取することを旅行の目的にしていたので、日本が関係する企業の視察や各地の在留日本人要人たちとの会談についての記述が中心を成している。すなわち、著者は、満鉄中央試験所、撫順炭坑、鞍山製鉄所、南満製糖会社、本溪湖煤鉄廠、開灤炭坑、漢冶萍公司などを参観しており、開灤炭坑についてはまだ開発が十分でないと日本人に奮起を促している。また日本の借款鉄道である南潯鉄道（南昌－九江間）の粗悪であることを見て、日本がなすべきことをしていないと嘆いている。

著者は日本人ばかりでなく、中国の政治家にも会っている。奉天では張作霖と会見しているが、その内容は記されていない。また、北京では梁士詒、徐樹錚、曹汝霖らに会い、上海で孫文と会談して、当時の中国政局の重要課題であった南北統一問題について話し合っている。

このほか名勝旧跡を訪れたことも記されていて、本文が扱っている話題は多岐にわたっているが、いずれもきわめて簡単な記述にとどまっている。

## 1921

#### 山西省旅行記／佐藤汎愛著

1921（大正 10） 63 頁 [5424]

著者は1920（大正9）年12月30日夜に北京を発ち、太原府に一遊し、翌年1月4日に北京に戻った。北京日本国際観光局に勤務している人らしい。本書は「山西研究に対する幾分の葉ともなれば本懐の至り」というつもりで書かれたもので、自己の観察や印象を記したというものではない。わずかに「北京太原間」と題する部分が直接旅行の道中を述べているが、それでも石家荘・正定府・陽泉県・平定県などについて、書物からの解説が中心である。本書の主な内容は、山西省の沿革、山西人の特徴、太原府（地勢・名蹟など）、督軍閻錫山の自強自足策、教育、山西研究会、区制の施行および救荒施設、掘井奨励条例、試種区田奨励規則、物産、築道、山西の石炭、福会社の活動、正太鉄路についての、現状や歴史の解説である。

#### 粵射隴游／東亜同文書院第十八期生編

上海 東亜同文書院 1921（大正10） 792, 20頁 [2317]

東亜同文書院第18期生90名が20班に分れて1920（大正9）年6月から10月にかけて中国各地を調査旅行した時の報告。本書は、旅日記、旅の印象記を班毎にまとめて編集したもので、したがってある特定の事柄についてのまとまった記述はない。

各班の旅行した地域を総合すると中国本部18省および内蒙古、東北3省にひろがり、2, 3の班は台湾、香港、マカオ、インドシナ（ハノイ、ハイフォン）にも立寄っている。そして、それぞれの旅行の途中での苦労話——軍閥戦争の影響で通行を許されなかったこと、土匪に襲われないように地方当局から護兵をつけてもらったこと、増水で渡河できなかったことなど——とともに、かれらの見聞した各地の風俗・風物について学生らしい感想を附して語られている。なお巻末に、使用した交通機関、料金、旅館、言語、通貨などについて班毎にまとめた一覧表が附されている。

#### 金陵遊記／山田謙吉（岳陽）著

上海 禹域学会 1921（大正10） 182頁 [2396]

東亜同文書院教授である著者は、1917（大正6）年11月に滬城青年会員と共に、また1920年3月30日～4月3日に、東亜同文書院修学旅行南京班（教授・学生合せて百数十名）の一員として、金陵（南京）に遊んだ。本書は、そのときの印象記を、重複するところは省き、何年の遊記かは各文末に記して、また書物によってのみ知り実際には失われていたり行かなかった遺蹟のことをも記して、一篇の金陵めぐりに編集したものである。なお1917年にはさらに京口に足をのぼし、1920年には蘇州に2日ほど滞在した。

本書に記されている名勝旧蹟は、以下の通りで、〔 〕に入れたのは、実際にはみなかったものである。儀鳳門・〔獅子山〕・静海寺・三宿巖・鼓楼・大鐘亭・北極閣・台城・鷄鳴山・施食台・鷄鳴寺・〔景陽井〕・覆舟山・富貴山砲台・玄武湖・謝公墩・故宮・南京古物保存所・血蹟碑・孝陵・鍾山・天保城・徐達及び李文忠の墓・靈谷寺・秦淮・貢院・夫子廟・文德橋・〔旧王府〕・大報恩寺・〔天禧寺〕・〔劉園〕・雨華台・方正学之墳塋・木末亭・〔梅岡〕・〔鄧愈の墓〕・鳳凰台・冶城山・莫愁湖・勝棋樓・曾公閣・漢西門・駐馬坡・武侯祠・魯公祠・清涼山など。一つ一つについて、歴史的由来や伝承・古名など考証的に記し、またそれらを詠んだ漢詩を数多くとり出して紹介している。

#### 老大国の山河：余と朝鮮及支那／渡辺巳之次郎著

東京 金尾文淵堂 1921 (大正 10) 10, 433 頁 [5610]

30 年間の新聞記者生活をやめ閑暇を得た著者が、1920 (大正 9) 年 5 月から 6 月にかけての 1 ヶ月半、朝鮮・中国を旅行した時の記録。著者は、神戸から船で釜山に行き、朝鮮半島を汽車で北上して中国に入り、奉天・哈爾濱・大連など満洲の主な都市をまわって北京へ、そこから南下して南京・上海などを訪れたのち、山東へ戻って青島から再び船で帰国した。本書は、この間の見聞にもとづく著者の時評・論策と各地の風光や名勝旧蹟を楽しんだ紀行とから成っており、いずれにも新聞記者らしい達者な筆致がうかがわれる。

著者はかねてよりこの旅行を宿望していたもので、その理由は、(1)日本と中国・朝鮮との歴史的関係の深さ、(2)日本の経済的・政治的發展を考察するうえで 3 国を分離して考えることはできない、との 2 点から現地を見てみたい、ということである。とくに本書には第 2 の現実問題に関する著者の意見が随所に述べられている。例えば、ロシア革命によってロシアの勢力が衰退した哈爾濱の状況を捉え、東清鉄道の経営を日本に委託せよと論じ、満鉄の事業についても一言し、さらに旅行最後の地の青島で当時中国側が要求していた青島還附問題についても意見を述べている。著者は各地で会った人々と中国の現状や日中両国関係について意見を交換しているが、興味をひくのは、北京大学を訪問して李大釗・羅家倫に会い議論していることである。かれらは日本人の対中行動・態度や新文化運動について語り合い、両者の意見が一致するところはなかったが、著者は李大釗らの卒直な論議に好感を抱いている。

観光の方をみると、旅順で日露戦争の跡を巡って往時の激戦を想起し、北京では滞在日数が長かったせいもあって紫禁城・万寿山・天壇・明十三陵・居庸関など多くの史蹟を訪れている。さらに南京で明の故宮、上海から杭州・蘇州の景勝地に足をのぼし、山東では泰山・曲阜をたずねている。この他車窓からの風景描写も含む紀行には、著者の感興をうたった詩や和歌も折込まれている。

なお著者は、新聞社の勧めで、当時東京日々新聞の記者で中国に精しい波多野乾一に同行してもらい、また各地で同業の記者やジャーナリストらに迎えられ、意見の交換などを行っている。

衆議院議員支那視察団日誌(大正 10 年、大正 11 年)

2 冊 (衆議院公報附録) [680]

「大正 10 年衆議院議員支那視察団」は、団長小田切磐太郎、理事龍野周一郎・前川虎造・荒川五郎、および団員飯塚春太郎・磯田桑三郎・奥村安太郎・吉木陽・中山佐市・中島鵬六・黒住成章・山本厚三・毛里保太郎・鈴木久次郎、同行者衆議院書記官田口弼一・衆議院属春日井兼太郎からなる。1921 (大正 10) 年 10 月 5 日に下関を発ち、釜山・京城を経て、奉天に入り (10 月 9 日)、長春・哈爾濱・公主嶺・撫順・湯崗子・大連・旅順・青島・済南・天津・北京・漢口・武昌・大冶・南京・上海を駆け足で視察し、おもな名勝旧蹟もめぐり、在中高官や中国側高官の招宴を受けるなどして、11 月 7 日に上海を発って、11 日に東京に帰着した。

「大正 11 年衆議院議員支那視察団」は、団長広岡宇一郎、理事津野田是重・三木武吉、団員渡辺昭・金田平兵衛・高野毅・山田永俊・浅賀長兵衛・広瀬鎮之・森下亀太郎、同行者として衆議院書記官市川要四郎・衆議院属江川芳光を以て構成される。1922 (大正 11) 年 11 月 5 日に東京を発ち、釜山・京城・新義州を経て、11 日に長春に入る。吉林・哈爾濱・奉天・撫順・大連・旅順・青島・済南・天津・北京・漢口・武昌・大冶・南京・上海・杭州を、視察・観光のため駆け足でめぐる。



記述は、どこで何をみたり誰に会った、というようなことに尽きる。なお 11 年度の方には、「旅行日程実施表」「行程表」が附録として収められている。後者は、各地点間の哩数と一等賃銀のリストである。

## 1922

### 南方紀行：廈門採訪冊／佐藤春夫著

東京 新潮社 1922 (大正 11) 221 頁 [6928]

本書は 1920 年 6 月下旬から 10 月上旬にわたる旅行の見聞録の前半で、後半は『台湾漫遊記』と題して近く上梓する筈と著者は記している。本書のうち「廈門採訪冊」は、『新潮』『野依雑誌』『改造』の各誌に分載されたものを集めたものである。

日本人が甚だ不評判であることを十分自覚したうえで、中学時代の旧友の書生である鄭という廈門生まれの青年を案内役に、廈門・鼓浪嶼・集美・漳州を旅した。廈門では宿屋とか台湾人についての探偵小説風な体験を得、集美では陳嘉庚・陳敬賢兄弟の経営する集美学校を見物し、鷺江の絶妙な夕映えを觀賞し、また廈門の貴公子林正熊なる人物に伴われて妓楼のはしごをし、そこで世に稀な美妓を間近に見るを得て、開天冠という歌声入りの合奏を聴いた。漳州行きは、陳炯明の仕事を見るのが目的であって、聞かされた噂話にもとづいて漳州における陳炯明の業績の数々や評判を、なかなか詳しく紹介している。巻末に、旅行中に書き出した小説の一断片が、旅行中の事実に触れているとのことで、「朱雨亭のこと、その他」と仮題されて収められている。朱雨亭とは漳州で出会った人物の名である。

### 虎穴龍領／東亜同文書院第十九期生編

上海 東亜同文書院 1922 (大正 11) 687 頁 [2318]

東亜同文書院恒例の学生の調査旅行記。本書は、第 19 期生 120 余名が 1921 (大正 10) 年夏に 20 班に分れて中国各地を旅行した記録である。以下に、各班の旅行の概略を記す。

隴綏班——洛陽・西安・青海湖・蘭州・包頭など中国の西北部 5 ヶ月間かけてまわる。西安の碑林、とくに大秦景教流行中国碑についての紹介と、青海湖近くの風景やチベット系の人々の生活、ラマ教などについての紹介は、比較的詳しくなされている。隴秦晋班——陝西省の綏徳・定辺から寧夏・蘭州をまわり西安へ出るコースを旅行している。漢水嘉陵江流域班——宜昌・重慶・成都・潼川・広元・漢中・老河口とまわる旅で、船の便を利用したところと徒歩で踏破した部分があるが、それぞれの交通事情に関する記述が中心を占める。黔蜀班——貴陽を経て四川省の成都・打箭炉・峨眉山・重慶などを旅する。なかでも峨眉山に登った時の印象記が詳しい。河南山西班——信陽・桐柏・洛陽・太原などを訪れている。山西省の閻錫山の統治に多少の注意を向けて評価しているが詳しい記述はない。湘桂流域班——香港から広東に入り、軍政府に大總統の孫文を訪ねて約 1 時間かれからその経綸と抱負を聞き、その後梧州・桂林を経て長沙・岳州へと旅行した。途上で見聞した両広戦争の影響やかれらの体験を語っている。大運河班——本班は、杭州から大運河に沿って北上し北京まで旅をしている。大運河の沿革・現状についてまとまった記述がある。ほかに土匪の出没、中国の兵士のことなども論じている。江蘇山東班——江蘇省の海門から山東省芝罘まで両省の沿岸地域を旅行。広東湖南班——広東から韶州・郴州・長沙・岳州までの旅行で、本班も広東で孫文に会っている。小論「粵漢鉄道

の現在及将来」を収録。北支・満洲班——ハルビンとウラジオストックでの出来事が僅かに語られているだけ。満洲班——大連からチチハルまで満鉄・東支鉄道に沿って北上した旅で、大連・営口の概況が比較的まとまった記述である。北支班——泰安・青島・天津・北京・奉天の旅行。南溟班——フィリピンの事情を詳しく報告している。東蒙古班——桃沖山鉄鉱・大冶製鉄所などの見学を経て、鄭州・観音堂から山西省を北上の旅。直魯晋豫班——太原・平陽・陝州・鄭州などをまわる。皖贛浙湘班——寧波・杭州・景德鎮・九江・南昌・長沙などの各地を辿る旅の印象を旅程にそって記している。両湖四川班——長沙、洞庭湖周辺を経て、沙市より重慶まで揚子江を溯航し、さらに成都まで歩いて峨眉山に登った、旅の記録。南支班——廈門・福州・汕頭など広東省の沿岸諸都市と香港をまわる旅で、排日情勢をも含めて各地の状況を伝えている。北京班——北京の名勝旧蹟見物の記と、中国人の国民性および中国の政治問題についての感想文より成る。

以上の各班の旅行記のほか、巻末に以下の 6 篇の論文を収録している。1. 支那文明の日本文化に及ぼせる影響、2. 四川に於ける列国布教勢力、3. 支那の回教、4. 支那の苗族に就て、5. 支那工業と日本、6. 山西の雲崗と河南の龍門。

#### 満洲見物支那紀行／棟尾松治著

大連 大阪屋号書店 1922 (大正 11) 11, 5, 181 頁 [XI-6-2]

『未解決の現代満洲』といった著作で知られた『遼東新報』記者による旅行記。「満洲見物」(1920 年 4 月, 10 月, 21 年 10 月)と「支那紀行」(1920 年 10 月 29 日～11 月 26 日)からなり、後者は『遼東新報』の連載が元になっている。巻末には附録「大和民族生存政策私見」がある。

「満洲見物」は、大連・星ヶ浦・沙河口・旅順・奉天・遼陽・長春・哈爾濱を巡るものだが、内容の多くは満鉄関係者など満日本人の活動で、特に大連から旅順までは満鉄の友人(N 公)とのやり取りが会話体で豊富に採録されている。

大連のヤマトホテルは儲かるものの、旅順と星ヶ浦のヤマトホテルは冬場の客がなく、ホテル全体としては「プラス、マイナス、ゼロ」であること、また野球の盛んな大連では、満鉄社員が組織する満洲倶楽部対実業野球団との試合の見物人はほとんどが日本人であるものの、2 万を算する、といった話は興味深い。

「支那紀行」の経路は、大連－奉天－天津－北京－漢口－南京－上海－南京－済南－青島－大連で、天津では「飢民の群は二万を算し(中略)年頃の娘も銀四五弗にて売買せり」という声を拾っている。

北京では國務院を訪問し、総統府・南海・中海・北海を参観したほか、大阪毎日新聞の招待で、日本人記者(大阪朝日新聞の大西斎、大阪毎日新聞の波多野乾一・松本鎗吉ら)と共に梅蘭芳の舞台を観ている。上海では孫文を訪問しているが、その詳細は『未解決の現代満洲』参照とある。(関智英)

#### 曲阜紀行聖蹟／山田謙吉著

上海 東亜同文書院研究部 1922 (大正 11) 48 頁 [4902]

著者は 1921 (大正 10) 年夏、東亜同文書院の同僚向後教授、学生 1 人、中国人 1 人を同行者に、済南を経て曲阜で聖廟に詣で、帰途泰山に登り、北京に遊び、上海に帰った。本書は、

その曲阜紀行に関する 9 篇の小文をあつめたもので、後半に大村欣一の「江蘇省の教育概観」を収める。

第 1, 2 篇は、済南から曲阜駅、そこから曲阜県城までの旅程の目でみた印象記であるが、第 3～6 篇は、幾十とある曲阜聖蹟を、めぐった順に、『闕里誌』・『山東考古録』などに拠って確かめつつ列挙したものであり、第 7, 8 篇は、闕里誌に拠った記述あるいは所感であり、第 9 篇は「曲阜の芸文に就きて」という小文である。

#### 山東旅行叢話／山田謙吉（岳陽）〔述〕

上海 春申社 1922（大正 11） 110 頁 〔3354〕

著者は上海東亜同文書院の教授で、「曲阜に遊んで聖跡を尋ねたい」との宿願を果たすべく、1921（大正 10）年 7 月 10 日から 30 日間で、江蘇・山東・直隸・安徽の一部を通過した。この旅行の日記は、清書して他日刊行する、とあり、本書は、この旅行中遭遇したもの、支那学者として得たもの、などについて述べたものである。

後半は直接専攻分野にかかわる金石や古碑の拓本についての解題的報告で、附録に『山東古物調査表』に拠る山東金石一覧表を掲げ、また参考書をあげている。前半は、この山東旅行が支那学者としての内面に感動を与えた諸事件や、旅行によって確信を深めた支那学者としてのおのれの行き方などについて述べたもので、「支那学研究の二方面」「支那学に就きて」「勞乃宣の逝世」「支那の為に支那の道法を復活させよ」「前清の文化に就きて」「宗教家の事業」「芸術家に望む」「旅行中に遭遇せる時事問題」「支那人民の惨楚」などと題する文章がある。そのいくつかは『週報上海』『青島新報』『上海日報』に載せた記事の転載・紹介である。

### 1923

#### 乾ける国へ：満鮮支那旅行／木下立安著

東京 鉄道時報局 1923（大正 12） 2, 8, 248 頁 〔13248〕

『鉄道時報』主幹による 1922 年 4 月末から 6 月下旬までの 54 日間の旅行記。訪問地は、朝鮮（釜山・馬山浦・東萊温泉・大邱・木浦・京城・仁川・平壤・鎮南浦・新義州）、満蒙（奉天・大連・星ヶ浦・沙河口・旅順・営口・鞍山・湯崗子・四平街・鄭家屯・白音太拉・長春・哈爾濱・吉林・奉天）、北支那（天津・北京・通州）、南支那（漢口・武昌・南京・上海・杭州）、山東（浦口・済南・曲阜・泰安・泰山・青島）で、各地で採録した挿話（分量は新聞コラム程度）225 篇からなる。満洲の馬賊が略奪し逃走する際には、小銭を道に撒いて逃げる（巡査が小銭拾いに気をとられるため）、卵を孵化して売ることのみに特化した通州の商人の話、武漢で『湖広新報』を経営する笹川潔の「支那の新聞は（中略）各地に転送して回読せらるゝ為め、単に発行部数のみを見て読者数を判断」できない、「コウ生活必需品が支那から日本へ輸入するやうになつては日本は亡国だ」と語る船津辰一郎上海総領事の言葉などを採録している。

（関智英）

#### 偶像破壊期の支那／鶴見祐輔著

東京 鉄道時報局 1923（大正 12） 271 頁 〔5042〕

本書は、著者が1923（大正12）年5月から70余日、中国を旅行した時の見聞に基いて著したもので、3部より成る。

著者は中国を知る方法としてこの国を動かしている人々に会うことが必要であると考え、旅行中に以下の人々に会った。すなわち、胡適・呉虞・周作人・徐世昌・蔡元培・王寵惠・閻錫山・張謇で、本書の第1部はかれらとの会見記である。最初の3人は新文化運動の指導者として著者が重視している人々で、胡適と呉虞から儒教否定の意見を、周作人からは実生活とかけ離れた中国語についての意見を聞き出している。そして、かれらの運動を偶像破壊運動と名付け、この運動の後に来る新しい建設に期待を寄せている。蔡元培にはルソーの影響をうけた蔡の教育思想について尋ね、閻錫山と張謇については、かれらが独自の地方自治を実行している点に注目して、著者は山西省太原に閻を、江蘇省南通県に張を訪ねて話をきいている。

第2部が紀行文である。朝鮮から満洲に入り、北京・漢口・青島を訪れて得た各地の印象を記しているが、なかでも北京の美しさ、その外国人を魅きつける情緒について詳しく述べている。また著者の旅したすべての地に共通するものとして驢馬を挙げ、それが中国らしい風物であると短文を草している。

以上の、人物と土地から得た印象を総合して中国について論じているのが第3部の「現代支那大観」であり、本書の眼目はこゝにある。この中で、中国の将来、中国についての外国人の見方、中国の教育事情、近年のナショナリズムの勃興、地方自治問題などを論じたのち、著者は結論として、日本人の中国に対する姿勢をとりあげ、同文同種という固定観念にとらわれず、また自らの尺度で相手をはかることなく「日支親善」に努めるよう説いている。

#### 金声玉振／東亜同文書院第二十期生編

上海 東亜同文書院 1923（大正12） 16, 712頁 [2319]

東亜同文書院第20期生が1922（大正11）年夏おこなった恒例の調査旅行の感想文集。120名が21班に分れての旅は、北は吉林省の富錦、南は海南島、西は雲南に及んでいる。多くの者が足にまめをつくりながら歩く「陸行」の苦勞を語っているが、時勢を反映した記述もところどころにみられる。例えば、松花江班は「シベリアの風物に愛着を覚」え、「赤露の真相も肉眼で見」たいと、ハルビンからハバロフスクへ、あるいはチタへ向かおうとして国境近くまで行ったが果せなかったという、シベリア干渉戦争下の満洲の状況を語り、江西・広東班ほか二つの班が孫文と陳炯明との戦争に揺れる広東の状況にふれている。また、二つの四川省班は自流井の製塩について述べ、成都についての比較的まとまった一文もある。

#### 中華民国に遊ぶ／乗杉義久著

上海 乗杉事務所 1923（大正12） 466頁 [2490]

本書の主人公鳥居専蔵は、国枝某の発議によるらしいが、中国の平民の中で仕事をするという使命を抱いて、蒙古に行こうとした。仲間3人と共に1916（大正5）年4月に出発し、大連・旅順・熊岳城・奉天・長春・鉄嶺・営口を一両日づつ観察して、錦州に入る。1ヶ月後、鳥居のみ、中国語の習得のため北京行きを決心した。本書の大半は以後の鳥居の中国における行状・観察をまとめたものらしい。北京に1年余滞在する間、城内城外の名所旧跡も歩き、張勳復辟劇を目撃し、また中国人の中に文明人としての資質と品位を発見する。1917年9月初から40日間、初志への申し訳のため蒙古旅行をし、熱河・赤峰・多倫諾爾・張家口などを歩

く。北京に戻り、東京に帰り、再び中国に渡って上海に行く。上海で諸外国民との比較において、日本人はどうも一等国民ではないということを見出す。この間、孫洪伊・王正廷・陳友仁などと面識を得た。1年経って、あるひとの紹介で綿花商人となって漢口に行くが、その途中南京城内を見物する。漢口で綿花取引に専心し、翌年7月江陸（沙市）へ出張し、その期間、荊州に1日遊び、また宜昌を視察する。父の死（1920年正月？）で再び帰国するが、また上海を経て、沙市に戻る。安直戦争（1920年7月）で仕事がしにくくなって、同年9～10月に四川各地を視察旅行する。また上海に戻り、一時帰国し、1921年3月、三度び中国に渡って、上海に住み、1922年8月に孫文が上海に逃れた頃、帰国したらしい。上海・漢口の有様や綿花取引の実情など詳しく、また四川の地理誌も詳しい。

## 1924

中支汗漫游話／今関寿麿（天彭）著

北京 今関研究室 1924（大正13） 40頁 〔6248〕

1924（大正13）年初夏に訪れた鄭州・洛陽・漢口・南京・上海・蘇州・常熟各地の紹介と印象が記されている。

第1に著者は、各地で産業が発展し始め、鄭州・洛陽では5年前とくらべて街の様相も一変するほど活気があること、とくに呉佩孚下にある洛陽が厳粛な中にも南京以上の繁栄ぶりを示していることに驚く。

次に仏教が学問的にさかんに研究されつつあることに大いに関心を抱く。一般庶民の信仰を受けていないから表面的には寺院が荒廃しているが、実業界や政界・知識階級には素菜食をとったりするほど熱心な信者がいることを指摘している。文芸方面に深い造詣をもつ著者は、近世以来蘇州・常熟の生んだ多くの学術界の人々に言及している。

1922年に行った張謇支配下の南通の様子も並載されていて、華中の状況をさらにわかりやすくしている。

著者が危惧するのは日本人の中国における生活ぶりである。中国の人から誤解を受けないようにその閉鎖性を解くこと、また漢口のような重要な地域では更に積極的に有能な人材を配し、漢字新聞を発行するなどして、親善をはかるよう提言している。

なお今関研究室は1918年から31年にかけて活動し、また著者は後に重光葵外相の秘書も務めた。

雲崗大石窟／佐藤孝任著

北京 華北正報社 1924（大正13） 232頁 〔6166〕

1923（大正12）年7月下旬から1ヶ月にわたって調査した雲崗大石窟の、印象をまじえた詳細な紹介に、北京から雲崗までの紀行文と、雲崗の生活を記して母親に送った手紙が加えられている。大石窟の紹介には、美術家の著者による拓本と写真が巻頭や本文中の随所に掲載されて、読者の理解を助けている。雲崗の人々は、粗食で、入浴はもちろん洗濯も知らない「傷ましい」悲惨さであるが、今後も土質の悪い耕地では商品経済についていけず、ますますヒドクなるだろうと心を暗くしている。

### 支那行遊紀録／左右田信二郎著

1924（大正 13） 154, 50 頁 [4624]

著者は 1922（大正 11）年 10 月 12 日に大連で開かれる港湾会議（満鉄主催）に出席する 60 余人の 1 人として、同年 10 月 8 日に横浜を発った。同会議出席ののち、大連港、中央試験所や旅順の戦跡をめぐり、撫順・奉天・長春・哈爾濱を一同とともに見物した。一行は奉天で解散したが、著者はその後さらに中国内地の旅行を思いたち、芝罘・青島・済南・曲阜・泰山・天津・北京・南口・十三陵・八達嶺・漢口・漢陽・武昌・九江・廬山・鎮江・南京・上海・杭州（西湖）・蘇州などを巡遊して、11 月 22 日に上海を発ち、27 日に横浜に帰着した。

本書は前半（154 頁）が速記家に口述した見聞録で、後半（50 頁）が「満支百首」と題された旅の先々で詠んだ短歌集である。遅塚金太郎（麗水）が校訂した。

### 満鮮の行楽（『定本花袋全集』第 28 巻（臨川書店・1995 年刊）の影印）／田山花袋著

469 頁 [15440] 初刊は『満鮮の行楽』東京・大阪屋号書店、1924（大正 13）

満鉄の招聘による 1923 年 3 月から 6 月までの満鮮旅行（『田山花袋全集 新輯別巻』による）の記録。訪問地は大連・沙河口・星ヶ浦・老虎灘・旅順・金州・瓦房店・千山・湯崗子・鞍山・奉天・哈爾濱・長春・吉林・北京・撫順・安東・平壤・京城・金剛山・慶州・蔚山・東萊・釜山で、このうち金山・瓦房店附近は、田山にとって日露戦争に従軍した曾遊の地だった。

大連の油房（大豆かすから搾油する施設）で中国人が裸で作業している様子、「僕等の次きの時代」になれば、「此処が故郷だから（中略）此処がこひしくなるよ」との松岡満鉄理事の言葉、大連の花柳界は「概してお客にあまやかされた藝者が多い」といった観察は興味深い。他にも大連小崗子の支那街の「市場の取上高は肅親王一家の主な財産」、「満鮮地方では、大抵、九州、中国生れのものが多く、大阪から東のものは滅多に来てゐない」といった話も採録する。

北京では支那通として知られた中野江漢と会い、また周作人ほか北京大学関係者と交流している。（関智英）

### 彩雲光霞／東亜同文書院第廿一期生編

上海 東亜同文書院 1924（大正 13） 20, 541 頁 [6105]

東亜同文書院第 21 期生 80 余名は 17 班に分れて、1923（大正 12）年夏、恒例の旅行をおこなった。従前と同様に、かれらの足跡は、「北は遠く北満の曠野に彷徨して松花江を渡り、南遙かに仏領印度支那の苦熱を冒して紅河の水に棹さし、更に西の方、峨眉山上の風に長嘯し、古都長安の月に逍遙した」と述べるように、広範囲にわたった。したがってその見聞した事柄も数多く簡単にまとめ得ない。ただ、京漢京奉沿線班ら三つの班が武漢の排日状況を語っている。また、河南陝西山西直隸班が閻錫山の山西治政にふれるなかで採録している山西の流行歌 5 首は、面白い。

### 名士之満蒙観／吉永成一編

奉天毎日新聞安東支局 1924（大正 13） 235 頁 [17065]

編者は当時、『奉天毎日新聞』安東支局長。序文によれば「満蒙に足踏したるものゝ断片なり意見を、此二三年来蒐め置きて編纂したるものが即ち本書である」という。『奉天毎日新聞』

所載の記事を主に、他紙の論評も加えて一書としたアンソロジーである。以下、順に筆者と題名を列挙する。各篇末尾には掲載紙が記されるが、ここでは省略する。

大谷光瑞「満蒙経営策論」、渡辺得司郎「満蒙拓殖政策」、枅内壬五郎「満蒙開発上の三大事業＝大豆の改良＝水田の開発＝綿羊の改良＝」、川村竹治（談）「調査機関を統一せよ」、川上常郎（談）「満洲工業の振興策」、堀諫「白音太拉を視察して」、千葉豊治「資源を得べき唯一の地」、奉天毎日新聞社調査「甘草産地としての満蒙」、石塚英蔵（談）「土地問題の解決が必要」、田島錦治（談）「農業本位に進め」、岡実（談）「工業の満洲移住は不利」、中名生国穂「満洲に於ける棉花の将来」、奉天毎日調査「外国人活躍の真相」、牛沢玉城「満蒙の門戸開放」、満鉄調査課員調査「欧米宣教師の潜勢力」、渡辺得司郎「水田問題に就ての考察」、満鉄農業課調査「鮮人と水田問題」、下村宏（談）「鮮人と満洲経営」、枅内壬五郎「満蒙と綿羊飼育」、横堀善四郎（談）「満洲の牧畜業」、田村順之助（談）「特殊会社の失策」、河内山楽三（談）「南北満洲を視察して」、荒川五郎（談）「往来を簡便ならしめよ」、俵孫一（談）「資金と事業家に次ぐ」、関東庁調査「満洲の通貨及金融」、古賀廉造（談）「官憲の保護が足りない」、大町桂月「満鮮の山水」、永井柳太郎（談）「余りに満鉄を頼り過ぎる」、大蔵公望「改良を要する日本品」、来栖健助「貿易と金銀売買」、内藤確介（談）「不安定なる林業」、津野田是重（談）「対張作霖は斯うだ」、加藤日吉（談）「在満邦商の弱点」、湯原元一（談）「在満児童は頭脳がいゝ」、樋口詮三（談）「資本主義ではなくては駄目」、本間英史（談）「結核療養の好適地」、森沢省巳「我農業根本策と西伯利の農業」、花井卓蔵／平石氏人／原善道／早川千吉郎（談）「領事裁判改善問題」、有川鷹一（談）「何時でも満洲へ」、近藤良吉「満蒙視察管見と日本の経済的地位論」、佐藤一三「東部蒙古の三大市場 将来の盛衰如何」、小西晴溶「満蒙の開発は日本の使命」、岸川益一「追ひ詰められたスラブ族」。

なお、東洋文庫所蔵本は目次の1枚目を欠く。 (村田雄二郎)

## 1925

### 支那游記／芥川龍之介著

東京 改造社 1925（大正14） 265, 7頁 [2158]

著者は大阪毎日新聞社の命を受け、同社の村田・住友両記者および国際通信社のジョオンズとともに、1921年3月21日に門司を発ち、7月上旬まで、上海・南京・九江・漢口・長沙・洛陽・北京・大同・天津などを遍歴した。帰国後「上海游記」を執筆し、約3ヶ月後「江南游記」を執筆し、3年後「長江游記」（未完）を執筆した。ほかに「北京日記抄」、「雑信一束」を収める。

自序に「『支那游記』一卷は畢竟天が僕に恵んだ（或は僕に災ひした）Journalist 的才能の産物である」という。「上海游記」は体験的観察記とでもいうべきもので、上海の第一印象、城内の諸相、芝居見物、妓女のことなどをトピックスに上海の雰囲気を描いている。章炳麟・鄭孝胥・李人傑らとの会見記もある。「江南游記」は杭州・蘇州・揚州・南京の印象記であり、西湖や靈隠寺めぐり、天平山・靈巖山詣で、寒山寺や金山寺めぐりなどもこまごま記しているが、執筆時の身体の不調の悪さと遍歴時の体験とが入り混っているようなところがある。「長江游記」は蕪湖と廬山の印象記で終わっている。「北京日記」抄は雍和宮・什刹海（遊園）・蝴蝶夢（崑曲の芝居の題名）のことや、辜鴻銘との会見のことなどが、ごく簡単に記されている。

### 揚子江を中心として／上塚司著

東京 織田書店 1925 (大正 14) 830 頁 [2294]

1918 (大正 7) 年初夏、著者は (当時満鉄に在職中) 満鉄から華南経済調査の命令を受け、1 年 6 ヶ月に亘る、7 期に及ぶ揚子江流域踏査旅行を敢行した。本書はその紀行・随筆を集大成したものである。第 1 期は江蘇調査で、1918 年 12 月 31 日に上海を発ち、崇明・海門・通州・如皋・東台・塩城・興化・邵伯・宝慶・高郵・清江浦・揚州・南京・鎮江・常州を遍歴して 1919 年 2 月初に上海に戻った (「江蘇遍歴記」)。第 2 期は、台湾・福建調査で、1919 年 2 月 20 日～3 月 15 日、福州・基隆・台北・台南・打狗・阿喉・廈門を旅行した (「南支那沿岸航路に就て」、但しこの内容は紀行ではなく論文である)。第 3 期は安徽・江西旅行で、1919 年 4 月 16 日に上海を発ち、太平・蕪湖・寧国・旌徳・績溪・徽州・屯溪・休寧・黟県・祁門 (「皖南穀北鉄脚行」)・浮梁・景德鎮・饒州・都昌・九江 (「江西東部舟行記」) をまわった。九江を辞する 1919 年 5 月 26 日から 7 月 5 日漢口到着までが、第 4 期の江西・湖南旅行であり、南昌・豊城・臨江・新喻・分宜・袁州・宜風・萍鄉・醴陵・株州・衡州・湘潭・長沙・湘陰・岳州・漢口をまわった (「贛雲楚水日記」)。第 5 期は湖北・四川調査であり、1919 年 8 月 15 日に漢口を発ち、沙市・宜昌・夔州・万県・忠州を経て、8 月 30 日に重慶に至る (「巴山巫峡」)。第 6 期は四川・雲南旅行で、重慶調査ののち、9 月 15 日に重慶を発ち、永州・榮昌・隆昌・内江・資中・資陽・簡陽・成都・嘉定 (「蜀中記」)・峨眉山 (「峨眉山遊記」)、叙州・大関・昭通・巧家・東川・尋甸・嵩明・雲南に至る (「蜀滇路道中記」)。第 7 期は雲南・南安・東京調査で、雲南・阿迷・蒙自・老開・河内・海防・香港をまわって帰滬した (「雲南記」、紀行ではなく解説)。

記述は、旅中の体験・観察もあるが、学識を傾けての解説も多い。本書は以上のほか、曲阜詣でを綴った「東亜のエルサレム」「泰山登臨考」「西湖遊記」など紀行 3 篇および論文「揚子江流域に於ける列国の鉄道利権競争」を収める。

### 燕呉載筆／那波利貞著

東京 同文館 1925 (大正 14) 508 頁 [3032]

著者は東洋史の学究。新村出とともに 1919 年 9 月 21 日～10 月 2 日、燕京 (北京) に滞在し、10 月 4 日から南京、7 日は上海、8 日から蘇州・海寧、12・13 日は杭州に行った。駆け足の、純然たる名勝旧跡めぐりであったが、本書は、史家の紀行の著作的命脈は、単に対象を観察するのみならず、「之を過去に溯源し之に客観を加ふる」ことによって、のちにその地に遊ばんとする者への指針としての内容をはらんだことによって生ずる、との信念にもとづき、3 年余の歳月を要して書かれた。記述は、眼前のものへのこまごまとした観察と、中国の古典や史書への知識から生まれる膨大な考証的部分とを織りまぜている。師の桑原隲蔵と同行の文学博士新村出が序文を書いている。

北京では、天壇・先農壇・雍和宮・孔子廟・国子監・鼓楼・頤和園・耶律楚材墓・東黄寺・隆福寺・文華殿・太和殿・喇嘛塔・観象台・貢院遺址・白雲観・法源寺などをめぐり、東安市場・前門外夜市・北京大学・京師図書館・武英殿古物陳列所・清史館・琉璃廠書肆・柵欄児耶蘇会墓地・中和茶園などを見学する。また北京大学の史学系のカリキュラムを紹介している。南京では、明故宮址・孝陵・北極閣・莫愁湖・秦淮・夫子廟・貢院・江南官書局などをみ、上



海では、大英欽准亜州学会・徐家滙天文台を、蘇州では、留園・西園戒幢律院・寒山禪寺・楓橋・虎丘を、杭州では、西湖を舟でめぐり、下天竺講寺・靈隱禪寺・淨慈禪寺・雷峰古塔などを訪れ、呉山にのぼる、といった旅であった。燕京では、武内義雄・佐藤広治などが案内役となった。

#### 満洲を振出しに／橋本喜作（十王）著

大阪 1925（大正 14） 118 頁 [4616]

著者は毎年暑中休暇をとってどこかへ旅行するのを楽しみとし、1925（大正 14）年は少々時日をかけて、大連・湯崗子・撫順・奉天・天津・北京・八達嶺をまわり、朝鮮にも立ち寄った。出発は 8 月 18 日（神戸発）であったが、帰朝の時日は記していない。

著者の関心は満洲における邦人企業の観察にあったようで、大連では大連博覧会・中央試験所・取引所・満洲福紡などを視察し、満鉄の事業について考察をめぐらし、奉天では南満製糖会社・奉天製麻会社・満蒙毛織などを視察し、現状では全体として行き詰っているが、資源の科学的活用方法を導入すれば、満洲の天地で伸びる事業、なすべき事業はたくさんあるとみる。湯崗子では温泉に入り、撫順では炭坑を視察したが、北京では 9 月 7 日に、法制院長姚震と会見したり、張作霖・馮玉祥の勢力関係についての情報を得たりしたほか、文華殿・武英殿・万寿山・石舫・宮城など、名所名物をあちこち見物し、梅蘭芳の芝居も観たり、八達嶺まで行って長城を見物したりといった日々をすごした。

#### 一商人の支那の旅／服部源次郎著

東京 東光会 1925（大正 14） 360 頁 [3319]

著者は 1907（明治 40）年頃に朝鮮に渡り、そこで水産関係の実業家として成功した。1924（大正 13）年末に妻を失い失意のとき、1925 年春に朝鮮総督府からロシアおよび中国の水産貿易調査の囑託を受け、単身視察の途にのぼった。すなわち、1925 年 3 月 2 日、朝鮮統営を振出しに、安東・奉天・長春・吉林・哈爾濱・大連・天津・北京・済南・曲阜・泰山・青島・上海・廈門・汕頭・香港・広東・杭州・蘇州・揚州・南京・九江・廬山・漢口をまわり、上海を 6 月 6 日に発って、一旦長崎に着き（6 月 7 日）、6 月 14 日に住み馴れた統営に帰った。本書は、この旅の折々に 88 回にわたって『釜山日報』に書き送った記事を修訂のうえ収録したものであり、著者自ら「此旅行の行程海陸七千哩、歴訪せし都市二十五、接せし人種十有三、所要の日数一百三、此間に於て余は名所旧蹟は勿論商工業、政治、教育、産業、宗教、芸術風俗、習慣に至るまで、時間の許す限り眼の届く限り踏査研究した、余は之を本書に於て及ぶ限り赤裸々に叙述した」と自負する。記述はしかし、日々の見聞をその日のうちに書き記したらしく、歴訪した都市あるいは長時間乗った交通手段毎に区分してある。哈爾濱・北京・青島・上海についての見聞がもっとも多い。ソロバンの達人であると自負する通り、日常生活から貿易にいたるまで、ものの値段についての記述とコメントが非常に多い。巻末に「支那問題の帰趨」と題する考察がある。

#### 支那の旅／前田武四郎著

東京 工業雑誌社 1925（大正 14） 166 頁 [8377]

著者は中国の電気事業の視察を農商務省から依頼され、1924（大正 13）年 3 月～4 月各地を

旅行した。その旅行の前半の印象をまとめたのが本書であるが、『電気新報』に掲載された著者本来の職務の報告文も附録として加えられている。

自作の漢詩を披露しながら旅行を楽しむ著者は、李白・杜甫・白楽天・蘇東坡等の詩にひかれ、上海・福州・蘇州・南京・漢口・北京の各地で名所を訪れる。しかし蘇州寒山寺・楓橋、潯陽江、赤壁と漢詩のもつ情緒とあまりに相違する実際の風景の平凡さに失望感を募らせ、武昌では遂に黄鶴楼を見に行く元気を失くしている。

命が縮まるから写真に撮られるのを嫌がる福州の轎屋、1尺5寸もある三把刀を髪に挿しながら懸命に働く福州の婦人たち、蕪湖の鹽乗りの女乞食、水夫たちの旨い料理などの庶民の様子が時には写真を添えながら綴られている。一方、「己れ自身はドコが彼に優越し居るかの反省を欠いている」在留日本人には、著者は厳しい批判の目を向けている。中国旅行を6回も行い、また欧州各国の旅行を経験している著者は、中国にしながら中国との親善を積極的に抱えることを拒否している人々によって日中の反目の度が深まることを嘆息している。

孫伝芳麾下の軍隊でひっそりする福州、無軌道な兵隊に悩まされる南京、出没する土匪対策に兵隊が護衛する京漢鉄道などの緊張感もあるが、著者の旅行は順調に進んだ。

## 1926

### 広東視察談／小畑大太郎著

1926（大正15） 19頁〔6126〕

貴族院議員である著者は、国民政府の成立した広東の現状を視察するため、1925（大正14）年11月下旬、汕頭から同地に赴き、数日間滞在した。本書はその見聞を12月15日貴族院議長邸午餐会で講演した時の記録である。

あちこちに掲示されている「未だ革命成らず」の意味が分らず、後にわざわざ上海領事に問い質したり、三民主義をはじめとする政治教育が、参観した小学校で行われていることに驚いている。中国人経営のホテルに泊り、夜間にも一人で散歩をする著者は、防備を固める租界地とは逆に、平穏をとり戻している“赤化した”広東の状況を述べている。

著者の関心は対英・対外ボイコット問題にあり、日本政府の的確な現状認識と、適切な対応を喚起している。軍部に較べて情報活動の緩慢さが指摘される外務省——特に現地の外交官活動の充実化を希望している。

### 満蒙を廻りて／神田正雄著

出版地・出版者不明 1926（大正15） 59頁〔XII-3-A-43〕

扉に「以印刷代謄写」とあるので、私家版のパンフレットとして印刷したようである。序によれば、著者が満洲を訪れるのは、明治42（1909）年から数えて7回目だという。大連・旅順から、奉天・撫順・長春など南満洲、ハルビン・チチハルなど北満洲、洮南など東部内蒙古を巡遊した、ジャーナリスト出身にして衆議院議員となった著者の旅行記である。著者の関心は日本が直面する人口問題と食糧問題にあり、満蒙（東三省と熱河特別区）への移民を積極的に奨励し、南満洲では中枢機関として満鉄（南満洲鉄道株式会社）が満蒙の発展を援助して事業の拡張を図り、また東部内蒙古への農業移民を考えるべきだという。（村田雄二郎）

我国と隣邦の民国：大正 15 年度支那視察報告／神田正雄著

出版地・出版者不明 1926（大正 15） 51 頁〔XIII-5-C-a-11〕

『満蒙を廻りて』の姉妹編。「第一 民国本部の諸問題」と「第二 満蒙に於ける諸問題」に分かれる。後者は『満蒙を廻りて』の簡約版である。満蒙視察を終えた著者が北京・保定・天津を訪問し、中国の要人や在留邦人と会談した際の見聞や感想が記される。北京では段祺瑞や沈瑞麟と、保定では呉佩孚と、天津では張紹曾と面談したというが、その具体的内容は示されない。著者が関心を向けるのは、「軍閥」混戦の中、中華民国の政局の行方であり、とくに当時盛んであった鉄道共同管理説や北京で開催された関税会議に対する自らの見解が披瀝される。

（村田雄二郎）

支那南北記／木下杢太郎著

東京 改造社 1926（大正 15） 571 頁〔4014〕

著者は 1916（大正 5）年 5 月にも奉天に来たようであるが、同年 10 月以来奉天の南満医学堂に職を得て、1920 年 7 月末まで同地に住んだ。その間に、北京をはじめ吉林・長春・大連・撫順・徐州・洛陽などを旅したが、奉天を去るにあたって、木村莊八とともに、朝鮮を 3 週間、さらに中国各地（八達嶺・十三陵・大同府・雲崗・太原・晋祠・天龍山・獲鹿県・洛陽・鞏県・鄭州・漢口・武昌・岳州・長沙・南京・鎮江・蘇州・上海・杭州など）を数ヶ月間旅行し、11 月末ごろ天津経由で神戸に帰った。本書はこの間に書かれた紀行・論文・随筆・書翰などを編集したもので、年代順ではなく内容によって、「朝鮮風土記」「満洲聞見録」「支那南北記」および附録（「満洲通信」ほか 5 篇）に配列されている。

土地とそこに住む人間とその作品、建造物、古墳、美術品（絵画・書画・彫刻）などが著者の関心を惹くのであって、自らは「歴史的知識の欠乏よりも寧ろ博物学的知識の不足の為めいつも心を苦しめる」と記しながら、遼陽の古墳とか、奉天における回回教や喇嘛教の寺院とか、北京の文華殿などについて、建築学史的考証や言語学的考証を記し、南画や中国住宅の装飾性や中国婦人などについて記している。附録のうち「満洲通信」は、1916 年 10 月から 1918 年 9 月あたりまでの、おもに斎藤茂吉にあてた書翰（和辻哲郎あてのものもある）である。

武昌滄桑記 武漢三鎮游記（東亜研究講座第 11 輯）／笹川潔〔述〕・後藤朝太郎〔述〕

東京 東亜研究会 1926（大正 15） 57 頁〔5475〕

武昌滄桑記の笹川潔は読売新聞主筆を退いた後、漢口の湖広新報社長、湖北省名誉顧問などを務めた人物で、兄は美術評論などで著名な史学者の笹川臨風。タイトルの「滄桑」は海が桑畑に変化することで、移り変わりが激しいことを意味する。内容は武昌の歴史を紹介したもので、1926 年 9 月の武昌城に籠城した呉佩孚麾下の北軍と北伐軍との戦闘が契機になっている。中国での戦争が夏に多いことを、1921 年に蔣作賓率いる北伐軍が岳州から湖北を攻撃した際のエピソードを交えて説明するなど興味深い。武漢三鎮游記は、この頃毎年のように武漢を訪れていた後藤朝太郎による武漢紹介。講演は、呉佩孚派の劉玉春と陳嘉謨が武昌に籠城北伐軍と対峙し注目されていたことに合わせたもので、奥略楼－省議会－武昌大学－賓陽門－抱冰堂（張之洞祠堂）を説明した後、武昌城外船着き場にならぶ紡績工場、武昌乙棧・丙棧といった旅館、萍鄉煤鉱局、造紙廠などに触れ、漢口郊外の外人洋商跑馬場（競馬場）、唐代から知られた漢陽郊外の鸚鵡洲、三鎮郊外の狩猟スポットだった廬荻を紹介する。さらに江西の廬山

と湖南の洞庭湖も武漢の延長で考えるべきとする。

(関智英)

### 長江漫遊日記／高山著

1926 (大正 15) 序 249 頁 [3031]

著者は後藤朝太郎を案内役に、長男高山慶一を同行に、1926 (大正 15) 年 6 月 25 日に神戸を発って、上海から長江を重慶までさかのぼり、8 月 4 日帰京した。本書は旅中の日記と、雲陽丸船長峰岡某が一行に贈った手記「重慶航路沿革ノ大要」および、中国の現状や将来などについて記した「旅中雑感」からなり、挿入の写真は高山慶一が撮影したものである。「他日の記憶に存する為めの其日其日の見聞録で素より一家の私記他人に示すべきものでは無いが漢口から上流は割合に見た人が少ないので或は案内記の一端になりはせぬかと印刷に附して知人に頒」ったもの、と緒言に記されている。

一行が上陸した地点は、上海（「船益々進み行きて先づ第一に鐘淵紡績大日本紡績上海紡績明治製糖会社次から次と我邦の工場が相応接して眼に入るのは如何にも愉快で恐らくは初めて来る邦人の誰でもが受ける最初の印象であらうと思ふ」とある）・下関・蕪湖・漢口・宜昌・万県・重慶などであり、帰路に九江・廬山などにも行き、更に上海から杭州・南京へ、また上海から蘇州へと、名勝旧跡をみてまわり、上海市街も歩きまわる。以上のほか、船上から通過するさまざまな名勝や市街を眺め、その印象を記している。漢口から対岸武昌の火事を目撃し、対岸の火事という表現の実感がわかったとか、長江の濁水についての印象を「結局我々とは水に対する観念が違って居るのである若し峡中の児童に色鉛筆を与えて川を書かしたら必らず黄色か赤色かを使ふであらう」と記すなど、面白い観察がある。

### 新入蜀記／遅塚金太郎（麗水）著

東京 大阪屋号書店 1926 (大正 15) 288 頁 [3699]

著者は 1925 (大正 14) 年 3 月 10 日、長崎を発ち、上海・杭州・寧波・蘇州・南京・九江・廬山・漢口と長江を溯航しつつ名勝・史蹟をめぐり、さらに洞庭湖めぐり、長沙見物ののち、三峡をこえて四川に入り、重慶・成都に行き、嘉陵江を下って万県に入るなどして、再び上海に戻り、6 月 10 日帰朝した。本書はその旅日記であり、「天生城の山寨に遊ぶ」とか「江岸に死刑を観る記」など、風変りな見聞も含まれる（天生城とは、万県江心で万県随一の大富豪賀淑甫の大家族が営む自給自足の山寨であり、著者はそこを訪問するの機会を得た）。1925 年 3～5 月における各地方の群雄割拠や土匪の跋扈、デモンストレーションなどの政治的諸事件が折々記されている。

### 乗雲騎月／東亜同文書院第二十二期生編

上海 東亜同文書院 1926 (大正 15) 672 頁 [2981]

東亜同文書院恒例の中国大旅行の記録の一つ。第 22 期生 108 名は 18 班に分れて 1925 (大正 14) 年 5 月下旬に上海を発って各地方へ散った。今回の旅行には印度支那班と南洋華僑班という 2 班が設けられて、前者はハノイ、ユエ、サイゴンとインドシナ半島を南下し、後者はシンガポール、タイ、マレー、ジャワ、フィリピン、ボルネオなど南洋諸島に赴いた。もう一つ今回の旅行に特徴的なことは、多くの班が各地で上海の五卅事件に始まる排日運動に逢着していることである。2, 3 の例をあげると、滇蜀班は貴陽で学生達の集会に出席させられ、広東

江西班は、中国人たちの白い眼に囲まれながら九江の租界にたどり着き、山西陝西黄河流域班は柳林で宿を追われた。一方、福建江西班と粵漢班は「土匪」に襲われるという体験をした。

#### 西湖より包頭まで：支那研究／藤田元春著

東京 博多成象堂 1926（大正 15） 430 頁〔4366〕

1924（大正 13）年夏期、著者（京大卒の文学士）は田中啓爾（東京高等師範学校教授）・西田与四郎（奈良女子高等師範学校教授）・多田文男（東京帝国大学理学部地理学教室助手）とともに、外務省対支文化事業局からの命令で各自研究題目をかゝげて中国視察に向かうことになった。著者の研究題目は黄河の研究ということで、特に包頭付近の黄河および德州・平原間の旧黄河河道の跡を調査することが眼目であった。本書はそのときの日記を多くの参考書（一覧表に列举）によって整理し、その上梓によって上司への報告にかえた一書である。小川琢治が序で、「百聞を一見によって確かめたといふ特長が全篇を通じて認められる」と評している。

一行は 8 月 10 日に神戸を発ち、10 月 11 日に帰学したが、その間に踏破した地点はつぎの通りである。上海・杭州・蘇州・南京・大冶・武漢三鎮・洛陽・北京・八達嶺・張家口・大同・綏遠・歸化・包頭・天津・德州・平原・灤口・泰山・曲阜・済南・青島・大連・旅順・撫順。さらに平壤・京城を経由して帰国した。研究題目のこととはべつに、それぞれの地で名勝史蹟を、知識を実地で確認するような仕方で、丹念にまわっている。観察と考証は詳細である。

## 1927

#### 瞎驢行／伊藤敬宗著

京都 内外出版 1927（昭和 2） 190, 44, 90, 21 頁〔9203〕

1925（大正 14）年日本で東亜仏教大会が開かれたとき、中国から太虚師以下 20 数名の代表的僧侶が来日した。そこでその答礼をかね、日中仏教親善のため、1926 年、各宗派から選ばれた 21 名の管長・門跡・重役・大学教授が水野梅暁を案内役として、中国を訪れた。一行は 11 月 1 日東京を発って、奉天・北京・天津・南京・鎮江・上海・蘇州・杭州とまわり、特に仏教に関係の深い名所・旧跡や名士・団体などを訪問、10 月 31 日上海を発って、11 月 2 日神戸に帰った。

本書はこの旅行記で、3 篇から成る。第 1 篇「瞎驢逐隊」は漢文で書かれた旅行記で、全体的にみて、のちの日本語の旅行記よりも詳しい。第 2 篇「錦心繡腸」は外務省に報告した感想文で、仏教の現状と社会関係、仏教事業と居士、歓迎視察についての雑感、仏教の長短、仏教界に与えた感想、将来に対する希望、仏教以外の諸宗教のことが述べられている。第 3 篇「七花八裂」は日を逐うて記した紀行文。末尾に、団員名簿、接見芳名刺、将来品目、海外通信、新聞記事が附録されている。

#### 支那行脚記／後藤朝太郎著

東京 万里閣 1927（昭和 2） 474 頁〔3677〕

行脚記とあるが、北伐を前後する時期の中国各地（北京・上海・漢口・四川・杭州・広州ほか）の事情・風俗を紹介した随筆である。著者の行動として時期が確定できるのは、1927 年 4 月に香港から広州まで日清汽船廬山丸に乗船した部分で、一等・二等と三等以下の船室が鉄格

子で区切られていることに触れ、「生命財産を保護する方法としてはやむを得ぬこと」とする。北伐軍占領後に真新しい青天白日満地紅旗のたなびく上海、掠奪を受けた漢口日本租界を伝えた記事などは、本人が直接体験したことに、現地で集めた伝聞や新聞情報などを加えて構成されている。各地で集めたと思しき宣伝ビラをはじめとする写真も複数掲載され、北伐前後の時期の中国社会の雰囲気を知る一助となろう。(関智英)

#### 満鮮考古行脚／高橋健自・石田茂作著

東京 雄山閣 1927(昭和2) 208頁 [梅-50]

東京帝室博物館で考古学を専門とする高橋健自と石田茂作による朝鮮・満洲の考古視察記。「考古学の研究に携わっている関係上、何時か海を越えて、彼の地の遺物遺蹟を見たいと憧れていた」著者二人は、1926年に同館の派遣によって朝鮮・満洲を視察する機会を得、具体的な日程は不明だが、大邱から慶州－扶余－京城－開城－平壤－奉天－大連－旅順を巡った。本書では、朝鮮における仏教関連史跡の視察に多くの紙幅が費やされ、満洲に関する記録は奉天城内および関東庁博物館の見学記、および大連の鋳コレクター・K氏宅訪問記のみであるが、1920年代の朝鮮半島や満洲地区の史跡・博物館の状況を伝える貴重な記録となっている。

東洋文庫本は旧梅原末治の蔵書である。巻末には梅原の自筆による感想が書きこまれている。(辻直美)

#### 支那印象記／竹内逸著

東京 中央美術社 1927(昭和2) 356頁 [5066]

著者は美術評論家。本書は、1921(大正10)年と22年との2度にわたって著者が中国を旅した時の見聞をまとめて綴ったものである。それぞれの旅程を正確に追うことはできないが、2度の旅行で訪れた土地は、上海・蘇州・杭州・鎮江・揚州・南京・龍門・済南・北京であり、一度は数人の画家たちと一緒にであった。

著者の目的は、職業柄、龍門・大同の石窟や中国の絵画を見ることにあったが、本書ではこれらについて詳しい芸術論を展開しているわけではない。もちろん、著者が各地で見た寺院や仏像のいくつかについては、専門家らしい説明と感想が簡単に述べられている。たとえば、龍門に関して、賓陽洞や古陽洞内部の壁画と仏像をみて極東の仏教芸術の精華であると語り、また、南京の棲霞寺にある隋・文帝の舍利を納めたという舍利塔のすばらしさと、とくにその台座に彫られた仏伝八相の秀逸さに感嘆している。一方、杭州の大寺院である靈隱寺の石窟仏については、それらが宋・元・明代のもので、唐代仏(および北魏や隋のもの)にくらべると芸術的に劣ると述べ、鎮江の焦山禪寺の宝物である周鼎には疑問を提している。

しかし、本書全体としては、標題のとおり、中国の風物を楽しみつつ名勝を見物してまわった旅の印象記となっている。著者は、上海の街をさまよい歩き、招牌(看板)に興味を抱きながら商店や街頭の様子を語る。蘇州では、「美は土の香り、水の色、廢墟にあり」としてその田園風景に「支那詩文」の世界を見出し、杭州の西湖では、画舫に乗って「支那の貴族的雰囲気をもつ庭園」の情景をしのび、揚州でも舟に乗って周囲の風景に杜牧、雪舟の絵を思い出している。また、当時日本人の間で「不潔」な町として評判が悪かった南京を、著者は、「旧蹟と詩情風趣の世界」と感じ、秦淮河畔の歡樂街で夜の時間を楽しんでいる。北京には1ヶ月間滞在し、ここで始めて中国らしい大都市の生活を感じている。清朝の宮殿区域、ラマ廟の雍和

宮、万寿山、万里の長城など名勝旧蹟を見ると同時に、琉璃廠の骨董店や崇文門外の玉類を売る朝市をのぞきに行ったり、夜は京劇見物に出かけたりもしている。この当時北京は中華民国の首都であったが、著者には首都のもつ活気が感じられず、宣統帝が主人のようである、という。であるからこそ、著者は十分に「支那情緒」にひたることができたのであろう。しかし、同時に、将来におけるこの「老大国の復興と団結」を考えつつ文を結んでいる。

#### 黄塵行／東亜同文書院第廿三期生編

上海 東亜同文書院旅行誌刊行会 1927（昭和2） 378頁 [6103]

東亜同文書院恒例の修学旅行である「支那内地調査旅行」の紀行文集。数人ずつを1班として以下の15班がそれぞれの旅の体験をまとめている。各班は、1926年5～6月に上海を出発し、8月末頃帰っている。

粵西海南島班——福州・廈門・漳州・泉州など福建省南部。広東三角州地方班——汕頭・広州・仏山・香港。広州は省港ストの最中で港らしい騒がしさもなく、沙面もひっそりしていたと述べている。滇蜀班——上海からハイフォンまで船で行ったのち、滇越線で雲南省城に行った。唐繼堯に会見。このあと東川－昭通－老鴉灘と雲南の高原を跋涉した苦労を語っている。江西縦貫班——広東省北部から江西省へ。すなわち、韶州－南雄－贛州－南昌－九江のルートで、このうち広東省側では北伐軍の通過後食べるものなどなにも残されていない村の様子などを見ている。湖南循環班——上海から漢口まで揚子江を溯航したあと長沙へ。数十年来の大洪水に見舞われた長沙であった。蜀秦班——宜昌を経て重慶から嘉陵江に沿って北上し、陝西省の漢中までの旅。途中、三峡を溯航し、蜀の栈道を歩いたが、排日の演説にもぶつかった。四川西部循環班——富順－自流井－成都－峨眉山。自流井では塩井を見、成都に古きみやびやかさを感じたことを述べ、さらに峨眉山登頂を詳しく語っている。皖淮班——南京から蚌埠へ出て、信陽まで淮河沿いの旅を綴っている。京漢沿線班——漢口－鄭州－石家荘－正定。鄂豫班——漢口から漢水に沿って安陸－樊城－唐県の旅で、途中安陸では「軍事探偵」とみられて石を投げつけられた。隴海沿線班——江蘇省北部の海州から西へ向かい、洛陽－陝州－潼関まで。龍門の石仏を觀賞し、兵隊に汚された驪山北麓の温泉をみながら唐代の華やかさを偲んでいる。河南山東黄河流域班——徐州－曲阜－泰安、そして泰山に登っている。山西縦貫班——隴海鉄道の終点・陝州で黄河を渡り、運城－夏県－平陽府－太原まで北行した。夏県で禹廟に、平陽府で帝堯廟に詣でたことや、太原で閻錫山に会見を申し入れたが断られたことなどを述べている。京津班——北京で花柳街へ行ったことだけを記している。満蒙班——錦州から赤峰を経て熱河の砂漠を歩き、鄭家屯からハルビンまで行った。砂漠の落日を感傷的に描いている。

#### 鮮満支素見／中山正善著

奈良 私家版 1927（昭和2） 232頁 [XI-4-6]

天理教第2代真柱（代表）の第1回鮮満旅行（1926年8月10日～9月12日）について「自由な感想を加えた紀行文」。訪問地は釜山－東萊－京城－元山－平壤－奉天－撫順－哈爾賓（8月22日）－湯崗子－大連（8月26日）－旅順－大連－天津－北京－奉天－京城。写真は著者が撮影した300余葉から選ばれたもので、凡百の関係書籍には見られないカットが多く、奉天市街の写真など貴重だろう。北京では大道の商人にレンズを向けて怒られている。

著者が「上陸第一に感じたことは（中略）内地の人が意張り過ぎる」ことだった。公主嶺・

四平街の駅頭では「赤い夕陽の満洲」を如実に味わい、長春から湯崗子までの列車内では、武藤信義と同車している。また専務車掌が天理教信者だったため、色々な便宜をはかってくれたという。湯崗子では、「朝、旅館前の小庭に集つて、はるか「ぢば」の方を遥拝して」から乗車しており、天理教真柱ならでは。旅順では関東庁の児玉秀雄長官と面会し、ヤマトホテルでは、張作霖第五夫人一行と遭遇している。

天津北京間の列車は一等車でも窓に金網がはめてあること、天津でも北京でも税関検査があること、朝鮮の寿松普通学校校長の、生徒から「先生何日になれば朝鮮は独立するのですか」との質問に困惑する、といった話を採録している。

「支那回想」では、「北京大学の理科実験室の如きは、我が国の一寸気のきいた小学校の実験室にも及ぶまい」といった観察や、「支那へ行つて間違ひなく釣銭が取れると、もう一人前の支那通だ」といった評価、また「利害、人情、言語等を異にする南北が、互に独立して内治につとめ蒙古、西藏等の四圍の夷国も自覚して独立し、互に刺戟をあたへたならば、支那も実質上に於て案外早く治まつたのではなからうか」といった中国観も興味深い。（関智英）

### 最近の支那旅行／二橋三郎著

東京 蘆田書店 1927（昭和2） 175頁 〔XI-6-B-b-75〕

著者の二橋は浜松師範学校訓導などを務めた教育者で、綴り方に関する著作がある。視察は静岡県教育会の企画で、県からの出張扱いである。本書出版元の蘆田書店は、明治から昭和にかけての教育者として知られた芦田恵之助によるもので、出発に際し芦田から「日本を離れて、日本を見よ」という餞の言葉をもらっている。

1926年10月15日に神戸出帆、18日は馬車3台に分乗して、上海日本尋常高等小学校を訪問。「雲つくばかりの」印度人の門衛に迎えられ、校庭には、山を見たことのない生徒のために小山が築いてあったという。上海では他に日本高等女学校・東亜同文書院・上海市立万竹女子小学校・南洋大学・アメリカンスクールなど教育施設に加え、商務印書館とその印刷所を見学。

日清汽船の鳳陽丸で長江を遡行して到着した南京では名勝の他、生徒数21名の日本人小学校を見学している。続く訪問地蘇州でも領事館隣にある日本人小学校を見学、その後杭州を見学している。末尾には中華民国全体の状況を概説し、「新しい支那は大学から」と、上級の学校ほど盛んであると見ている。（関智英）

### 蒙古踏破記／吉田平太郎著

東京 満蒙研究会 1927（昭和2） 156頁 〔5968〕

1919（大正8）年3月24日から10月5日にかけて行われた内蒙古東部と洮南との視察旅行日記。著者の肩書は陸軍中將、この旅行の直前まで現役である。内蒙古東部の旅行は4名、洮南へは2名で行くが、同行者の名前は頭字で示してあるだけである。この視察旅行の目的は、各地の地形、農業・牧畜の現状と羊毛・皮革・雑貨の売買状況の調査にあり、この日記にも詳しくその実情が書かれている。また著者は陸軍省で騎兵課長、軍馬補充部長を歴任しているので、馬の形態、性情、取扱などについて高い関心が払われている。この旅行の結果、一つの試みとして、牧羊試験が行われることになり、緬羊218頭、山羊110頭が購入され、1人の同行者が高爾斎に留まり、中国人を雇用して牧畜業を営むことになる。



著者はまず旅行の準備や見物をかねて、大連・旅順・北京・張家口・奉天・鉄嶺・公主嶺・四平街をまわり、4月22日鄭家屯から視察旅行に入る。白音他拉・開魯・東扎魯特・西扎魯特・ハンスーム・阿魯科爾沁・小巴林王府を経て大板に5月17日到着する。ここを起点として次の3地点を回る。(1)林西、(2)赤峰・敖漢・奈曼、(3)オランハガスーム・西烏珠穆沁王府・タブソノール・林西・高爾斎。その後、7月31日大板を発ち、林西・土城子・赤峰・圍場・多倫諾爾・張家口・歸化城と進み、また張家口へ戻って、9月8日北京に到着する。再び鄭家屯に行き、9月16～24日まで洮南間を往復している。11枚の行路略図が巻末に附されている。

## 1928

### 漢華／東亜同文書院第二十四期生編

上海 東亜同文書院 1928(昭和3) 636頁 [6123]

東亜同文書院第24期生による1927(昭和2)年夏の旅行記録。70余名が15班に分れて北はチチハル、南は南洋諸島、西は雲南までの旅であったが、今回、特徴的なことは、雲南省を除いていわゆる「中国本部」の中へほとんど足を踏み入れていないことである。当時は国民革命軍による北伐とそれに続く国共分裂の時期で、かれらの旅行も不可能だったのであろう。北へ向かった班は上海から船で青島あるいは大沽へ行き、そこから天津、北京を経て大同へ、または天津を経て東北地方へと旅をし、さもなれば大連から東北地方へ行っている。また南へ向かった班は、福州、廈門、汕頭、広東など沿岸都市にとどまっている。今回の旅行のうちでは北満間島班の「間島紀行」が珍しく、ただ一つ雲南に入った班は、この年5月に唐繼堯が病死した後の不安定な雲南政情を報告している。

### 東京外国語学校支那旅行報告(昭和2年度)／東京外国語学校支那語部・蒙古語部編

東京 1928(昭和3) 365頁 [2303]

東京外国語学校支那旅行団は2班に分れる。支那班は学生15名を宮腰健太郎教授が引率し、1927(昭和2)年7月18日東京を発って、朝鮮経由、奉天・鄭家屯・洮南・昂々溪・齊々哈爾・哈爾濱・長春・大連・北京・天津とまわり、9月5日帰京する。蒙古班は学生3名を出村良一助教授が引率して、7月18日東京を発って、朝鮮経由、奉天・鄭家屯・通遼・洮南・満洲里・ダライ湖・海拉爾・興安・哈爾濱・長春・大連・北京・天津とまわって、9月4日帰京する。

本書はその旅行報告であるが、旅行記らしいものはほとんどなく、「転換期の紅槍会」「支那新聞の変遷に就いて」「北満に於ける貿易」「支那に於ける勞工法運動の研究」「支那芝居の瞥見」「蒙古に於ける商取引に付いて」などといった学生の調査報告が主である。

### 支那遊行記／北条太洋著

東京 北洋社 1928(昭和3) 170頁 [1450]

著者は1927(昭和2)年11月1～7日、上海で開催された第2回全亜細亞聯盟理事会に日本代表の一員として出席した。本書は前半にこの会議の様子が記され、会議後12月30日まで2ヶ月近く中国・満洲方面を旅行した印象が後半にまとめられている。『紀伊毎日』に掲載した文に修正を加えて発行された。

「名物に旨いものなし」と、頽廢した名所・旧蹟に著者はほとんど目を向けず、自然や緊迫した情勢を主に記している。上海・蘇州・南京・漢口・青島・濟南・天津・北京・大連・哈爾濱の各地を訪れ、通過した鎮江・蕪湖・九江も紹介されている。馮玉祥の進撃の噂に出航が見合わされたり、南軍が兩岸を蟻の行列の如く進行する靳水辺の航行、日本領事館が危険を回避してハルク内に置かれている南京などの情景を伝える。

中国における日本の権益の擁護伸長に、積極的な意志をもつ人の旅行記として興味を抱かせるのは、旅行中の宿泊費や交通費、さらにその税金の割合などが丹念に記され、日常生活の一端が理解できるようになっていることと、商売の上手な中国人の存在にも目を留め、日本商人が個人的に対応することが難しくなっている現状に、工業品の改良、金融機関・言論機関の創設などの助成措置をとることが提案されていることである。

## 1929

黄河治水：一名東洋文化発祥地改造／小越平陸著

東京 政教社 1929（昭和4）168頁〔XI-6-B-d-22〕

蝸牛庵主人こと小越北溟（平陸）による黄河源流の探索記。小越は1896年5月以来、広西・新疆以外の中国を多くは徒歩で踏査してきた人物で、『白山黒水録』『陰謀家袁世凱』といった著作をものしている。その旅は「由来乞食旅行と云つて一日が十錢足らずで旅行するので、とても地方官などを訪問する資格がない（中略）全く自己の辮髪を垂下した支那苦力一様」であったという。

経路は、1922年3月9日に濟南を出発し、北京－歸化城－青塚（王昭君墓）－包頭－寧夏－中衛－蘭州－西寧－湟源（丹噶爾）－河拉克托－青海湖岸－貴徳－康家寨－巴戎－循化－拉布楞－河州－狄道－蘭州－中衛－横城（寧夏）－石嘴子－磴口－南海子（包頭）－河口（托克克城）－河曲－保徳－磧口－壺口－禹門鎮－三河口－潼関－陝州－鉄謝鎮（孟津）－栄沢（京漢鉄橋）－蘭儀－陶城埠－灤口（濟南）－利津。途中、寧夏では羊毛、牛皮などの輸出を計画している日本人2人と意気投合し、また清朝の端群王及びその孫秀峰と交歓している。湟源では喇嘛廟をおとない、20歳位の活仏が200-300人の稚僧と読経する様を伝えている。

結論では黄河全水域の測量は必要ではあるものの、それよりも重要なこととして植林の必要性を説いている。

（関智英）

孫文移靈祭の記：附・新支那旅行記／近藤達児著

東京 1929（昭和4）191頁〔2408〕

1929（昭和4）年6月1日に行われた孫文移靈祭に、国賓として招待された犬養毅に随行した著者の旅行日記。一行は11名——犬養毅・萱野長知（以上国賓）・犬養健・古島一雄・板野友造・清水銀蔵・宮川一貫・高州太助・著者・護衛2名。南京までは、同じく国賓であった頭山満一行と、ほとんど行を共にしている。犬養一行は移靈祭に参列したにとどまらず、5月20日から7月2日にわたり、上海・鎮江・揚州・青島・泰山・曲阜・濟南・北京の各所を訪れ、各界の人々と交流している。各地で日本側からも中国側からも盛大な歓迎を受けている。多数の歓迎宴の中には、黄興の遺児達との情の通り会った午餐や、同盟会有志とのしみじみとした茶会も行われている。

著者は革命後の政府が基礎固めに努力していることに好意をもち、苛斂誅求の非難を浴びる蒋介石や、その下で活躍する有能で若い人々に寛容を示している。肅然と行われた移靈祭を賞賛しながらも、宏壮な中山墓陵に「流行の新しい気分が十分に溢って居り、支那には適はしからぬ」と感じている。

雄大な大陸の風景を楽しみ、荒廃している旧蹟に、一種の詩的情趣を感じながらも、排日排日貨のポスターが溢れている現状に最大の関心を持つ。日本の権益を守ることが「東亜」の安定に必要であることを、中国に誤解なく伝わるような、密接な中国関係を保つ努力を政府に望み、また中国語を中学校で履修させようという提言もなされている。

黄塵に見舞われつつ華北の旅を終え、神戸への帰途、田中内閣総辞職の報が入る。

#### **線を描く：大旅行記念誌／東亜同文書院第二十五期生編**

**上海 東亜同文書院 1929（昭和4） 510 頁 [2320]**

東亜同文書院第25期生75人の旅行の記録。1928（昭和3）年夏、15班に分れての旅であったが、今回も「中国本土」の中心部へは行けず、それだけ東北地方へ向かう班が増えて8班を数える。そしてこれらの班は多かれ少なかれ張作霖爆殺後の奉天に触れている。最も早い班は事件の翌朝近くを通過した汽車の窓からまだ燃えている車輛を見ている。また事件から1週間目に奉天へ行った班は、犯人が日本人とわかって情勢は厳しいと伝えている。この前月には日本の「山東出兵」があり、青島をみた幾つかの班は日本軍が町にあふれ、港には日本の軍艦が停泊している状況を述べている。一方、南方へ向かった班も5班に増え、ベトナム、フィリピン、コーチシナ（ラオス）、ビルマなどに赴いている。

#### **教育家の目に映じたる欧米南洋鮮支事情／福德生命保険株式会社編**

**大阪 1929（昭和4） 236 頁 [10397]**

福德生命保険株式会社は昭和4年度海外視察員を欧米・南洋および中国・朝鮮に派遣した。本書はその視察報告で、95頁以降が中国・朝鮮視察記。この視察団は渡辺千治郎（滋賀県女子師範学校長）団長以下11名。1929年6月2日下関を発って、朝鮮を経、6月6日奉天に着き、それから撫順・奉天・旅順・大連・天津・北平・塘沽・大連・青島・済南・青島・上海・杭州・蘇州・南京・上海とまわって、6月30日長崎に帰る。中国視察記の内容は次の通り。渡辺千治郎「朝鮮支那視察記緒言及雑感」、矢野千束（小学校長）・有路政五郎（小学校長）「支那朝鮮視察旅行日誌」、税田弥三郎（県視学）「満洲の教育」、今泉宗市（小学校長）「支那視察雑感」、井奥賢治（小学校長）「日鮮支関係所感」、尾島桑次郎（県視学）「満洲支那に於ける教員の待遇と其の家庭生活」、島袋源一郎（小学校長）「朝鮮満洲視察雑感支那大観」、森屋高蔵（県視学）「支那の教育」、また井上光次（教諭）の写した写真がたくさんある。

#### **新支那訪問記／村松梢風著**

**東京 騒人社書局 1929（昭和4） 270 頁 [3714]**

本書は、著者が1928（昭和3）年11月に南京、上海、蘇州、杭州の各地を旅行した時の見聞を綴ったものである。標題にある「新支那」とは、ようやく全国統一のなった国民政府治下の中国を指しており、この旅行以前にも何度か中国を訪れたことのある著者は、本書で「新支那」に見られる変化を描こうとしている。これが本書の特色である。

著者は、「新支那」を理解するためにはその首都である南京を知らねばならぬと考え、旅行中もっとも長く、2週間以上同地に滞在した。したがって本書の内容もその3分の2が南京にあてられている。著者が訪れた南京は、首都建設計画の下に改造事業の進行中であった。劉紀文市長は果敢なやり方で道路建設を推進し、その工事に伴う住民立退き命令は無法ともいえるほど乱暴に実行されていた。国民政府は乞食を一掃する政策をとり、実際、南京をはじめその他の町々でも乞食を見かけないことに著者は注目しているが、同時にそれでもなお、かれは、南京について混雑して慌だしく不便でいやな所だという感想をもらしている。南京の不便さに関して、土地の人々は南京にない四つのものとして「電灯不明」「電話不霊」「道路不平」「水不清」の言葉をあげて、国民政府の近代都市建設政策の矛盾を皮肉っている、という。また、政府は芸妓の営業を禁じ取締りを厳重にしているので、南京に娯楽場がなく、そのため茶館と書場（歌を聴かせることを主にした茶館）が大繁昌しているが、政府の高官たちは、毎週のよう上海へ楽しみを求めに出かけている、という。著者は、茶館や書場に入ったり、雨花台や中山陵などの見物に行ったりして南京の風物を楽しみ、また、強いて当面の政治問題には触れないと断つてもあるが、著者の筆は、以上にみたように、現実の政治を反映した南京の実相を巧みに描写している。さらに、国民政府中の大立物として蒋介石と馮玉祥の2人の人物評もおこなっている。

上海については、著者は、同市が広くいわれているような「魔の都」ではないとし、その見方は外部の世界の既成道徳によって上海を判断することから生まれると述べている。そして、グレイハウンドのレースやダンス・ホール、賭博場などにも出かけた著者は、これらの場所で見かけた女性のヘヤ・スタイルや服装についても作家らしい眼で観察している。

蘇州では留園や虎丘寺、獅子林など、杭州では西湖とその周辺の名勝を訪ねたことが語られている。

## 1930

### 高速度支那の旅／芦田均著

出版地・出版者不明 1930（昭和5） 2, 77頁 [E-292.2-7シ 01-001]

駐イスタンブール参事官だった芦田均が一時帰国している時期の中国出張の記録（『芦田均日記』第1巻によると1930年3月6日～4月3日）。主な経路は、長崎－上海－南京－青島－天津－北平－奉天－旅順－大連－京城だが、現地の事情に言及があるのは上海・南京・青島・北京（及び長城・明十三陵）だけである。

上海から南京までの列車に「小鳥の籠を下げて乗つてゐるのが可なり多い」、蒋介石の住む軍司令部は「支那家屋を改造した粗末な家」、「青島には国粋会といふのが幅を利かして」いる、青島の膠州路では「銀杏返しの日本娘がお世辞を売つてゐる」、故宮武英殿の書画類は「偽物が七八分」、といった現地の声も拾っているが、大部分は中国の情報を総合的に集め分析したものである。文末には「日支関係」をどうすべきか、という項目が立てられ、日本人には「支那人をして日本人を軽侮し、之を嫌惡せしめない丈けの修養と努力」が必要で、「新しき支那の立場に同情を示しつつ我國の立場を明瞭に定めて置く」べきと説く。芦田の中国観を知る上では興味深い。

（関智英）

### 蘇浙游記／小倉正恒著

上海 1930（昭和5） 28, 22丁〔7771〕

1929（昭和4）年春、著者は住友会社役員として中国・朝鮮旅行をした。本書はその旅行の前半、4月11日～24日蘇浙滞在時の旅行日記である。毎日、交流した人々、訪問・見学した場所が克明に記され、おりおりの自作の漢詩も数多く載せている。本文は漢文であるが、福田千代作により全訳されている。上海を中心に杭州・蘇州・南京を、4人の随員——久島・香川・中目・福田——と共に訪れている。

杭州の2日と蘇州の1日は遊覧を楽しんでいるが、上海・南京では、中国人および日本人との交歓が日程の大部分である。蔣介石主席には武漢転戦中とのことで会えないが、譚延闓行政院長・何応欽参謀長・王正廷外交部長・芳沢公使・重光総領事ら政界人、王一亭・虞洽卿の財界人、鄭孝胥・呉蔭培の文人と、各方面の人々と会談している。この交遊の広さと、一部を除いて中国という呼称が使用される見識とは、著者の中国問題への深い認識を伺わせるものである。

### 足跡：大旅行記念誌／東亜同文書院第二十六期生編

上海 東亜同文書院 1930（昭和5） 494頁〔2321〕

東亜同文書院第26期生100人が19班に分れて1929（昭和4）年夏おこなった恒例の旅行の記録。今回は中国内地の旅が復活して、第4班（本書記載の順序によって筆者が仮につけた）は雲南から叙州、峨眉山、成都、重慶と歩き、第5班は自流井、峨眉山、成都、順慶と歩き、第6班は揚州、安慶を経て揚子江を溯航し、宜昌、万県から重慶に至り、第9班是北京から大同、張家口へ行き、第10班是北京から包頭、大同とまわっている。このほか、東北地方を旅したのが7班、南洋諸島へ行ったのが1班で、さらに2班は広東省各地を、1班は雲南・ベトナム北部を旅行した。残る2班是北京駐在班と上海班で、かれらの記述はきわめて簡単なものである。

### 東京外国語学校支那旅行報告（昭和4年度）／東京外国語学校支那語部・蒙古語部編

東京 1930（昭和5） 389頁〔2303〕

東京外国語学校支那旅行団は2班に分れる。支那班は学生13名を宮越健太郎教授が率い、1929（昭和4）年7月10日東京を発って朝鮮を経由、奉天・撫順・遼陽・営口・大連・旅順・青島・上海・杭州・南京・済南・北京・天津とまわり、約50日して東京に帰る。蒙古班は学生3名を出村良一助教授が率い、1929年7月10日東京を発って、朝鮮経由、奉天・撫順・鄭家屯・洮南・白音太拉・昂々溪・齊々哈爾・長春・大連・天津・北京・済南・青島とまわって、約50日して東京に帰る。

本書はこの旅行報告であるが、旅行記らしいものは少く、「満蒙対策の革新」「思想界と労働界から見た支那」「支那に於ける罷業の一考察」「支那に於ける新聞広告の瞥見」「逆産条例に就て」「東部蒙古を如何う見るか」などの学生の調査報告が主である。

### 鮮支遊記／藤山雷太著

東京 千倉書房 1930（昭和5） 150頁〔3495〕

大日本製糖株式会社における活動を中心として財界の重鎮である著者が、京城における博覧

会見物を機会に中国に赴き、安東・奉天・大連・旅順・青島・上海・南京を歴訪した時の見聞記。旅行は1929年9月15日～11月9日の2ヶ月にわたり、10月12日以降中国旅行をしている。一行は滝川・福井2人の秘書に、大日本製糖朝鮮支店理事三浦計が中国旅行に加わり、4名である。

豊富な資源と膨大な人口と広大な領土を有する中国と、国富を増進している日本とが将来にわたって共存共栄していくためには、中国自身の国家的統一が必要だと考える著者は、中国人に対する日本人の誤解に反論している。すなわち、中国の統一が完成すれば日本の脅威になると恐れ混乱を喜んでいる人々に対しては、中国の経済・文化が進展して、はじめて隣国日本の産業の繁栄も考えられるといい、中国人の弱点ばかりをあげ、打ち続く抗争を否定的にながめている人々には、中国人は力量的にも秀れ、法律に頼らない商業道德の進んだ国民であるという。そして苦しんでいる中国に対して、中日の将来を考えて理性的に寛容をもって対応するよう望んでいる。一方、蔣介石の下で活躍する若くて有能な人々、活動的な女学生、排日運動をする一方日本語の習得に励み日本を理解しようとしている人々、中国統一の象徴として作られた豪壮な中山墓陵など、中国の革新的な意気込みに大いに感銘を受けている。

多数の要人との交歓のうちでも、奉天の張学良、南京の蔣介石との和やかな会談の様子が特に描かれている。張作霖とも親交のあった著者は、張学良にも高い評価をもち、日本の彼に対する誤解に不満を感じている。

#### 満蒙遊記／与謝野寛・与謝野晶子共著

東京 大阪屋号書店 1930（昭和5） 344頁 [7888]

満鉄の招待で、1928（昭和3）年5月5日から6月17日にかけて旅行した各地の印象が前半に記され、あとの3分の1以上に、その折詠んだ歌が収められている。満鉄から加藤郁也が随行し、また途中湯崗子～奉天間では詩人佐藤惣之介が合流している。著者たちは北京へ行くこともはじめ希望していたが、北伐が進展したため断念し、大連・旅順・金州・熊岳城・營口・湯崗子・遼陽・安東・五龍背温泉・四平街・洮南・齊齊哈爾・昂昂溪・哈爾濱・吉林・長春・公主嶺・奉天・撫順・（大連）を訪れている。大連の頃まで寛が書き、後は「金州以北の記」として晶子が綴っている。満鉄側からは、折り折りの歌作を望まれているが、2人は情趣ばかりではなく、中国と「日本との交渉を円滑にする為には、その自然と社会生活を知り、気分感情を読みとること」が必要だと、この旅行を誠実に捉えている。そのため、多くの見聞を描くことに力点がおかれているが、さらに緊迫した動向への考察、日本人観も明快に述べられている。

大連の福昌華工株式会社、硝子製造工場、大連病院、熊岳城・公主嶺の農事試験場、遼陽の監獄、阿片吸煙所などを熱心に見学してまわり、各地でその産業にまで筆が及んでいる。そして工場で黙々と働く強壮な労働者や、薄利勤勉な商人などの中国人に好感をいだき、翻って日本人に対して厳しい目を向けている。たとえば、忍苦の力、団結力などの不足、人情風俗に通じようとしめない優越意識などを指摘している。晶子はさらに進んで排日運動について「帝国主義の見方からは怖ろしいことながら、人道上からは支那人のために慶祝されねばならない」と述べている。彼女の理想主義的な面が躍如としている。一方寛は、満鉄の事業に参画する日本人の収入が、その日常生活を商う中国人によって、結局吸収されていることを見抜く洞察力を示し、勤勉な日本人が入殖しなければ、満洲の地も日本の利益にならないだろうと感じている。

読者を驚かすのは、奉天の駅上ヤマトホテルに泊った明け方、著者たちは張作霖の列車が爆破される音を聞、数日間の奉天滞在中で、その事情を知ってしまうらしいことである。往路の遼陽で、朝鮮から急に派遣された夥しい兵士に観光旅行の興をそがれ、奉天でも武装し殺気立つ雰囲気を見、「日本を世界から孤立させる結果になりはしないかと想像して心を暗く」していた晶子の不安が適中したわけである。

2人を歓迎して各地で短歌会が催され、熊岳城・湯崗子・五龍背の温泉をまわることも楽しみであった旅行を更に印象深くさせているのが、呉俊陞夫人によってもてなされた「嫩江の一夕」である。数日後に呉俊陞が爆死してしまうため、特に夫人の像が細やかに描かれている。

情熱的という面が強調される2人の、社会に対する真摯な態度に好感を覚える旅行記である。なお「金州以北の記」は『世界紀行文学全集・中国編1』（修道社、1959）に収載されている。

### 鮮満旅行記／吉野豊次郎著

東京 1930（昭和5） 88頁 [5448]

朝鮮博覧会と満洲の見物を目的として日本旅行協会が募集した「第1回満鮮視察団」に参加した時の旅行記。参加者は15名、案内の旅行社の係員が加わり一行16名である。1929（昭和4）年10月7日に東京を出発し、著者は26日に東京に戻るが、満洲では主に安東・撫順・奉天・哈爾濱・長春・大連・旅順を見物している。同行者名簿によれば茨城県古河からの3名と福島県若松市からの1名以外は、東京居住の人々で参加者は占められているが、職種は様々で、元弁護士、米穀商、機械商などあり、著者は農業である。

満鉄の発展ぶりを目のあたりにしつつ、慌しく市街見物を各地ですが、日露戦争の戦蹟に接して著者は特に感慨深いものを覚える。奉天の納骨堂、哈爾濱の沖横川両志士の記念碑、さらに旅順の戦場跡や戦役記念陳列館と戦争の記憶をたどりつつ、失った多くの友人に思いをはせる。一方満洲での風俗に接することにも積極的で、阿片吸煙所を見学したりもするが、中国人商人の商行為の巧みさに感心をしている。「事実を事実として記述」と著者が序にいうとおり、淡々とした旅行記である。

## 1931

### 満鮮紀行／賀茂百樹著

東京 1931（昭和6） 133頁 [9691]

陸軍省の命令により、靖国神社の賀茂百樹は、満洲・朝鮮にある忠魂祠の巡拝と視察を、1931（昭和6）年5月13日から6月6日にかけて行った。その旅行日記と、神社の現状に対する考察が述べられている。関東軍司令部より大久保氏が同行、案内している。戦死者の納骨堂がある大連・旅順・遼陽・奉天・安東の5ヶ所と撫順を訪れ、その後朝鮮へまわっている5神社と納骨堂への参拝には各地の満鉄職員、在郷軍人会の人々も多数参列している。一方著者は参拝ばかりではなく、大連の油房・福昌華工株式会社碧山荘、撫順炭鉱、奉天の北陵なども見学している。

新しい土地で神職に励む神官たちに感動しながらも、現地に溶けこもうとする意欲の無いことに不満をも感じている。神社が、日本人のみならず、現地の人々にも崇敬できる場所になってこそ建設された意味もあると思い、現地の風俗・人情に通じ、積極的に人々を受け入れる努

力をして欲しいと望んでいる。

#### 最近の南支那瞥見／佐藤恒二〔述〕

千葉 千葉県図書館 1931（昭和6） 27頁 〔3444〕

1931（昭和6）年5月、医学者である著者は夫婦で上海・蘇州・杭州・南京へ旅行した。その時の見聞をまじえながら、千葉県図書館千葉読書倶楽部で、中国について語ったのが本書である。著者たちには中国の知人が同行しているので、国民会議閉（開の誤りか）会直後で戒厳令下にあった南京も訪れている。

中国は日本人が過去に考えていたような国家でなく、つかまえどころのないほど大きく強くなっていることを著者は強調している。政治的には活潑化する自主権擁護の動きや、5月5日から開かれた国民会議の様子、風俗的には女性の活躍や車夫のこと、さらに活気のある上海や南京などについて説明しながら、中国の状況を知らせている。

#### 満支一見／里見弴著

東京 春陽堂 1931（昭和6） 135頁 〔7890〕

志賀直哉と著者とが、満鉄の招待で1929（昭和4）年12月21日から1930年2月1日まで、満洲各地と北平・天津をまわった時の日記風の旅行記。『時事新報』に3月10日～6月27日に掲載した文に加筆してまとめられたのが本書である。正宗得三郎の描くスケッチが多数添えられ、また著者の撮影したスナップ写真も付されている。文からすると、特に志賀直哉の主張で、満洲各地は簡単にまわり、北平にゆっくり滞在している。ジャパン・ツーリスト・ビューローから派遣された係員が、2人の気の向くままに便宜を計っている。

大連でおおよその旅程をたて、旅順・熊岳城・營口・湯崗子・遼陽・鉄嶺・四平街・鄭家屯・長春・吉林・哈爾濱・奉天・撫順とまわるが、大連・哈爾濱・奉天以外は半日位の滞在で、1月10日には再び大連に戻り、北平へ発っている。満洲においては、名所にほとんど興味を起さないが、北平では故宮をはじめとして景山、天壇、明の十三陵に感心している。特に太和門から見る太和殿、祈年殿、万寿山は再遊を希望するほど賞賛している。著者は建築美を醸し出す「高低、起伏をふくんでのプラン」にひかれていて、奉天の北陵を一例として図版を載せている。

本書を面白い旅行記としているのは、歯切れよく、生々と描写される各地の風俗、食べもの、人々の話のためである。長く滞在した北平では、監獄、琉璃廠、北京一の風呂屋の話が盛り込まれているが、その他の地でも、旺盛な好奇心で繁華街へ遊びに出かけた様子が憚ることなく語られている。志賀とのやりとりや、「不思議な熱情」を動物に抱く彼の素顔が語られている。

この紀行文は『世界紀行文学全集・中国編1』（修道社、1959）に収載されている。

#### 燕吳遊蹤：第二回支那大陸旅行記／大東文化学院

東京 1931（昭和6） 127, 255頁 〔4219〕

大東文化学院の第2回の中国朝鮮修学旅行の記録と感想、およびそれに基く研究を編纂したもの。

一行17名は、1930年7月26日神戸を発ち、上海・杭州・蘇州・南京・大連・旅順・天津・北京・奉天とまわり、朝鮮を経て9月5日下関に帰着した。この間の旅程は「旅行日記」の項に詳しく記されているが、主な見学箇所には以下のものがある。すなわち、杭州の雲林寺・岳



王廟，蘇州城内，南京の明の孝陵・中山陵・中央大学，旅順の日露戦争の戦跡，北京の故【古】物陳列所・頤和園・明十三陵・清華大学，奉天の北陵などで，また羅振玉・恭親王・溥儀・段祺瑞に会っている。

この旅行を通して抱いた各人の所感としては7篇が収められ，それらは「日支親善」「支那国民性」「支那の最下層社会」などについて語っている。本書の後篇はこの旅行での見聞に基いてなされた研究論文集で，以下の10篇が収録されている。「朱子学概要」「対聯について」「明器雑考」「曲阜」「南画の研究」「常平思想の発展と常平倉」「支那学校史」「支那に於ける大乘禅の承伝に就いて」「泰山と廬山」「朝鮮案内」。ただし泰山と廬山へは「戦乱」のために行けなかったもので，この部分は第1回旅行の際に発表されたものを借りている。

#### 東南西北／東亜同文書院第二十七期生編

上海 東亜同文書院 1931（昭和6） 10，474頁〔6118〕

東亜同文書院第27期生94名の旅行文集。1930（昭和5）年夏18班に分れ，北は黒龍江省チチハル，南はシンガポール，西は四川省松藩に至っている。どの文章も随筆的に軽い筆致で旅の見聞や体験を語っている。そのなかでは，巴蜀岷涪班の，成都から2週間かかって松藩へ行き，さらに雪山を越えて帰途に向かった話と，四川・陝西班の，成都から漢中に至り，さらに秦嶺を越えて西安まで行った話とが興味深い。また吉会沿線班は間島事情を詳しく報告している。

#### 鮮満の旅／東京鉄道局

東京 1931（昭和6） 192頁〔3741〕

東京鉄道局が主催した246名の朝鮮満洲視察団は，満洲事変直前の1931年5月5日東京を発ち，朝鮮を経て，5月10日鴨緑江を渡り，大連・旅順・鞍山・遼陽・長春・哈爾濱・奉天・撫順をまわって，5月19日再び鴨緑江を渡り，22日東京に帰る。

本書は帰国後，東京鉄道局が編集して団員に配った記念帖で，前半の85頁は写真とその説明，後半が旅日記となっている。そのほか，朝鮮総督府鉄道局・南満洲鉄道株式会社鉄道部が車中で発行した『時報』と題する案内・注意書きもおさめている。写真の中には，奉天の城内・張学良邸・支那街・北陵，撫順石炭の露天掘，撫順のオイルシェール工場，鞍山製鉄所，遼陽の白塔，公主嶺の放牧，大連埠頭，星ヶ浦ヤマトホテル，旅順の戦蹟，満洲の農夫，ハルピンの停車場・市街・ロシア寺院，東支鉄道の汽車，ハルピン付近の松花江などがある。

#### 中華五十日游記／松本亀次郎著

東京 東亜書房 1931（昭和6） 1冊〔3882〕

中国の教育視察を目的として，1930（昭和5）年4月3日～5月24日まで，上海・杭州・蘇州・南京・廬山・九江・漢口・青島・大連・旅順・天津・北平・奉天・撫順・哈爾濱の各地を訪問した。著者は，中国人留学生の日本語教育に，宏【弘】文学院で1903（明治36）年からあたり，さらに1914（大正3）年からは東亜高等予備学校を設立して，活動してきた人である。本書は3部分から構成されている。書名の「中華五十日游記」は，視察旅行日記であり，視察した主な学校の詳細な報告と著者の見解が，附2「教育視察紀要」に記されている。附1には，1928年に発表した文に加筆した「中華留学生教育史」が並録されている。

本書で特徴的なことは、“中華・民国・民国人”という言葉でのみ中国が呼称されていることである。これは、この時代の他の図書と全く相違するところである。著者はこのことについて何の説明も加えていないが、日中親善についていろいろ模索する著者の、一つの見解を示している。著者の交歓する中国人や日本人は、それぞれにお互いの利点を認めることができる人々のため、日・中の交流を深める積極的な提案がだされている。中国の情勢について現状だけで酷評するのでは、自他ともに益にならないと主張する著者は名所・旧蹟の紹介にも故事や漢詩を多く取り入れている。中では、教え子であった秋瑾の墓に詣でた様子や、廬山の登山が印象的に書かれている。

同行者は 3 名、日華学会主事 中川義弥、東亜高等予備学校教授 吉沢嘉寿之丞・小谷野義方。

### 風雲を孕む支那を旅して／最上政三著

東京 交通研究社 1931（昭和 6） 36 頁 〔4352〕

民政党議員である著者は、中国問題を論じるには中国の実情をまず見聞することだと考え、同僚 6 名の代議士と共に中国各地をまわり、蔣介石・王正廷・韓復榘・張作相など多数の要人と会見し、また宣統帝も慰問した。その旅行から得た中国の印象を述べたのが本書である。旅行は 1931（昭和 6）年 5 月 24 日から 6 月 28 日にかけて行われ、上海・杭州・蘇州・南京・漢口・北平・天津・済南・曲阜・泰山・青島・大連・奉天・撫順を訪れた。一行は、多田満長・宮沢胤勇・長野綱良・岡田春夫・佐藤謙之輔・武谷甚太郎である。

感情的ではなく中国を理解することが、他の諸外国と違い特殊関係にある中国と日本が共存共栄していくための要件であると述べている。著者はこの旅行で「不可解なる中国」という印象を得たから、なおさら中国の国情・国民の気風を知ることの必要性を痛感している。国民政府の組織と実情、国民教育の現状がとくに取り上げて説明されている。

## 1932

### 満洲国を旅して／津村重舎著

東京 1932（昭和 7） 187 頁 〔4588〕

貴族院議員による「朝鮮、満洲国及上海方面視察旅行団」に参加して、1932（昭和 7）年 10 月 4 日～26 日にかけて旅行した時の、日記体の記録がはじめの 4 分の 1 で、あとは「満洲国概観」としてその機構・産業・移民などについて概説している。一行は 13 人、井上匡四郎・西大路・立見・梅園・矢吹・松平・山之内・青木・赤池・今井および著者の議員連と、瀬古・内田事務局員である。朝鮮から安東に入り、新京・吉林、さらに飛行機で哈爾賓・齊々哈爾に行き、新京に戻り、奉天・大連・青島・上海をまわった。執政溥儀、國務院総理鄭孝胥らと会見し、満洲国承認慶祝の宴会に出席している。民政部総長臧式毅と会見しては、「恐るべき存在」とその人物を評している。新京南嶺の兵営、奉天北大営等の戦場と、各地の産業状況の視察に旅行の重点がおかれている。

### 千山万里／東亜同文書院第二十八期生編

上海 東亜同文書院 1932（昭和 7） 671 頁 〔7129〕

東亜同文書院が「一大伝統」として誇る「支那内地大旅行」の 23 回目、第 28 期生 70 余人

の旅行記。1931（昭和6）年夏，19班に分れたかれらは，「北は南北満洲より，南は碧海の列島に，西長驅して雲南・四川」に至り，さまざまな見聞を記している。その幾つかを拾ってみると，露支国境班は海拉爾の事情と松花江から黒龍江の船の旅を詳しく語り，南支沿岸班は広州で汪精衛らの広東国民政府の軍・政両委員任命式に列席したことを記している。また，雲南・四川班は帰途目撃した漢口の水害を語り，黒龍江省班はホロンバイルの蒙古人について述べている。なお巻末に，宮原豊「万宝山踏破記」，岡部善修「北満に於けるソビエツト聯邦のダンピングに就いて」，加藤和夫「南洋華僑の送金問題」を収める。

#### 中国視察記念誌／東海商工会議所連合会中国観光団

名古屋 1932（昭和7） 494頁 〔10420〕

東海商工会議所聯合会が主催する中国観光団の中国視察記。この観光団は聯合会傘下の18商工会議所が募集したもので，応募者は884名，それに係員59名を加えた総計943名という大観光団で，団長は伊藤次郎左衛門（名古屋商工会議所会頭）。大阪商船所属の1万トンの巨船「りおでじゃねろ丸」を借り切って，1931（昭和6）年4月11日神戸を発って，上海・杭州・蘇州・南京・青島を視察して，4月21日神戸に帰る。

本書は3編からなる。第1編は「総説」で企画から解散までの記録。準備段階のこと，各地視察のことから，団員の氏名・職業や上海で船に招待した知名人士の氏名・職業などにいたるまで記されている。第2編は「団員視察記」で，団長以下52名の団員が，それぞれ視察記・感想文を書いている。第3編は「団員所感八題」で，271名の団員が，最も予想外に感ぜられた事，最も奇異に感ぜられた事，最も印象深く感ぜられた事，最も良く感ぜられた事，最も悪く感ぜられた事，最も愉快に感ぜられた事，最も不愉快に感ぜられた事，其他，の8問に答えている。

#### 満洲は微笑む：漫遊綺談／真鍋儀十著

東京 中和書院 1932（昭和7） 206頁 〔11983〕

立憲民政党前衆議院議員の著者が建国直後の満洲国を巡った際の記録。経路は奉天－新京－吉林－敦化－ハルビン－チチハル。事変勃発からまだ時を経ていないことは，「藁の下をステッキの先でついて見ると永い間氷に閉されてミイラになつた支那兵の遺棄した屍体が，解くるに従つて表に露はれ，それを嗅ぎつけた瘦犬が，しやぶりに来てみたところだ」といった記述からもうかがえ，柳条溝の視察では，不審者に間違われ，あやうく日本兵に狙撃されかかっている。

現地では佐官級の関東軍軍官と交流したほか，臧式毅（奉天省長）・袁金鎧（参議）・溥儀・鄭孝胥・熙洽（吉林省長）と会見している。袁金鎧を「満洲国の大久保彦左衛門」，熙洽を「吉林の大政」と紹介するくだりは当時の雰囲気伝えていよう。

満鉄経営の炭坑では，問題の多い日本人や朝鮮人の坑夫を避け，「全部支那人で間に合せてゐる」という話を聞き，「収入と釣合はない体裁ばかりの生活をする日本人」と，堅実でつましい生活をする「支那人」とを対比している。また新京では，乞食に阿片窟・モヒ窟を案内させ，実際にアヘンを吸引し，アヘン・モルヒネ欲しさに盗みを働く者が多いのではないかと推測している。

チチハルではモンゴル人の自転車運転手が読んでいた『日本話本』から現地の日本語熟を紹

介するとともに、その「雑貨類」のページの一部を採録しており興味深い。

(関智英)

## 1933

満華一巡之旅／神田正雄著

稿本 1933 (昭和 8) ノート 5 冊 〔貴 17255〕

当時の著者は、元東京朝日新聞社支那部長、元衆議院議員にして、雑誌『海外』社社長。満洲建国後の 1933 年 10 月から 12 月まで現地と中華民国を訪問した際の日記で、ノートブックに縦書きペン字で綴られる。『甲戌之旅』へと連続する、満洲・中国各地を巡り当路に取材した著者の旅日記の一部である。各冊冒頭に自序をおき、第二冊以降日記の後には「道聴途聞(録)」と題する、要人の談話内容を直話形式で記す。談話者の多くが率直な語り口で当時の緊迫する日中関係や中国の政情を語っており、記録者のバイアスは避けがたいものの、当事者の証言として貴重な記録となっており、史料的价值は高い。各冊の旅程と、「道聴途聞(録)」に紹介される主な談話者は以下の通り。

第一・二冊：大連－奉天－新京(長春)－ハルビン－チチハル－新京－奉天－錦州－朝陽－熱河－北京。十河信二・金井清・大蔵公望・畑俊六・儀我誠也・小磯国昭・宇佐美寛爾・土肥原賢二・上杉益喜ら。満洲国では、チチハルから軍用機に乗り、満ソ国境を上空から観察するなど、関東軍の全面的支援を受けた。第三冊：北京。湯爾和・殷汝耕・黄郛・何澄・商震・周作民・王克敏・何応欽・江朝宗ら。ほかに、承徳の離宮(避暑山荘)や寺院を巡った際の見聞録「見矣聞矣」がある。第四冊：北京－天津－済南－青島－上海－南京。于学忠・孫潤宇・魯嗣香・呉鼎昌・姚震・張士譚・韓復榘・崔士傑・段祺瑞・唐有壬・汪精衛・賀耀組・陳儀ら。第五冊：上海－福州－台北。李景鏞・呉光新・蔣方震・張耀曾・謝春木・張公権・孫洪伊・陳友仁・欧陽予倩・羅万俔ら。筆者は台北北郊の草山(現・陽明山)温泉で年越しを迎える。『甲戌之旅』に続く。

(村田雄二郎)

北斗之光／東亜同文書院第二十九期生編

上海 東亜同文書院 1933 (昭和 8) 523 頁 〔2322〕

東亜同文書院第 29 期生 79 名は 22 班に分れて 1932 (昭和 7) 年夏、恒例の「大旅行」をした。「満洲国」が成立したのが、この旅行の僅か 3 ヶ月程前であり、この情勢を反映してか、かれらの眼はほとんど満洲に向けられている。第 21 班の香港・広東・台湾旅行と第 6 班の 1 人が別れて武漢・長沙へ行ったのを除いて、他はすべて満蒙の各地を旅行した。初期の頃の旅行記とは異なり、本書に述べられた多くの報告が河北から満蒙各地の政治・経済情勢にふれている。たとえば、日中間の緊迫した情勢と青島・天津における日中貿易の状況に関心を払うものあり、営口の経済を述べるものあり、また満洲の民族協和運動や鉄道問題を考えているものもある。さらに、「狭隘な偏見を捨てて、満洲国を直視しつつ書かれた」20 数名の「満洲国印象記」が巻末にまとめられている。

熱河風景／村松梢風著

東京 春秋社 1933 (昭和 8) 241 頁 〔3360〕

1933 (昭和 8) 年 2～5 月、日本軍は、熱河省の満洲国への服属を確かなものにすべく、い

わゆる「熱河作戦」をおこなった。著者は、清朝以来封禁の地といわれてきた熱河が解放されたことをよろこび、日本軍進駐直後の6月下旬から7月中旬まで熱河省の省都承德から北京へと旅行した。本書はその旅の見聞記である。

6月24日承德に着いた著者の旅程は、この旅行が軍の便宜供与をうけたものである関係から、まず日本軍の司令官やその他の高官たちに会うことから始まっている。ついで、熱河省警備司令官兼省長の張海鵬将軍に会い、かれが政治工作や治安維持を日本軍にまかせている様子を伝えている。

しかし、承德での見物の中心は、康熙帝の建てた避暑山荘（離宮）と八大ラマ廟で、著者は7月3日まで約10日間同地に滞在して、これらの名勝旧蹟をくまなく巡り、詳しい案内記を綴っている。すなわち、避暑山荘については、主な建物を紹介し、周囲2里半という山荘内の景観を描写しており、また、八大ラマ廟についてもこれらを世界無比の美術建築であると述べて、とくに代表格といえる扎仔倫佈と佈達拉の2寺を詳しくとりあげている。そして避暑山荘とラマ廟の美しさに著者は魅せられると同時に、それらの荒廃ぶりを嘆いている。ラマ廟の荒廃には僧達の生活が関係しており、興味深い著者の記述がある。承德には300人程のラマ僧がいて、かれらは半農半僧の生活をし、阿片栽培で収入をあげている者もいるが、多くは貧しく寺の什器を売払っている、という。

このあと著者は、これまで日本人の辿ったことのないルートを取り、承德から南下して灤平—古北口を経て河北省へ入り密雲から北平へと向かっている。この間は悪戦苦闘の旅で3日間を要した。すなわち、道路の状態がきわめて悪くトラックの車輪がたびたび泥濘のなかにはまりこんだことや、また川を渡る際には馬車の荷の上に乗って振り落されないようにしがみついていたことなどを伝えている。同時に、古北口など日本軍と中国軍との激戦地では、同乗の軍人からその時の模様を聞いて感心し、また沿道にみる人々の生活風景が平和で外国の軍隊の侵入をうけたという感じがなく、との感想をもらしている。ついで河北省に入ると密雲—北平間には日本軍がいないので、匪賊の襲撃をおそれながら深夜のトラック便で突走った状況も語られている。

北平では当地在住の村上知行の案内で寄席、娯楽場を見てまわる一方、日本との間で華北問題の收拾にあたっている黄郛（北平政務委員会委員長）と何応欽（軍事委員会北平分会主任）とにそれぞれ会見して、かれらの対日意見をきいている。

なお、本書には多数の写真が挿入されていて読者の目を楽しませてくれる。

## 台湾跋涉／吉野豊次郎著

東京 吉野屋本店 1933（昭和8） 152頁 [5940]

著者はジャパン・ツーリスト・ビューローの組織した団体に加わって、1932（昭和7）年11月台湾へ旅行した。一行は12名で、11月8日門司を出航し、28日同地に帰着した。台湾の、北は基隆・淡水より西海岸に沿って最南端の鵝鑾鼻に至り、さらに通常観光客の行かない東海岸地帯へも足をのばし、花蓮港まで下った。この間、中央部の山地にも入りいくつかの「蕃社」を見た。著者の記述は旅行日程を細かく追っているが、風景描写は少なく、米作と水利工事、甘蔗栽培と製糖会社などの産業関係、および日本の領台以後につくられた各種の施設の状況をおもに語っている。「蕃社」については、その風俗、住居、生業など見聞したことを記している。こうして、著者は日本の台湾統治の成功を自らの目で確認しているようである。

## 1934

### 甲戌之旅／神田正雄著

稿本 1934（昭和9） ノート2冊 〔貴17254〕

甲戌は1934年の干支。第一冊の自序には「昭和九年一月元旦 於草山温泉 東洋学人」とある。ノートブックに縦書きペン字で綴られた旅日記である。前年から台湾を訪れていた著者が、廈門－汕頭－香港－広州－桐州－南寧を巡った際の見聞や要人との会見の様子が記される。

「道聴途聞録」には、香港での胡漢民、広州での林森・鄒魯、南寧での李宗仁との談話が記されるほか、以下の人物の直話が紹介される。李得一・松井石根・蕭仏成・林国庚・劉紀文・陳濟棠ら。台北滞在時に面会した人物の中には、林呈禄や羅万俔の名も見える。

第二冊の自序は「昭和九年一月二九日 於香港旅舎 東洋学人」と記す。香港から日本への帰途の日誌であり、後半はやはり「道聴途聞録」として胡漢民の直話などを収める。

（村田雄二郎）

### 本年観タ北支那（私家版）／神田正雄著

稿本 1934（昭和9） 73頁 〔6311〕

内容は1934年春以降に北平・天津・山海関などを3週間かけて訪問して得た知見をまとめたもので、同年春に神田が記した「我カ対支国策決定参考私見」を補足する。南方滞在中の黄郛（北平政務整理委員会委員長）には会えなかったものの、神田は袁良（北平市長）・許修直（黄郛秘書長）・何応欽（軍事委員会北平分会委員長）・殷同（北寧鉄路局局長）ら要人と会見した。蒋介石は「黄郛を名目上の北支の全権と為し、実力は何〔応欽〕氏に握らしめた訳である」と観察し、黄郛の基盤が不安定であること、文武官問わず華北には張学良系の人ばかりが居のこっていること、黄郛に代わって張学良を呼び戻して北支那に覇を立てさせる説が勃興するほど、北支那の後継者問題が難しい点などに言及した上で、後継者として何応欽が最も適任だが、黄郛以上の仕事は難しいとする。この他、外交上不都合な記事を中国の新聞記者が平気で書くことに苦言を呈する何応欽、山西に優良な大炭坑や鉄鉱山があるにもかかわらず、運搬費の高さから活用できていないこと、日本の支配を望む現地の声なども採録している。

（関智英）

### 新帝国への旅／神田正雄著

稿本 1934（昭和9） ノート1冊 〔貴17253〕

新帝国とは満洲国のことで、自序には「昭和九・六・二四 於目白文化村 東洋迂人」とある。ノートブックに縦書きペン字で綴られた満洲の旅日記である。大連に上陸後、奉天－新京－山海関とめぐり、その後は『北支那への旅』に接続する。すでに馴染みの多い満洲各地の訪問先で、筆者は朝日新聞や満鉄の人的ネットワークを通じて精力的に行動するほか、奉天では土肥原賢二らと面談、長春では皇帝溥儀に謁見した（通訳は林出賢次郎）。同地では、満洲国要人および多くの日本政府・軍関係者と面会したことがつぶさに記されている。

ノートの後半部分は「途上之見聞」と題する個別の面談記録で、数十頁に及ぶ詳細な取材メモである。取材対象の人物はアルファベットと実名を交えているが、以下の人々が含まれる。

千葉豊治・橘樸・土肥原賢二・臧式毅（民政部大臣兼奉天省長）・閻伝綏（奉天市長）・菱刈隆（関東軍司令官）・沈瑞麟（宮内府大臣）・谷正之（満洲国大使館参事官）・鄭孝胥（國務総理）・宇佐美寛爾（関東軍司令部顧問）・リンチウ（林出賢次郎、満洲国宮内府行走）・西尾寿造（関東軍参謀長）・田代皖一郎（関東軍憲兵隊司令官）・小林省三郎（駐満洲国海軍司令官）・儀我誠也（山海関特務機関長）ら。その談話内容は、帝制実施後間もない満洲国首脳の思想や認識を知る上で一定の史料価値を有する。ほかに「満洲国皇帝陛下に謁見」のメモもあり、溥儀の打ち解けた談話の内容（近衛文麿への関心、呉清源の碁の話など）も直話として引かれる。

（村田雄二郎）

### 北支那への旅／神田正雄著

稿本 1934（昭和9） ノート2冊 〔貴17252〕

『新帝国への旅』の続編。同じくノートブックに縦書きペン字で綴られる。

第一冊冒頭の自序には「昭和九年七月十六日天下第一関を訪ね歸りて 於山海関東洋旅舎東洋迂人」とある。『新帝国への旅』の続編にあたり、ノートブックに縦書きペン字で綴られた日記である。旅程は、山海関に始まり、北京－太原－大同－張家口と移動し、北京で終わる。張家口では宋哲元・秦徳純に面会している。後半には「見たり聞いたり」と題し、以下の人物の談話が紹介される。柴山兼四郎（北京駐在武官）・王朝佑（山海関公報社）・袁良・何澄・雷寿栄・林亀喜・何応欽・湯爾和・何其鞏・殷汝耕・段正元・許修直・唐麟・祝慳元ら。さらに「山西省を訪ふの旅」と題する紀行文があり、現地要人との会見記、省内各地の見聞、雲崗石窟の訪問のことなどが語られる。第二冊は張家口・北京・天津訪問の日誌であり、張家口から張北県まで軍用車で往復した際の体験談が「内蒙古旅行記」にまとめられる。また「見たり聞いたり」として、張熾章・胡霖・陸宗輿・姚震・孫潤宇・王揖唐らの談話を収める。

（村田雄二郎）

### 亜細亜の礎／東亜同文書院第三十期生編

上海 東亜同文書院 1934（昭和9） 496頁 〔2323〕

東亜同文書院恒例の旅行記。第30期生90余名は、南支台湾班と南洋班の計4名を除き、1933（昭和8）年6月3日上海から一斉に満洲へ旅立った。かれらは26班に分れて「満洲国」の調査を計画し、「真に満洲国を知るには田舎へ這入り、その偽はらざる状態を把握」することが必要であるとの考えから、各班はさまざまな県へ赴いた。「治安状態が悪い」ために必ずしも所期の目的を達せられなかった場合もあったが、かれらはできる限り「満洲国」の末端の情勢を見ようとしている。そして「満洲国」の将来を明るく捉えているものもあれば、「王道の満洲」に憧れてきたのに日本人の民族的優越感が支配している状況に失望しているものもある。

### 上海から北平へ／中山正善著

丹波市町 天理教道友社 1934（昭和9） 427頁 〔3551〕

著者は1930（昭和5）年3月5日、長崎から船で上海に着き、蘇州・南京・杭州を訪れてのち、上海から青島に赴き、済南・曲阜を見、再び船に乗って天津に着き、北平に5泊して、4月9日北平を発ち、奉天・大連を経て帰国した。

帰国後その紀行文を『天理図書館報』『あをぎり』『三才』などの雑誌に載せたが、本書はそれらを収録したもの。訪問各地の紀行文だが、その職業がら、文化施設、特に宗教に関する施設に特に注意がはらわれている。特に上海では、天理教の伝道、図書館、学校のほか、プロテスタントの伝道運動、徐家匯の沿革と現状、他の宗教の伝道事業と宗教的行事、済南では済魯大学付設の社会施設、広智院、天津の救世新教、北平の東方文化事業研究所、清華大学、故宮博物院、清真寺、北堂のことが詳しい。中でも徐家匯、清真寺、北堂に関する記述は、旅行記というよりも論文に近く、最後の「儀礼宗論の宗派争い」は、旅行とは関係のない典礼問題に関する論文である。写真が多い。

#### 満洲文化と北支の見聞（霞山会館講演第 19 輯）／水野梅暁〔述〕

東京 霞山会館 1934（昭和 9） 39 頁〔4697〕

1934 年 9 月 11 日に霞山会館で行われた水野梅暁の講演会録。東亜同文書院の一期生で、僧侶の立場で日中交流を推進した水野は、日満文化協会の設立や事業計画の策定にも参画した。本講演は、水野が日満文化協会の事業内容と、事業に対する中華民国側の反応を語ったものである。前半では、内閣文庫公文書の整理や熱河古建築の修善、『清実録』の印刷など、協会による古文化の保存や復興の試みは北平の学者に歓迎され、彼らが知見や資料の提供に積極的に応じているとして、事業の好評ぶりを紹介する。後半では道德学舎創始者として知られる段正元の紹介に力がこめられる。段は何応欽や何健らが弟子の礼をとるほどの人物で、北支停戦協定が実現したのも段の影響が大きいとする。そして、段の説く「大同」の実践によってこそ北支を安定させることができ、それは世界大同の前提でもあるのだと熱弁をふるっている。巻末には、講演会参加者に資料として配布された段と水野の会談要旨「段正元氏訪問録」を付す。（辻直美）

#### 満洲旅行記／吉本米子著

東京 冬柏発行所 1934（昭和 9） 196 頁〔12057〕

1934 年秋（9 月 13 日～10 月 3 日）の満洲旅行の日記を補足した記録。旅行は大日本聯合女子青年団及び大日本聯合婦人会主催、文部省後援の第二回満蒙視察団（総勢婦人 18 名）によるもので、著者の吉本は横浜聯合婦人会代表として参加した。

吉本米子は横浜市野毛町の江戸初期以来の大家に生まれ、各種婦人活動に参加、序を寄せた与謝野寛・晶子とも知己だった。夫の平四郎中尉は日露戦争時に旅順爾靈山（二〇三高地）で戦死しており、この旅は 30 年越しの慰霊の旅でもあった。

訪問地は京城・安東・奉天・撫順・ハルビン・新京・吉林・公主嶺・錦県・山海関・大連・旅順で、各地で司令部を慰問した他、奉天では社会救済事業として「満洲国の最も誇りとする」同善堂、撫順では警戒犬訓練所などを見学している。

ハルビンでは満洲国貨幣、ハルビン大洋票、日本貨幣が流通し、禁止されているソヴィエトのルールがしばしば釣銭に混ぜられて、旅行者を困らせる、といったことを記録している。後半の附録には旅中に詠んだ短歌が掲載されている。（関智英）



## 上海から巴蜀へ／神田正雄著

東京 海外社 1935（昭和 10） 364 頁 [5027]

著者は何回も中国に行っているが、最初は 1901（明治 34）年、招かれて重慶に赴き、中学堂の教習となる。その四川に、34 年後の 1935（昭和 10）年再遊する。今回は上海から滬寧鉄道で南京に行き、1 月 12 日南京を日清汽船の襄陽丸で発って、15 日漢口に着く。18 日漢口から当陽丸に乗って、22 日宜昌に至り、三遊洞に遊ぶ。減水のため船が溯航できず、漢口にもどり長沙に赴き、ようやく 2 月 27 日になって宜昌から嘉陵丸で重慶に進み、3 月 4 日着。12 日自動車で重慶を発って、15 日成都に着く。19 日まで成都に滞在し、飛行機で重慶にもどり、あとは船で、4 月 7 日上海に帰る。

この旅行から著者が知り得た四川省全般の事情は『四川省綜覧』（昭和 11 年刊）に記した。本書はこれと対をなすもので、この 1935 年の上海から成都までの四川旅行を、34 年前の旅行と比較しながら、各地の有様や揚子江岸の風光、重慶から成都までの自動車の旅、飛行機からみた巴蜀の景観について述べる。揚子江を溯る汽船の今昔、三峡溯江の民船から汽船への転換の歴史も記す。

以上は第 1 篇で、これを補う意味で、第 2 篇は「古きを温ねて」と題して、1901 年の上海から重慶に至るまでの旅行の感想文をのせ、更に中国人の書いた案内記『宜昌到重慶』を翻訳して、第 3 篇「入蜀案内」とする。そのほか、「日清汽船会社の沿革と現況」「揚子江流域の富源」「長江詩抄」を付録する。

## アジアを跨ぐ／副島次郎著

東京 言海書房 1935（昭和 10） 28, 10, 408 頁 [Q2091]

著者は欧アを結ぶ内陸アジアの横断を志し、1924（大正 13）年 1 月 1 日北京を出発し、蘭州・迪化・伊犁、ソ連領を通過して、1925 年 9 月 6 日トルコのイスタンブールに到着した。ところが 1926 年 1 月天津に戻り、調査資料整理中 6 月、大連で死亡した。本書は著者の友人によって編集されたもので、構成は旅行中の日記と、編者入手の各地の事情報告が地域毎に挿入され、附録として、『大阪毎日新聞』に掲載された「甘肅新疆の旅」、詩集「剣花集」、書簡が収められている。旅行の最大の後援者として段祺瑞の顧問である大谷猛がおり、彼によって旅費も蘭州・ウルムチ・イスタンブールに分散して送金されている。

先ず包頭まで汽車で行き、ここで旅行の最後の準備をするが、中国の役所から周辺の事情が危険のため出発許可がなかなか下りない。1 月 17 日包頭発、31 日寧夏、2 月 25 日蘭州、4 月 2 日肅州、4 日嘉峪関、11 日安西、21 日哈密、5 月 13 日迪化。迪化で送金を待つので 9 月 13 日まで滞在している。またこの間 4 月 12 日安西～5 月 4 日木壘河までは砂漠越えをするので昼宿夜行をしている。10 月 18 日霍爾格斯、11 月 6 日綏定。ここでソ連領通行許可証が下りないため、翌年 1925 年 7 月 7 日まで滞在を余儀なくされている。日記もソ連領通過中は疑われることを恐れて書かれず、記憶でおおよその行程を書き、9 月 6 日イスタンブールに到着している。

金銭的苦労、馬夫との感情のもつれ、病気、そして最大の難関であった国境越えなど種々の問題もあったが、著者は途中で「兎角旅行者が自己の功名を大にせんが為に殊更に行路の難を

云ふ。決して信ずべからず」と述べるように、著者の意志の前には中国での旅程は「平易なる行路」とみえている。

#### 出廬征雁／東亜同文書院第三十一期生編

上海 東亜同文書院 1935（昭和10） 629頁〔7128〕

東亜同文書院第31期生70名は26班に分れて、1934（昭和9）年6月初旬、恒例の「大旅行」に出発した。「中国内地の情勢幾分好転せり」ということで、今回は7班が華北・華中へ赴いた。すなわち、河北省班は済南・天津・北京・張家口へ行き、寧夏・甘肅省班は張家口・包頭・寧夏・蘭州とまわり、寧夏では省政府主席馬鴻逵と会見して阿片問題や漢回両民族の関係について意見をきいている。また、河南・陝西班は鄭州・洛陽・西安・咸陽・臨潼・張家口・汴源などをまわり、山東班は芝罘・濰縣・済南から泰山に登り、山西省班は鄭州・洛陽で排日の空気強く追われるように通過して運城・太原・大同へ行った。華中方面では、湖南・湖北省Ⅰ班が長江を溯って沙市・宜昌・重慶へ、同Ⅱ班が同じく長江沿いに武漢・長沙・岳陽などへ行った。南支沿岸班は上海から南へ向かった唯一の班で、香港・広東・廈門・台湾をまわった。残る18班はいずれも満洲を目指し、熱河・吉林・奉天・黒龍江・興安各省のさまざまな地域をたずねた。

#### 乙亥訪華録／日華仏教研究会編

京都 1935（昭和10） 140頁〔4409〕

日本と中国の仏教徒が研究と信仰の上で提携連絡し合って「垂上正真道」を求めることを目的として結成された日華仏教研究会は、中国の仏教徒に会の趣旨を説明し連携の実を図るために11名の使節を中国へ派遣した。本書はその使節団の報告書である。一行は1935年6月4日より7月7日まで上海・杭州・南京・廬山・漢口・武昌・北京・済南・青島とまわって、各地で寺院と仏教団体を訪問した。その数、46ヶ所。また一行は、上海で段祺瑞、済南で山東省政府主席・韓復榘を訪ねて会談し、各地の日本人居留民に講演もした。本書は、まず、このような一行の精力的な歴訪日程を詳しく記し、ついで、中国仏教会などの団体、代表的な僧侶と居士、宗派など中国の仏教事情をまとめている。さらに各地での講演の要旨、および一行が托された寺院などへの寄贈図書と中国側から贈られた図書のリストも収める。なお、使節団の目的が十分に達せられたとは言い難いようであるが、意見交換の内容については明らかにされていない。

#### 広西遊記／森清太郎（岳陽）著

広東 岳陽堂出版部 1935（昭和10） 82, 98頁〔6139〕

著者は清末以来広東に居住して、両広一帯の歴史にも現状にも通曉した人。1917（大正6）年には、三菱合資会社の鎌田文三郎に同行して広西に赴き、賀県に至って土匪に襲われ、山中に捕われたこともある。

本書は、1931（昭和6）年、時の広東総領事須磨弥吉郎に随行して広西をまわったときの旅行記。8月29日に広東を発って、梧州・容県・貴県・南寧・柳州・荔浦・桂林・柳州・黎仲・石龍・桂平・江口・梧州とまわって、9月18日に広東に帰るまで、日を逐うて、訪問した各都市の沿革・人口・道路・施設・物産・名勝・旧蹟や、都市を結ぶ沿路にみる山川・風光を描く。

須磨総領事が随処で詠んだ詩が載せられ、また写真が豊富におさめられている。なお、著者は巡遊の結論として、広西は一般に山国の貧困な処といわれているが、山と可耕地はほぼ半ばし、貧困な処などではないという。

本書の後半には、「広西の盗賊に捕はれて」と題する文が付録されている。これは前述した1917年の賀県における遭難記で、ほかに救援隊の日記と、共に捕われた中国人2名の遭難記がある。

#### 山西四川を横断して／山田文英〔述〕

外務省文化事業部 1935（昭和10） 67頁 〔XI-6-B-b-1〕

立正大学卒業後、対支文化事業研究員として1932年5月から北京に滞在した山田文英の外務省文化事業部における講演（1935年6月21日）速記を元にした記録。山田の目的は中国仏教の現状と寺院の経済状況についての研究で、満洲事変が相対的に落ち着きをみせた1933年4月に山東省（泰山・曲阜・万徳の靈巖寺・済南附近）、同年8月に山西省（太原晋祠附近・風峪・天龍山・石壁寺・大同雲崗・永定莊の石炭坑・五台山・河北省正定府）、同年8月10月に満洲（齊齊哈爾・哈爾濱・吉林・新京・奉天・大連・營口）、1934年2月に河南省（洛陽白馬寺・龍門・開封）、同年10月に中南西支（山西・湖北・湖南・四川）を訪問した。

本書の中心は1934年10月の踏査で、経路は太原－潼関－漢口－重慶－成都－嘉定－叙州－重慶－宜昌－荊州－沙市－漢口をめぐる。このうち重慶－成都間では支那通として知られた後藤朝太郎と同じバスで移動している（後藤『支那風土記』）。鉄道建設のために危うく壊されるところだった霍県郭庄村の北魏仏像の様子、当初潼関より長安入りを予定していたものの、潼関県長によって阻まれたこと、成都の教育博物館での抗日、反共スローガン、四川の実力者劉湘の動静、四川における日本留学組の隆盛、嘉定で銅貨を半分に切断して補助通貨としている様子など興味深い。ちなみに『満洲紳士録〔第四版〕』によると山田は1941年に満洲国協和会首都本部参事となっている。（関智英）

#### 蒙古／山本実彦著

東京 改造社 1935（昭和10） 414頁 〔5377〕

1935（昭和10）年6月下旬から45日間にわたり、北平・天津・察哈爾・綏遠、ソ満国境地帯の満洲国を旅行した印象記。各々独立した随想、紀行文、論説がこの行程と関係なく前後して収められている。

蒙古民族への関心とソ満国境地域の雰囲気を知ることが、著者を満洲へ旅行させる動機である。訪れている所は、新京・齊齊哈爾・扎蘭屯・海拉爾・満洲里・達頼湖。さらに呼倫貝爾高原を海拉爾から甘珠児廟へと進む。7月18日に扎蘭屯で開かれた興安東省の族長会議を見学し、海拉爾では蠅に悩まされながらも蒙古の街を実感し、さらに人から聞いたオロチョン族の生活の話を述べながら、蒙古人の牧畜生活と国家の関係、土地所有権の問題、将来に向かって喇嘛教への対策などに問題があることが指摘される。著者は日本の急テンポの成長と何か通じるものがあると感じられる成吉思汗の「奔放無比な流動的国家の組織作り」に憧憬をいだき、達頼湖畔にたたずむ。また本書巻末には「死の前の成吉思汗」という文を収めている。

ソ連だけでなくイギリスの蝕手も伸びていると感じられる内蒙古の動向を知るために、張家口・帰化城・貝勒廟を訪れる。帰化城では傳作儀と会談し、王照君の墓に詣でている。内蒙古

自治政府が独立存在となるためには、ソ連の力でもなく、中国の力でもなく、日本の力に頼るのが一番賢明と思う著者は、内蒙古商工業の中心地張家口の経済的重要性を強調している。

チャハル事件が起り、緊張した日中関係に、「あなた方の日本に対する誠意はどの程度と測量したら間違いのないものでせうか」と問う著者は、呉鼎昌・曹汝霖・大公報主筆胡霖・北平市長袁良、河北省長王克敏と積極的に会談している。

## 1936

### 支那近情管見／今関寿麿（天彭）著

東京 1936（昭和 11） 235 頁 [4543]

1922（大正 11）年から 1935（昭和 10）年までに公にした、中国に関する論説、所感 12 篇がまとめられている。ここでとりあげるのは第 9 篇「最近の南北支那を語る」と、第 11 篇「北平から観た時局」である。第 3 篇「中支汗漫遊記」は別掲されている。

「最近の南北支那を語る」は、1932 年 11 月に訪れた北平・天津・済南・青島・上海・南京での見聞をもとにした時局の所感。市街がきれいになり人口が増加した北平や、都市の整備がされた南京や、大上海計画が再び進む上海などの活況に比して、ほとんどの中国人が他の租界地に引き上げた天津日本租界の寂れ方が述べられ、東京にいて推測するのと現地で直接見聞する状況の相違が語られている。著者と親しい呉佩孚も面会を拒否するほど、日本人が敬遠されていることに驚く。張学良と張嘉森ら国家主義者たちとの関係、章炳麟の動向も、東京で想像するような密でないことを知る。華北では復辟問題が、華中では満洲事件国際連盟提訴に関する思惑がそれぞれ関心の中心である。著者は中国南北の対立も結局、南方の西洋崇拜という新しい思想が北方に浸透していくことにより、文化的にまず解消していくかも知れないと考えている。

「北平から観た時局」は、1934 年末～35 年 1 月に北平に滞在したときの所感。袁良市長下で北平がなごやかな雰囲気をもちはじめていること、朝鮮人が多数見かけられることに目をとめている。胡適・陳宝琛・楊雪橋と交歓したことを楽しげに述べている。華北の旧実力者として段祺瑞・馮玉祥の 2 人を挙げ、それぞれの権力が失墜した今日、張学良に再起の機会があるかも知れないと推測している。

### 満鮮雑録／岩崎清七著

東京 秋豊園出版部 1936（昭和 11） 246 頁 [16820]

著者は磐城セメントを創業し、日本製粉社長、東京商工会議所副会頭などを務めた実業家で、日露戦争直後から満洲を訪問している。本書は 1935 年の訪満記録と附録の在満将士慰問旅行雑録（1936 年 10 月）からなる。

前者は、哈爾浜で開催される満洲特産協会第 11 回通常総会に、全国特産商関係諸団体の代表者が出席するのに合わせて組織された満鮮視察団での記録が中心で、9 月 5 日、うる丸で神戸を出帆した。出発に際しては神戸復興号の王敬施が見送りに来ている。王の従兄王敬祥は辛亥革命で孫文を支援した人物である。経路は大連－旅順－哈爾浜－湯崗子－鞍山－遼陽－奉天－四平街－洮南－齊齊哈爾－北安－海北－海倫－哈爾浜－新京－本溪湖－安東－鴨緑江－平壤－京城－咸興－范浦－長津江－興南－温陽温泉－天安－慶州で、10 月 4 日に東京に戻っ

ている。

各地の実業界の事情と日本人実業家との交流のほか、日露戦争時期の回想、また名所で著者が詠んだ漢詩が載る。奉天では 1924 年の渡満の折に会った福龍という藝妓と再会し、齊齊哈爾では龍江省実業庁長盧元善と交歓した。齊齊哈爾では日本の満洲国承認三周年にあたったため、齊齊哈爾神社の境内で祝賀会が催されていたが、余興の内容が日本式で、満洲式のものがないことを遺憾に思っている。

後者の在満将士慰問旅行雑録の経路は、大連－旅順－新京－哈爾濱で、哈爾濱で風邪をひいた著者は北満行を止め、やや温暖な奉天・天津・北京に行程を変更した。満洲では丁鑑修（実業部大臣）、北平では崇貞学園の清水安三・秦徳純市長・殷汝耕夫人、通州では殷汝耕と交歓している。（関智英）

### 満洲から北支へ／神田正雄著

東京 海外社 1936（昭和 11） 370 頁 [6169]

著者は 1909（明治 42）年以来、何回も旧満洲・華北を旅行している。最近では 1935（昭和 11）年 12 月から翌 36 年 1 月にかけて、奉天から北平に入り、西安へ、また北平から天津を経て済南へ、そして青島から大連を経て帰国している。

本書はこの最近の旅行を中心とした旅行記であるが、第 1 編「満洲国」においては、1932、33 年の旅行がむしろ主で、第 2 編「北支那」でも、山西・察哈爾への旅は 1934 年のものである。全体的にみて、著者の見聞した政治の推移や現状がよくかかれており、張景恵（満洲国国務総理）・鄭孝胥（満洲国前国務総理）・臧式毅（満洲国参議府議長）・宋哲元（冀察政務委員会委員長）・殷汝耕（冀東防共自治政府長官）・邵力子（陝西省政府主席）・韓復榘（山東省政府主席）・陶希聖（北京大学教授）・曹汝霖といった名士との会見記も多い。また著者がこれまでの中国旅行、中国滞在を通じて感じたこと、調べたことをまとめた「（満洲）建国から今日までの概況」「満洲国視察感想」「北支の価値」「北支はどうなる」といったような文章もある。

### 翔陽譜／東亜同文書院第三十二期生編

上海 東亜同文書院 1936（昭和 11） 512 頁 [6104]

東亜同文書院第 32 期生 60 余人の 1935（昭和 10）年夏の旅行記。かれらは 22 班に分れて、「北は漠北黒龍に至り、南は滇南桂江を窮め」た。今回ふたたび中国本部の旅行が可能になり、22 班の内訳は、華北 8 班、華中 3 班、華南 3 班、南満、北満各 4 班であった。中国本部を旅した幾つかの班は町々で「新生活運動」の宣伝ポスターに気付き、その実行状況に関心を払っている。華北は日中間の緊迫した状況下にある時期であったが、河北省遊歴班が北京滞在中に起った豊台事件により同市に戒厳令が布かれたことを語っているだけである。

### 鮮満支旅行報告書／東京外語支那語部鮮満支旅行団編

東京 東京外語東亜同学会 1936（昭和 11） 104 頁 [4772]

東京外語支那語部鮮満支旅行団は清水元助教授の率いる学生 5 名から成る。1936（昭和 11）年 7 月 11 日東京を発って、下関・釜山・京城・輪城・清津・羅津・雄基・南陽・図們・延吉・吉林・新京・哈爾濱・奉天・大連・天津・北平・塘沽・神戸とまわって、8 月 21 日東京に帰る。

本書はその報告書。松延秀雄「鮮満支視察旅行記」のほか、尾高紘「満洲農業移民について」、内山克孝「日本の商品市場としての北支」という調査報告がある。

#### 北満国境線を画く／野長瀬晩花著

東京 1936（昭和 11） 109 頁 [4611]

著者は 1935（昭和 10）年 6 月、北満洲金鉱会社の人々とともに渡満し、ハルピンから黒河に出、黒龍江をさかのぼってハルピン出発後 15 日で漠河に到着、黒龍江沿岸のスタリョーカ村、シーコーズの町、その他、砂金鉱区のチシンコウ、パカチャなどの山間地帯を跋涉し、8 月末ハルピンに帰る。帰国後、京都の自宅および東京交詢社で「北満国境線スケッチ展覧会」を開く。

本書はこれらの展覧会に陳列したもの全部を、原色版または写真版として採録し、さらに著者の短文を配している。原色版は 25 枚、挿画 11 枚、写真 20 枚。記事は、黒河へ、漠河、ボーリング作業、吉興溝（チシンコウ）、オロチョン、八才峠（パカチャ）、西口子（シーコーズ）など。

#### 北支満鮮旅行記／本多辰次郎著

東京 日満仏教協会 1936（昭和 11） 92 頁 [5026]

著者の 1933（昭和 8）年の華北・東北（満洲）および朝鮮の旅行記。9 月 24 日東京を発って、25 日神戸から乗船、29 日塘沽に着く。天津・北平にほぼ 1 週間滞在して、10 月 5 日北平を発ち、天津から大連に行き、旅順・撫順・奉天・新京とまわり、10 月 15 日新京を発って、朝鮮を経、28 日帰京する。

本書はこの旅行記で、巻末に、旅行を終えての国家興亡に関する感想文、宗教についての記述などがある。

#### 大興安嶺に馴鹿オロチョンを訪ふ／米内山庸夫

大連 満洲文化協会 1936（昭和 11） 35 頁 [XI-6-A-b-4]

著者は森林で狩猟を生業とするツングース民族を「森林民族」と呼ぶ。著者の説明によれば、森林の減少とともに森林民族は牧畜や耕作へと生活様式を切り替えることとなるが、オロチョン族は森林民族固有の生活様式を維持していた。オロチョン族のうち、南は馬を使い、北はトナカイを使うのだが、後者は最も原始的な生活様式であるとされる。その北オロチョン族に、著者は偶然出会う。著者は元々「三河」のロシア人部落とアルグン河畔の古城を見学する予定であり、興安嶺の森林民族を訪ねるということは、時期的にも日数的にも難しかった。しかし三河に着いたところで、山から出てダヴオワイヤまで来ていたオロチョン族と彼らが連れて来ていたトナカイに遭遇したのである。そして彼らが假宿としていた森林を訪れることとなった。本書には、その時に著者が見聞きしたオロチョン族の住居、衣服、飲食、トナカイとの共存関係といった情報が、写真とともに記録されている。（久保茉莉子）

1937

#### 躍進支那を診る：中支から南支へ／神田正雄著

**東京 海外社 1937（昭和 12） 353 頁 [9051]**

著者は 1936（昭和 11）年 11 月から翌 37 年 2 月にかけて、約 3 ヶ月華中・華南を旅行した。すなわち上海・南京・武漢から湖南に入り、長沙を中心に湘潭・南岳・衡陽・零陵・常德・桃源とまわり、粵漢鉄道で広州に出て、広西に入って梧州・南寧・桂林などの都市を訪れ、広州にもどり香港・澳門に赴く。

本書はこの時の旅行記。南嶽や桂林では風光を賞でているが、概していえば興味の中心は政治にあり、その推移や現状がよく書かれている。また孔祥熙（財政部長）・陳立夫（CC 団頭目）・王正廷（駐米大使）・張熾章（大公報主筆）・王伯羣（中央政務委員）・呉震修（中国銀行南京分行經理）・杜月笙（青幫の頭目）・龔德柏（救国日報社長）・李迪俊（情報部長）・高宗武（外交部亜州局長）・何鍵（湖南省政府主席）・馬君武（広西大学長）・林雲陔（広東省政府主席）・劉奇文（広東市長）・鄒魯（中山大学長）・李宗仁（広西綏靖主任）・邱昌渭（李宗仁顧問）・陳濟棠（総司令）ら多くの名士との会見記があり、このほか段祺瑞・黄郛の死を悼み、唐才常・胡漢民の墓に詣でている。

**土匪村行脚／後藤朝太郎著**

**東京 北斗書房 1937（昭和 12） 440 頁 [3128]**

講演速記（講演時期は不明）が元になっているため、様々な話が混入しているが、大きな柱は四川と江蘇太湖周辺の 2 つの旅行体験談である。いずれも旅行時期は不明だが、前者については 1924 年 8 月に後藤が初めて四川省に入った際に石川熊蔵（日清汽船徳陽丸代理船長）の話聞いたとある。1923 年 9 月に四川の涪州で発生した宜陽丸事件についての伝聞は具体的に興味深い。後者は一銭蒸気など民船を乗り継いで上海から丹陽までをたどるもので、時期は内容から 1930 年代と推測される。途中、海賊の名所として知られた太湖周辺をめぐり、発動機船で賊が民船を襲うことや、賊との一問一答など興味深い。経路は次の通り、上海（黄浦）－龍華－宝帯橋－蘇州（胥門）－太湖洞庭東山－楊湾－洞庭西山－木瀆－光福－善人橋－蘇州－常熟－無錫－宜興－東玖湖－溧陽－金壇－珥陵－丹陽。（関智英）

**南腔北調／東亜同文書院第三十三期生編**

**上海 東亜同文書院 1937（昭和 12） 544 頁 [4256]**

東亜同文書院第 33 期生 75 名は 25 班に分れて 1936（昭和 11）年夏、恒例の「大旅行」に出た。華北 13 班、華中 7 班、華南 4 班、南洋 1 班で、満洲を目指した班はない。察哈爾省 I 班が蒙古のオボ祭見物を報告しているが、各班ともそれぞれに各地の風物・景観を記しているのは従前通りである。これに加えて時勢を反映した記述がある。第 1 は、緊迫の度を加える日中関係に関連して、北平班と河北省 III 班はいわゆる「冀東密輸」問題を語り、幾つかの班はこれらの感じた排日の空気を報告している。第 2 は西南戦争で、湖北省 II 班・湖南省 I 班・広東省班がその影響を蒙った広東の状況を述べている。

**1938**

**長江千里／後藤朝太郎著**

**東京 高陽書院 1938（昭和 13） 313 頁 [12953]**

タイトルに長江とあるが、内容は長江に限らず「全支の風物の有りのまゝを随筆風に説いたもの」で名所案内に近い。時期のわかる旅行記は4つある。掲載順に、最初は鱸魚（スズキ）で名高い江蘇松江の訪問記（日帰り）である。同行者である関君の洋装姿から、往路の車中で車掌に、松江では公安にそれぞれ目をつけられ、結局松江では、公安と兵士数名が護衛についてまわり、落ち着いて鱸魚を探索する雰囲気でなくなってしまう顛末が興味深い。時期は1936年夏で、上海近郊はいずれもやかましく「神経を尖らせてみる」といった記述からも、日中戦争前夜の緊張感が伝わってくる。次は1936年7月の安徽黄山訪問である。駐日大使許世英からの紹介状はあったものの、外国人の旅行禁止区域であるため、南京の外交部や杭州市政府の許可といった、事前の手続きに数週間を費やしていることがわかる。続いて1927年4月の広東・香港での体験が載り、広州では共産党粛清直後に街頭に掲示されたスローガンの文言などが記される。最後は1927年4月から5月にかけて上海から漢口への旅で、北伐戦争の最中、長江を間に南北両軍が向かい合っている中、各地で銃声・砲声を耳にしながら日清汽船の襄陽丸で長江を遡上したものである。護衛艦蓼の艦長（堀勇五郎少佐）や蒋介石の密使高某との交流も記され、貴重である。

（関智英）

#### 嵐吹け吹け／東亜同文書院第三十四期生編

長崎 東亜同文書院 1938（昭和13） 425頁〔2324〕

東亜同文書院第34期生90余名は28班に分れて、1937（昭和12）年6月1日上海を出発し、恒例の「大旅行」に出た。28班の内訳は満洲班3、支那班22、仏領印度支那及南洋班3であった。盧溝橋事変の起ったのはかれらの旅行中7月7日で、翌8日には各地でそのニュースを知った模様であるが、このことに触れている文章は少い。詳しく報告しているのは四川省班で、かれらは成都滞在中に号外で知らされ、直ちに地元警察の保護下におかれて重慶の日本領事館へ護送された様子を語っている。学生たちは旅行の継続を望んだが、学校側が支那班すべてに旅程の変更・短縮を命じたので、途中で引揚げた。

本書の後半130頁分は「時局と我等」「文藻」の2部に分れて、前者には、この年11月4日上海の東亜同文書院が灰燼に帰した経緯と、通訳として従軍中の学生からの通信とを収め、後者には、伊藤利雄「書院太平記」、三浦康三「宝庫東辺道の横顔」など8篇を収めている。

#### 双月旅日記／中島真雄著

東京 1938（昭和13） 101頁〔4288〕

著者は1938（昭和13）年、奉天の『盛京時報』1万号の記念に招かれて奉天に赴き、あわせて満洲・華北を旅行する。すなわち5月12日東京を発ち、朝鮮を経て5月18日奉天着。1万号の祝宴に出たり、奉天周辺や大連を訪れ、5月31日奉天を後に、承德を見物、6月3日から11日までは北京・天津に滞在、その後また奉天に戻り、新京を経て、6月20日には哈爾濱に入る。哈爾濱から飛行機でソ満国境の黒河を視察し、一旦哈爾濱に帰り、ここから船で佳木斯に下り、弥栄・千振の入植地を訪問、図佳線で牡丹江を経て図們にいたり、7月2日豆満江を渡って清津に泊る。これから朝鮮を経て、7月12日、2ヶ月ぶりに東京に帰る。

本書はこの旅行記で、訪問地の状景を見聞および過去の経験にもとづいて記している。満洲通信や『満洲日日新聞』『熱河新報』『大北新報』『三江報』などの新聞人や知友の名がよく出てくる。



### 黄塵紀行／村松益造著

甲府 汲古館南塘文庫 1938（昭和 13） 214 頁 （8904）

1937（昭和 12）年 6 月 3 日から 10 日まで、日本図書館協会は満鉄の支援を得て、大連を中心に奉天・新京・ハルピンの各地で第 31 回全国図書館大会を開催した。著者は汲古【故】館南塘文庫の代表としてこの大会に参加、その旅行記が本書である。

著者は 5 月 29 日釜山に渡り、朝鮮を経て、6 月 1 日奉天から大連に飛んで、大会に参加、大会とともに大連から旅順・鞍山・撫順・奉天・新京・哈爾濱とまわり、大会終了後は熱河を訪れ、6 月 14 日承德からバスで古北口を経て北平に入る。盧溝橋事件直前の北平に 3 日間滞在し、天津を経て大連に戻り、6 月 22 日ここから乗船して帰国する。その職務がら、大連図書館・鞍山図書館・満鉄奉天図書館・哈爾濱鉄路図書館・熱河図書館・故宮博物院・北平大学図書館・国立北平図書館・北平近代科学図書館などの図書館をよく訪れ、また奉天では文溯閣の四庫全書を見、北平では国子監・孔子廟に行き、琉璃廠を歩いているのが目立つ。余りにも職務に忠実なあまり、奉天では「書館」を訪れ、それが妓楼であってあわてたのは傑作である。

### 游支雑筆／諸橋轍次著

東京 目黒書店 1938（昭和 13） 309 頁 （3452）

著者の 1918（大正 7）年、1920 年、1921 年の中国旅行記。8 章から成る。(4)「故都新都初見参」は 1918 年 4 月の上海・蘇州・南京・武漢・洛陽の旅行記。(1)「破国の倂」はこの旅行の直後に書いた印象記。古い中国の書物を読んでいたのとまるで違う各地の荒廃した姿に破国のおもかげを見る。もっともその中国に新しい芽生えもあるとして、新文化運動、国語国字問題を紹介したのが、(2)「新しい姿」である。これは 1920 年の旅行直後に書いたものであるが、旅行記ではない。(3)「破国か新興か」は 1930 年の著作で、旅行記でない。これまでの旅行から感じた中国の民族性を論じたもので、その幅の広さ、したがってその不死身なことを強調し、それ故に中国が衰滅の一路をたどるとは思えないという。

(5)「旅枕」は 1918、1920、1921 年の 3 回の旅行を交錯させて、南京から宜昌にいたる長江沿岸のこと、特に廬山や洞庭湖周辺のこと、津浦線・隴海線・京漢線沿線のこと、殷墟・洛陽や長城一帯、曲阜・泰山など山東のことを述べる。(6)「江浙学者遺跡探訪誌」は 1921 年 6 月～7 月訪れた無錫の東林書院、儀徴の詒經精舍、王店の曝書亭、湖州の韻宋樓、常熟の汲古閣鉄琴銅劍樓、寧波の天一閣、崑山の顧亭林遺跡、紹興の王陽明墓や、上海にいる学者、王国維・鄭孝胥・章炳麟・沈子培・康有為のことを記す。(7)「無極県の大家族を訪ふ」は、正定府の東北にあたる無極県の大家族、「劉八家」で見聞した服喪・族長・家廟・財産・邸宅・墓地・小学校・家譜について書き、(8)「江山佳色」は西湖周辺の風景を描く。

### 興亡の支那を凝視めて／山本実彦著

東京 改造社 1938（昭和 13） 406 頁 （3950）

1937（昭和 12）年 11 月に訪れた香港・澳門と、同年 12 月 29 日～1938 年月 1 月 15 日に訪れた上海・南京、この 2 つの旅行によって得た見聞をもとに、中国の政情、日本軍の状況を考察している。香港を訪れたのは、一つには日本に友好的でなくなりはじめたイギリスの動向を探るためであり、さらに中国要人達の動きが香港で活発化しているため、その状況を把握する

ためである。香港の排日熱、日本人の状況、スミス民政長官との会談の様子、さらに著者がえた情報をもとに、蒋介石と彼をめぐる人々の状況、和平運動、共産党の動きを記している。また映画館で、国民政府への人気が人々にまったくなくことを知り驚かされる。澳門では、サンパイオ民政長官、バルボサ総督に会うが、総督との文学的話題以外は得るところがなく、街も生き生きとは見えない。そして著者はつねに中国人から、「恐ろしい目」でにらまれていると感じている。

上海・南京の旅行は、戦蹟を訪問するためと、華中の建設方向を考えることにある。上海では情報をもとに蒋介石の現状が、経済方面から記されている。また日本企業の破壊状況が語られ「既得の権益を、一日でも早く回復すること」が、上海の復興にとって肝心だと考えている。崇徳女学校・広中路戦地跡を見学し、飛行機で、江陰・鎮江の戦場を視察しながら南京へ行く。荒れ果てた南京路には、日本兵が一杯で胸が熱くなるが、一方ボロをまとった避難民が「ウヨウヨ」いて、著者はこの避難民には親しみを持つことができない。国民をこのような状況におとす蒋介石を非難し、さらに国民政府の政情が記されている。

著者は、自身の戦争観をはっきりさせるため、兵士への手紙、軍隊訪問、軍人との交流のようすを収めている。

#### 大陸縦断／山本実彦著

東京 改造社 1938（昭和 13） 322 頁 [4387]

緊迫した情勢にあるソ満国境の視察と、日本の中国統治の現状に関する認識を得るためと、2つの目的をもって行われた旅行の紀行文。1938（昭和 13）年 6 月 16 日東京を出発し、清津・新京・牡丹江・綏芬河・東寧・烏蛇溝まで行くところが前半。刊行言によればその後著者は新京・哈爾濱・奉天を経て北京に入った。後半の旅行は 7 月 14 日天津を発ち、津浦鉄道で 10 日程かかって浦口に着し、さらに南京・上海を回っている。津浦鉄道の旅行は済南・利国・徐州・固鎮・蚌埠と止まり止まりで、利国では匪賊が近辺に出没する為 1 日立往生している。著者は車中の人とよく話し、一般的な感覚に接することにも熱心であるし、又政界・文芸界の主だった人々との意見の交換も積極的に行っている。北京臨時政府実業総長王蔭泰・教育総長湯爾和・建設総署督辦殷同・法部総長朱深との政治的会談、周作人の心境、錢稻孫との出会いについて述べている。平穩な北京ではまた、新新戲院、天橋に出かけている。戦局について著者は「断固として押切るべきだ」と言っていて、南朝鮮総督、及川司令長官、畑最高指揮官との会見の様子も収めている。

### 1939

#### 中北支一ヶ月の旅／伊藤正雄著

川崎 帝国社臓器薬研究所 1939（昭和 14） 222 頁 [11984]

本書は著者が『医海時報』『東京医事新誌』等に寄稿した 2～3 件の論考をまとめたものである。著者の伊藤と編者（山口保平）及び発行者（二宮三郎）は「同志三名」と表現されており、彼らは 1938 年 8 月末、「戦友及び中国同学の志の慰問」のために東京を出発した。最終的に長崎から汽船で上海に渡るのだが、まず羽田から飛行機で福岡へ移動した後、博多から列車で諫早へ行き、さらに車で雲仙を経由して長崎へ、という経路をたどる。よって本書には雲

仙や長崎を見物した際のこととも記録されている。中国では、著者たちは上海－南京－青島－奉天－北京－天津を訪れた。各地で戦跡や史跡を見学したほか、医療機関や医学校、薬屋を視察し、北京では中国の医学者とも交流している。著者の目から見て、上海や南京は依然として戦争の惨状が残る状態であったが、青島や北京は戦争があったことを感じさせないほど平穏であったという。巻末に「上海市救護委員会医務組工作報告」が付されている。（久保茉莉子）

#### 中支風土記／高井貞二著（絵と文）

東京 大東出版社 1939（昭和14） 327頁 〔3679〕

従軍画家として中支に赴いた洋画家・高井貞二（1911-1986）による旅行記で、大東出版社による風土記シリーズの一冊。著者の従軍は、本著の内容から、日本軍が上海から南京に侵攻した後の1938年だったと見られる。長崎から航路上海に上陸し、その後、蘇州－南京－九江－廬山－漢口－漢陽－武昌－杭州を巡っている。従軍とはいえ、九江へと向かう航路で敵襲をこうむったほかは、いたって平穏な旅であり、著者はもっぱら各地の風光を愛で、名所旧跡をめぐりながら中国の歴史や文学に思いを馳せる。上海では爆撃された商務印書館跡、南京では光華門の戦跡などを見学するものの、従軍という立場上、皇軍の躍進ぶりをたたえ、戦闘による残骸やそこに生える雑草なども、情緒的にながめるばかりである。旅行記のほか、仏像、庭園、茶館、絵画、商売、中国人の性格、大陸旅行マニュアルなどについても記されている。きまって妖麗な半裸の美人画を飾っている甘栗屋、壊れた瀬戸物をつぎ合わせる行商の修理屋など、画家ならではのマーケット観察は興味深い。著者自身による旅先のスケッチも収録されている。（辻直美）

#### 靖亜行／東亜同文書院第三十五期生編

東京 東亜同文会業務部 1939（昭和14） 498頁 〔7577〕

東亜同文書院第35期生100余名は、1938（昭和13）年夏、6月から8月にかけて2ヶ月余り、29班に分れて調査旅行をおこなった。かれらの行先は華北方面5班、華中・華南方面21班、南洋方面3班で、満洲が含まれていないのは特徴的である。南洋方面を除き、日中戦争下の中国の旅はいずれも日本軍の特務機関、宣撫班、警備隊などと連絡をとりつつ、かれらの保護の下になされている。したがって、学生たちの足跡はほぼ江蘇・浙江・山東・河北の沿岸4省に限られている。

#### 北支風土記／向井潤吉著（絵と文）

東京 大東出版社 1939（昭和14） 290頁 〔4399〕

陸軍の報道班員として1937年秋に北支戦線を旅した洋画家・向井潤吉（1901-1995）による従軍記。著者に与えられたミッションは、「北支戦線に於ける皇軍の活躍状況をスケッチし、これを広く国民に紹介する」ことであった。大連から天津－北京－内蒙古－大同－綏遠－保定－石家荘を巡った著者は、「僕の憧憬の土地の一つ」とする北京で、名所旧跡の見物を楽しむ余裕のあったものの、張家口から山西へ移動して前線のただ中に踏みこんでいく。著者は、兵隊と列車やトラックに同乗しながら前線を巡り、自らを戦争の過酷な環境に追い込むことで、現地のリアルな状況を把握しようとしてつとめる。戦闘で廃屋と化した駅舎、野戦病院に向かう血まみれの負傷兵の一群、道の両側に積み重なる軍馬の死体など、著者による描写は、戦闘の激

しさや悲惨さをあますことなく伝えている。本著には、都市部の平穏や賑わいと、前線の凄惨さが併行して描かれる。また、戦争による人々の生死に理知的に迫ろうとする著者は、他方で、帰国後に「事変の飛沫は決して安閑とした境地に夢を追う痴呆を許さない」として「彩管報国」をめざす「大日本従軍画家協会」の発起人の一人となる。こうした、戦争と日常、あるいは戦争と芸術とが境目なく混在しうるような状況が、ある意味で戦時のリアルなのかもしれない。（辻直美）

#### 古き支那新しき支那／村上知行

東京 改造社 1939（昭和 14） 351 頁 [5554]

村上知行（1899-1976）は福岡県出身のジャーナリスト。『九州日報』記者、旅回り新派劇団の座付き作者などを経て、昭和の初め中国にわたり、1927 年から北京に居住、『新支那』記者や『読売新聞』特派員を務めた。北京在住の「支那通」として知られ、多くの日本人がそのもとを訪れた。1946 年に帰国。戦後は『三国志』『水滸伝』『聊斎志異』など白話小説の翻訳を行った。著作に『九・一八前後』（1935 年）、『支那及び支那人』（1938 年）、『古き支那新しき支那』（1939 年）、『北京歳時記』（1942 年）、『北京十話』（1942 年）、『北平より東京へ』（1947 年）などがある。

本書は筆者が各処に寄稿したエッセイの集成である。中国人の現世欲の強さや日中の民族性の比較などが諧謔と饒舌と露悪の混交した文体で語られる。北京の四季の推移、風俗や信仰、また小説や説話に関する話題が多く、雑然とした印象を与えるが、「大学生と女学生」「日本の女・支那の女」「新支那の女性」「北京の女」「妻の賢徳・妾の妖態」など女性をめぐる論述も多く、中国の軟文学を偏愛する著者の嗜好を映し出す。巻末に付録として、中国の筆記小説に題材を取った創作 3 篇を収める。（村田雄二郎）

#### 渦まく支那／山本実彦著

東京 改造社 1939（昭和 14） 392 頁 [5466]

1938（昭和 13）年 12 月広東・香港・澳門を、1939 年 4 月 27 日～5 月 31 日に上海・南京・武漢を訪れた様子と、2 つの論説「汪兆銘脱出と其波紋」「事変と広西の役割」を収めている。

香港ではノースcott 総督、澳門ではバルバサ総督に会見し、広東陥落後の難民流入の扱いを聞き、それに対して日本側が収容する意志のあることを言明している。その他それぞれの経済的位置の変化について見解を訊ねたり、さらにノースcott には、1000 万ポンドの借款を中国と結んだか訊ねているが、カー大使に聞くべきことで自分は知らないと返答されている。広東では気球で空から状況を見たり、俳句愛好家の中隊長との寛ぐ話題の一方、蛋族の娘たちや胡弓をひく盲目の女に中国の暗い過去を憤っている。

上海・南京・武漢の旅行では、上海がまず一番平穏静安で、ブロードウェイマンション 12 階に翻える日章旗に感慨を新たにし、華中の建設に日本人が責任をもたなければならないことを思う。南京では和平派の動向を記し、武漢では日本人が多く入りこんでいること、流行病撲滅のために日本軍病院が予防注射を始めていること、難民区はゴミゴミしていても陰惨さや、ブキミさがないことなど、いろいろ見聞して、武漢の復興が短時日に行われるだろうと予想している。南京では日本側山田最高指揮官、中国側梁鴻志行政院長と会談している。梁鴻志には具体的政策についていろいろ聞くが、心理の諒解を第一に考えるという彼の答えに考えるところ

が多くあると思っている。また、C.C団などの圧迫におびえている有力者たちのことも伝えている。東亜の建設という大業を担う日本政府が、まず中国の民気を捉えるために慎重かつ大胆に臨んで欲しいと願って文を終えている。

## 1940

### 北支と南支の貌／川島理一郎著

東京 龍星閣 1940（昭和 15） 242 頁 [3678]

著者は 1938（昭和 13）年 5～7 月北京に、1939 年 1 月 6 日～2 月 7 日広東に、陸軍省の委嘱を受けた従軍画家として滞在し、またおそらく 1939 年冬に 2 週間、大同に旅行した。雑誌や新聞に掲載されたその折のエッセイ 38 篇が本書にまとめられ、他に 6 篇の美についての文が加えられている。描かれた多くのスケッチと作品も図版として添えられている。

北京滞在中は盧溝橋、通州に戦跡を訪れた時の様子と、紫禁城・天壇・万寿山の紹介がされている。紫禁城の「大陸の空に描き出す大建築のスカイラインを見上げた時」の東洋的建築美に感銘を受け、画家としてはさらに、中国山水美を見るような北海公園白塔から見下した眺めと、紫禁城の建築群を一望に集める景山の頂からの眺めの 2 つを絶賛している。

広東では近代化された欧米風都会に失望し、珠江の「明るい癖に何か無常感をたたえる」眺めに南方の中国にふれた実感をい込む。ここでは庶民の生活に関する文が多く、泥棒市、蛋民、避難民、いかもの食いについて述べられている。従軍画家として、戦争画ではなく、現地風物を日本人の人々に紹介することを使命と考えている画家の、描写力豊かなエッセイ集である。

### 支那紀行／木村毅編

東京 第一書房 1940（昭和 15） 391 頁 [4086]

編者は、夏目漱石が執筆した満洲・朝鮮の旅行記「満韓ところどころ」に大きな影響を受けている。編者によれば、「満韓ところどころ」を読んで満洲に関心を持った人々は少なくなく、編者もその 1 人であった。編者が初めて満洲の地を踏んだのは本書の出版から 10 年前、すなわち 1930 年頃のことである。その当時は満鉄の仕事がどのようなものなのか、国民にあまり理解されていなかった。その時の状況と同様に、本書が出版された 1930 年代末～1940 年代初めの時期、多くの国民が興亜院の仕事を理解していないとして、編者は嘆く。そして国民の理解を得るために、中国の旅行記、いわば「支那ところどころ」を書くことの意義を強調する。しかし広大な地域全てを含む旅行記を書くことは難しい。そこで、1930 年代以降に中国に渡った多くの文芸家が記した報告書を収集し、編者が整理することで、本書が完成した。本書を読んで「大陸に運命を開拓する意気込み」の青年が続出することが編者の希望である。収録される報告の事例として、佐藤春夫「蒙疆一張家口」「廈門」、芥川龍之介「長沙」「蘇州城内」、横光利一「上海」「上海共同租界」、菊池寛「揚子江一瞥」、林芙美子「杭州と蘇州」「漢口」などがあげられる。  
(久保茉莉子)

### 満洲紀行／島木健作著

東京 創元社 1940（昭和 15） 359 頁 [10675]

著者は 1939（昭和 14）年春から夏にかけて、吉林・四家房・勃利・黒河・孫呉・克音河・綏化・鉄驪・哈爾濱・齊々哈爾・訥河・嫩江などをまわり、北満の開拓地 15 ヶ所、青少年義勇訓練所 5 ヶ所を視察した。

本書はこの視察報告書。「満洲旅日記抄」「勃利にて」「興農鎮の一夜」「孫呉にて」「車中瞥見」「齊々哈爾から訥河」までは視察調査記、そのほか満洲における日本人の生活や満洲農家の実態報告がある。巻頭の「北満開拓地の課題」「新たなる出発」は、帰国後、視察調査の結果をまとめ著者の満洲農業、開拓地に関する意見を述べたもので、開拓地の農業が満蒙の労働力に依存しているのを嘆き、北満開拓地の課題は、北満の農業的開発、開拓民の経済的自立、開拓民の使命の遂行にありとし、これを解決するためには、農業技術を高めるほか、新しい共同経営の形態を考えるべきだとする。

このほか、満洲へ旅する人への助言や開拓地に関する書物に対する感想文がある。

### 全国中等学校地理歴史教員第十三回協議会及満洲旅行報告書／第十三回全国中等学校地理歴史教員協議会編

東京 1940（昭和 15） 370 頁〔10465〕

1939（昭和 14）年 7 月 31 日から 8 月 2 日まで新京中学校の講堂で第 13 回全国中等学校地理歴史教員協議会が開かれ、その前後、参加者は旧満洲の各地を見学旅行した。本書の第 2 部（223～364 頁）が「満洲視察旅行記」。

旅行は協議会前後の 2 回にわかれる。まず参加者は A 班：中山久四郎（東京文理科大学教授）団長以下 81 名、B 班：田中啓爾（東京文理科大学教授）団長以下 84 名の 2 班に分れ、A 班は 7 月 23 日門司を出発、大連・奉天を経て、7 月 29 日新京着。B 班は 7 月 23 日新潟を発って、清津・雄基・延吉・吉林を経て、7 月 29 日新京に着き、協議会に参加する。協議会終了後、満洲国内視察団を結成、第 1 班の田中啓爾団長以下 91 名は、8 月 3 日新京を発し、哈爾濱・佳木斯・牡丹江・哈爾濱・齊々哈爾・満洲里・洮南・通遼・承德・錦県をまわって、8 月 20 日奉天で解団。第 2 班の中山久四郎団長以下 82 名は、8 月 3 日新京を発って、哈爾濱・奉天・錦県・承德とまわり、8 月 10 日奉天で解団する。

### 大旅行紀／東亜同文書院第三十六期生編

東京 東亜同文会業務部 1940（昭和 15） 432 頁〔10040〕

東亜同文書院第 36 期生の「大旅行」は、1939（昭和 14）年夏 3 ヶ月かけておこなわれた。「行く処、すべてこれ今なほ硝煙が匂ひ、気象は混迷の彼方にある」状況であって、28 班に分れたかれらは以下に示す各地の日中戦争下の様子を伝えている。

河北省：天津・唐山・北京・保定・石家荘。蒙疆：京包線沿線。山東省：済南・青島。山西省：運城・蒲州・臨汾・五台山、正太線沿線。察哈爾省：張北・多倫諾爾。安徽省：長江流域（この項は紀行文というより産業経済を論ず）。江西省：九江・湖口・呉城鎮・南昌・廬山。湖北省：武漢・岳陽。福建省：廈門。広東省：広州、海南島。このほか仏領印度支那に行った班が援蔣ルートについて述べている。

### 満洲風物誌／春山行夫著

東京 生活社 1940（昭和 15） 453 頁〔5062〕

著者は詩人で文明評論家。1939（昭和 14）年 10 月 26 日から 11 月 23 日にかけて、満洲国と華北を見学する。東京から新京・哈爾濱までは日満中央協会の主催にかかる日本雑誌記者団満洲国調査隊の一員として、その後は一旅行者として大連・奉天・承德・古北口を経て北京に入り、北京から大同に向かい、一路南下、天津を通して奉天にもどり、京城に立ちよって帰京する。

本書はこの旅行における奉天までの旅行記。旅行記といってもただ印象だけを記したものではない、調査報告といってもいいし、満洲国の文化環境をよく報じているところから、文化史的風物誌ということもできよう。奉天の大陸科学院、公主嶺の農事試験場、哈爾濱の植物園と博物館、ロシアを象徴する北満鉄道の今昔、旅順博物館などの記事が特に詳しい。

### 南支風土記／吉田謙吉著（絵と文）

東京 大東出版社 1940（昭和 15） 282 頁 [15593]

向井潤吉『北支風土記』，高井貞二『中支風土記』，中村正利『太平洋風土記』とならぶ、大東出版社の風土記シリーズの一冊。著者の吉田謙吉（1897-1982）は、築地小劇場創設時のメンバーとして舞台装置や宣伝を手がけた舞台美術家。1938（昭和 13）年に従軍画家として「南支」に赴いた。従軍は海軍報道部の派遣によるもので、自ら志願したとされる。同行者には、東京朝日新聞の古田常太郎・武田正次・丸山四郎、東京日日新聞の隅田恭・和泉恭・佐藤振寿がいた。一行は、廈門から海南島へわたり、三亜・崖県・海口をめぐった後、広東へわたった。各地では日本軍の駐留先のほか、戦跡や市街、史蹟などに案内され、食事も乗船にあたって鯛の尾頭つきに赤飯が供せられるなど、その待遇は賓客あつかいであった。

「考古学」に対して「現代」のモノを科学的な方法で分析する「考現学」にこだわる著者は、行く先々でノートとライカのカメラを駆使して対象を「採集」した。日本軍がジャングルに丸太でしつらえた洗面所や洗濯場、街で遭遇した大葬列、広東の水上生活者、訪問した小学校の児童の姿など、著者の関心は日本軍や現地の人びとの暮らしぶりや風俗にある。本書には文章による丹念な説明のほか、80 点余りの風景画やイラストが掲載されるが、精緻に記録された人びとやモノの姿はドールハウスの人形やミニチュアのようなものである。「南支」の光景の中にいる日本人というエキゾチズムも、著者の一貫した関心である。ヤシ林に幕営する日本軍を「映画の外国人部隊のようだ」と感じ、海南島にある朝日新聞や毎日新聞の支局を訪ねて、朝日新聞の屋上から映画「ペベルモコ（望郷）」そっくりの白亜の市街が見わたせる、毎日新聞には洋風バスやアップライトピアノがあると驚きをみせている。旅先では、作家の火野葦平（本名は玉井勝則）や後に美術評論家となる竹田道太郎（当時は朝日新聞の美術記者）など、様々な人物とも邂逅している。

言葉やスケッチで現地の状況を丹念に記録した本著であるが、「客観性」にこだわるゆえか、皇軍の躍進ぶりが強調されないかわりに、戦争の苦悩や悲惨さも感じさせない。描かれた人物の顔には目鼻がほとんど描かれていない。帰国してまもない著者は、旅をともにした記者の武田正次が海南島で戦死したとの報を受けとった。（辻直美）

### 雲南四川踏査記／米内山庸夫著

東京 改造社 1940（昭和 15） 357 頁 [5668]

1910（明治 43）年の雲南・四川旅行記。その解説は、巻頭の自序（1940 年）を引けば十分

である。日く、

「私は、明治 43 (1910) 年 7 月、上海より行を起し、香港・海防を経て雲南に入り、さらに北して四川に出で、それより揚子江を下って、11 月上海に帰った。その間、海防から雲南省城の昆明までは滇越鉄道に依り、昆明から四川省城の成都までは自ら歩いた。殊に、8 月 9 日昆明を出発して 9 月 6 日四川省叙州に着くまで、海拔 1 万尺の山々相連なる雲南高原の、約 1418 軒、29 日に亘る徒歩行は、私にとっては終生忘れられぬものである。叙州からさらに北して、自流井に四川の富源を探り、峨眉山に登って西方遙かに大雪山山系を望み、9 月 30 日成都に着いた。徒歩行程実に 2284 軒、日程 52 日であった。それから、10 月 9 日成都を立て民船で岷江を下った。叙州で揚子江に入り、さらに、重慶・夔州・宜昌へと下った。夔州から宜昌まではかの有名な三峡である。峡の長さ約 250 哩、断崖 1000 尺、江流狂奔し、洶湧として渦を巻いて流れてゐる。その三峡の險流を、私は、長さ僅か 5 間に足らぬ小舟で下った。

宜昌から重慶まで汽船が通ひ、さらに重慶から上流の叙州・嘉定までも、発動機船が通ひ、また、雲南・四川の空を旅客機が飛ぶ今日から見れば、私の雲南四川行は、全く夢のやうな話である。しかし、交通不便のその当時、徒歩と小舟とで旅行したその難行苦業のお蔭で、私は、雲南四川の山岳河川の状勢と人情風俗の実際とを、泌々と身に体験した。この小著はその体験の記録である。

本書を第 1 編紀行、第 2 編調査としたが、その中、滇蜀山水記を除いてその他は、殆どすべて旅行当時の筆記である。……尤も、今になって見れば、至らぬもの多きを感じ、書き改めたいと思うものも多々あるけれども、実感の害はれんことを虞れて、すべてそのままとし、単に文章字句を整理するに止めた。第 1 編中の滇蜀山水記は、その後、折に触れ、曾遊を偲びつつ起稿したものであるが、現実の体験を基としたものであることには変りはない。第 2 編の調査は、主として山川道路の形勢と気候とを挙げた。それは、共に、今も昔も変りはないものであるからである。掲載の写真及びスケッチは、すべて当時自ら撮影または写生したものであり、拓本及び支那人の筆蹟は同じく当時旅行中の所得である。スケッチは極めて拙いものであるけれども、現地の実写たる点に於て何等かの印象に触れ得べきものあるかとも思ひ、鶏肋捨て難くこれを添へることとした。」

## 1941

### 蒙疆の旅／飯山達雄撮影 羽間乙彦著

東京 三省堂 1941 (昭和 16) 1 冊 [Q2093]

1938 (昭和 13) 年夏、内蒙古高原調査のために結成された「京城帝国大学蒙疆学術探險隊」に撮影報道班員として参加した両氏の紀行文と風景・風物写真が収められている。羽間乙彦はこの隊を後援した大阪毎日新聞社の記者。飯山達雄はこの隊に参加した後、大同・綏遠・包頭に旅行し、その写真も加えられている。この探險隊は 7 月 29 日から 8 月 17 日まで、張家口を出発し、張北・徳化・西蘇尼特・阿巴嘎貝子廟・西烏珠穆沁・林西・烏丹城・赤峰・多倫を経て張家口に戻る。さらに 2 班に別れ、1 班は包頭へ行き、羽間が加わる班は 8 月 21 日張家口を出発し蔚県へ行き、情勢の合い間をみて小五台山登攀をして、27 日蔚県に戻っている。この探險隊は、副隊長鈴木武雄以下隊員 16 名であるが、護衛兵が付くため一行 70 余名、隊員に泉靖一がいるが、全員の名はこの書ではあげられていない。



包の生活、文化的に進んだブリヤート族の紹介もあるが、蒙古民族が喇嘛教の大きな影響力によって頽廃し、その上、中国人が蒙古奥地まで利を求め入ってくるため圧迫され、かれら自身、自然の安直さに狎れていると批評している。旅行は西阿巴嘎王府を中心として前半は荒寥たるステップ地帯で、後半は緑一色ともいえる丘陵地帯を行く。それに加えて前半は「殺人的ともいえる」華氏 140 度の炎暑下を行動し、8 月 7 日の西烏珠穆沁からは、冷氣と降雨の中、泥濘の深さを苦しみながら進むという極端さである。

写真は白黒であるが、より詩情がこめられている。飯山達雄は西蘇尼特からウーランホショ・エレクトホカを回るチームに入っているの、赤い崖の写真を収めている。

### 満鮮産業の印象／石橋湛山著

東京 東洋経済新報社 1941（昭和 16） 219 頁〔3535〕

石橋湛山（1884-1973）は山梨県出身のジャーナリスト・政治家。早稲田大学卒。東洋経済新報社社長を経て、戦後は 1946 年第一次吉田茂内閣の蔵相となる。公職追放後に政界に復帰し、55 年自由民主党総裁、56-57 年首相に就任。戦前は「小日本主義」を唱えるなど自由主義的論陣を張り、戦後は日中・日ソの交流に尽力した。

本書は 1940 年 5 月から 6 月にかけて、ダイヤモンド社の石山賢吉をともない朝鮮・満洲を視察した際の記録で、帰国後の講演筆記を『東洋経済新報』に連載し、それを一冊にまとめたものである。付録として、満洲国開拓総局長・稲垣征夫「満洲開拓地の農業経営に就て」と満洲拓殖会社東安地方事務所長・長澤信之助「北満の野に立ちて」を収める。後者は、本書の一節「満洲に土地無し」への反論である。

満洲での視察先は、新京－吉林（松花江ダム）－弥栄・千振・龍爪・天理村（日本開拓民入植地）－王兆屯（白系ロシア人村落）－虎頭（東部満ソ国境）－東安－ハルビン－安東（大東港）－本溪湖（煤鉄公司）－奉天－撫順－湯崗子温泉－鞍山－大連－新京で、朝鮮の清津を経て帰国の途についた。大連ではナチス大連支部長を名乗るドイツ人の講演を聞いて、「私は何うも納得が出来ませんでした」との感想を漏らしている。著者の満洲産業（鉱工業・農業）視察の結論は、「満洲には天然資源が豊富であります。唯だそれを開発するのには非常に多くの資本が要ります。」「満洲の産業は、我が国や、また満洲で、一般に考えてみるように決してそんなに有利ではありません。将来は確かに大いに有望だと考へますが、差詰めとしては、相当不利な話があることを認識して掛からないと、飛んだ間違を生ずるだらうと思ふのであります。」（187 頁）というものだった。かつてのように、あからさまに植民地放棄論を唱えられない時局下での発言とはいえ、損得（算盤）勘定から植民地支配の代価を計算する石橋のスタンスは一貫しているとも見られる。（村田雄二郎）

### 中南支並香港視察報告書：自昭和十五年十一月至昭和十六年三月／神田正雄著

出版地・出版者不明 1941（昭和 16） 130 頁（タイプ謄写印刷）〔8026〕

著者の当時の身分は、雑誌『海外』社社長。報告の提出先は不明であるが、同じ秘密扱いの『北支、蒙疆及満洲国視察報告書』（1939 年 3 月）が陸軍省に提出されており、印刷の体裁がほぼ重なるので、同じく陸軍宛の報告書と見てよいだろう。第一篇「中支視察報告書」、第二篇「南支視察報告書」、第三篇「香港査察報告書」の 3 部からなる。中支の視察先は南京と上海で、中国要人との会話も直話の形式で記録される。実名で談話が収録されているのは、汪精

衛国民政府主席，林伯生宣伝部長，虞洽卿，蘇錫文，丁默邨らである。著者は「遺憾なことは支那の人々の心は事変勃発の当初に較べて益々日本を離れて反対に重慶政権を謳歌するの傾向が強められて行くことである」（8 頁）と、中支視察の印象を率直に語る。第二篇は台湾から廈門・汕頭・広州と訪問した際の、また第三編は香港を視察した際の日中当路との会談の様子や見聞が語られるが、著者が特に関心を寄せるのは、重慶政府に対抗して海外の中国人の心をいかに南京政権側に引き寄せるかという「華僑工作」をめぐる諸問題である。（村田雄二郎）

#### ハルビン点描／北野邦雄著（写真とも）

東京 光画荘 1941（昭和 16） 写真 24 頁・本文 86 頁〔16882〕

ドイツ語講師から写真界に転じ、写真専門書の刊行や執筆に活躍した著者によるハルビン旅行記兼写真集。著者が現地を訪れたのは 1939 年初夏のこと。訪問の経緯は不明だが、同年の『カメラ』誌上で作品を発表している（北野邦雄撮影「はるびん」『カメラ』第 20 巻第 9 号，1939 年 9 月）ことから、同誌の依頼による仕事だった可能性がある。著者にとっては、エキゾチックで豊富な材料に恵まれ、「とても 5 日や 10 日では撮りつくせない。…ハルビンほど写真的に楽しいところを他に知らない（日本，満洲，支那に限定して）」といわしめるほどの旅であった。

著者は、ロシア人の街としてのハルビンと、そこに生きるロシア人の存在に心をひかれている。ヨーロッパにもあまり見られないような広々とした路や街路樹，建築が美しいハルビンだが，ロシア人は亡国の人である。乞食も多い。エミール・ヤニングス演ずる「最後の人」のような風貌のロシア人ドアマンは「いらっしゃいまし」と日本語を話し，エレベータ・ガールのロシア人女性は用語・態度ともに日本的であった。本書に掲載される 24 点の写真は，盲目のアコーディオン弾き，尼僧・乞食・教会・十字架など，ほとんどがロシア人やその文化を被写体とする。写真専門家として，日本にはない街頭写真師の「早取」システムを観察したり，カメラ店の少し古くて珍しい品揃えを楽しんだりもしている。ハルビンの写真団体「哈光倶楽部」の人びとからも歓迎され，その交友は日本に帰った後も続いたようだ。ハルビンでは異国風モチーフの多さから写真熱が高く，1938 年頃からは日本のカメラマンや雑誌編集者が多数現地を訪れたことで，現地の写真グループの活動が日本にも知られるようになっていた。とりわけ「哈光倶楽部」は，その代表的な存在であった（満洲芸文年鑑編纂委員会編『満洲芸文年鑑』康德 9 年度版，満洲富山房，1943 年，31-32 頁）。戦後の著者は，写真雑誌の刊行や個人著作の執筆にはげむかわら，1967 年に設立されたカメラ博物館「ペンタックス・ギャラリー」の初代館長となり，クラシックカメラの普及に尽力した。（辻直美）

#### 西遊日記／釈宗演著（編輯・発行：井上禅定）

鎌倉 鎌倉松ヶ岡東慶寺 1941（昭和 16） 160 丁，15 頁〔XI-4-1015〕

『西遊日記』は，もともと上・中・下の 3 巻から成り，禅僧の釈宗演（1860～1919 年）が 1887 年 3 月，29 歳で銀瀾〔錫蘭，セイロン〕に赴き，3 年間滞在した際に書かれた日記である。原型のまま保存されているのは上巻のみであり，中巻は漢文に直されたもののみ存在，下巻は消失してしまった。釈宗演の没後 23 年を記念し，東慶寺現住職（当時）井上禅定師の発願で『西遊日記』が複写出版された。原本は毛筆で書かれており，横浜出港から約 1 年間分の記録で，船上や経由地（神戸，長崎，香港）で見聞きしたこと，考えたことなどについても細

かく記されている。なお、釈宗演は、セイロン滞在を終えた後、タイに入り、香港・上海を経由して神戸に帰港した。本書の巻頭には、知人・友人たちからの送別の言葉（主に漢文）や、餞別に送られたお金・品物の一覧も付されている。（久保茉莉子）

#### 新支那を観る／長野朗著

東京 東世社 1941（昭和 16） 244 頁 [5421]

1937（昭和 12）年日中戦争がおこってから 1940 年まで 10 回にわたって行われた中国の情勢視察旅行の見聞をもとにして、日本の中国統治について政治・経済・社会・文化の面から考察されている。10 回の時期と滞在地を列举する。(1)1937 年 10 月、天津・北京、(2)1938 年 2～3 月、北京・天津・上海・南京、(3)同 5 月、天津・北京、(4)同 8 月、天津・北京、(5)同 10 月 11～18 日、上海、(6)同 12 月、北京・天津、(7)1939 年 3 月、天津・北京、(8)同 9 月、天津・北京、(9)同 10 月、上海・南京・台湾・廈門、(10)1940 年 2 月、上海。この 10 回の所感が時間的順序で並べられ、その時々的情勢の変化をありのまま伝えようとしている。具体的にとり上げられるのは、政権をめぐる人々の人物評、租界地、治安工作に関する問題、食糧の需給関係、産業としての棉花栽培の価値、工場の荒廃、幣制の複雑さ、ラジオ・新聞・映画などマスコミを利用した特に国民政府側の効果的宣伝、中国人子弟の教育など多岐である。さらに華北と華中とは全く情勢が相違することを、以上のような諸点を通して述べ、その複雑さに統治の容易でないことを指摘している。

#### 満洲紀行：写真と随想／長谷川伝次郎著

東京 目黒書店 1941（昭和 16） 186 頁 [11980]

著者は 1939 年 9 月から 3 か月間、満洲を旅行した。著者にとっては 25 年ぶりの満洲旅行であり、車窓から見える満洲の自然が「昔ながらの悠然たる大陸的風景美」を保っていることに感激している。この旅行の後援は、陸軍報道部・関東軍報道班・満鉄弘報課・三井物産会社・清水組・シュミット商店であった。本書は、「平和にして明朗な風物」を主題として著者が旅行中に撮影した多くの満洲の写真を収録する。「新京」「奉天」「吉林」「ハルビン」「齊齊哈爾」など、主要都市・地域の風景写真に加え、「満洲開拓青年義勇隊」「大豊満第二松花江発電所」「ロマノフカ白系露人部落」といったテーマの写真もある。また日本語或いは英語で、各地の地理・歴史の基本情報、建築物の特徴や由来などに関する解説文が付されており、日本語部分については瀬沼孝一が協力し、英語部分については国際観光局事業課の紹介で A・F・トーマスが執筆したという。（久保茉莉子）

#### 呉越彩管游記／松村雄蔵著

上海 上海毎日新聞社 1941（昭和 16） 211 頁 [9694]

著者は興亜院調査官として華中連絡部文化局に在勤中の人であり、また天籟という雅号をもつ画家である。本書は彼が『上海毎日新聞』に掲載した江南の景勝紹介の 3 篇の絵と文から成っているが、第 1 篇は小説風であるのでここでは 2 篇を扱う。

第 2 篇「富春江を下る」は、蘭溪から杭州までの船旅についてである。蘭溪で民船を雇い、通訳、船主夫婦、その娘とともに建徳・嚴子陵・桐廬へ下り、ここで汽船に乗り換えて富陽・杭州に到る。この間に糸瓜灘という難所と七里灘という景勝地を通過するのである。写生をす

る著者を取り囲む朴直な人々との会話が面白く書かれている。1936（昭和 11）年 6 月 6 日から 4～5 日間の旅行である。

第 3 篇「江南彩管道中記」は、1939 年秋、華中鉄道の招待で江南各地の絵行脚をしたことである。一行は飛田周山・伊東深水・酒井三良・三輪晁勢・池田遙邨・上村松篁・著者と鉄道省嘱託鈴木吉祐の 8 名。杭州・蘇州・鎮江・揚州・蘇州を訪問している。それぞれの地で絵のために訪れている所は、〔杭州〕浄慈寺・靈隠寺・錢塘江畔・湖心亭・三潭印月・放鶴亭・平湖秋月，〔蘇州〕太門橋・虎邱・留園・楓橋・寒山寺，〔鎮江〕甘露寺・金山寺・焦山めぐり・竹林寺・石浮橋，〔揚州〕法海寺・五亭橋，〔南京〕五州公園・北極閣・明孝陵・鷄鳴寺・莫愁湖・光華門・鼓樓・秦淮。賑やかに交わされる会話と絵で綴られた楽しい読み物である。

#### 和平来々：満支紀行／鷺尾よし子著

東京 牧書房 1941（昭和 16） 424 頁 [9693]

著者は郷土の文芸雑誌『秋田』を主宰する女流文人。1938（昭和 13）年と翌 39 年の 2 回、北満国境の郷土部隊や開拓団を慰問する。

本書の第 1 部「満洲旅行」は 1938 年の慰問旅行記。9 月 5 日大連に上陸，奉天・新京・ハルピン・佳木斯を経て，弥栄村を訪れ，さらに牡丹江を経て，ソ満国境の郷土部隊を慰問，9 月 29 日奉天を発って，朝鮮をまわり日本に帰る。第 2 部「北満の郷土部隊を訪ねて」は 1939 年の慰問旅行記。前年訪問した際の将兵の要求に基づき，今回は踊り子をつれて，10 月 11 日大連に上陸，前回と同じソ満国境の郷土部隊を慰問し，帰途ハルピン・新京・奉天では白衣の勇士を慰問し，11 月 2 日大連を発って帰国する。大連出発直前には，満洲文化協会経営の大同女子技芸学校を訪れ，ここに学ぶ中国人女学生と懇談する。第 3 部「新支那を視る」は，1940 年汪政権のいわゆる「国民政府還都」を慶祝するための南京訪問記。10 月 20 日東京を発って 22 日奉天，24 日天津で汽車をのりかえ，25 日南京に着き，5 月 1 日まで南京に滞在して，「和平建国」の看板や青天白日満地紅旗のあふれる南京をみてまわる。5 月 1 日から 4 日まで上海に滞在，長崎を経て 5 月 6 日東京に帰る。南京の教員養成所では学生と会談する。

## 1942

#### 満洲見学記：第三次満洲見学旅行団報告／華北農事試験場農業技術訓練部

北京 華北農事試験場農業技術訓練部 1942（昭和 17） 146 頁 [3563]

1941 年 12 月 5～31 日に華北農事試験場が実施した見学旅行の報告書。同試験場農業技術訓練部第二学年練習生 122 名が満洲国及び関東州各地を訪問した。この見学旅行は 3 回目で，当初の計画では，前年（1940 年）と同様，9 月に日本，朝鮮，満洲を訪れるはずであった。しかし「緊迫せる時局」のため旅行計画は一時中止となった。その後，1941 年 11 月の時点で，満洲国や関東州については見学できる状況となったため，計画を変更し，北京本場，済南支場，青島支場の練習生を相前後して見学旅行に出発させた。本書には，引率職員及び練習生の報告書・感想文，日程，名簿などが掲載されている（秋元眞次郎（華北農事試験場長）「序」）。見学先は，興城の園芸試験場，錦県の興農合作社聯合会，新京神社，ハルピンの義勇訓練所，奉天の獣疫研究所，満洲棉花会社，製麻会社，金州の棉紡績工場，大連の満蒙資源館，公設市場，旅順の博物館などであり，練習生たちは各地の気候や土壌の違い，農業開発の歴史と現状，

各種建設事業について学んだ。報告書のテーマとしては、満洲の農業、畜産、林業、交通、食糧、教育といったものが並び、関東州よりも満洲を対象としたものが多くを占める。

(久保茉莉子)

#### 大東亜戦下ノ支那ヲ旅シテ／外務省調査部第六課

東京 外務省調査部第六課 1942(昭和17) 31頁 [6445]

本書は、「転換過程に在る中国共産党」と「国共合作の現況とその将来性」で構成される一種の中国レポートである。当時の延安の状況も、詳細に分析されている。このレポートで最も興味深いのは、中国が共産主義化しないという大方の予想に対して「私ノ結論ハ否テアル」(28頁)と述べた箇所である。

なお、本書は、旅行者による口述という形態をとっている。冒頭に「草野囑託述」とあり、おそらく口述者は草野文男(のちの拓殖大学教授)であろう。草野文男が1943年に外務省の囑託として調査を命ぜられていたことは明らかとなっている。(中村元哉)

#### 考史遊記／桑原隲蔵著

東京 弘文堂書房 1942(昭和17) 12・22・311・34頁、図版128頁 [XI-6-B-d-21]

東洋史学の創始者として知られる著者が1907年からの2年間、清朝末期の北京に留学した折の旅行記で、文部省に提出済の報告書を底本に、門下生の森鹿三らが著者の日記や手帳類による校訂を加えて集大成したもの。北京－洛陽－長安(西安)を旅した「長安の旅」(1907年秋)、北京－濟南－泰山－曲阜－開封－保定をまわる「山東河南遊記」(1908年春夏)、北京－熱河－興安嶺－張家口－居庸関をめぐる「東蒙古紀行」(1908年夏)を収めている。

旅の目的が史跡踏査だったことから、さまざまな史跡の状況や規模、碑文の内容等を詳しく記録し、また各地の歴史や地理・交通・民俗の状況も含み、内容は多岐にわたる。紙幅の分量から長安近郊の陵墓や曲阜の泰山・孔子廟、開封の「国書碑」の見聞に重きをおく様子がうかがえるが、もっとも鮮やかな印象を著者に与えたのは三島海雲の誘いで意図せず出かけた東蒙古紀行だったようである。困難な旅路につぎつぎに現れる蒙古の珍しい風俗や広大な自然を、著者はふだんの謹厳さを打ちやぶるような生気あふれる筆致で描写した。各地で活躍する日本人教習との交流も本書の見所の一つであり、赤峰では鳥居龍蔵夫妻のもとを訪れている。

題箋は狩野直喜(君山)、序文は蒙古と長安の旅にそれぞれ同行した矢野仁一と宇野哲人、あとがきは森鹿三が担当し、おもに著者の撮影による268枚の写真も収録する。清末における史跡の状況や各地の地理・風俗、また日本人教習の分布を知る上で貴重な資料といえるだろう。

同行した宇野の旅行記は『支那文明記』(大同館書店、初版1912年、東洋文庫本は1918年改訂版[4703])として刊行されている。(辻直美)

#### 大陸遍路／東亜同文書院第三十八期生編

上海 東亜同文書院大学 1942(昭和17) 326頁 [4232]

東亜同文書院第38期生100余名が1941(昭和16)年夏、31班に分れておこなった旅行の記録。ただし、かれらは旅行から帰った直後、繰上げ卒業と臨時徴兵検査を知らされて当初の予定通りに全員が原稿を書くことが出来なくなった。ここに収録されているのは旅行記の一部

であるが、華北・蒙疆から華南・台湾までかれらの足跡は十分に伝えられている。蒙疆の2班は蒙古聯合自治政府治下の厚和・張家口・多倫などでの見聞を記し、山西の1班と山東の2班は日本軍占領下の両省の事情を語り、さらに華北を旅行したある学生は、合辦事業・軍の発言権・英米資本の勢力・治安・教育など7点にわたって日本の華北支配の問題点を論じている。湖南・湖北・江西・浙江など華中を旅行した5班は、日本軍の兵站線に沿った旅を語る。華南を旅した6班の報告は澳門について詳しい。

#### 支那を行く／中村孝也著

東京 講談社 1942（昭和17） 467頁 [5317]

広東大学から「明治維新史」の講義を依頼されたのを機会に、2ヵ月にわたって行われた中国縦走旅行記である。1941年2月18日福岡を発ち、約1ヵ月間広東大学で講義をし、3月末から澳門・香港・上海・杭州・蘇州・南京・北京・吉林・奉天・大連を回り、4月末日本に戻っている。同僚和田清の名前が、広東までの航路、広東での見物に時折見られる。各地で名所旧蹟・戦蹟を訪れ、その都市の印象が述べられている。一番強い印象を受けたのが南京であり、南京訪問によって旅行の核が得られたと述べている。それは軍総司令部を訪れ、日本民族の「逞しき力」を改めて認識したことである。歴史的な大勢として説明されるアジアの北から南への「うねり」、東力西漸の進行に従事する日本民族の存在価値を評価し、自信を強化すべきであると強く感じている。

歴史学者である著者はしかしそればかりでなく、「生きる支那」を理解することに積極的に取り組んでいる。中山陵に近代中国の性格が見事に象徴されていると述べ、広東では護衛兵を頼んでまでして孫文の故郷翠亨に赴いている。「古きものは壊れる。新しきものは現れる。時代の生活は、このやうにして移ってゆくのである」——これは戦場跡と旧蹟の入り交る南京で鶏鳴寺や明の故宮を見学して回った印象であるが、「新たな生命の発揚」の把握が、この旅行の1つの観点である。たとえば広東では、珠江を新しい門戸として、新しい生活を始めたところに広東の明るい将来が示されているという一方、香港・澳門についてはその過去・美観に魅力を感じながらも「糸の切れた風」と評している。

経済都市としての発展は抑えられても、文化の宝庫として高く評価されているのは北京である。また杭州西湖・銭塘江の自然的景観も大いに嘆賞されているが、蘇州の印象では、「過去の追憶は現実に勝る」と結論している。

この旅行記のもう1つの特長は著者の人生観の描出である。水上街路を見学するため珠江の蛋民船に乗って「無学である、無知であると聞いているが果して左様であらうか。それは学問でないかも知れない。しかし生活は人を賢明ならしめる」と感慨する。澳門の大路で少年群に金銭を乞われて、やはり「何故に貧しく生れた子供達なのであろうか、それは宿命なのであろうか。……大きな目で見おろすならば、少くとも同じ位の生存価値が認められないとも限らないであらう」と感じている。それはまた丹念な自然描写と、さらに民俗学への興味が加わり、「人類の強烈なる生活要求が表現」されている墳墓に関する記述を多く記すことにもなっている。

#### 工藝廠：満支工藝視察余録／西川友武著

東京 中川書房 1942（昭和17） 212頁 [3361]

著者は1928（昭和3）年に開設されたデザイン研究機関・商工省工芸指導所の技士で工芸デザイナー。工芸指導所の機関誌『工芸ニュース』に連載された「満支工芸視察」に関する随筆を書籍化したもの。著者は39年2月半ばに新潟を出港し、清津から吉林－新京－哈爾濱－奉天、さらに熱河－承德－北京－天津－大連－旅順－平壤－京城を一ヶ月半にわたって旅した。タイトルの『工芸廠』は、満洲事変以前の吉林省で、満人の子弟に陶器・刺繍・絨氈・製靴などの工芸技術を伝習していた省立工芸廠にちなむもので、「満洲国は、新しい建設的、産業的見地から工芸の振興をも深く考慮すべき時機にある」と認識する著者の理想がこめられている。

技士である著者の観察と理想は、冷静かつ大胆である。稚拙と評価されがちな現地の工芸技術については「工業的生産というものに対し、従来实际的な訓練が行われていなかったことに起因する」と分析し、むしろ人々の大陸的な「根気強さ」を評価する。工芸品の輸出入については、「満支」地域は日本の工芸品の消費市場であり都市部の消費力は高い、よって安物第一主義ではなく高品質の工芸雑貨によって日本の国威を宣揚することが大東亜共栄圏の輸出を考えるうえでも肝要とし、さらには古都・北京の建築・装飾・工芸の意匠を「我々の手近に置」いて研究することが東洋工芸の創造であれ輸出工芸の振興であれ最も大切だと説いている。

著者が旅において拠点とした吉林・奉天・承德・北京の日本人家屋のスケッチや生活様式の描写もあり、生活史の上でも貴重な資料といえるだろう。（辻直美）

#### 山西学術紀行／宮本敏行著

東京 新紀元社 1942（昭和17） 289頁 [3158]

著者は朝日新聞社社員で、1942（昭和17）年第1次山西学術調査研究団に報道部員として参加する。この調査研究団の派遣は、文部省直轄資源科学研究所の最初の事業であって、団長の土岐章（貴族院議員・資源科学諸学聯盟理事長）を団長に、地質鉱物班長松下進（京大教授）、地理班長多田文男（東大助教授）、人類班長谷口虎年（慶大教授）、動物班長清棲幸保（資源科学研究所嘱託）、植物班長館脇操（北大助教授）、映画班長太田仁吉（日本映画社社員）ら38名から団は構成され、山西省の資源を総合的に調査研究しようとするものである。

1942年5月2日、全員が太原に集結し、5月5日から20日までは山西南部の調査を潞安地区、垣曲地区、蒲州地区の3隊に分れて行い、5月25日から6月16日にかけては、山西北部の五台山地区を全員で調査する。

本書はこの調査研究の報告書ではなく、著者が終始一行と行動をともにして得た印象と知識とを述べた紀行文である。

### 1943

#### 大陸紀行／東亜同文書院大学昭和十七年度旅行誌編纂委員会編

上海 大陸新報社 1943（昭和18） 445頁 [4225]

1942（昭和17）年夏におこなわれた東亜同文書院恒例の「大旅行」の感想文集。38班に分れたかれらの足跡は「現在旅行可能の占領地」を大体尽しており、「それを学生といふ特殊な地位から眺めてゐる点は此の書の持つ特徴であらう」と編輯委員自ら語っている。本書では班毎の報告という形をとらず、36人の書いた35篇の紀行・感想文を収める。そのなかには、華

北のある部落の生活を描いた「燕郊鎮の事ども」、北京の幫をとりあげた「パンの現状」、「開拓村瑞穂村概観」など調査余記といえる文章も幾つか含まれている。

#### 私の支那紀行／豊田正子著

東京 文体社 1943（昭和 18） 239 頁 [4966]

著者は 1942（昭和 17）年 6 月から 7 月にかけて、陸軍報道部の委嘱で、片岡鉄兵・石浜知行・大迫倫子とともに、蘇州を中心とする地方の清郷地区を視察する。

本書はこの旅行記で、最初の「清郷を往く」は、蘇州城外の車坊鎮・光福鎮、常熟城外の宋家村、および青浦県の視察記。ついで主要都市のことを記した「蘇州雜記」「南京の印象」「常熟の思ひ出」があり、最後の「中支旅行日記から」は断片的な感想文・印象記をあつめる。

#### 満支印象記／藤本実也著

東京 七文書院 1943（昭和 18） 318 頁 [4016]

著者は 1943（昭和 18）年、東亜研究所の依頼を受けて、華中の蚕糸業視察に赴く。すなわち 10 月 16 日、長崎から上海に渡って、上海・蘇州・南京・鎮江・無錫・杭州・嘉興を視察、11 月 3 日上海を去り青島を経て、11 月 5 日大連着、14 日安東を去って朝鮮を経、帰国するまで、大連・熊岳城・湯崗子温泉・千山・鞍山・新京・哈爾濱・奉天・撫順・五龍背温泉を訪れる。

本書はこの視察旅行記。第 1 篇は「支那」の部で、〔上海〕商品検驗局・自然科学研究所・三井洋行・日本商工会議所・華中蚕糸株式会社、〔蘇州〕蘇州糸廠・絹織工場、〔南京〕国立博物館、〔鎮江〕鎮江蚕業場、〔無錫〕糸廠・家庭製糸・大日本紡績工場、〔杭州〕緯成糸廠・絹織工場の視察記があり、最後に華中視察の総合的な感想文を付する。第 2 篇は「満洲」の部で、〔大連〕満鉄調査部・中央試験所・地質調査所・満洲資源館、〔熊岳城〕農事試験場、〔新京〕大陸科学院・建国大学、〔哈爾濱〕北満江運局、〔奉天〕国立博物館・国立図書館・満鉄図書館、〔安東〕満洲柞蚕株式会社安東支店・国立柞蚕纖維検査所・興東柞蚕加工株式会社・柞蚕織物工場・満洲紡績株式会社安東工場・熊岳城農事試験場安東支場の訪問記があり、また旧満洲全体の感想文もある。

#### 蒙古横断：京都帝国大学内蒙古学術調査隊手記／宮崎武夫著

東京 朋文堂 1943（昭和 18） 318 頁 [8672]

京都帝国大学内蒙古学術調査隊は京大の教官・学生・卒業生ら 13 名から成り、木原均（理学部教授）が隊長をつとめる。一行は、1938（昭和 13）年神戸を出帆、大連・北平を経て張家口にいたり、ここを根拠地として 8 月 25 日から 9 月 28 日まで、約 1 ヶ月にわたって綏遠省の東半分、察哈爾省、熱河省の西部など、いわゆる内蒙古一帯を主として奥地に自動車縦横にはしらせ、種々の調査を行った。

本書はこの旅行記。団員の中には、植物学・動物学・農学・地理学・経済学などの専門家がおり、それぞれ学術的な報告はその属する専門の雑誌に発表されたが、これは蒙古奥地の風物・民情を伝えようとしたものである。まず出発から根拠地張家口にいたるまでの旅を記し、ついで第 1 行程として、張北・徳化・西蘇尼特・錫拉穆林・哲斯ホンゴル・百靈廟・包頭・綏遠・四子部王府・平地泉・張家口とまわった西北への旅、つぎに張家口から阿巴嘎・西烏珠穆沁・



興安嶺・赤峰・多倫とまわり張家口にかえる東北への旅を述べる。

1944

太湖踏査記／莊司憲季著

東京 三省堂 1944（昭和 19） 596 頁 [3818]

著者は陸軍糧秣本廠の嘱託として、1938（昭和 11）年末から翌 39 年にかけて、太湖の魚族調査を行う。本書はその調査旅行記で、「太湖の魚族調査報告」「上海を中心とする漁業調査報告」「無錫養殖事情」などはその本命とする調査報告である。但し機密に属することは勿論はぶかれている。また漁業に関連して戦時糧秣資源全般の調査を行い、その報告にあたる「東洞庭山の資源調査報告」「西洞庭山の資源調査報告」「江南米余談」「太湖流域における水稻育種試験表」「支那茶と喫茶習慣」「支那名茶龍井茶について」などが本書におさめられている。このほか、「太湖の海賊と杜月笙」「匪団と遭遇す」「西洞庭山島」「支那の鵜飼」「江南点描」「杭州旅日記」など、一般的な旅行記もある。

## 戦後の部

1948

梅花一両枝／大鹿卓著

東京 洗心書林 1948（昭和 23） 197 頁 〔8379〕

著者は辛亥革命を文学上の仕事にしようと思い、その資料を蒐集し、革命の舞台を眼底に納めるために、1944（昭和 19）年 2 月初旬から 6 月末まで、中国を旅行する。案内役は窪田雅章、水谷清画伯も同行する。

まず上海を本拠にして、南京・鎮江・杭州に行き、上海では樂善堂の跡、南京では中山陵を訪れ、杭州では徐錫麟・秋瑾の墓に詣で、西湖博物館では宋教仁・廖仲愷ら革命志士の写真を見、また上海で山田純三郎をたずねて兄良政や孫文の話聞き、錢瘦鉄宅では革命に参加した高漢声・周南専に紹介され、張一鵬・陶晶孫らに会い、辛亥当時からあった日本人旅館の女将の話聞き、南京では何海鳴から革命の体験談をうかがう。

ついで本拠を広州にうつし、その周辺および香港を訪れて、革命発祥の息吹きを肌で感じ、七十二烈士の墓に詣で、老広東と呼ばれる土居節・大塩伸三郎から辛亥前後の広東のことを聞き、香港では許崇智に会い、また広州・香港で宋慶齡や唐才常の子唐有壬の話聞く。ついで北京に移るが、ここでは橋川時雄・石橋丑雄・中野江漢らに昔のことを聞き、白堅・張騰霄・徐凌霄ら中国知識人と座談会を開いて、清末民国初年の話をうかがい、光明殿を訪れて、1873（明治 6）年副島外務卿が同治帝に謁見したときのことを思う。

なお書名の『梅花一両枝』は本書巻頭の随筆の題名、これは、1 月半ば湘南腰越に萱野長知を訪ね、中国旅行の旨を伝え、馮自由への紹介状をもらったことを記す。なお本書の挿絵は同行した水谷の画くところである。

沙漠の鶴：大陸俳句紀行／加藤楸邨著

東京 大日本雄弁会講談社 1948（昭和 23） 340 頁 〔10979〕

俳人である著者が 1944（昭和 19）年の 7 月から 10 月まで、陸軍報道部の派遣によって朝鮮半島経由で奉天－北京－張家口－大同－綏遠－トフミン－包頭－太原－開封－南京－蘇州－上海－天津－大連－新京－哈爾濱を旅した際の俳句と紀行文集。上海までの同行者には歌人の土屋文明・石川信雄がいた。著者らの派遣は、陸軍報道部長の秋山邦雄が著者の主宰する『寒来』の投句者であったことから実現したようで、このことは戦後、著者が戦争責任を問われる一因となった。「後記」には、「日本人の俳句を通じての中国理解に同情したまうあらんことを祈る。そしてその理解を通じて常時俳句を掲げて大陸に奔馳した私の意図を汲みたまわんことを祈る」との心情が吐露されている。

派遣されたとはいうものの、著者の旅は意欲的でエネルギッシュなものだった。戦時の緊張が高まる各地をめぐり、都市の情景や人々の姿を見、都度わきあがるように俳句をよみあげる。内蒙古のラマ僧院・トフミン廟への旅の記録は出色で、旅先にあらわれるモンゴルの大自然やエキゾチックな人々の描写は一篇の冒険小説のようである。本書のタイトルは祭りの近いトフ

ミンの沼に見た2匹の鶴からイメージしたもので、装丁には日本画家の川端龍子が伸びやかな鶴の姿を描いている。(辻直美)

**わが思い出（第1部:ゴビの砂漠をゆく・動乱の中国にて）／徳田球一著**

**東京 東京書院 1948（昭和23） 237頁 [8652]**

戦後の日本共産党書記長として有名な著者は、1920年代にコミンテルンの会議に出席するために、あるいは日本共産党の問題についてコミンテルンに相談するために3度ソ連へ出かけたが、それはいつも中国を経由する旅行であった。また、このほかに、コミンテルンやプロフィンテルンの駐在代表に会うため2度上海を訪れた。本書は、これら前後5回にわたった中国旅行を回想したものである。

第1回目の旅行の記録が本書の3分の2を占めているが、それは1922年1月に開かれた極東民族大会に出席のためモスクワへ赴いた際のことである。1921年10月初旬日本を出発し、上海へ向かった。船が黄浦江の河口へ近づくや、倉庫、石油タンク、工場や銀行などのビルディングが立並ぶ兩岸の風景に目を奪われている。上海から汽車で北上したが、途中、揚子江に停泊する日・英・米の軍艦、曲阜の駅の多勢の乞食と物売りを記憶に留めている。また、済南や天津で見た警備中の軍隊が無規律で持っている鉄砲も古いこと、そして奉天への車中では黒龍江省督軍が酒とマージャンで時を過していることから、軍閥戦争は兎戯にひとしいものだと結論している。ハルビンでは帝政ロシアを偲ばせる広い街に感じ入りつゝ、満洲里からソ連へ入る連絡をとるのに成功した。帰途は蒙古経由で、22年3月下旬にイルクーツクを出発し、キャフタ・クーロンを経て4月中旬に張家口に着いた。著者はこの間の沙漠の旅を詳述している。張家口については、これを石炭の集散地であり多量の毛皮や皮革の取引の町であると特徴づけ、南下の途中一瞥した北京については、近代都市とはみえないと述べている。このあと徐州までの体験と観察によって第一次奉直戦争の緊迫した状況を伝えている。

第2回目と第3回目の旅は上海渡航で、1925年1月にコミンテルン代表のヴォイチンスキーに、4ヶ月後の5月にはプロフィンテルン代表に会いに出かけた。この時は国共合作下に国民革命が進行中で、上海ではソ連総領事館などが町の中心部へ進出し、労働運動とこれを支援する学生運動が燃えあがっていた様子を伝えている。

第4回目はコミンテルン執委第6回プレナムに出席のためモスクワへ赴いた時のことで、1925年12月末の上海は孫伝芳の支配下に反動的空気が強まっており、翌26年6月に帰途立寄った青島は張宗昌の横暴な支配下におかれていた、と述べている。

最後の第5回目もコミンテルンへ行った時のことで、1927年3月19日に上海へ着いた2日後に始まった上海労働者の第3次蜂起について著者のとらえた街の空気を描いている。

なお本書には、これらの旅行中に会った張太雷ら中国共産党関係者のプロフィールも語られていて興味深い。

**1952**

**私は見て来た、ソ連・中共／高良とみ著**

**東京 朝日新聞社 1952（昭和27） 200頁 [3514]**

著者は参議院議員。1952（昭和 27）年 3 月末から 7 月にかけてヨーロッパ、ソ連、中国をまわってきた。ソ連、中国行きは予定外の行動であったので、当時大きな反響を呼び、その帰国報告は注目された。本書の前半はモスクワにおける国際経済会議に単独で出席したのち、ソ連国内を旅行した見聞記。中国には、6 月始めに北京で開かれたアジア太平洋地域平和会議準備委員会に前参議院議員帆足計、衆議院議員宮腰喜助と共に日本代表として出席するため入国した。会議後 6 月末まで中国に留まったようで、北京、上海を訪れた視察報告がある。北京では市内の改善された衛生状態、郊外農村の合作社組織など改革の模様、上海では人民法院における裁判のやり方を観察している。その他、新中国の婦人活動、大規模な治水、植林事業の実情がかなりのデータをあげて説明されている。

#### ソ連・中国紀行／帆足計著

東京 河出書房 1952（昭和 27） 366 頁 [3608]

著者は 1952（昭和 27）年 4 月 11 日、羽田を発って農業視察のためコペンハーゲンに向かった。同行者は宮腰喜助（改進黨代議士）と秘書 1 名。デンマークの農業実態を見聞した後ソ連に赴き、ここで高良とみと合流し、国際経済会議中国代表南漢宸の招待により中国に入り、5 月 15 日から約 1 ヶ月間北京を中心に上海、杭州、武漢、沙市、南京などを訪れた。また 6 月 1 日には日中貿易協定に調印した。本書の前半はコペンハーゲンとソ連の紀行文、後半が中国旅行と日中貿易協定についての記述である。北京や上海の生活状態、農村や国营機械化農場の視察、工場、学校、治水工事の見学、景勝地および演劇見物など多方面の記述のほか、新中国政権や党風の説明、南漢宸、沈鈞儒、冀朝鼎、雷任民、章乃器、劉寧一その他多数の人との会談の様子も含まれている。著者が本書で最も留意しているのは平和と貿易の問題のようで、アジア太平洋地域平和会議準備委員会に出席したこと、日中貿易協定に調印したことを記録するほか、平和と貿易の問題を、いろいろな文献やデータを引用しながら述べている。

## 1953

#### はたらくものの国：新中国をつくる原動力／西園寺公一等著

東京 理論社 1953（昭和 28） 222 頁 [4867]

5 部から成る。第 1 は 1953 年まで中国人の妻として四川省にいた井関けい子の体験記。第 2 は、1953（昭和 28）年 3 月アジア太平洋地域日本平和連絡会の労働者代表として、第 1 次帰国者を迎えに天津に赴いた山田長吉の労働者の眼で見てきた話。第 3 は、中国進出口会社の招きで 1952 年 12 月 19 日～1953 年 2 月頃まで訪中した東邦商会社長白木実の企業家としての見聞記。第 4 は、1953 年頃中国に行った参議院議員西園寺公一が、天津、北京の子供、学生、学びつつ働く人々の姿を中心に記したもの。第 5 は本橋渥が文献から調べて中国労働者の生活を記す。

#### 見てきた中国（世界風土記 1）／帆足計著

東京 岩崎書店 1953（昭和 28） 250 頁

著者は 1952 年 4 月、東南アジアからヨーロッパを経てソ連に入り、その後、モスクワ国際経済会議の中国代表南漢宸（中国国際貿易促進委員会主席）の招きで訪中し、約 2 か月間滞在

した。同行の高良とみ・宮腰喜助とともに第一次日中貿易協定（1952 年 6 月 1 日付）に調印し、またアジア・太平洋地域平和会議準備会にも出席した。「中国の旅」と題された前編は、北京・武漢・沙市・上海といった各地の見聞が中心であるが、北京郊外の農村訪問や長江の水利工事、また「解放後」中国における労働、教育の現状に関する事柄が多い。在華日本居留民との接触もあり、鉄道関係者との座談会のほか、満洲映画協会にいた持永只仁、森川和代とも対話している。後編の「日中貿易の現状と将来」は、中国国貿促主席南漢宸、秘書長冀朝鼎の印象にはじまり、モスクワでの事前交渉、北京での会談、日中貿易の現状について記述されている。付録として「貿易の手引き」「貿易用語解説」ほか、日本の対中及び中国の対外輸出入に関する品目、貿易額の一覧がある。分冊として同著者の『見てきたソ連邦』も刊行されている。

なお、その後の経済貿易交流に関連して 1972 年に刊行された『日中かけ橋の一記録：村田省蔵先生の偉業』（村田省蔵著・大阪商船三井船舶編）も参考となる。当時、日本国際貿易促進協会会長であった著者が 1955 年 1 月に訪中した際の記録であり、周恩来その他の要人との会見内容が記されている。中国国貿促では雷任民代理主席と会い、中国貿易代表団の訪日、見本市の相互開催、通商代表部の相互設置について合意した。（池田尚広）

## 中国／南博著

東京 光文社 1953（昭和 28） 202 頁 〔4847〕

1952（昭和 27）年パリで開催された社会心理学会に出席した著者は、帰途北京へ立寄って 10 月 2 日から 13 日まで開かれたアジア太平洋地域平和会議に出席し、会議後約 3 週間北京市内外の教育の実情を視察した。本書はこのときの中国旅行記で、著者は、中国、ソ連に対して『べたばれ』あるいは『食わずぎらい』になりがちな日本人の態度を批判し、公平、冷静に見学し記録したという。社会主義建設中の中国のあらゆる面における教育の実情が具体的にわかりやすく書かれている。なお最後に、平和会議の様子、種々の決議文が採択されるまでの過程を記し、附録として「北京平和会議の決議文」を収録している。

## 中国に使して：村山氏帰国歓迎午餐会記録／村山佐太郎〔述〕

東京 大日本水産会 1953（昭和 28） 31 頁 〔Q2039〕

著者は 1953 年 9 月 28 日から 11 月 3 日まで大日本水産会顧問として中国通商視察議員団に加わり、両国間の漁業問題について協議するため北京に滞在した。本書は帰国後の歓迎午餐会での関係者の挨拶や訪中報告を記録したものである。内容は、平塚常次郎（大日本水産会会長）、周東英雄（日本遠洋底曳網漁業協会会長）の挨拶、および「中国に使して」と題する村山の訪中報告、帆足計（衆議院議員）「貿易協定について」などからなる。著者は元函館高等水産学校校長で、当時は日米水産株式会社常務取締役を務め、日中漁業懇談会の幹事でもあった。このときの訪中の目的は、水産貿易の促進や、黄海における底曳網漁船拿捕問題について中国側と協議することであったが、10 月 28 日になってようやく中国紅十字会顧問の趙安博との面会が実現した。趙の対応は「今日の中、日両国の政情のもとに於ては漁業問題は文化の交流や経済交流の如きものとは違い極めて解決困難の問題である」と厳しく、「台湾の逆徒国民政府と外交関係を結んで居る」吉田政権に対する中国政府の対決姿勢を崩さぬものだった。「補足報告」は一転して中国社会の大変貌の話になり、街がきれいになったこと、蠅を見なかったこと、

売春婦がいなくなったことや、「北京にはドロボー・犬・猫がない。ホテル等で窓を開けっぱなしにしておいても、少しも心配がない」（31 頁）状況がくだけた口調で語られる。

（村田雄二郎）

## 1954

### 科学は平和を求めて／柘植秀臣著

東京 大日本雄弁会講談社 1954（昭和 29） 230 頁 〔XIV-1-44〕

著者の柘植秀臣は脳生理学者で、上海自然科学研究所や東亜研究所で活動した経験がある。本書は、柘植が 1953 年 11 月にウィーンで開かれた第 5 回世界平和評議会に参加した後、あわせてソ連と中国を訪問した記録である。日中関係史の観点からは、柘植がどのように「中国の科学者に会い、中日の科学交流の相談をした」のかが注目される。加えて本書には、中国は「解放後、（中略）組織上、思想上の準備活動の面での成果のほうが、科学研究活動の成果よりも大きかった」（原子核物理学者として著名な銭三強の言）という様子や、ある研究所の図書室には「ソ連の文献以外にも英米のものが非常によくそろえてあった」という柘植の観察が描出されており、当該期の中国における政治、外交と学術の関係を考える上でも有用である。

（吉見崇）

### 目で見たソ連中共／中曽根康弘著

東京 憲法調査会 1954（昭和 29） 62 頁 〔7030〕

憲法調査会主催による「ソ連中共視察帰朝講演会」の速記を編輯採録したもの。中国を扱ったものは 20 頁余である。この視察旅行は 1954（昭和 29）年のことで、約 2 ヶ月間、自由党から共産党までの各党代表が一緒に行っただろう。著者は当時改進黨所属の衆議院議員で憲法調査会の会員。1 時間ほどの講演の記録であるから、中国の政治、経済、文化、社会の諸事情が簡単に述べられているにすぎない。その結論として、ソ連、中共に対する日本の外交方針を導きだそうとしたものである。

### モスクワの異風客／西村直己著

東京 産業経済新聞社 1954（昭和 29） 206 頁 〔XII-3-A-251〕

著者の西村直己は静岡選出の衆議院議員（自由党）である。西村は中共貿易促進議員連盟のメンバーであり、1954 年 6 月にストックホルムで開かれた世界平和集会に出席し、その帰途にソ連、中国を訪問した。本書はその記録である。西村は、「共産政治に対しては、わたくしは、強い批判の態度をとっているし、また将来も、これを堅持して行くつもりである」としながらも、「消極的な“反共”や“防共”という立場から、一步進んで、（中略）“制共”即ちいわゆる共産禍に対してこれをコントロールして行く」姿勢を表明し、日本が「共産圏貿易へも、可能な範囲において、積極的に活路を開いて行かなければならない」と主張した。（吉見崇）

### マレンコフ氏の苦笑—ソ連・中国訪問議員団の手記—／松浦周太郎著

東京 全国木材組合連合会 1954（昭和 29） 233 頁 〔XII-3-A-250〕

著者の松浦周太郎は北海道選出の衆議院議員（改進黨）である。本書は、1954 年 6 月にスト

ックホルムで開かれた世界平和集会に出席した松浦が、その帰途にソ連・中国を訪問した手記である。本書には、国務院副総理である郭沫若との会見などが記録されているが、今後の日中間の経済関係をいかに築くべきかという松浦自身の考えが述べられているのも特徴である。それは松浦が木材会社を立ち上げるといった経済人の顔もあわせ持っていたからだろう。松浦は、「中国は農業と重工業の目的を持っている。我々も重工業と農業である。そこで両国が共に発展する線を考えなければならぬ」と説いている。(吉見崇)

**赤い歯車：ソ連・中共の産業を見る／松前重義著**

**東京 読売新聞社 1954 (昭和 29) 222 頁 [4466]**

科学者であり、衆議院議員である著者（現在、東海大学総長）は、この原子力時代にいかに平和を実現させるかを念頭に、1954 (昭和 29) 年 6 月から約 2 ヶ月間東南アジア、西ヨーロッパ、ソ連、中国を歴訪した。本書はその時の記録であるが、副題の示すようにその大部分はソ連、中国にあてられている。中国の部は今回の 10 日間の北京滞在と前年の国慶節前後約 1 ヶ月の北京滞在の記録をあわせたものであるが、いわゆる見聞録ではない。教育、農村と農業教育、国土開発、社会保障、思想統一運動の面から中国の現状を述べ、また中国進出口公司総経理廬緒章の中国貿易についての説明および郭沫若との会見記も収められている。

**わが真実への旅／柳田謙十郎著**

**東京 青木書店 1954 (昭和 29) 228 頁 [XI-4-130]**

著者はベルリンの「世界平和評議会特別会議」とストックホルムの「国際緊張緩和のための集まり」に出席することを目的に 1954 年 5 月に出国し、ヨーロッパ・ソ連の視察を経て 7 月 24 日から 8 月 4 日まで北京・天津・広州を訪問した。著者を団長とする平和代表団のほか、松浦周太郎を団長とする国会議員代表団も同じ時期にストックホルムの集まりを経て訪中している。著者によれば中国側の待遇は「どうも私たちのグループの方を第一のお客としてあつまっている様子がみえる」というもので、中国側の「平和」問題に対する重視が窺える。訪中期間は短いが、この間、中国紅十字会会長の李徳全から日本人戦犯釈放の意向がはじめて明らかにされた。中国の視察は天津の紡績工場や天津工業大学、北京郊外の永定河の水利工事など当時としては定番のものが多く、中国は同年 10 月に新憲法発布を控え、中国政法学会での懇談もアレンジされている。(池田尚広)

**1955**

**新中国見聞記／大谷瑩潤著**

**東京 河出書房 1955 (昭和 30) 143 頁 [3065]**

1954 (昭和 29) 年の国慶節に、安倍能成を団長とする中国学術文化視察団の一員として招待された著者の見聞記。国慶節前後の約 1 ヶ月間、北京をはじめ天津、西安、上海、杭州、広州の各地を視察したが、その旅程に従って見聞したところの社会施設、文教機関や都市、農村の生活の様子がよく紹介されている。特に宗教人である著者は、新中国の宗教のあり方に大きな関心を寄せているので、各地で寺院を訪れ、僧侶と会談し、宗教界の現状を知ろうとつとめている。また著者はこれまで中国俘虜殉難者遺骨の送還のためにつくしているもので、それについ

ての話会いの様子も見られる。同行者は次の 14 名である。安倍能成，阿部知二，奥野信太郎，貝塚茂樹，風早八十二，戒能通孝，倉石武四郎，近藤日出造，小沢正元，菅原昌人，碓伊之助，吉野源三郎，和達清夫，藤田敬三。

#### **前進する中国の農業協同組合／織井齊・坂井治吉共編**

**東京 東洋経済新報社 1955（昭和 30） 228 頁 〔3504〕**

1955 年の中国における農業協同化の現状を実地見聞してきた日本の農業団体の代表による報告。1955（昭和 30）年 4 月下旬から 6 月下旬にかけ、農協中央会，全購連，全販連，農林中金，全国金融協会，家の光協会等を代表する 13 名が，広州，武漢，北京，瀋陽，天津，無錫，上海，杭州，重慶，成都と広く中国各地を見てきた。その結果得られた農業協同化の三つの形，すなわち農業生産合作社（農業生産協同組合），供銷合作社（購買販売農業協同組合），農村信用合作社（農村信用協同組合）について詳細に語られている。実際に見学した報告のほか，全体的な現状を説明する資料，組織のしくみの解説などもくわしく，協同化の今後の展望も含まれていて，この年代の段階における中国農業協同化について知るのによい書である。代表団のメンバーはつぎのとおり。小川豊明（団長衆議院議員，全購連囑託），多賀谷松雄，織井齊，熊谷幸博，坂井治吉，厨大弐，富田金吾，船橋磯右衛門，池田恒雄，井野隆一，小林徹，佐藤剛弘，西村公克。

#### **中共拝見／門田勲著**

**東京 朝日新聞社 1955（昭和 30） 122 頁 〔3616〕**

著者は朝日新聞社の記者で，1955（昭和 30）年 7 月中旬から 9 月はじめにかけて，日本新聞放送中国視察団の一員として訪中した。この書は，北京の名所を見学し，上海の南京路を歩き，天津の公私合営の織物会社，国営の製紙工場を視察した時々の，著者の目にふれ，心を捕えた新しい中国の姿を，メモ的に項目別に列挙したものである。著者は，中国の新聞の特長を投書欄に見出し，また広大な中国大陸を旅しているうちに中国人の穏歩主義という国民性はこの風土から産出されたものかと感心する。しかし何よりも深く印象づけられたのは，撫順の戦犯収容所を訪れた時であると著者は述懐する。もうひとつ旅の思い出として著者に残ったものは，誇りと希望に燃えていた中国の青年たちであった。

#### **ソ連・中国の印象／桑原武夫著**

**京都 人文書院 1955（昭和 30） 264 頁 〔3414〕**

本書は，フランス文学者である著者が訪ソ訪中学術視察団に加わり，1955（昭和 30）年 5 月からソ連，中国を 3 週間ずつ見学した時の印象をまとめたものである。旅行中『朝日新聞』に書き送った通信，新聞社からのアンケートの回答，旅行後の講演記録，『世界』，『新潮』，『文藝春秋』に発表した記事が主となり，さらに新しく書き加えられた文も含まれている。両国の文化政策，大学，研究所の現状，文学，演劇，等に関する記述が多い。なお中国では，北京のほか武漢，重慶，成都も訪れている。

#### **ソ連・中国の旅／桑原武夫著**

**東京 岩波書店 1955（昭和 30） 64 頁 〔XI-4-129〕**



著者の桑原武夫は、京都大学教授を務めた仏文学者であり、父の桑原隲蔵は著名な東洋史学者である。1955 年、日本学術会議の会員であった桑原は、同会議のソ連・中国訪問団の一員として、両国を視察した。本書は、その訪問の過程で桑原自身が撮影した写真に、それぞれキャプションを付してまとめたものである。なお、桑原が視察の結果に基づいて執筆した「中国における文学研究の動向」や「中国における歴史研究」が、日本学術会議編『ソ連・中国学術視察報告』（日本学術振興会、1956 年）に収められているので、あわせて参照されたい。

（吉見崇）

#### 中国を見て／杉戸清著

出版地・出版者不明 1955（昭和 30） 38 頁 [4844]

著者は名古屋市水道局長で、1955（昭和 30）年 9 月から約 1 ヶ月訪中した。一行は六大都市議員と京都市長ら総勢 47 名で、北京、瀋陽、鞍山、撫順、天津、南京、上海、広州という順序で見学している。著者が上下水道、塵芥の処理などに特に興味をもって見学しているのが、本書の特徴といえよう。著者は最後に、新中国には強力な統制がしかれ、日本とは主義政策を異にしているが、人民の幸福を願う点に変わりはないと感想をのべている。

#### 黄河は青くなる：新中国紀行／鈴木充著

東京 黎明書房 1955（昭和 30） 225 頁 [4394]

15 名からなる日本新聞放送中国視察団は、中国新聞工作者聯誼会の招待で、1954（昭和 29）年 7 月 24 日から 9 月 3 日にわたり、北京を中心に天津、ハルビン、長春、瀋陽、撫順、鞍山、上海、武漢、広州の各地を視察した。本書はその視察団の一員であった著者が、現地から新聞社に送ったルポルタージュを集めたもの。前半はかつて著者がみた古い中国と比較しながら新中国の変化を印象記風に描き、後半はかかる変化の原因とこれからどうなるかについて述べている。その間に、著者は、周恩来、郭沫若、張奚若、李德全らとの会見を記している。

#### 中共見聞記／須磨弥吉郎著

東京 産業経済新聞社 1955（昭和 30） 220 頁 [4287]

著者は、1954（昭和 29）年国慶節に招待された国会議員各党代表団に日本自由党の代表として参加し、約 1 ヶ月、広州、北京、上海、瀋陽、鞍山、撫順などをめぐっている。本書はこの旅行の見聞報告であるが、単に見聞を記すだけではない。著者は外交官として長く中国に在留している。今回の旅行は 18 年ぶりの中国訪問で、古い中国と対比しながら変貌した新中国に対する印象、感懷を述べている。また傅作義、蔡廷鍇、齊白石、梅蘭芳など、政界、芸能・芸術界に旧知が多く、この旅行の際にも様々な人に再会してその消息を伝えている。特に、中国をめぐる国際問題——日中関係、中ソ関係、中英関係、台湾問題などについて著者の見解がかなりの頁をさいて語られているのが目立つ。写真のかわりに著者自身のスケッチが数多く載せられているのが面白い。

#### 中ソひとり歩き／辻政信著

東京 河出書房 1955（昭和 30） 273 頁 [4291]

各党代表 38 名から成る訪ソ議員団の一員として、中国経由でソ連を訪問した 1955（昭和 30）

年 8 月下旬から 40 日間の旅行記録。従って中国滞在は、訪ソの前後に通る広州、武漢、北京に約 10 日間のみ、中国視察は主な目的ではなかったから、その記録は僅か 30 頁があてられているにすぎない。著者は中国語もロシア語も話せるので、早朝や夜ひとりで街に出て通りかかる人々に職業、収入、戦争の経験を尋ね歩いた。これを公式の視察や会見の記録、感想と合せて旅行中毎日書きとめたのが本書で、「生々しい印象」という点に意義をもたせている。中国については全人民が新しい建設に集中して働き、自信をもっている点に感心し、ソ連と異り古い伝統の上に新しい文明を培養しようとする中国に親しみをもった。だが著者は、共産主義のモデルを両国の政治、経済、教育の上に発見することはできなかったと述べている。

#### ソ連と中国／南原繁著

東京 中央公論社 1955 (昭和 30) 145 頁 [4906]

1955 (昭和 30) 年の学術視察団に加わってソ連と中国を訪れた著者が、その時の感想をまとめたものである。旅行の全体を述べたものではなく、ソ連ではモスクワ大学 200 年祭に出席したことなど、中国では周恩来、郭沫若、そのほか一行の接待をしてくれた人々のことを書いている。さらに諸施設の視察結果を報告しながら、両国における政治と宗教、学問上の自由について著者の見解が披瀝されている。著者の詠んだ和歌も十余首おさめられている。

#### 中華人民共和国学術視察報告／日本学術会議訪中学術視察団

日本学術会議訪中学術視察団 1955 (昭和 30) 102 頁 [7203]

1955 年 6 月 3 日から 6 月 25 日までの学術視察団の報告書である。当時、日中間の学術交流が自然科学も含めて広範囲にわたって再開された。1950 年代半ばは、日本が中国からの学術視察団を受け入れた時期でもあるため、それぞれの記録を併読することに意味がある。

(中村元哉)

#### 保守党から見た新中国／山口喜久一郎著

東京 読売新聞社 1955 (昭和 30) 141 頁 [4083]

著者は、1954 (昭和 29) 年の国慶節に正式招待を受けた中国視察国会議員団の団長で、自由党代表者の 1 人である。視察団は議員 31 名よりなり、須磨弥吉郎、川上貫一、鈴木茂三郎らの名もみえる。一行は 9 月 26 日から 1 ヶ月、北京を中心に広州、瀋陽、鞍山、撫順、上海などを見聞している。本書の前半は中国各地の印象記で、万寿山、天壇などの見学、大学・工場・炭田の視察、日本人戦犯との面会の模様、周恩来との日中問題懇談、西湖の舟遊びの印象深さなどが語られている。後半は、新中国を視察して得たこと、すなわち政府の歓迎態度、労働者の実情、経済建設、農業事情、対日平和政策を論じている。この論は（前半の視察記も合せて）中国に対して非常に懐疑的で、中国に見習う点はほとんどないという。昔日の大日本帝国を懐かしんでいる感がある。最後に周恩来の対日方針演説が 19 頁にわたって載せられている。また同行した近藤日出造の挿絵が色彩りを添えている。

1956

#### モスクワ・北京・文学の旅／岩上順一著

**東京 河出書房 1956（昭和 31） 226 頁 [4983]**

著者は徳永直と共に 1954 年 12 月に開かれたソ連の第 2 回作家大会に出席し、その帰途、翌 55（昭和 30）年 2 月対外文化協会の招待で中国を訪れた。本書はこの時の記録であるが、いわゆる旅行記でなく、両国における文学界の事情だけを述べたものである。すなわち、著者らはもっぱら文学者と交流し、作家の生活、創作態度、文学者の組織とその活動などについて記している。中国では周揚、老舍、趙樹理、楊朔、白朗、秦兆陽らとそれぞれ会った時のこと及び北京の文学講習所について述べている。

**元軍人の見た中共：新中国の政治・経済・文化・思想の実態／遠藤三郎等著**

**東京 文理書院 1956（昭和 31） 221 頁 [4071]**

かつての中国に対し直接の敵対関係にあった元軍人が、毛沢東の招きに応じて、1956（昭和 31）年 8、9 月訪中した時の報告である。参加者中、遠藤三郎（陸軍中将）、土居明夫（陸軍中将）、堀毛一麿（陸軍中将）、犬飼総一郎（陸軍少佐）、景山誠一（陸軍大佐）、内野治嘉（陸軍少佐）、岡崎文勲（海軍大佐）、多田伊勢男（陸軍少佐）の 8 名が執筆しており、中国の政治、経済、貿易、国民生活などについてそれぞれの見聞と意見がのべられている。一行の中には主義思想が中国と全く反対の者も多く、当初は非常に警戒的な態度であるが、時間の経過と、熱心な質疑討論の中に次第に理解し合えるようになり、一日も早く国交が回復されるのを切望するというのが大半の結論のようである。一行の会った要人は毛沢東、周恩来、陳毅、彭徳懷などの最高指導者から、廖承志、趙安博などの中堅幹部にまで及んでいる。

**社会主義はどういう現実か：ソ連・中国旅日記／大内兵衛著**

**東京 岩波書店 1956（昭和 31） 198 頁 [4848]**

本書は 1955（昭和 30）年 5 月～6 月に日本学術会議のソ連中国学術視察団の一員として両国を訪問した著者の旅日記と報告文である。旅日記は 5 月 7 日羽田発から始まり、モスクワの学界視察と諸文化施設見学の模様が書かれている。北京入りは 6 月 4 日で、ここでも各学界の要人との会見記や北京・人民・中山・復旦大学訪問、経済研究所見学など研究機関、学者の消息を伝える記事が多い。主として北京と上海を視察し、帰途南京、武漢、広州に立寄っている。郭沫若、胡繩、狄超白、周恩来、陳毅、宋慶齡らと会談している。報告文では、ソ連、中国の経済発展及び経済学がいかなるものかを『経済学教科書』などの例を引いて平易に説いている。なお同行者は、茅誠司、桑原武夫、長田新、南原繁、菊池勇夫、名和統一、江上不二夫、宮地伝三郎、青山秀三郎、矢野勝正、浅見与七、野口弥吉、長谷川秀治、武藤完雄の 14 名である。

**ニコヨン世界の旅／大道俊著**

**京都 三一書房 1956（昭和 31） 156 頁**

著者は戦前から組合運動、闘争に参加し、3 度投獄された経験を持つ。訪中当時は自由労働組合京都支部の財政部長を担当していた。同書は 1956 年 6 月にハンガリーのブダペストで開催された世界婦人会議に参加した際の旅の記録である。同地のほかヨーロッパ各地、ソ連を歴訪し、最後に中国を訪問している。中国滞在は同年 7 月 15 日から約 2 週間、訪問地は北京・瀋陽・長春・天津・上海・武漢・広州である。児童病院や自動車工場、紡績工場、労働者の住宅、託児所の見学や「ハエ撲滅」の言説など、視察そのものは当時の中国観察のステレオタイ

プに近い。一方で、いわゆる知識人によって書かれた「よそゆき」の旅行記ではなく、「日雇のおばさんが、自分の見たまま、聞いたままを率直に語った」（編集部「あとがき」より）という通り、平易な言葉で率直に印象が語られる点が特徴的である。（池田尚広）

#### **社会主義の文化と教育／長田新著**

**東京 理論社 1956（昭和 31） 244 頁**

著者の長田新は、広島大学教授や日本教育学会会長を務めた教育学者である。1955 年、日本学術会議の会員であった長田は、同会議のソ連・中国訪問団の一員として、両国を訪問した。長田によれば、本書は、プラトン・カント・ペスタロッチでできた（長田の）目に映ったソ連と中国の印象記である。長田は「日本子どもを守る会」会長も務めていたため、中国の児童保健委員会のトップである宋慶齡（中国副主席、孫文夫人）とも会見しており、その様子も本書に収められている。なお、訪問団による報告書『ソ連・中国学術視察報告』（日本学術振興会、1956 年）には、ソ連の教育に対する長田の論考（「ソ連の社会教育」、「ソ連の就学前の教育—託児所と幼稚園」、 「少年ピオニール団と青年共産党連盟（Y.C.L）」）が収録されているので、あわせて参照されたい。（吉見崇）

#### **望郷・北京にありて：日本人の想える／亀田東伍著**

**東京 光文社 1956（昭和 31） 217 頁 [4846]**

1952 年 10 月、北京でアジア・太平洋地域平和会議が開催された。著者は同会議に出席するため日本政府の旅券を得ないまま訪中し、1958 年まで長期滞在した。中国第一のホテルに滞在し、必要に応じて自動車が用意されるなど、中国側からの待遇は代表団接待と同様に至れり尽くせりであったという。同書には執筆時における中国の見聞、歴史問題への見解、日本人の中国観、日本とソ連・中国・アメリカとの関係についてなど 17 編の文章（一部詩作）が収められている。日本代表団の訪中時には度々現地では対応にあたっていた著者だが、同書では美術評論家の北川桃雄（共立女子大学教授）に同行して訪問した大同・敦煌について触れている。

（池田尚広）

#### **先生のみたソ連・中国／菊地定則著**

**東京 淡路書房 1956（昭和 31） 220 頁 [4085]**

1955（昭和 30）年 6 月ヘルシンキで開催された世界平和集会に日本代表の 1 人として参加した後、ソ連と中国を訪問した著者の見聞記。もと満鉄の技術員であった著者は、みごとに転身した清潔な中国に仰天する。また北京の万寿山、故宮博物館等の見学や演劇観賞を通して文化遺産の管理保存にまで国家が非常な努力を払っていることに感心し、大衆の信頼を受けている政治についてあらためて考えている。著者がもっとも関心をもって見てきたのは教育事情で、十分な施設がある学校を見学し、教育に重点を置いている政治を見るにつけ、日本の現状と比較して暗い気持ちになると述べている。

#### **素顔の社会主義国：十人のジャーナリストは報告する／城戸又一編**

**東京 東洋書館 1956（昭和 31） 253 頁 [6119]**

1956（昭和 31）年 6 月ヘルシンキで開かれたジャーナリスト国際集会に参加した 10 人の日

本代表団が、帰途ソ連、中国、北朝鮮、モンゴル、ポーランドを歴訪した時の記録を分担執筆してまとめたもの。中国訪問は、中国新聞工作者聯誼会の招待によるもので、途中4日間の北朝鮮を含めて7月1日から8月6日まで滞在し、北京・長春・ハルビン・瀋陽・撫順・鞍山・上海・杭州・広州の各地をまわった。開けっ放しの監獄、予想外に発展している農業合作社、私企業の公私合営への移行と民族資本金家、十分に心のくばられている児童施設や養老院、人民の憩いの場となった西湖などに新中国のあり方を見ている。また、工業都市として発展しつつある東北諸市やすっかり清潔になった上海の様子も伝えている。

#### 五星紅旗の国／芦沢新二著

東京 三和新聞社 1956（昭和31） 162頁 〔7170〕

著者は鉄軌工業部門の青年実業家。北京市長彭真の招請による日本六大都市代表中国訪問団47名のうちの専門家代表として、1955（昭和30）年9月20日から10月20日の1ヶ月間にわたり北京・瀋陽・鞍山・撫順・天津・南京・上海・武漢・広州等の各都市を訪問した。対資本家政策に重点を置きながら新中国の経済政策を概観するとともに、日本人の旧支那観を正すという趣旨で新中国の日常生活一般にかんする見聞を雑録風にまとめている。巻末に代表団と周恩来の会談でなされた周恩来演説の全文が、通訳竹内実の訳で収められている。これは対日外交と国内政治の基本方針を述べたもので、29頁にわたっている。また著者撮影の写真が多数収められている。

#### おとなりの新世界／高木健夫著

東京 読売新聞社 1956（昭和31） 226頁 〔4865〕

著者は読売新聞社編集局次長。1955（昭和30）年7月下旬から9月初までの46日間、中国の新聞工作者聯誼会の招待により、日本新聞放送中国視察団の一員として訪中した時のルポルタージュ。北京が新中国を象徴しているとの考えから、著者の筆は殆ど北京に留っており、上海や東北地方の様子は僅かにふれられているのみ。戦前『華北日報』主筆として中国にあった著者は、旧中国と比較しながら労働者の国における人々の生活様式や風俗を述べ、また全国人民代表大会や北京市監獄の様子、中国の新聞の性格等によって新中国を描き出している。だが総じて著者はかつての中国に郷愁をおぼえるらしく、そのような描写があちこちに見られる。

#### 招かれて見た中共／橘善守著

東京 毎日新聞社 1956（昭和31） 206頁 〔4615〕

著者は毎日新聞の編集局次長で、過去約20年間、中国関係の部署にあった。1955（昭和30）年7月下旬より9月初まで日本新聞放送中国視察団の一員として、北京、上海、武漢、東北地方をまわって諸施設をみ、各界要人にも会っている。非常に混乱している日本人の中国観を是正し、ありのままの中国をとらえるという意図のもとに、全体はルポルタージュ風に描かれている。内容は第1次5ヵ年計画の途次にある建設の状況、思想改造、労働者や婦人の様子から外交政策、首脳部のポートレートまで、広汎にわたっている。著者は、物の見方や考え方、それをもたらす生活慣習の変化の大きさに注目し、訪中した日本人はこの気塊のものすごさに圧倒されるだろうと感じている。本書の最後の2章は、著者の日本工業クラブにおける講演要旨と中国を訪問して帰国した片山哲氏との対談の記録にあてられている。

**アジアはよびかける：日本国民につぐ十七人の報告／谷川徹三・石川達三著，村松梢風監修  
東京 青木書店 1956（昭和 31） 205 頁**

日本アジア連帯委員会により編成されたアジア連帯文化使節団の団員による 16 編を収める。使節団は随行含め 19 名で構成され、1956 年 4 月から 7 月までインド・エジプト・ヨーロッパ・ソ連・モンゴル・中国・北朝鮮・ベトナムを歴訪した。中国について記したのは木下恵介「中国の日本映画祭」、福田豊四郎「敦煌の覚え書」、加藤唐九郎「景德鎮窯を見る」の 3 編である。杉村春子、乙羽信子とともに日本映画祭に参加した木下によれば、映画祭は中国の 16 都市で一斉に開催されたものであり、「二十四の瞳」などが吹替で上映された。また中国の社会体制における映画製作事情について日本と比較している。

団員は次の通り。谷川徹三・杉村春子・石川達三・八田元夫・村松梢風・尾崎宏次・星野立子・花柳徳兵衛・松岡洋子・芥川也寸志・福田豊四郎・城戸幡太郎・今泉篤男・淡徳三郎・菊池一雄・本郷新・加藤唐九郎・渡辺義雄・木下恵介、（以下随員）佐藤重雄・北条四男・村松暎。巻末に 2 か月におよぶ行程がまとめられている。（池田尚広）

**お隣りは天国か：ソ連・中共見聞記／中外調査会編  
東京 新世紀社 1956（昭和 31） 223 頁 [7478]**

中外調査会がその研究会に招いた講師の講演をいくつかまとめたもの。中国に関しては、「お隣りの『天国』——新聞記者の中共見聞記」と題し、東京新聞編集局次長横田芳郎の講演速記全文とその質疑応答、及び同筆者の附録：中共ノート（東京新聞からの転載）がある。筆者は 1955（昭和 30）年 7 月下旬から 9 月初旬まで、中国の新聞工作者聯誼会に招かれた日本新聞放送中国視察団の一員として、広州・北京・東北諸市・漢口・上海を廻った。講演内容は個々の視察地紹介より、むしろ全般を通じて感じた印象、特にその全体主義国家における「力の政治」の印象について述べている。附録：中共ノートは、前者より具体的に各方面の仕組みを紹介して、各例に対するデータは詳しい。筆者はここにおいても、それらが巧妙な全体主義的施策の下にあり、教育の浸透していることに注目して述べている。

**右翼開眼：中共と日共／津久井龍雄著  
東京 拓文館 1956（昭和 31） 222 頁 [4735]**

戦前愛国革新運動に参画し、現在も「国論」の主宰者である著者は 1955（昭和 30）年 9 月より約 1 ヶ月にわたって六大都市代表団の一員として中国を訪れた。本書はその見聞記というよりも、共産主義社会と資本主義社会あるいは中共と日共の比較であり、著者の意図する日本改革の為の意見書でもある。現在の日本に絶望している著者は、新中国の颯爽たる雰囲気によって憂気を一掃し、日本を改革強化する上に中国に示唆的なことが多いと結論している。内容は新中国の原動力、農業・企業の在り方、軍備のこと、日本と中国の自由のこと、中共と日共の比較のほか、高木健夫、辻政信、桑原武夫、サムウオトンらの中国観の批判、日本民族主義の要請にも言及している。要人と会見し、各地を見聞しているようだが、それらの記述はほとんどみられない。

**演劇・北京－東京／戸板康二著**

**東京 村山書店 1956 (昭和 31) 266 頁 [4845]**

市川猿之助劇団 (61 名) は中国人民対外文化協会に招聘されて 1955 (昭和 30) 年 9 月 28 日から 1 ヶ月間、北京、上海、広州で 14 回の公演を行った。著者はこれに同行した。中国を旅行中に、日本の新聞に通信を送り、帰国後も幾つかの文を書いた。これに、翌 1956 年 5 月来日した京劇に関する記事、その他評論や随筆を集めてまとめたのが本書である。旅行中の猿之助のこと、その公演の様子とともに、4 つの演劇学校を見学し、京劇をはじめ話劇、越劇、粵劇、滬劇を見た時のことを記している。そして、中国で伝統の保存、俳優の芸の鍛練が重要視され、そのための配慮が十分になされていることを、著者は日本と比較して羨ましく思ったという。一行が非常に優遇されたことも含めて、この公演旅行の意義を高く評価している。

**中国農村をたずねて：訪華日本農業代表団の一員として／富田金吾著**

**東京 新紀元社 1956 (昭和 31) 175 頁 [4870]**

1955 (昭和 30) 年 4 月～6 月の 50 日間を、訪中日本農業代表団の一員として視察した中国紀行。著者は家の光協会からの代表者である。広州、武漢、北京、瀋陽、天津、無錫、上海、杭州、重慶、成都などの農村を訪問し、解放後の中国農業の政策、合作社運動や農民生活の実情を紹介している。前篇では、解放前の農民の悲惨な生活、農業生産・供銷・農村信用合作社の 3 つの合作社の説明、実地に見学した農村の状況が具体的にデータをあげて説かれている。後篇は、著者が各地で見聞き感じたことなどが紀行文的に書かれている。

**ソ連・中国学術視察報告／日本学術会議編**

**東京 日本学術振興会 1956 (昭和 31) 299 頁 [5079]**

日本学術会議は、1952 年 10 月の第 13 回総会で、ソ連および中華人民共和国との学術交流の途を開き、学術の興隆をはかる努力をすべきである、と決議した。日本学術会議は、まずソ連訪問の準備を始めたが、その過程でソ連訪問の帰途に中華人民共和国も訪問することが決まった。訪問団は 1955 年 5 月に日本を発った。訪問団の団長は茅誠司 (日本学術会議会長、東京大学教授) が務め、メンバーには日本学士院会員の南原繁 (東京大学名誉教授) や大内兵衛 (法政大学総長) も加わっていた。1955 年 6 月に北京に到着した訪問団は、3 つの班に分かれて、東北・南京・三河閘・上海・武漢・四川・広州を視察した。訪問団の中国に対する印象は、「大学・研究施設は建国なお日が浅いため非常に不完全であり、かつ教育面にも研究者にも人材が少〔な〕い」というものであった。本書の特徴は、当該期の中国における研究・教育制度や、研究施設・教科内容が詳細に紹介されているところであり、また訪問団のメンバーによる論考 (例えば、南原繁「世界観と政治」や大内兵衛「中国経済の発展」) が付されていることである。

(吉見崇)

**赤い国の旅人／火野葦平著**

**東京 朝日新聞社 1956 (昭和 31) 312 頁 [4984]**

1955 (昭和 30) 年 4 月ニュー・デリーで開催されたアジア諸国会議に出席した日本代表団 50 名のうち、28 名が中国を訪問した。一行は政治家、経済人、学者、労働運動家、婦人団体代表、医師、作家、詩人、宗教家と多彩な顔振れで構成されている。4 月 21 日中国入りし、広州、武漢、北京、瀋陽、撫順とまわった後、10 名が北朝鮮を訪問し、帰途南京、上海を経由し

ている。本書は、この団の一員であった著者の記録である。前に兵隊として、また報道班員として中国各地を歴訪した著者は、「自分の精神の問題としての旅行記、また一個の文学作品となるような魂の記録にしたい」と記している。内容はインド、北朝鮮、中国の部よりなり、大部分が中国で占められている。中山記念堂、農民講習所、大学、水上生活者、揚子江、工場、北京市内、天安門のメーデー、万寿山、北京監獄、天橋の商店、中央民族学院、撫順日本人戦犯管理所などを見学した様子が、著者の感慨と共にかなり詳しく書かれている。著者はたえず過去の中国と現在のそれを比較している。また滞在中の亀田東伍、中村翫右衛門に会ったことも各処にみられる。

#### **労働者のみた新中国／平田幸雄著**

**東京 長谷川書房 1956（昭和 31） 167 頁**

日本労働代表团 56 名は、中国総工会の招待を受けて、1955 年 5 月 1 日の北京メーデーに参加することになった。著者の平田幸雄は、この代表团の一員として、約 1 か月間、中国を訪問した。本書は、その記述内容と筆致からして、読み応えのある旅行記となっている。たとえば、当時の生活水準を示した物価情報は、研究者にとって有益だろう。また、東北（旧満洲）地方に残留した日本人へのインタビュー記録は、日中関係史研究を深める上で十分に活用されるべきものだろう。（中村元哉）

#### **元軍人団の中国訪問記／訪中元軍人団世話人会編**

**出版地不明 訪中元軍人団世話人会 1956（昭和 31） 131 頁 【Q29】**

日本の元軍人団が 1956 年 8 月 9 日から 9 月 15 日まで香港経由で中国を訪問した際の記録である。謄写版による印刷。団長は元陸軍中将遠藤三郎で、このときは 2 回目の訪中であった。前年 11 月～12 月の訪中で「毛主席並に周総理が元日本軍人の来訪を希望して居る」旨を受けた遠藤が呼びかけ人となって、戦後初めての元軍人による訪中が実現した。訪中団員 15 名の内訳は「参観人」13 名（金沢正夫・堀毛一麿・土居明夫・茂川秀和・岡崎文勲・景山誠一・眞山寛二・宮子実・町野誠之・犬飼総一郎・金子陸奥三・内野治嘉・清水廉）と「世話人」2 名（遠藤三郎・多田伊勢男）で、順に広州－北京－長春－瀋陽－鞍山－旅大（大連）－北京－蘭州－武漢－南京－上海－広州を巡った。この間、訪中団は自動車工場・製鉄所・造船所・タンク学校・戦犯収容所などを見学するとともに、各地で懇談会や講演会を行い、北京では周恩来、彭徳懷、毛沢東ら党政府の要人と会見した。第 3 章には「視察者の所見」として、訪中団全員の見聞記を収録する。また、付録として遠藤三郎「元軍人の観たる新中国」（初回訪中の視察談）を収める。（村田雄二郎）

#### **若い国古い国：教育者の見た中国／松永忠二著**

**静岡 静岡図書 1956（昭和 31） 【VI-7-A-40】**

本書は、東京大学教育学部長宗像誠也教授の「お隣の中国でおこなわれつつある偉大なことを、われわれに知らせてくれるのに役立ちます」という一文で始まる。著者は、静岡の教育者であり、中国教育工会の招待で日教組が派遣した教育視察団（1955 年 10 月下旬～同年 11 月下旬）に参加した 35 名のうちの 1 名だった。次の山田清人氏と同じ視察団に参加していた可能性が極めて高い。そのため、本書を山田清人『新しい中国の新しい教育』と比較して読み込



むと、当時の視察団の成果を客観的に把握できそうである。

本書の「あとがき」にある次の一節は、社会主義建設に邁進していた中国を過度に美化しつつあった当時の日本の中国観を突き放すものである。貴重な中国分析の一つかもしれない。「しかし中国の前途には幾多の難問題が山積していることも事実である。生活の向上が国家建設の情熱をわかす一つの源泉であるとすれば、経済建設の順調な発展は、この国の発展に必須な条件であろう。この成否が今の中国の存廃を決定するものともいえる。又この建設にあたっては膨大な資本が必要であろう。この資本をソ連圏の借款援助にのみ依存する事は不可能であろうし、このためには資本の蓄積が必要であるし、自然に人民生活の向上をも抑制する必要が生じてくると思う」。

(中村元哉)

#### 新しい中国の新しい教育／山田清人著

東京 牧書店 1956 (昭和 31) 206 頁 [VI-7-A-39]

著者の山田清人は、1906 年生まれのエducational scholar (国立教育研究所所員) である。本書は、その著者が日教組の派遣した中国教育事情視察団 (1955 年 10 月～同年 11 月) で見聞した内容をまとめたものである。

本書で特筆されるべきは、高等教育機関 (北京大学) のみならず、当時のあらゆるレベル、あらゆる種類の教育機関について記録を残していることである。専門学院 (農業機械化学院・中央体育学院・東北工学院・東北地質学院)、中等専門学校 (北京機器製造学校)、中学校 (北京女子中学・ハルピン第一中学)、小学校 (北京市第一実験小学)、幼稚園 (北海幼稚園・北京第一幼稚園) の視察内容はもちろんのこと、少数民族の教育機関 (中央民族学院)、大人の通う夜間学校、職場に設置された余暇教育のための学校、農業合作社と農村の学校、人民共和国に入ってから設置された新しいタイプの学校 (北京舞蹈学校) の視察内容についても克明に記録されている。あわせて、教員の養成システムや教員の生活実態についても記述がある。

本書には、中国共産党の宣伝内容が多分に含まれている。それでも、「教師生活の過去と現在」で紹介されている教員たちの記憶は 1940 年代から 1950 年代にかけての社会の実態の一部を生々しく伝えている、とも言えよう。

(中村元哉)

#### 音楽の旅：欧州・ソヴェト・中国／山根銀二著

東京 岩波書店 1956 (昭和 31) 287 頁 [IX-5-E-20]

著者はベートーベン研究などで知られる音楽評論家で、1955 年 2 月から 1 年半にわたる欧州、ソ連、中国への「音楽の旅」の記録である。日本では戦前から西洋音楽が普及していたとはいえ、戦後まもなくは、まだ外国旅行が身近な存在ではなく、音楽研究を専門にする著者ですら初の渡欧であった。神戸から貨物船アンデス丸に乗ってジェノバに上陸し、ミラノ・フィレンツェ・ダルムシュタット・パリ・ミュンヘン・アンスバッハ・バイロイト・ベルリン・ウィーン・ザルツブルグ・プラハをたずねる。ダルムシュタットやベルリン・ドレスデンなど一部の都市では空爆による破壊の跡がまだ生々しいが、欧州では音楽の復興が進みつつあった。著者は、イタリアのオペラ、バッハ音楽祭、バイロイト音楽祭、ベルリン音楽祭、ウィーンフィルの演奏会、モーツァルト音楽祭などを精力的にめぐりあるき、最新の音楽事情を渉猟する。そこでは、マリア・カラスやバーンスタイン、カラヤン、カール・リヒター、ブルーノ・ワルター、カール・ベーム、カルロス・クライバーらが活躍していた。十二音技法や無調性の音楽

も流行をみせていた。

現地の音楽界と交流するうちに、著者は日本の音楽評論家として認知されていく。だが、日本の音楽については、明治以後は西洋の模倣に全身全霊を傾け、自らが立脚してきた伝統さえも切り捨ててしまったのでは、と疑問をいただくようになる。そうした旅の途中でもたらされたソ連と中国からの招待は、著者の認識に新たな扉を開くことになった。ソ連では、対外文化協会の招きでモスクワとレニングラードを訪れ、ボリショイ劇場のオペラや国立モスクワ音楽劇場のバレエなどを観賞した。そのあと訪れた中国は、ちょうど「推陳出新，百花齊放」という芸術開拓キャンペーンの真っ最中だった。中国音楽家協会主席呂驥や馬思聰・孟波らに歓迎され、北京－天津－南京－上海－杭州－武昌－広州を周遊した著者は、北京の中国少年児童劇団・人民劇場・長安劇院・民族音楽研究所・北京師範大学音楽系、天津の中央音楽院・雑技団の曲芸、南京師範学校音楽系、上海の音楽学院・交響楽団・中央実験歌劇団など、豊富な見学プログラムをとおして、「無技巧にすぎると思えるほどの真実主義」で新しいものを創りださんとする中国音楽界のエネルギーに感化される。そして、北京の国際クラブで講演を行った著者は、「電子音楽のように形式主義的な表現におちいつてはならぬが、西洋の技法を全面的に否定してはならない。伝統を現代的なものへと成長させるべきである。新しい中国は音楽方針の樹立の点で見事に問題を処理している」として、伝統を基盤に独自の芸術をうちたてようと試みる中国の現状に評価を与えた。

(辻直美)

#### 新中国の労働事情：訪問記からみる労働組合法／横山利秋著

国鉄労働組合 1956（昭和 31） 106 頁 [5029]

著者は国鉄書記長（のち衆議院議員）で、1954（昭和 29）年 10 月日本労働代表 34 名と共に訪中した。本書はその視察記だが、主として中国労働運動とその背景を述べたものである。労働組合法の条文に従い、組合の定義、労働者の権利、労働保険、賃金、生活状況、文化教育、衛生施設、専従役員のことなど、中国の労働事情が諸データを加えて詳細に書かれている。一行は、北京、上海、瀋陽の各種工場、学校、合作社、病院、文化施設などを見学し、各処で懇談会も行っているようだが、具体的な記述はない。

#### 民衆の生活から見た中共／吉田東祐著

東京 東洋書館 1956（昭和 31） 203 頁 [12788]

著者の吉田東祐は本名を鹿島宗二郎といい、1927 年に東京商大を卒業した後、1936 年に中国に渡った。中国滞在中は、上海『申報』社の論説委員を務め、近衛文麿の密使として和平交渉にもあたった。1946 年に帰国してからは、愛知大学理事を務めるかたわら、1952 年から 1955 年まで香港やマカオで貿易業務に従事した。このような経歴をもつ著者は、「中国の人民が中共政権の下でほんとに幸福に暮らしているかどうかを確かめることはある意味で日本の今後の動向を知ることでもある」（4 頁）という問題関心を抱くようになり、中国を客観的に捉えるために、マカオ滞在中に中国情報を精力的に収集した。本書は、その成果である。

本書の結論は、次のとおりである。「中共の民衆がみな嬉々として建設に没頭しているかのような観察もあやまりだが、また反面に内心は不平不満でいっぱいだという見方も正しくない。それは人によりけり。今はっきり判っていることは、中共の建設と思想改造の成果があがるにつれて新生活に心から清新な喜びを感じずる人々がだんだん多くなってゆくということだ」（186

## 1957

**新中国みたま／愛知県第1次訪中平和親善使節団****名古屋 東海産業経済調査所 1957 (昭和 32) 117 頁 [8403]**

愛知県第1次訪中平和親善使節団の報告書。一行は、愛知県民各階層を代表する伊藤長光(東海産業経済調査所長)団長以下19名で、中国との親善をはかることにより世界平和に寄与しようと、中国人民保衛世界和平委員会(主席・郭沫若)の招待により訪中する。1956(昭和31)年11月27日東京を出発、団長以下11名は広州・武昌・北京・天津・西安・南京・上海・杭州を経て約1ヵ月で帰国、他の8名は更に東北の哈爾濱・長春・瀋陽・撫順・鞍山・旅大を視察、そのうち6名は朝鮮に赴き平壤・開城・板門店を訪れて、1957年1月21日に帰国する。

本書においては各階層を代表する参加者がそれぞれ専門の立場から視察した結果を報告している。例えば、製陶業者が製陶について、冷蔵製造販売業者が中小企業について、協同組合理事長が時計業について、商社社員が公私合営企業について、寺の住職が幼児教育と福利について、医師・薬剤師が医療について、教師が教育文化、新民主主義青年団、売春婦の更生について、家庭の主婦が家庭教育について語っている。

**新しき国 新しき教会：中国に使いして／浅野順一著****東京 日本基督教団出版部 1957 (昭和 32) 111 頁 [IV-5-162]**

著者は1957年4月下旬から5月下旬まで訪中した中国教会問安使節団(15名)団長である。帰国後各媒体に発表した数編が一冊にまとめられている。中国側の招請は中国三自愛国運動委員会主席呉耀宗である。「三自」とは、キリスト教会の自治・自養・自伝のことであり「すなわち教会が外国ミッションの支配から解放されて、自ら教会を治め、自らの経済において立ち、自らの力によって伝導する」という「解放」後の独立志向を指す。一方で、著者が中国の教会が持つ弱点を「共産主義国家に於ける教会の立つ神学的基盤の問題」「中国古来の精神文化との対決」という二点にまとめるように、共産政権における宗教信仰の在り方は当時の中国観察における一つの焦点であった。著者は観察において「解放」の成果を率直に認めながらも、教会が政府に同調的である現状について、「しかし国家が福音に反せざる政策を現に実行して良い成績を着々あげている今日、教会は国家に対して何を好んでいたずらに消極的批判的であってよかろうか」とその樂觀ぶりに疑問を呈してもいる。同書の後半には、三自愛国運動の指導者の一人である丁光訓(南京金陵協和神学院院长)が1956年に世界学生キリスト大会(於：西ドイツ)で行った講演の翻訳も収録されている。

(池田尚広)

**点・線・天：以前の中国と今の中国／草野心平著****東京 デヴィッド社 1957 (昭和 32) 216 頁 [4094]**

1956(昭和31)年9月から11月にかけて、中国の対外文化協会、作家協会からの招待を受けて、23名からなる日本文化人中国訪問団が新中国を訪れた。著者はこのときの副団長で、かつて広州嶺南大学(現在の中山大学)に学んだこともある。青春時代をすごした中国は、著者にとっては第二の故郷でもあって、この中国が、どのようにして新しい中国に発展したかに関

心をもって見聞している。特に希望して辺境のウルムチへ出かけたり、国慶節のパレードの力強さに深く心を打たれたり、嶺南大学時代の同級生に会い旧交を暖めたりしている。詩人の眼を通して見た今の中国は、著者にとっては、食物の種類が多く、寛容でユーモアを解する人のいる思い出の地と変らなかったようである。

#### 中共の放送事業視察記／田尻泰正著

出版地・出版者不明 1957（昭和 32） 67 頁

著者の田尻泰正は、東亜同文書院の卒業生であり、当時、朝日放送東京支社放送部次長を務めていた人物である。その著者が、梅益中国広播事業管理局長から日本民間放送現業者視察団が招待された際に、その団長として約 40 日間、北京－ハルビン－長春－瀋陽－西安－武漢－上海－杭州－広州などを訪問することになった。

この視察の主たる目的は、中国共産党がどのように放送事業を整備しているのか、ということだった。本書には北京放送局の番組一覧が掲載されており、一定の資料価値がある。しかし、それ以上に目を惹くのは、著者のジャーナリストとしての客観性を重んじる態度である。同書には、「昔のように極端な貧富の差はなく最低の生活は保障されている。だがもう昔のように自ら考え、自ら欲し、自ら行う自由はない。つまり中共は地獄でもなければ天国でもない」（59 頁）という一節がある。注目されるべき観察眼であろう。（中村元哉）

#### ソヴェト紀行／徳永直著

東京 角川書店 1957（昭和 32） 228 頁 〔5020〕

本書は、日本共産党員の作家である徳永直が、1954 年 12 月に開かれた第 2 回作家大会に参加するためソ連を訪問し、その帰途に中国に寄った記録である。徳永は、中国で郭沫若・茅盾・周揚・丁玲・老舍・趙樹理・蕭三・馮雪峰・田漢など多くの作家、詩人、演劇関係者に面会した。本書には、その様子が臨場感あふれる筆致で描かれている。（吉見崇）

#### 差し向かいの毛沢東：中共首脳部の肚を叩く／土居明夫著

東京 鏡浦書房 1957（昭和 32） 267 頁 〔3067〕

1956（昭和 31）年 8 月 9 日から 9 月 15 日まで、中国外交学会の招待による中華人民共和国訪問旧軍人団の一員として訪中した時の記録。一行は旧陸海軍の中将、大佐、少佐ら 15 名。著者は関東軍情報部長、上海第 13 軍参謀長など歴任の後、1945 年から 2 年間南京の国民政府国防部顧問を務めた人である。北京市の農業合作社、東北の工場、大連の海軍学校、上海中学などを視察したが、全般的に革命直後と比べて「雪融け」の状況にあり、中国独自の「東洋的」な道を進んでいると、著者はみている。だが本書の特色は、毛沢東、周恩来、陳毅らとの会見記録に全体の 3 分の 1 を使っていることである。著者の訪中目的は中国首脳部の肚を知り、日中友好の基盤の有無をみることで、この点を会談を通じて詳細に述べている。さらに著者の知り得たとする中国の対日観、対日政策の真意と著者の論が展開されている。同行者：遠藤三郎、金沢正夫、堀毛一麿、茂川秀和、景山誠一、岡崎文勲、真山寛二、宮子実、町野誠之、犬飼総一郎、多田伊勢男、内野治嘉、金子陸奥三、清水廉。

#### 麦積山石窟／名取洋之助著（写真とも）

東京 岩波書店 1957（昭和 32） 138 頁 [I-1-D-125]

日本のフォトジャーナリズム（報道写真）の先駆者・名取洋之助の撮影による麦積山石窟（以下「麦積山」）の記録。

名取が麦積山を撮影したのは 1956 年秋のことである。現甘肅省天水市の東南 45 キロの地点に位置する麦積山は、堆積した麦山に似ることからその名があり、高さおよそ 142 メートルの山の崖に 5 世紀から造営された 190 余りの石窟がある。中国では、1952 年から本格的調査が実施され、1954 年には調査報告（『文物参考資料』1954 年第 2 期および文化部社会文化事業管理局編『麦積山石窟』中国・文化部社会文化事業管理局、1954 年）が刊行されていた。撮影にいたる経緯は不明だが、長与善郎から石窟の存在を聞いたという。

名取は、魯迅没後 20 年記念祭（56 年 10 月 19 日、長与が日本側代表として挨拶）に日本作家代表团とともに参加し、その後一行と別れて天水に向かった。11 月 23 日から 25 日までの 3 日間、石窟の文物保管所長の部屋に泊まりこんで行われた撮影は、懸崖にわたされた梯子や栈道をつたいながらの危険と隣りあわせで、かつ写真機の故障で一部作業のやり直しをせまられるなど、決して楽な作業ではなかったが、後年「仕事の鬼だった」と評される名取の爆発的なエネルギーが、悪条件下での撮影完了を可能にさせた（小林勇「名取洋之助：爆発するエネルギー」『折り折りの人 第 3』朝日新聞社、1967 年、140-143 頁）。

本書には、石窟の塑像や壁画、また麦積山の山容を撮影した 80 余点のモノクロ写真が掲載される。「不思議なやわらかいほほえみをたたえた『アルカイック・スマイル』にひきつけられた」と名取は記しており、自然の光線を生かした塑像の写真は、序文を寄せる和辻哲郎に「推古仏の源流」を想起させた。写真家・木村伊兵衛によれば、名取は常に「それは何かと疑問をもたせること」にこだわっていた（木村伊兵衛「名取洋之助さんの足跡」『朝日新聞』1962 年 11 月 24 日、11 頁）。よって、本書の魅力はむしろ、懸崖にはりめぐらされた栈道、巨大な仏像の顔近くにまで無遠慮に打ち込まれた栈杭など、特異な石窟の容貌を捉えたカットにこそあり、おそらく名取の興味関心もそこにあったとみられる。

序文は和辻哲郎、巻末には、石窟全図、主要石窟の見取り図、鄭振鐸による解説（原文は『麦積山石窟』1954 年刊所載）、町田甲一による中国彫刻史年表、吉川幸次郎「杜甫『山寺』について」などがある。撮影通訳は葉渭渠がつとめている。（辻直美）

二つの中国はない：日中国交回復国民会議訪華使節団中国訪問記／日中国交回復国民会議  
東京 日中国交回復国民会議 1957（昭和 32） 131 頁

日中国交回復国民会議は、小畑忠良を団長として、1957 年 9 月 28 日から同年 10 月 31 日まで訪中した（北朝鮮への訪問日程も含む）。中国人民外交学会との「日中国交回復に関する共同声明」（同年 10 月 10 日）や周恩来総理・陳毅副総理との会談記録が収録されており、本書は一種の公的な記録とも言える。

本書の後半には、この訪中団に参加した個々人の感想が綴られている。「戦犯管理所を訪ねて」（土井裕信）には、古海忠之（元満洲総務庁次長）が服役者 30 名の共通の心境として次のように述べた、と書かれている。「われわれは日本の動向に深い関心をもっております。最近岸内閣が反中国政策をとっていることは非常に残念であります。（中略）私は岸首相とは友人として仕事を進め参りましたが、皆さんが帰国の節は“古河は変わった”と御伝え願います」。古海を古河と改変するような記述から当時の政治性その他を読み取るのか、日中関係史研究者

の手腕が試されるだろう。

(中村元哉)

**日中の国交回復へ：日本社会党訪中親善使節団報告書／日中国交回復特別委員会編**

**出版地不明 日中国交回復特別委員会／日本社会党教宣局出版部 出版年不明 180 頁**

**〔Q2030〕**

社会党訪中親善使節団（1957 年 4 月 10 日～4 月 26 日）の報告書である。団長は党書記長浅沼稻次郎、団員は日中国交回復特別委員会委員長勝間田清一、国際局長佐多忠隆、企画局長曾禰益、外交部長穂積七郎、日中国交回復特別委員会副委員長山花秀雄、政策審議会副会長兼事務局長成田知己、日中国交回復特別委員会事務局長佐々木良作、随員は米山雄治、佐藤拓弥である。報告書は「報告概要」「正式会談報告」「共同コミュニケ正文」「主要なる声明、挨拶、講演要旨」で構成されている。この報告書によれば、中国側と 9 つの分科会に分かれて意見交換したとのことである。その分科会とは、日中国交回復に関する基本方針、アジア並びに一般国際間に於ける共通の問題、日本と中国との経済提携、貿易の一層の促進、漁業に於ける協力、技術交流、文化交流、気象及び郵便業の協力、居留民の往来・遺骨の相互送還である。同報告書は、アジアの平和外交、すなわち「日中の貿易拡大、通商、漁業、定期航路の諸協定」から国交回復を成し遂げるとし、「すでに今日、中国を知らずして、中国を抜きにして、アジアの平和と社会主義的な経済建設を語る」のは「許されない」と訴えている。（中村元哉）

**生きていた教会・日本キリスト教代表中国問安使節団報告／日本基督教代表中国問安使節団報告書編集委員会編**

**東京 キリスト新聞社 1957（昭和 32） 80 頁**

1957 年 4 月 25 日から 5 月 20 日まで広州－武漢－北京－瀋陽－鞍山－撫順－天津－済南－南京－蘇州－上海－杭州を訪問した標題使節団の団員 13 名による報告。使節団は団長浅野順一、副団長植村環ら 15 名で超教派的に構成されている。滞在中は各地の教会や神学校訪問とともに刑務所、工場、橋梁工事、農村、史蹟、寺院、劇場といった一般的な見学が組まれている。執筆者によって訪中の感想はまちまちだが、教会と国家の関係についての記述は比較的多く関心の高さが窺われる。なかでも「新中国」建国当初において行われた教会関係者の弾圧については、宗教と政治の確執ではなく、あくまでも「反革命」に対する処置であったとの見解が貫かれているようである。一方で、YMCA の副総幹事李寿葆が「私たちは勿論マルキシズムのイデオロギーを信奉してなどいない」「ただししかし現在の政府の実際に行っていることを見ると、これが正しい政府であり、真に人民のための政府であることを否定できない」（井上良雄「中国における教会と国家」より）と語ったとあり、三自愛国運動がはじまって以後も宗教と国家の問題は依然難しいもののようである。附録として「中国基督教三自愛国運動委員会よりのメッセージ（一九五七・五・一五）」が収録されている。（池田尚広）

**新中国紀行：若い中国のモラル／林靈法著**

**名古屋 東海学園出版部 1957（昭和 32） 243 頁 〔4290〕**

1956 年秋、和平委員会主席郭沫若氏の招請により、愛知県訪中親善使節団が結成された。著者はその一員である。一行は貿易、産業、労働、医療、教育文化、宗教、婦人、青年等各界代表から成る 19 名で、1957（昭和 32）年 11 月 27 日から 12 月 28 日まで広州、武漢、北京、西

安、南京、上海、杭州を訪れた。本書はこの旅行記で、全体的にみて、教育文化・宗教方面の見聞が多く記されている。日記と断想の2章からなる。日記の章では、各地視察の模様、郭沫若、李德全、南漢宸等との会見のことが記されている。断想の章では、中国人民が如何に民族独立を全うしたか、中国革命と宗教の立場はどうか、中国の教育と日本の教育との比較などを述べている。また、著者は本書を通して中国人の社会主義に対するモラルの徹底に目をみはっている。

#### **中国考古学の旅：訪中考古学視察団報告／原田淑人編**

**東京 毎日新聞社 1957（昭和 32） 198 頁 [4866]**

1957（昭和 32）年、中国科学院の招待をうけ、日本考古学協会及び毎日新聞社共同主催の下に訪中視察団が組織された。団員は、原田淑人、杉村勇造、駒井和愛、水野清一、杉原莊介、関野雄、樋口隆康、岡崎敬、安保久武、杉本要吉の 10 名で、4 月 16 日から 5 月 4 日にわたり、北京、包頭、敦煌、酒泉、蘭州、西安、成都、洛陽、鄭州、安陽、済南、曲阜、南京、蘇州、上海、杭州、広州、長沙、武漢と広く各地をまわり、これらの地の考古学に関する研究所、博物館、発掘遺跡などを視察した。本書は参加者が分担執筆した旅行記で、巻頭には安保久武撮影の写真 30 頁がある。

#### **中国・十二の物語／丸岡秀子著**

**東京 池田書店 1957（昭和 32） 268 頁 [7596]**

1957（昭和 32）年 1 月 16 日から 3 月 6 日まで北京大学の招きで中国を訪れた時の記録。北京・西安・南京・上海・杭州・広州をまわったが、本書では、旅行の順序にしたがわず、著者の印象に残った話を 12 章に分けて書いている。かつて車夫であった人の話、民族資本家の話、総工会の婦人幹部から聞いた長征時の苦労や賃金問題、瞿秋白夫人楊之華と会ったこと、職業や結婚についての青年たちの考え方、主婦と家事労働の問題、婦人教師の話、土地改革から現在の高級合作社に至る農村の変化、著者の世話をした通訳の人たちの印象。著者は、農村婦人の問題や教育関係の分野で活動してきた人なので、自らの体験をも思い合わせながら、いろいろの階層の人たちと心のひだにふれるような話をしている。非常に人間的なあたたかみの伝わってくる本である。なお、宗像誠也以外の同行者は不明である。

#### **中国の農業／吉岡金市著**

**東京 東洋経済新報社 1957（昭和 32） 215 頁 [3619]**

現在、農業経営研究所を主宰する著者が、中国人民保衛世界和平委員会の招きで中国を訪問したのは、1955（昭和 30）年 4 月 20 日から約 2 ヶ月間である。本書はこの時の記録であるが、現地の視察（広州、武漢、北京、瀋陽、撫順、鞍山、天津、南京、上海、杭州など）と文献資料（『人民中国』の諸論文、『土地改革関係資料集』『毛沢東選集』『劉少奇著作集』『中国共産党第八回大会政治報告』など）をもとに書かれていて、旅行記というよりはむしろ農業の専門書に近いものである。まず新中国の農業の現状をあきらかにし、次に具体的に土地改革と農業協同化を中心に中国の農業の解放後の発展をのべている。本書が中国の農業と日本及びソ連の農業との比較において書かれているのも一つの特徴といえよう。

**新生中国を打診する／井上善十郎著****札幌 労働文化協会 1958（昭和 33） 217 頁 [4546]**

北海道の平和団体から選ばれた 14 名からなる平和と文化の北海道訪中使節団は、中国保衛世界和平委員会の招待を受けて 1957（昭和 32）年 9 月 26 日から 11 月 15 日まで中国を訪れた。著者はこの使節団の一員、北海道大学名誉教授、医学博士で、昭和 13～16 年に同仁会中支支部に勤務したことがある。本書はこの旅行の見聞録で、全体を公式訪問、産業、学校教育、医療衛生、社会文化施設、都市、名所旧蹟、演芸などの章に分けて、それぞれ訪問、視察した場所と係員から聞いた説明を詳細に記述している。一行は北京、南京、上海、天津、大同、東北地方、西安、蘭州と足を伸しており、本書全体に人文地理的な記述が多い。著者自身は解放前の中国と比較してその変化、現在の建設に驚き、未来に希望のある明るい新中国の社会に感嘆している。

**新中国の裏通り：社会部記者の見た中共／大隈秀夫著****東京 鏡浦書房 1958（昭和 33） 230 頁 [3955]**

著者は西日本新聞の社会部に勤務する人。1957（昭和 32）年の初めに中国を訪れた。訪問の資格や同行者などは本書に記されていないので不明。題名に「裏通り」とあるように、著者はできるだけ人民大衆の生活の中に入り、その結果とらえた社会主義建設途上に現われた矛盾、人民大衆の不満など、いわば新中国の暗い面を紹介している。売春婦や乞食の存在、数多い反革命分子、労働模範表彰という制度の行きすぎ、収穫の 4 分の 1 を税金として納めねばならぬ農民の生活、不備な小学校教育、人口増加の悩み等々である。くわしい旅程は明らかでないが、あとがきに 2 ヶ月間、1 万 5 千キロにわたる旅とあり、香港、広州、武漢、上海、北京、西安から東北地区の瀋陽、ハルビン、長春まで足をのびしている。

**新中国風土記／小宮義孝著****東京 メヂカルフレンド社 1958（昭和 33） 173 頁 [3393]**

国立予防衛生研究所寄生虫部長である著者が、住血吸虫病の予防及び治療対策の援助のため、1956（昭和 31）年 9 月末から約 2 ヶ月半、中国に赴き北京、上海、南京、武漢、広州の視察調査を行った。視察の中心は住血吸虫病であったが、むしろ新中国の医学教育制度に興味をもって見学しているようである。本書はこの時の記録である。終戦前約 15 年上海に住み、もとの上海自然科学研究所（今の中国科学院）に勤めていたので、中国への郷愁が強い。したがって本書でも、古い中国と新しい中国を常に対比させ、古い中国の面影が段々失われて行くのを淋しく思っている。しかし同時に新しい中国の発展に目を見はっている様子がうかがえる。著者の撮した写真も多くのせられている。

**点描・新しい中国：1957 晩秋／中島健蔵著****東京 六興出版部 1958（昭和 33） 166 頁 [2506]**

著者夫妻は日中相互の友好と理解を増す目的で中国に招聘され、1957（昭和 32）年 11 月 6 日から 19 日にかけて北京、天津、広州を訪れた。本書はその随筆風の旅行記で、著者自らの



撮った写真が豊富におさめられている。

**写真集 見てきた中国／濱谷浩著（写真とも）**

**東京 河出書房新社 1958（昭和 33） 122 頁 〔2505〕**

著者は、新潟県高田市（現上越市）を拠点に活躍し、写真界のノーベル賞と言われるハッセルブラッド国際写真賞をアジア人として初めて受賞するなど国際的評価を得た写真家。1956 年に日本文化人中国訪問団の一員として訪中した際に撮影した写真集である。「あとがき」によれば、できるだけ「ふだん着」の中国を紹介したという。雑踏にあふれる大衆、人びとの生活の断片など、新旧が雑多に入りまじる「新中国」に生きる人間がテーマである。百花斉放・百家争鳴の時代だったこともあり、国境・軍事施設の撮影は禁止されたが、他はほぼ著者の希望がかなえられたようだ（毛沢東に会いたい、との願いだけは実現しなかった）。万里の長城・紫禁城など歴史遺産に始まり、広州・上海・西安・杭州・蘭州・カザック部落・ウルムチ・北京で撮影された町並みや人びとの暮らし、最後に国慶節のパーティ（北京飯店）と園遊会（頤和園）の模様を収録する。毛沢東の中国共産党第八次全国代表大会挨拶（抄）も掲載。序文を井上靖、装丁を洋画家の高橋忠弥が手がける。（辻直美）

**私は中国の兵隊だった／春野鶴子著**

**東京 学風書院 1958（昭和 33） 245 頁 〔4555〕**

本書は 1938 年以來 9 年間に日中戦争中の上海で過した著者が日本敗戦後の混乱の中で経験した特異な体験を綴ったもので、新中国旅行記といえるのは最後の約 20 頁ほどの部分のみである。旧い中国を離れて帰国後約 10 年以上すぎた 1957（昭和 32）年に日本各地の婦人代表の一人として招待され、再び中国を訪れた、その時の見聞記である。記述は著者のよく知っていた上海、演劇などにかぎられているが、旧来と面目を一新した新中国の様子が述べられている。

**人民の国々を訪れる／藤岡三男著**

**東京 出版者不明 1958（昭和 33） 118 頁 〔4557〕**

本書は、1956（昭和 31）年 10 月 31 日から 12 月 23 日にわたるソ連、西独、中国訪問記。一行は著者を含めて日本労働組合総評議会の代表者 5 名。旅行の目的は、ソ連社会主義革命 40 周年記念祝典に参加すること、西独の国情を見ること、中国総工会第八次全国大会に出席し、日中両国労働者の友好、親善をなすことにあった。一行は 11 月 28 日に北京に入り、総工会の大会に出席したのち、京劇をみたり、近郊の農村合作社を視察した。次に東北地方の瀋陽、撫順、鞍山の機械工場、炭鉱、製鉄所を訪れ、労働者の労働条件、生活状況、教育、住宅、福祉施設などの視察を行っている。また上海では公私合営の状態をみ、杭州の西湖、武漢、広州を歴訪している。「中国労働組合同規約」と「第二次五ヵ年計画における労働者の任務」の 2 資料が附録されている。

**新中国の横顔／村瀬玄妙著**

**京都 潮音舎 1958（昭和 33） 2 冊 〔4593〕**

黄檗 49 代山田玉田の印可証明を禀けている著者は、日本仏教徒代表訪中仏教親善使節団の一員として 1957（昭和 32）年の 9 月から 10 月にかけて約 40 日間、仏教関係の史跡などを中

心に、中国各地を旅行した。本書はこの旅行記である。訪問した各地における仏教の現状を、ユーモアのあるエピソードをおりまぜながら、豊かな感受性と好意的な批判とで、ある時は叙事的に、ある時は抒情風に記し、共産主義政権の成長と仏教の発展とは決して矛盾しないと結論づけている。著者撮影の写真が豊富におさめられている。

**新中国の農業見聞記／山田登・山本秀夫・南郷茂重共著**

**東京 農林水産業生産性向上会議 1958（昭和 33） 167 頁 [3126]**

1957（昭和 32）年 6 月末中華全国自然科学専門学会聯合会の招きにより、2 ヶ月間中国平原地帯の農業事情を視察した見聞記である。視察団は総勢 50 人で、国会議員、大学教授、農林省技術関係官、県農業試験場長、新聞論説委員、製造会社技術者等各方面の専門家を網羅している。一行は北京、南京、上海、天津、杭州、瀋陽、長春、ハルビン、広州をまわり、各地の合作社、国営農場、研究所などを広範に視察している。本書は土地改革、農業の集団化はどのように行われているか、農作物増産のためにどのような措置がとられているかという問題を軸として書かれた見聞記で、沢山の写真、図表を親切な解説をそえてのせている。

**1959**

**中共見たまま聞いたまま／大森繁著**

**東京 日刊労働通信社 1959（昭和 34） 175 頁 [4093]**

本書は、元陸軍中佐の中国記録である。著者の大森繁は、終戦直後にソ連軍に捕まり、ソ連とモンゴルの収容所を転々とした後、1950 年 7 月に中国（撫順とハルビン）の監獄に移されて、1957 年夏に満期釈放となった。

著者は、当時としては分かりやすい文体で、以下のように述べている。これもまた当時の日本における中国観の一種として記憶されるべきであろう。

マルクス・レーニン主義の中のよい所や、又中共のとっている政策中の長所で、日本の伝統、国情、民情にかなった点は、大いに日本にとり入れて然るべきであると思うが、その取捨選択については、十分研究した上で、慎重にやらなければならないことだろうと思う。

殊に形式上は一応民主主義であり、人民の自発的意思によって、何ごともすすめられるようになっているが、その奥になにかおもしろい、くらいものを感じることがあることは、大いに考えさせられた。

我々の日本はあくまでも明朗な社会でありたいものだと思う（4-5 頁）。（中村元哉）

**新中国のあしおと／近藤康男著**

**東京 中央公論社 1959（昭和 34） 312 頁 [2751]**

著者は 1957（昭和 32）年の 10 月から 11 月にかけて、東京大学山崎不二夫教授、東京農工大学近藤頼己教授、京都大学赤井重恭教授及び鹿児島大学小林嵩教授と共に、北京、天津、南京、杭州、広州等を訪れ、これら諸都市近郊の農業合作社を視察した。本書はこの時の記録であって、合作化の過程、合作社の組織、合作化による生産力の向上等が著者の見聞を通してよくうかがわれる。なお著者が訪中の時はまだ人民公社は出来ていなかったが、本書執筆の頃は

既に人民公社が出現しているので、それと合作社との関連も述べられている。

**新中国見学記：一教師の視察報告／田中剛著**

**東京 理論社 1959（昭和 34） 173 頁〔Q2038〕**

著者は東京商科大学（現在の一橋大学）教員養成所を卒業した中学教諭で、訪中時は鳥取県中学教職員組合書記長だった。本書はその著者が 1957 年に日本教職員組合海外教育視察団の一員として、約 50 日間訪中した際の視察記である。恩師上原専禄の紹介で本書を上梓することになったという。本書の記述から察するに、著者は戦前中国で教職につき、満洲にも一時滞在しており、敗戦後引き上げたという経歴を持つ。そのため、中国語の会話が少しできたようだ。視察団の旅程は、バンコク－ラングーン－昆明－北京－瀋陽－撫順－鞍山－長春－ハルビン－西安－南京－上海－杭州－広州で、北京では周恩来の接見もあった。最も長く滞留した北京では、鉄路学院・中央民族学院・北京監獄・中華全国総工会・北京体育学院・北京師範学院・北京大学・故宮博物院・農業生産合作社・中国教育工会・新民主主義青年団を訪問している。全体として、訪問先は大学や小中学校などやはり教育関連の施設や組織が多い。視察団がハルビンに来たことを新聞で知った残留日本婦人約 50 名が視察団に会いに来たなど、印象的なエピソードも記される。筆者は中国人の通訳の姿にも場面場面で注意を向ける。「中国では私的な会話は別として、公的な会話は、どんなに日本語のできる人でも、絶対に日本語を使わない」（33 頁）とは、戦前に日本と関係のあった中国人が置かれていた微妙な立場をうかがわせる観察である。

（村田雄二郎）

**私の中国旅行／野上弥生子著**

**東京 岩波書店 1959（昭和 34） 207 頁〔3138〕**

著者は中国対外文化協会、中国作家協会の招待で、1957（昭和 32）年 6 月 2 日から 1 ヶ月余にわたり、広州、北京、大同、延安を旅行した。本書はこのときの紀行文で、古い中国の文化遺跡と新しい中国の民衆生活——例えば広州の水上部落や北京の工場、風呂屋、刑務所、雲崗の摩崖仏、延安の大礼堂、毛沢東の洞窟の部屋、辦公庁など——がよく描かれている。毛沢東、朱徳ら中共首脳者の逸事や性格にも触れられているが、全体的には政治、外交を前面に持ち出さぬ文学的紀行である。

**モスコ－・北京：訪ソ・訪中国民使節団の思い出／野溝勝著**

**東京 日本農林水産経済研究所 1959（昭和 34） 79 頁〔4213〕**

著者は社会党の代表として 1955（昭和 30）年 8 月の訪ソ議員団に参加した。訪ソの行き帰りに立寄った中国では、日中貿易問題について雷任民等と、抑留者問題について李徳全らと話し合い、また国慶節参列後、周首相と台湾問題、貿易、戦犯問題等について会談した。本書はソ連篇と中国篇に分れている。中国篇には、前記各要人との会談が各問題を整理しながら、要領よく記されている。また、抑留、戦犯のことは人道上の問題であるとして、両国に特別な扱いを望んでいる著者の主張は、全編にみなぎっている。巻末にスナップ集が附録されている。

**セールスエンジニアの見た中国／福山秀夫著**

**東京 新読書社 1959（昭和 34） 260 頁〔3615〕**

著者は、1958 年広州と武漢とで開かれた日本商品展覧会へ派遣された事務局、商社、メーカーの代表 120 名の 1 人（オルガノ商会代表）で、中国滞在期間は 1958（昭和 33）年 2 月 16 日から 5 月 26 日である。本書はその見聞録で、両展覧会のこと、展覧会のあい間に見た広州、武漢の製糖、製紙、製鉄等の工場、発電所のこと、展覧会終了後視察した北京、長春、瀋陽、鞍山、天津、上海、杭州のことが記されている。

**訪中所見／古井喜実・井出一太郎・田林政吉著**

**出版地・出版者不明 1959（昭和 34） 104 頁 〔7010〕**

松村謙三に随伴して 1959 年に中国を訪れた衆議院議員の古井喜実・井出一太郎、日本長期信用銀行役員の田林政吉による訪中記。松村一行は、著者のほか、竹山祐太郎や田川誠一、報道関係者 7 人などで構成される計 17 人。一行は、1959 年 10 月 18 日から 1 か月半にわたって中国に滞在し、中国の要人と政治会談を行ったほか、北京－西安－蘭州－三門峡－洛陽－重慶－昆明－成都－武漢－上海－杭州での実地観察を通じて、中国の国家基本建設や経済計画などについて政策調査を行った。この見聞に基づき、石橋内閣で農林大臣をつとめた井出が農業生産と人民公社の部分、金融を専門とする田林が工業生産、国内商業、対外貿易について、その他は古井喜実が執筆を担当している。総括として、「中国の建設はめざましく、共産主義への賛否・好悪は別として、それは素直に認めなければならない」とし、中共政権についても「基礎はむしろ強化されつつあり、国内の困難や矛盾で崩れる兆候は見あたらない」として、「新中国」の基盤はもはや揺るがし得ないことを指摘している。そして、「中国は日本に対し、友好関係を望んでいる。今日の日中関係は誰が考えても不自然であり、何時の日かこの姿は是正されなければならない」と、関係改善に向けた日本側の努力の必要性を提唱している。

（辻直美）

**上海にて／堀田善衛著**

**東京 筑摩書房 1959（昭和 34） 208 頁 〔15736〕**

堀田善衛は 1945 年 3 月から上海に滞在し、終戦後は中国国民党宣伝部に留用され、翌年 12 月日本に帰国した。本書は、1957 年 10 月の日本文学者代表団で上海を再訪した後に書かれたものであり、戦中戦後の上海滞在時の回想を含む。

代表団団員は堀田のほか中野重治・井上靖・本多秋五・山本健吉・十返肇・多田裕計だった。滞在したのは 10 日前後だが「第一日目を除いては、ほとんど計画されていた見学には参加しないで、ひとりで町の三輪車を拾い、電車、無軌道電車〔トロリーバス〕に乗り、あるいは徒歩で、勝手知った町々を歩き回った」。代表団が宿泊した錦江飯店が、かつて日本の十三軍司令部のあった建物ではないかと若い中国人通訳に尋ねた堀田は、「むかしのことは知りませんね」と返され、この青年が敢えて知らないことにしているのではないかと自問する。一方、復旦大学で堀田自身が上海の「属性」と認めてきた乞食・淫売・浮浪者・失業者・ギャング・泥棒・スリ・カップライ・外国人・外国兵の話をしたところ、若者にはまるで理解されず、確かな時間の経過というものを実感させられてもいる。

再訪時の上海について印象を述べる時、かつての工場労働者や子どもの窮状が改善された現状を実見しながら、堀田は自身の感じる「都会の魅力」には“貧窮”というものがついて回っていた。こうした終戦前後と 1957 年の再訪を行き交う堀田の所感に「惨勝・解放・基本建設」

を経て変化著しい上海に対する内面の複雑な心境が現れる。また終戦翌年に堀田は戦中の対日協力者とされた中国人の死刑執行を目の当たりにしているが、「敵」と「味方」と「漢奸」の、この三者の流した血が沈んで行って、その上に更に、解放のために流されなければならなかった血が加わり、歴史という、どろどろのアスファルトか、溶岩流のようにもどす黒い、すさまじい「ママ」ものが目に見えて来るようになって行った」と述べている。戦後派作家として知られる堀田の原点には戦中から戦後にかけての上海での体験があるとされるが、同書は自身と中国人との間にある戦争責任を孕んだ個人の自省と占領当時の上海に対するノスタルジーを断片的に伝えている。

(池田尚広)

## 1960

### 文学者のみた現代の中国・写真集／木村伊兵衛・中島健蔵編

東京 毎日新聞社 1960 (昭和 35) 120 頁 [3027]

1956 年から 1959 年にかけて訪中した文学者が自ら撮影した写真が収録されている。「あとがき」(中島健蔵)によれば、1960 年 3 月に東京の数寄屋橋で写真展が開催された(日本文芸家協会、日中文化交流協会主催、富士フィルム後援)。明確に記されていないが、同書は同展出品作の抜粋であろう。展覧会の選にあたったのは写真家の木村伊兵衛・渡辺義雄・田村茂、撮影者は青野季吉・井上靖・宇野浩二・江間章子・小田嶽夫・草野心平・多田裕計・十返肇・中島健蔵・中野重治・野上弥生子・堀田善衛・本多秋五・山本健吉の 14 名である。撮影場所は北京・上海・武漢・広州のほか、蘇州・重慶・延安・新疆ウイグル自治区・蘭州など地方各地を含む。後半は各撮影者による散文(一部詩作)である。

(池田尚広)

### 江南画冊／小杉放庵著(絵と文)

東京 東峰書院 1960 (昭和 35) [8866]

附(別添)：江南の回想 中央公論美術出版 1962 (昭和 37) 12 頁

画家・小杉放庵が 1940 (昭和 15) 年に江南地方を旅した際のスケッチ集。刊行に合わせて執筆されたと思しき回想録の小冊子が添付されている。この旅は前年に設立された華中鉄道の招きによるもので、同行者にはおなじく画家の石井鶴三・田中青坪らがいた。4 月 5 日に東京を立って上海に向かい、それから揚州－南京－蘇州－嘉興－杭州－蕭山を巡っている。

洋画のみならず、日本画に漫画に挿絵にとマルチな才能を発揮した放庵だが、その根底には漢学的な世界への憧憬があった。生涯で幾度も中国を旅し、懐古趣味に基づく理想の「支那」を描くとともに、伝統を基軸にすえた新しい南画の開拓にも取りくんだ(佐藤志乃「近代日本画家の「支那」イメージ蘇州を描いた作品を中心に」大観記念館館報 23 号、2007 年など)。本書に掲載されるスケッチの多くは、漢詩文にうたわれるような江南の河川や庭園をテーマとする。精神においても文人的な旅を理想にしたとみえ、上海事変の爆撃で損壊した街の光景を「家は全壊にあらざれば四壁骨立、春なれば雑草萌え居れ、其間に焼け煉瓦片寄せて、菜大根青く麦は早く穂となり居れり…」と、松尾芭蕉の『奥の細道』「平泉」にみられる無常観を踏襲するかのよう記す。戦線が近く、警戒の高まる杭州にあっても、放庵は西湖をめぐり、「いにしへの西施が国の春なれや夕かすみしてさしのぼる月」と現実とは隔絶した世界で歌をよむ。リアルな戦況とは一線を画した泰然たる態度が、本画冊の大きな特色となっている。(辻直美)

## **建国 10 年中国は躍進する／国慶節祝賀訪中日本代表团**

**東京 日中国交回復国民会議 1960（昭和 35） 190 頁 〔4868〕**

1959（昭和 34）年の建国 10 周年国慶節に招かれて、日中友好協会など 70 余の民間団体から推薦された 30 名が日本代表团として式典に参加した。団長は片山哲。約 1 ヶ月滞在し、式典参列後、西北・西南コース（西安－成都－重慶－武漢）と東北コース（ハルビン－長春－瀋陽－鞍山－撫順）の 2 班に分れて視察旅行をしている。本書は、式典、人民公社、婦人問題、科学、技術、教育、文字改革、司法問題などの各分野について団員 25 名が分担執筆した見聞録 16 篇を収める。その他一行が滞在中調印した共同声明などの文書、及び周恩来の論文「偉大な十年」、代表団の出席した経済問題、農業問題に関する座談会における中国側の報告 2 篇の全文翻訳が載せられている。一行の旅程はあとに附された行動日誌にくわしくうかがえる。

## **訪中 1 万 5 千キロ：変貌する新中国の奥地を行く／田川誠一著**

**東京 青林書院 昭和 35（1960） 232 頁 〔4907〕**

松村謙三を団長とする訪中国が周恩来総理の招きを受けて、1959（昭和 34）年 10 月 19 日～12 月 2 日まで中国を訪問した。本書は、松村謙三の秘書として随行した著者の日記。同行者は竹山祐太郎、井出一太郎、古井喜実ら自民党代議士、新聞記者 7 名を含む 16 名である。広州、北京、蘭州、西安、三門峽、洛陽、昆明、成都、重慶、武漢、上海、杭州と広く各地をまわって、工場、人民公社、学校、建設中のダム、遺跡などを見学している。これらの見聞が克明に記録されており、同行記者による座談会や中国の各機関の役員名簿、簡体字一覧表も附されている。

## **中国の旅／中野重治著**

**東京 筑摩書房 1960（昭和 35） 254 頁 〔3146〕**

1957（昭和 32）年 10 月末より約 1 ヶ月間、中国作家協会と中国人民対外文化協会の招待をうけて第 2 回中国訪問日本文学代表团が訪中した。メンバーは山本健吉、井上靖、十返肇、堀田善衛、多田裕計、本多秋五と著者の 7 人。中島健蔵が北京で途中参加し、11 月 10 日に発せられた共同声明にも加わった。本書は、著者が帰国後 3 年間に『新日本文学』、『アカハタ』、『近代文学』等に掲載した文を集録したもので、日程の順を追って書かれた旅行記ではない。北京、上海、杭州、重慶、成都をまわり、北京大学では日本文学についての講演をしたが、それらの印象や思い出をエピソード風に書いて面白く読める。いくぶん理屈っぽいところもあるが、新中国の風物を背景にした人間（同行者をも含めて）と日本人の中国に対する対し方、心情とでもいったものを感じずるままに述べており、この点が本書の核になっている。

## **中国の法と社会：訪中法律家代表団の報告／日本法律家訪中代表团・国際法律家連絡協会共著**

**東京 新読書社 1960（昭和 35） 252 頁 〔4850〕**

1959（昭和 34）年 8 月 10 日から約 1 ヶ月間、日本国際法律家連絡協会の仁井田陞、福島正夫、青山道夫、風早八十二等の一行 25 名（大学教授 7 名、弁護士 17 名、通訳 1 名）は、中国政治法律学会の招待により、北京、瀋陽、鞍山、武漢、上海、広州の各都市を訪問した。本書

はその報告集。全体が3部に分かれる。第1部「中国の法と道德」では今回の見聞に基づいて新しい中国の法と道德、司法制度、裁判、監獄等が記され、第2部「変貌する社会」では、農業と人民公社、工業と労働問題、社会改造と人間改造の問題にしばって見聞を記す。第3部「中国の印象」は1、2部に入れられない印象記。このほか、法律事情や商業に関する座談会の記録、中国政治法律学会副会長呉徳峰、日本法律家訪中代表団長長野国助の挨拶が載せられている。

#### **写真・中国の顔：文学者の見た新しい国／野間宏等著**

**東京 社会思想研究会出版部 昭和35（1960） 180頁 [3145]**

上記〔中国の旅／中野重治著〕の開高、亀井ら中国訪問日本文学代表団の写真集。1960（昭和35）年の6月を中心に5週間にわたって広州、北京、上海、蘇州を訪問し、各団員がそれぞれ主題をもって撮影、編集した写真と文を収める。各々特徴ある説明文が、写真をわかりやすく楽しいものになっている。新しいものと古いもの、広大な風土、若い人や子供など物と人間が活々ととらえられ、まさに中国の顔ということができる。

#### **近代中国の書：附中国遊記／松井如流著**

**東京 二玄社 1960（昭和35） 178頁 [4851]**

著者は書家で、日展評議員である。1958（昭和33）年5月14日より約1ヵ月、日本書道代表団14名中の一員として中国を訪問している。一行は広州、武漢、北京、曲阜、西安、蘇州、上海、杭州を訪れ、中国の書家たちと交歓し、書道関係の資料すなわち故宮博物院収蔵の金石拓本類や真蹟類、西安の碑林、曲阜孔子廟の碑林、陝西省博物館の諸碑、民間人愛蔵の書画などを具さに見学している。本書は近世中国の書家たちを論じた小篇を集めたものであるが、巻末の「中国遊記」はこの日本書道代表団の一員としての旅行を随筆風に記したもので、「中国詠草」はこのとき中国各地で詠んだ短歌を収めたものである。

#### **中国大陸を見聞して（「国民外交シリーズ」第18号）／松村謙三〔述〕**

**東京 国民外交調査会 1960（昭和35） 38頁 [6007]**

虎ノ門・霞山会館で開催された国民外交調査会主催による松村謙三の講演会録。松村は1959年10月18日から12月2日まで、竹山祐太郎・井出一太郎・古井喜実ら衆議院議員やメディア関係者ら一行17人で中国を訪れた。岸派に対抗する自民党非主流派巨頭による松村の訪中は、当時日中両国において注目を集めた。松村は北京で、周恩来や陳毅と率直な意見交換を行い、とりわけ周とは3度にわたる話し合いを持った。アメリカや岸政権に強い反感を抱く中国側ではあったが、「両国の政治体制を互いに尊重して、相侵さぬというならば、文化、経済の交流は当然行われるべき」との方向で、松村ら一行とは意見の一致を見た。陳毅は台湾について、「建設が進めば、台湾の方から一緒に仲間に入れてくれと言ってくるに決まっている、五年でも十年でも、やってくるのを待っている」と武力は用いない方針を述べた。中国側の姿勢について松村は、「「政経不可分」とは言うものの、日本の認識する「政治」と中国の認識する「政治」とは異なっていた」と見解を述べている。

松村は、蘭州－西安－洛陽－昆明－杭州－成都－重慶－武漢などを視察し、「とにかくばかでかいことを考え、やるという中国民族の特性」を研究しなければ将来の中国のあり方はわか

らない、と感じる。そして、アメリカやソ連と同じくらいの面積を持ち、中央集権、近代工業化を進める中国を世界はもはや等閑視できない、国連にも入れなければ国連の機能をそれだけ薄めることになる、「平和を談じ、軍備縮小を談ずるのに、中国を除外して、世界の平和が語れるか、世界の軍縮が語れるか」と、アジアの問題と大きな関連をもつ中国の問題について、日本は諸外国とともに考えていくべきである、とその信念を述べている。（辻直美）

#### 前進座中国紀行／宮川雅青編

東京 演劇出版社 1960（昭和 35） 497 頁 〔4840〕

1960（昭和 35）年 2 月から 4 月にかけて、河原崎長十郎を団長とする前進座は、「佐倉宗五郎」、「勘進帳」、「俊寛」、「鳴神」の出しものをもって訪中した。本書は、総勢 70 人が北京、西安、武漢、南京、上海、広州の各地を公演した時の記録と中国演劇人である欧陽予倩、欧陽山尊、梅蘭芳らの劇評をまとめたものである。詳しい公演日誌があり、またグラビアが豊富に収められている。なお、一行は劇院、学校、工場、人民公社、博物館なども見学しており、それらの記録も含まれている。

### 1961

#### 古い国新しい芸術：訪中日本新劇団の記録／尾崎宏次・木下順二共編

東京 筑摩書房 1961（昭和 36） 276 頁 〔3142〕

1960（昭和 35）年 9 月から 11 月にかけて中国を訪れた日本新劇団の記録である。村山知義を団長とし、文学座、俳優座、劇団民芸、ぶどうの会、東京芸術座の 5 劇団合同で総員 71 名が参加した。約 2 ヶ月間、北京、武漢、上海、広州とまわり、各地で公演し、観劇し、中国演劇人と会談するほか、社会施設や工場、農村も見学している。本書はこの旅行記であるが、農村、工場の見学記まで含まれているわけではない。中国演劇界の実情や、日本の演劇人が中国の演劇を見たり、中国の演劇人と語って得た印象や感想の記録が中心になっている。そのほか旅行日記、中国側の日本劇団公演に対する批評なども収められている。

#### 過去と未来の国々：中国と東欧／開高健著

東京 岩波書店 1961（昭和 36） 211 頁 〔3139〕

中国人民对外文化協会と中国作家協会の招待をうけて野間宏、竹内実、松岡洋子、大江健三郎、亀井勝一郎と共に中国訪問日本文学代表団の一員として訪中した 1960（昭和 35）年 5 月 30 日～7 月 6 日の日記。日程の大半を北京で過し、ほかに上海と蘇州も訪れている。人民公社や工場の視察に関する記述は少く、名所旧蹟、風景、街の様子が文学者の豊かな表現でよく描かれている。なお日本では新安保条約反対の運動が最高潮に達した時期なので、旅行中どこに行っても誰と会っても「反対美帝国主義」が話題の中心となった。そのため文学関係の人達との接触が多かったにも拘らず、文学を論ずる時間的余裕がなく、本書も著者自身の文学論を述べるだけに終わっている。他面この時期にしか見ることのできない中国の表情として、『人民日報』に報道された日本関係の記事やそれに対する人々の反応、毛沢東と陳毅の談話ものせている。本書の後半は同年 9 月から 11 月に東欧諸国を訪れた時の記録である。



### 新中国に奇蹟はない／日本中国友好協会第三次訪中代表团

出版地・出版者不明 1961（昭和 36） 32 頁 【Q2051】

宮崎世民を団長に、日本中国友好協会各支部（山梨、伊勢崎、大牟田、高知、石川、釜石、杉並、神戸、岐阜）の支部長・事務局長・常任理事など 10 名の訪中記録。一行は 4 月 25 日に羽田を発ち、香港を経由して広州－北京－瀋陽－三門峽－洛陽－上海－杭州－武漢－長沙－広州を経て、6 月 11 日に帰国した。活動内容は項目ごとに、工業建設、農村人民公社、魯迅記念館、都市人民公社、文化娯楽と労逸結合、学校教育、人民大会堂、上海工人文化宮と少年宮、北京メーデーに参加して、上海の大世界、上海労働運動史、北京児童病院、郭沫若氏との会見記、栄光の里“韶山”を訪ねて、とまとめられている。目を引くのが「中国農業の災害について」で、1959、60 年と続いた旱魃が「中国百年来のもの」で、広州から北京までの車窓からは「殆ど上作とみられる麦はなく種子取りさえむずかしい様な畠が見渡す限り見られる状況がしばしばであり、今年も相当な被害で〔中略〕解放前であったならおそらく餓死者は、2,000 万人から 3,000 万人位出て相当な困乱があったろうと想われる」と記録されている点で、被害の大きさをかなり正確に把握していたことがわかる。（関智英）

### 人民の国、中国の婦人たち：私たちの報告：1961／日本中国友好協会訪中婦人代表团

東京 日本中国友好協会訪中婦人代表团 1961（昭和 36） 56 頁 【Q2041】

日本中国友好協会訪中婦人代表团が 1961 年 6 月 14 日から 7 月 16 日まで北京－天津－上海－杭州－広州を訪問した際の記録である。代表团は、中華人民共和国全国婦女聯合会副主席の許広平らと会談している。この報告書には北京市婦産医院授乳室、虹橋人民公社などの現状に対する感想が綴られ、女性の視点から当時の中国情勢が記されている。代表团団員は河崎なつ（団長）・川上とし子（秘書長）・梶谷和子・山本信枝・立木千秋・村上あい子・苔米地章江・武藤光子・宅島綾子・佐藤スミ・櫛田鉦二郎（作業員）。（中村元哉）

### 中共の素顔／松野谷夫・野上正共著

東京 野田経済社 1961（昭和 36） 311 頁 【4869】

著者はともに朝日新聞の記者で、松野は 1957（昭和 32）年 3 月末から半年ほど北京特派員として中国各地を視察し、野上は 1958 年 3 月社会党使節団とともに新中国を訪れている。本書の冒頭で、著者はそれぞれの見聞に基づいて、経済建設への猛烈な意欲に燃え、機械力の不足を人力で補い、婦人の職場進出が著しい反面、農業と工業の発展テンポのズレを持ち、生活必需品や食糧の不足に悩まされているありのままの中国を描いている。続いて、中国経済の発展、人民公社、指導者の横顔を見聞だけでなく文献資料を駆使してつぶさに考察して、これが本書の中心となっている。追補の「六一年の中国」には農業不振を伝えられる最近の中国、及び国連代表権問題が論ぜられている。

### 躍進する中国を訪れて：訪中期間 1960.12.3～1961.1.11／民主々義擁護群馬県民連合訪中代表团編

出版地不明 民主々義擁護群馬県民連合訪中代表团 1961（昭和 36） 62 頁 【Q2049】

民主主義擁護群馬県民連合訪中代表团が角田儀平治（民擁連議長で 1960 年 4 月から 5 月の日中友好協会訪中国の一員でもあった）を介して 1960 年 12 月 3 日から翌年 1 月 11 日まで中

国を訪問した際の記録である。主な訪問地は、広州－北京－瀋陽－撫順－鞍山－天津－三門峽－洛陽－鄭州－武漢－南京－無錫－上海－杭州だった。一行は、北京で陳毅副総理兼外交部長、郭沫若平和委主席、廖承志 AA 連帯委主席らと懇談し、天津で中国人民保衛世界和平委員会天津市分会と共同声明を出した。報告書は「社会主義建設における大躍進が保障されている」と述べ、掲載された写真も中国の発展ぶりをイメージさせるものだった。たとえば、鄭州の人民公社での「土法」を紹介したページでは、「「技術の神秘性」を打破することが技術革新の道だと言って労働者も技術者も一つになって学習と実践に取り組んでいる」と肯定的に記されている。当時の日本において中国認識がどのように形成されていったのかを知る上で、大いに参考になる一節であろう。代表団団員は石黒寅亀（団長）・安藤安次郎（副団長）・金子満広（副団長）・布施甲子郎（秘書長）・久保田朝雄・佐藤清一・鈴木正・林金衛・畑利・猪上輝雄。（中村元哉）

## 1962

### 中国の旅／亀井勝一郎著

東京 講談社 1962（昭和 37） 232 頁 [3416]

著者は、1960（昭和 35）年 5 月から 7 月にかけて日本文学代表団の一員として、さらに翌 61 年 6 月 29 日から 7 月 15 日まで井上靖、平野謙、有吉佐和子と共に中国を訪れた。本書はこの 2 回にわたる旅行の記録である。最初の旅行では著者は中国の風物を熱心に見て、その情景を著者の得た印象や感想とともに詳しく書いている。北京の故宮博物館、万里の長城、明の十三陵、蘇州の虎丘・寒山寺・留園、魯迅の墓など。このほか人民公社の見学、毛沢東との会見の記事もある。また、日本では安保反対闘争の高潮時だったので、これに対する中国側の反応と著者の見解が述べられている。再度の訪問の時には、ほとんど北京に滞在して中国の文学者との交歓につとめており、その様子が記されている。

### 日中問題の焦点：再び中国を訪ねて／田川誠一著

横須賀 新風会 1962（昭和 37） 64 頁

松村謙三の訪中団（1959 年）に随伴した田川誠一が旅の合間に書きとめた記録で、松村と中国側（周恩来・陳毅・廖承志）との会談や交渉の経緯に焦点をあてる。人名や用語の解説もあり、松村訪中の意義を理解する一助となる。

松村一行と中国側は、両国が積み上げ方式によって政治経済関係を発展させ、関係の正常化に有利ならしめるべきである、との合意事項を発表しているが、著者によれば「政経不可分」の原則をめぐって両者には考えの相違が存在し、合意事項の形成にいたるまでに、かなりの駆け引きがあった。中国側は「政経不可分」の原則を譲らず、日本側も中国側が主張する政経不可分論をのんだような印象を与える点には同意できなかったためである。著者は、最後に周恩来が「私は中国共産党の幹部であり、松村先生は日本の自由民主党の幹部であるから見解の一致しないのは当たり前である。そうした前提に立って、両国の友好を前進させ、平和共存をし、親善関係をはかっていくことに意見の一致を見たのです」と述べたことを挙げて、見解の相違はあったものの、両国が積み上げ方式によって正常化をはかるという、関係打開の一つのチャンスをつくり得た点で松村の訪中には意義があったと、評価を与えている。（辻直美）

## 経営者のみた中国／中国訪問日本経済界友好代表团

東京 日本中国友好協会 1962（昭和 37） 48 頁 [4849]

日中友好協会が全国の産業経済界から日中友好運動に関係する人々、12 名を選んで中国に派遣した。団長は栄医療器株式会社社長指川謙三。1962（昭和 37）年 6 月 16 日から 7 月 14 日まで滞在。本書はその間の見聞を団員が分担して書いたもの。全体的な概況、経済建設、教育、農村人民公社、中小企業、社会福祉と保障の現状についての報告 6 篇と、特に代表団が希望した中国民族資本家との懇談会の記録が収められている。代表団の性格から工業関係の報告がくわしく、見学した 10 ヶ所の工場の紹介、上記の民族資本家との懇談など、この分野の状況をを知るのによい。

## 杜甫草堂記／土岐善麿著

東京 春秋社 1962（昭和 37） 341, 21, 11 頁 [3484]

中国文字改革視察日本学術代表団の団長として 1960（昭和 35）年 4 月中国を訪問した著者は、北京での公式日程を終えると杜甫草堂のある成都に 1 日遊んだ。帰国後、杜甫草堂の沿革に関する資料の整理をはじめ、詩聖杜甫の生誕 1250 周年にあたる 1962 年に出版したのがこの書である。永年同好の士と「杜甫を読む会」を続けている著者が、成都を訪れたのを機会に杜甫の詩を通して杜甫の生涯を偲び、はるか唐代に思いを馳せながら書いたものである。著者は武漢、上海、杭州、広州などにも立寄ったらしいが、それらに関する記述はない。巻末には、成都杜甫草堂編印の「成都杜甫草堂収蔵杜詩書目」が収録されている。なお同行者は倉石武四郎、原富男、さねとうけいしゅう、宮沢俊義、有光次郎、高杉一郎、村尾力、松下秀男、村岡久平である。

## 日本中国友好協会派遣日本民間教育家代表团中国訪問備忘録

東京 出版者不明 1962（昭和 37） 196 頁 [Q641]

日本民間教育家代表团は団長の三島一（歴史教育者協議会）以下、大田耕士（日本教育版画協会）・今井誉次郎（日本作文の会）・田中実（科学教育研究協議会）・遠山啓（数学教育協議会）・高橋磯一（歴史教育者協議会）・五十嵐頭（教育科学研究会）・川合章（日本生活教育連盟）・富田博之（日本演劇教育連盟）・山住正己（音楽教育の会）の 10 名。1961（昭和 36）年 9 月 20 日東京を発って、香港・広州・武漢・北京・南京・上海・杭州・広州・香港とまわって、10 月 22 日東京に帰る。

本書はこの訪中報告書。報告されている施設・機関は次の通り。〔広州〕農民運動講習所・中山大学、〔武漢〕鉄鋼公司・長江大橋、〔北京〕中国革命歴史博物館・中央美術学院・中国児童劇院・数学研究所・十三陵ダム・中国歴史博物館・農業展覧会・北京師範大学・中国作家協会・北京市小学校・北京大学・北京広播電台・中国科学院自然科学史研究室・北京鉄鋼学院・国立北京図書館・北京 4 中・中央民族学院・中国戲劇家協会・革命軍事博物館、〔南京〕南京師範学院・同付属小学校・紫金山天文台・南京博物院・無線電工業学校・十月人民公社、〔上海〕廬湾区第一中心小学校・上海第一師範学校・新旧工人住宅・工人文化宮・七一人民公社・中国福利会少年宮・児童芸術劇院、〔杭州〕上海市総工会屏風山療養所。

また郭沫若との懇談、三島・高橋と翦伯賛・侯外廬・周一良・劉大年・尹達らとの交流の模

様、中国教育工会メンバーによる「中国教育の歴史と現状」に関する講話、勇龍桂（経済研究所長）の講話、そのほか廖承志（中国A・A連帯委主席）・李頡伯（中華総工会全国委員会）・陳毅（副総理）・方明（中国教育工会）らの談話が載っている。

#### 敦煌美術の旅／北川桃雄著

東京 雪華社 1963（昭和38） 229頁 [4841]

雪舟等楊没後450年「記念典」が北京でもよおされ、その会に日本の美術代表者が招待された。山口蓬春・橋本明治両夫妻と著者である。本書はこの時訪れた著者の敦煌美術紀行である。著者は1956（昭和31）年8月1日に羽田を出発し、雪舟記念典の終了後の9月4日に亀田東伍と共に敦煌に向かった。飛行途上に立寄った太原、西安、蘭州、酒泉の風景や生活状況、その後、ジープで走ったゴビタンの殺伐たる風景と玉門、安西のオアシス都市の印象が日記風に記述されている。以上の紀行部分は、本書全体の3分の1で、あとは敦煌の町やシルクロードのこと、この書の本命である石窟芸術で占められている。敦煌石窟の概観、大雄宝殿の2大仏、北・西魏窟、隋や唐代の石窟や壁画、仏像などの説明がかなり専門的ではあるが平易に書かれている。全体に故事を織りまぜ、写真やスケッチも豊富で楽しい読物である。巻末に敦煌余録が収載されている。なお著者は1960年にも訪中している。

#### わが中国抄／武田泰淳著

東京 普通社 1963（昭和38） 238頁 [4121]

著者は作家であるとともに中国文学研究者であるが、この本は雑誌等に発表された、著者の中国文学と中国文化一般に関するエッセイを集録したもので、1935年から1963年までが収められている。著者は戦中に2回中国の土を踏んでいる。1937（昭和12）年に一兵卒として杭州上陸の部隊に加わり、また1944年に翻訳の仕事で上海に行っている。戦後は1961（昭和36）年冬に訪中している。この時の中国旅行の感想が「北京・カイロ・モスクワ」と題して本書に収められているのだが、これは1962年に「岩波の文化講演会」で行われた講演に加筆されたものである。一行は堀田善衛・椎名麟三・中村光夫と著者の4人。広東・武漢・鄭州・杭州・北京の各都市を訪れ、老舍に会ったり作家同盟の座談会に出席したりしている。

#### 新中国学習の旅／宮川実著

東京 青木書店 1963（昭和38） 194頁 [4080]

1962（昭和37）年8月末、著者は労働者学習活動者訪中団の一員として、中国の学習運動が労働運動、農民運動、革命運動の中でどんな役割を果たしたか、中国の労働者や農民はどういう仕方で学習を行っているかを見るために中国を訪問した。各地の労働者、農民と懇談したり、諸運動のすぐれた指導者の体験談を聞くことにより、中国では学習が生活の一部になっていることを知る。広州の毛沢東農民運動講習所、北京の革命博物館、さらに西安、延安をも訪れて革命の歴史をふり返っている。また国立科学院経済研究所での討論や、北京の紡績工場や国営住宅、長辛店の車輛工場、唐山の炭鉱、上海の工作機械工場と人民公社を見学して、解放後の労働者の生活を記している。全篇を通して一行が、中国革命の輝かしい歴史と、現在の中国のたくましい建設の様子を丹念に学習して来たことがうかがえる。結論として、中国では学習運動が労働運動、農民運動、革命運動の大きな基礎的部分をなしており、学習運動がなければ中国

革命の勝利は不可能であつたろうと言っている。そして中国で学習してきた多くのことを日本の今後役に立たせたいとのべている。

## 1964

**黄龍と東風／伊藤武雄著**

**東京 国際日本協会 1964（昭和 39） 320 頁 〔5240〕**

本書は、全体としては、満鉄の職員であった著者が 1917（大正 6）年にはじめて中国へ旅行した時から、1930（昭和 5）年迄の回想記である。その最後の 2 章において、1930 年 3 月春、著者のあこがれの地であった四川へ旅行した時のこと、1958（昭和 33）年 10 月、国慶節に参加した後再び同地を訪れた時のことを、併せ記している。かつては揚子江を重慶へと溯り、二度目は重慶から宜昌へ下った著者は、三峡の景観に感動し、30 年後に見た変化の様相とともに地理的にも詳しく記述している。また、じめじめして、街も狭かった重慶の町が、明るく広い街路をもつ重工業都市に変わったことに驚きの目をみはり、各種の工場や『紅岩』で名高い八路軍辦事処を紹介している。

**異国の旅／井上靖著**

**東京 毎日新聞社 1964（昭和 39） 255 頁 〔6906〕**

著者の新聞、雑誌に発表した数度の海外旅行の報告を 1 冊にまとめたもの。1960 年のヨーロッパ旅行、1957 年、1961 年、1963 年の 3 回にわたる中国旅行、1963 年の韓国旅行の報告よりなる。ヨーロッパ旅行記が主体で、中国旅行記は 45 頁を占めるにすぎない。3 回の中国旅行のうち 1957（昭和 32）年の第 1 回目は、日本文学者代表として 10 月末から約 1 ヶ月中国各地を旅行した。同行者は、中野重治・山本健吉・本多秋五・多田裕計・十返肇等。この旅行では長城と天壇の見物記がのせられている。1961 年の第 2 回目も日本文学者代表として盛夏の 1 ヶ月を旅行した。同行者は、亀井勝一郎・平野謙・有吉佐和子等。明十三陵のうちの定陵見物記がある。1963 年の第 3 回目は、9 月末から 10 月にかけての 1 ヶ月、鑑真和上円寂一千二百年記念訪中日本文化界代表の一員として鑑真の記念集会と鑑真紀念館の定礎式に列席する為訪中した。同行者は安藤更生・宮川寅雄・長島健・長沢元夫・佐木秋夫。この時の記事には揚州と西安訪問記がある。

**中国のこども／川合章著**

**東京 紀伊国屋書店 1964（昭和 39） 196 頁 〔5210〕**

著者は 1961（昭和 36）年 9 月から 10 月にかけて 1 ヶ月間、「日本民間教育家代表团」の一員として広州・武漢・北京・南京・上海・杭州など中国各地を訪問し、教育事情を視察してきた。本書はその際の見聞をもとにし、中国で出された教育関係の資料なども引用して、現在の中国における青少年のすがた、教育のありさまを概観して述べたものである。旅行記というより現代中国の教育事情を紹介したもので、託児園・幼稚園などの幼児教育、小学校から大学までの学校教育のほか、労働者のための業余学校・博物館・文化宮などの文化教育施設、少年宮のような青少年のための施設にいたるまで、社会のあらゆるところで行われている教育を広くとりあげて記している。

## 世界を動かす巨人に会って：中共を視察して祖国日本を想う／木村武雄著

米沢 米沢交友会 1964（昭和 39） 144 頁 〔Q2035〕

著者は山形県米沢市出身の政治家で、1936 年衆議院議員に初当選した。日中戦争が始まると、同県鶴岡市出身の石原莞爾に弟子入りして東亜聯盟運動に加わり、中国に 6 年間滞在した経歴を持つ。本書は二部構成で、第一部「世界を動かす巨人に会って」は欧米歴遊後の講演録であり、第二部「中共を視察して祖国日本を想う」が、1964 年 9 月～10 月に北京－西安－重慶－武漢－上海－南京－杭州－瀋陽を巡った旅の印象記である。序文は佐藤栄作による。著者は革命後の中国を日本の明治維新と重ね合わせて追体験しており、中国の核実験成功についても、「勤儉建国、勇奮祖国の民族運動」の発露だと評価している。また、戦前の上海滞在経験との対比で、治安の向上や民生の安定を好意的に観ている。とくに、道路の清潔さや蠅・蚊の撲滅など公衆道德の普及ぶりに瞠目し、その功を「教え導く政治」に帰しているが、他方、「中国人の生活水準が今の日本に追いつくまでには百年間かかるだろう」という陳毅副総理の言葉に賛同し、「貧乏人が貧乏人のままで、統一した政権をつくったのが社会主義なのであります」（137 頁）として、次元の高い政治をしている日本にとって、中国畏れるに足らずと結論づけている。（村田雄二郎）

## 建国 15 年を迎えた中国／日本中国友好協会第 2 次学習活動家訪中代表团

東京 日本中国友好協会 1964（昭和 39） 44 頁 〔10853〕

日本中国友好協会第 2 次学習活動家訪中団は、岩村三千夫団長以下、大原信一・大芝孝・野沢豊・杉野明夫・横山英の 6 名。旅行期間は 1964（昭和 39）年 7 月 31 日～9 月 1 日。訪問地は上海・北京・西安・延安・武漢・長沙・広州。

本書はその訪中報告書。上海のミシン工場、北京の長辛店車輛工場、西安の搪瓷工場、武漢の鉄鋼コンビナート・大型工作機械工場などの見学記（岩村執筆）、上海の馬橋人民公社、北京近郊の南苑人民公社、西安から 60 キロの醴泉県烽火人民公社、長沙近郊の黄花市人民公社、広東の南海県大瀝人民公社などの見学記（杉野執筆）、工人文化宮、少年宮、人民解放軍第 3 回美術作品展や、映画・演劇について（大原・大芝執筆）、郭沫若・廖承志・周而復の現代修正主義批判に関する談話（横山執筆）、上海の中共一全大会跡、北京の中国革命博物館、西安の八路軍辦事処跡、延安の日本工農学校跡、武漢の二七記念館、長沙の湖南第一師範、広州の沙基惨案跡など、革命遺跡を主とする史蹟参観記（野沢執筆）、烽火生産大隊（前身は白雲宮村）農民の解放前から今日までの苦しみ、怒り、喜びを描いた『烽火春秋』の紹介（大原執筆）などがある。

## 現代中国の教育／日本民間教育家代表团

東京 教師の友社 1964（昭和 39） 207 頁 〔4905〕

日本民間教育家代表团（三島一、大田耕士、今井誉次郎、田中実、遠山啓、高橋碩一、五十嵐顕、川合章、富田博之、山住正己）は、中国教育工会全国委員会の招待により 1961（昭和 36）年 9 月 20 日から 10 月 22 日にかけて広州、武漢、北京、南京、上海、杭州を歴訪し、史蹟見物、人民公社や工場見学、各学校視察を行った。本書は各代表が自己の専門と照して記した報告書で、「政治に服務する」教育の実態を多くの角度から論じている。すなわち、農業と不可

分な教育，「生産労働と教育の結合」をスローガンとした社会主義の教育原則，教員の養成と生活状況，授業内容などが報告されている。このほか幼児教育，労働者の文化施設，郭沫若，陳毅の談話なども載せられている。

#### 中国訪問から帰って／本田良介〔述〕

東京 ジャパン・プレス・サービス（国際事情研究会） 1964（昭和 39） 16 頁  
〔XI-6-B-d-57〕

アジア・アフリカ・ジャーナリスト協会日本協議会代表団長として 1964 年に中国を訪問した著者による国際事情研究会第 76 回月例研究会における講演の要旨。著者ら一行は同年 9 月末から約 1 か月間，北京・上海・広州のほか東北地方のハルビン－長春－瀋陽－鞍山－撫順を視察した。現地では，ソ連の経済援助打ち切りを「自力更生」によって乗り越え，資材やエネルギーをほぼ自給できるようになった中国工業の発展ぶり，また反修正主義を基調とした社会主義教育，文化革命など，対ソ連を意識した中国の国家建設や思想運動の動向に着目している。一行は，フルシチョフの失脚と中国の核実験という世界的ニュースにも現地で接した。中国が最初の核実験を行ったのは 10 月 16 日だったが，その前日の 15 日夜，一行は中国伝播事業局長・梅益らによる歓送会に招かれ，中国側から「中国が核実験をすれば，日本の反響はどのようなだろうか」との予告めいた質問を受けた。そして，翌 16 日にはフルシチョフの失脚が発表された。両者の関係性について著者は，直接の関係はないとしつつも，「ソ連の側からいって，中国の核実験切迫がフルシチョフの失脚を早めたということがいえるかもしれない」との見方を提示している。（辻直美）

#### 日中農協のかけ橋：訪中全購連代表団の記録／三橋誠編著

東京 新葉書房 1964（昭和 39） 258 頁 〔7074〕

全国購買農業協同組合連合会代表団の 1 行 7 名が，中華全国供銷合作總社の招待で訪中した際の視察報告書。時期は 1964（昭和 39）年 5 月末から約 1 ヶ月。供銷合作社は人民公社成立後も並存しておかれ，中国農村の流通を受けもっている協同組合で，代表団の全購連とは従来から交流がある。本書は代表団の性格上，人民公社，供銷合作社が数多く見学されているので，それに重点をおいてまとめられている。人民公社，供銷合作社の事情が，実地の見聞を紹介しながら，さらに説明を加えてくわしく述べられているので，この年代の状況がよくわかる。なお一行の見聞した国営及び公私合営の百貨公司など，都市における流通機構にもふれられている。また日本の協同組合関係者は，中国の協同組合，即ち供銷合作社と直接貿易関係を開くことを望んでおり，この代表団訪中の目的も一つはそこにあるので，中国滞在中関係方面との接触をかなり行っている。本書の一部はその報告にあてられ，盧緒章對外貿易部副部長，南漢宸中国国際貿易促進委員会主席などとの会談，中華全国供銷合作總社との懇談などの記録が収められている。

#### 中華人民共和国建国十五周年慶祝日中友好協会派遣第九次訪中国記録

出版地・出版者不明 1964（昭和 39） 25 頁 〔Q2050〕

人民共和国成立 15 周年の国慶節に参加するため組織された訪中団の記録。公式記録ではなく，各団員手許の資料として 200 部のみ作成・配布された。団長松本治一郎，副団長宮崎世民，

団員に角田儀平治、檜崎彌之助ほか。一行は9月26日に羽田を出発し、香港を経て広州―北京―西安―延安―鄭州―武漢―南京―上海―広州を巡り、10月30日に香港より帰国した（団長の松本は健康上の理由で10月10日に北京を離れた）。10月11日には、1945年に人民解放軍に医師として参加し、50年に脳膜炎のため死去した中村雄三「烈士」の遺骨伝達式が催された。上海での民族資本家との懇談会で記録された、陳銘珊（上海信誼藥廠々長）・貝竹韻（黄浦区手工業局副局長）・蔣達寧（上海市工商業聯合会副秘書長）の発言要旨は、1940年代から50年代にかけての上海経済界の事情を伝えている。宋子文の「民族資本がやれなければ、倒したらよい、アメリカから工場を持って来る」との発言に皆が怒ったこと（陳）、「共産党が来るときは恐かった」（貝）、といった発言は興味深い。（関智英）

## 1965

### 中華人民共和国／NHK特別報道班

東京 日本放送協会 1965（昭和40） 261頁 〔7001〕

NHKが特別報道班を世界の各地に派遣して作成する海外取材番組の一つとして、1964（昭和39）年9月末より2ヶ月間、中華人民共和国を取材旅行した時の記録。一行は、団長とプロデューサー、カメラマンの3人。本書の前半では、取材のコースに従い、広州・北京・西安・延安・洛陽・上海・蘇州・杭州・無錫・武漢・桂林の各地の紹介がなされ、後半では、著者らの取材が中国の民衆に焦点をおいたものであったので、若い世代のこと、婦人の服装、料理、床屋やふろ屋などといった人々の日常生活に関するさまざまな見聞をしるしている。取材上の苦勞、また第一回原爆実験の成功とフルシチョフ解任の大ニュースを聞いた時の様子なども、ところどころにのこまれている。

### 躍進する中国／川口健夫著

高知 高知県職員労働組合 1965（昭和40） 222頁 〔7444〕

著者は1964（昭和39）年11月、約1ヶ月に亘って、高知県訪中経済貿易文化視察団（訪中第七次視察団）の一員として、広州・武漢・北京・南京・蘇州・上海・杭州を訪問した。この視察団は、高知県の地方産業発展のために日中貿易の促進をはかるという任務をもつ。本書は単なるその時の旅行記というよりは、現代中国を理解するための啓蒙書といった感じが強い。「人間性を高める教育制度」、「躍進する人民公社」、「総工会と賃金制度」等18項目に分けて、それぞれの歴史的背景、および現在の状況が記されている。

### 法律家のみた中国／青年法律家訪中代表团

東京 日本評論社 1965（昭和40） 223頁 〔7077〕

1955年以来日本の国際法律家協会は中国との交流のため殆んど毎年法律家の代表団を派遣している。本書の執筆者達はその9回目の訪中代表団にあたる。1963（昭和38）年5月から6月の約1ヶ月の旅程、とくに今回は青年法律家ということで選ばれた一行10名である。その各自が記した文章を集めてまとめたのが本書である。生活、経済、革命の伝統教育、法律と項をたて、著者達の目に写った中国のすがた、民衆の生活、社会主義建設の状況などを綴っている。訪問者が法律家であるから、その旅程の中には中国の法律家との座談会、人民法院にお



ける裁判傍聴、監獄の見学等が含まれ、その報告が最後の法律の項に収められている。執筆者は次のとおり。宮内裕（京都大学教授）・花田啓一（弁護士）・利谷信義（都立大学助教授）・樋口幸子（弁護士）・諫山博（弁護士）・石川元也（弁護士）・渡辺洋三（東京大学助教授）・鳥生忠佑（弁護士）・安達十郎（弁護士）・鍛冶利秀（弁護士）。

#### **むらさきの旅情／深尾須磨子著**

**東京 弘文堂 1965（昭和 40） 258 頁 [7079]**

詩人である著者の 5 度目の海外旅行の記録。1963（昭和 38）年 5 月に日本を発ち、中近東・ローマ・パリ・ブダペスト・ワルシャワ・モスクワの各都市に滞在して旧約の土を踏み、サッフォーをしのび、ヨーロッパの旧友を訪ね、帰国の途中、10 月 18 日から 11 月 13 日まで中国に滞在し、広東・北京・南京・蘇州・上海・杭州の各都市を見学した。本書は全編自作の詩を散りばめたユニークな旅行記であるが、第 4 章の中国旅行の部分だけは走り書きの日記の再録であって、27 頁を占めるにすぎない。兄弟国中国に対する日本人の罪の許しを乞うという気持ちで渡中した著者は、解放後の中国にみなぎる創作と建設の意欲に人類文化の正しい方向を感じ、また国をあげての大事業の中で大らかさを失わない国民性に強い印象を受けている。

#### **太陽を射る中国：七億の大打進／高田富佐雄著**

**東京 弘文堂 1965（昭和 40） 199 頁 [6961]**

著者は毎日新聞外信部副部長。日中記者交換と貿易連絡事務所の相互開設を実現させた、松村謙三の第三次訪中国に特派員として同行。1964（昭和 39）年 4～5 月の 4 週間中国を旅行した。一行は 8 日間の北京会談のあと、延安・西安・成都・重慶・武漢・桂林・南寧を訪れた。著者は、すでに 1956 年 7 月、1 週間ではあるが、抑留中の戦犯に面会を許された家族に同行して訪中しており、また、1958 年から 61 年の 3 年間香港特派員をつとめている。その経験と知識を生かして、今回の旅行での観察を軸にしながら、1956 年頃からの中国の政治・経済・外交の動向を跡づけている。特に、「自力更生」のスローガンが打出された 1963 年以降を「第二の延安時代」と名づけ、1959 年にはじまる苦難の時期を乗り切った中国の表情を記者らしい目で見ている。最後に日中関係の今後に思いをいたし、日本政府の不合理な対中国政策が改められるべきだと説いている。

#### **大きな路の上を／第 1 回訪中学生参観団**

**東京 斉了会 1965（昭和 40） 88 頁 [7321]**

1965（昭和 40）年 8 月わが国で最初の訪中学生参観団が結成され、126 名の学生が 2 週間に亘って広州・杭州・上海・北京を訪問した。帰国後、学生達はわが国における「ゆがめられた中国像」を自分達の体験を通してぶちこわす責任を感じて、「斉了会」を作った。本書は、「見たこと聞いたこと」「中国の人々」「中国で考えたこと」の 3 部に分けて編集されているが、学生達が中国で一番感心させられたことは、本当に人間らしく成長している中国人に触れて、人間とはかくも美しいものであるか、ということだった。

#### **大松・中国を鍛える／大松博文著**

**東京 講談社 1965（昭和 40） 235 頁 [7107]**

著者は東京オリンピックに優勝した日本女子バレー・チームの監督。オリンピック終了後の1964（昭和39）年11～12月親善試合をするために、ニチボー・チームを率いて中国を訪問。翌1965年4～5月には、中国人にコーチするため再び中国を訪れた。本書は、著者のコーチに対して、中国人選手及びその関係者がどのような反応を示したかを記したものである。

#### 私たちの訪中記：1965年訪中日本婦人代表团／訪中日本婦人代表团

東京 訪中日本婦人代表团 1965（昭和40） 56頁 [7461]

本書に収録される訪中記の執筆者は、橋口和子（日教組婦人部副部長）、斎藤真佐（鹿児島大学助教授）、佐藤千恵子（静岡県母親連絡会副会長）、上田小八重（日本婦人会議函館支部事務局長）、三宮禎子（新日本婦人の会愛媛県本部事務局長）、岩崎菊江（高知県母親運動実行委員長）、水間綾（宮城県議会議員）、板垣勝（日本ジャーナリスト会議会員）、帯刀貞代（新日本婦人の会代表委員）で、この9名が訪中日本婦人代表团を構成していたと考えられる。同代表团は、中日友好協会及び中華全国婦女聯合会の招聘を受け、1965年6月16日～7月21日の35日間、広州－北京－唐山－西安－延安－南京－上海－武漢の各地を訪れた。頤和園や華清池といった代表的な観光地に加え、博物館、工場、炭鉱、鉄鋼コンビナート、病院、小学校、幼稚園、労働者住宅などを参観している。また現地の女性団体、労働者、工場経営者らとの交流を通し、当時の中国社会の実情を知ろうと努めていることがわかる。本書冒頭には帰国後に開催された座談会の記録が掲載されており、旅行中に目にした中国の清潔さや治安の良さ、教育環境、人民公社の整備状況を紹介し、社会主義建設を着実に進めていることを高く評価する内容になっている。（久保茉莉子）

#### 六億の合唱／三谷秀治著

大阪 浪花書店 1965（昭和40） 259頁 [7110]

1964（昭和39）年1月に中国を訪問した国際貿易促進地方議員連盟代表团の一員として見聞してきたところを記したもの。著者は日本共産党の大阪府議会議員。本書にとりあげられているのは全旅程のうち、広州・武漢・北京・天津のみで、そのほか訪れた南京・蘇州・上海・杭州については省かれている。一般的な旅行記の叙述に加えて、著者がとくに関心をよせる人民公社と公私合営の資本家について知りえたことがとくに紹介されている。広州の大瀝人民公社、天津の公私合営企業である仁立公司、その社長である民族資本家についての記述がくわしい。鄧小平副総理、彭真北京市長との会見、旅行の目的であった共同声明調印の様相もうかがわれる。

## 1966

#### 中国通信：1964～1966／安藤彦太郎著

東京 大安 1966（昭和41） 548頁 [7438]

著者は早稲田大学在外研究員として、1964（昭和39）年7月10日から1966年8月2日までの2年あまり、中華人民共和国に出張し、主として北京に滞在した。その間、中国の各地を旅するほか、北朝鮮も2度にわたって訪れている。著者は中国滞在中に、北京および訪問地における見聞をつづった通信を定期的に日本におくって、『大安』、『アジア経済旬報』などの

雑誌に掲載した。それがすべて 85 篇。これらを一冊にまとめたのが本書である。中国研究者で新しい北京に 2 年以上も滞在した人は、著者をおいて他にない。したがってこの通信文集によってうるところは極めて多い。なお、著者が帰国後に書いた「北京でみた「文化大革命」」，「紅衛兵とその背景」が附録されている。

**中国旅行記／飯田正夫著**

**東京 1966（昭和 41） 24 頁 〔10852〕**

著者は日本茶業中央会・日中友好協会が派遣した 30 名の茶業使節団（団長・大石八治）の一員。旅行期間は 1966（昭和 41）年 8 月 27 日～9 月 10 日。訪問地は広州・杭州・上海・北京・武漢。本書はその訪中報告。その目的とした茶業視察と中国茶業家との懇談は、文化大革命の勃発により果されなかったが、他の時期では得難い体験もあったとして、人情・民情を主とした訪中感想を書く。

**わが“洗脳”記（増補）：中国ひとり三週間の旅／井出新六著**

**東京 1966（昭和 41） 94 頁 〔7470〕**

著者は共同通信社の記者だが、取材記者としてではなく、一人の観光旅行者として、1964（昭和 39）年 11 月 6 日から同月 28 日まで中国を旅した。本書はその旅行漫録。14 日間滞在した北京や、帰路たち寄った上海・杭州・南京・武漢・広州の風物、人情が、見るまま感ずるままに記されている。本書の題名で、その感ずるところが如何であったかは推測されよう。以上の本文は、1965 年に出版されたが、これに「洗脳その後」の 1 章を足して再版したのが、この増補版。

**反共イデオロギー外交を排す／宇都宮徳馬著**

**東京 番町書房 1966（昭和 41） 222 頁 〔7600〕**

1961 年～1966 年に諸雑誌に発表した文章を中心に、日本のアジア外交に関する著者の意見をまとめたもの。中に一篇、著者が 1962（昭和 37）年 12 月に中国を訪れ、北京・武漢・桂林・陽朔・南寧・広東をまわった時の簡単な見聞記が含まれている。中国のほか、北朝鮮・北ベトナム・カンボジア訪問とそれらの国の首脳との会見を通して、アジアの新しい民族主義を理解することの必要を説いている。そして、日本政府の対米外交・対韓外交、さらには 1970 年の安保改定問題にまで筆を進めている。

**途方もない国：市長・中国印象記／梅川文男著**

**東京 御茶の水書房 1966（昭和 41） 304 頁 〔7401〕**

著者は三重県松阪市市長。中国人民外交学会が招待した日本地方自治友好代表团という日本の市長ばかり 6 名の団体の団長として訪中。1965（昭和 40）年 9 月末に中国へ入り、国慶節前後の北京に 10 日間、ハルビン・長春・瀋陽をめぐって東北に約 1 週間、その後武漢・蘇州・上海・杭州・広州を訪れた 1 月余の旅であった。本書には地方政治の担当者らしい観察、彼我の国の比較なども随所に見られるが、堅苦しい報告の書ではなく、はじめて新中国の様々な場面を見せられての豊富な印象が旅行の道すじを紹介しながらこまかく述べられている。もとは松阪の『夕刊三重』に「中国あっち、こっち」と題して連載されたもの。

## 中国文明の伝統／NHK特別取材班

東京 日本放送出版協会 1966（昭和 41） 238 頁 〔7595〕

NHKが1964年にひき続き派遣した特別取材班の中国取材記。1965（昭和 40）年 10 月末から 1966 年 1 月中旬までの 2 ヶ月間、北京・太原・西安・洛陽・鄭州・済南・曲阜・揚州・南京・蘇州・上海・杭州・紹興・広州の各地をまわった。今回の取材の焦点は、中国の文明や伝統文化が現代中国においてどのように保護され、継承されているかを明らかにすることにおかれた。これにしたがい、本書でも、訪問地の風土、そこに展開してきた歴史と伝統、今日の人々の生活との関わり方を紹介するとともに、京劇の現代化、文字改革、博物館や孔子廟などにみられる歴史遺産への姿勢について詳述している。

## 亡命へのいざない／遠藤忍著

東京 共同エージェンシー 1966（昭和 41） 98 頁 〔Q1587〕

著者は戦争中、中国にいたことのある人。1966（昭和 41）年 4 月 29 日から 5 月 11 日までの 13 日間、広州－北京－洛陽－南京－上海－杭州－南昌－広州とまわる。

本書はこの旅行記で、北京のメーデー、上海の民族資本家、洛陽のトラクター工場、定年制・住宅・物価、頭脳と国土の両面改造、新聞、治安、表現の不自由さなどについて記す。書名の「亡命へのいざない」は、13 日間、著者と行動を共にした中国共産党員が別れぎわに、今度は訪問者としてではなく亡命者として来てほしいと言ったことから来ている。

## 花に思想があるか：整風下の中共探険記／大島康正著

東京 東都書房 1966（昭和 41） 200 頁 〔7394〕

著者は文化大革命初期の 1966（昭和 41）年 5 月 15 日から 6 月 14 日まで 1 ヶ月に亘って自費で中国を訪れた。訪問した都市は、広州・武漢・鄭州・洛陽・北京・天津・済南・曲阜・南京・無錫・蘇州・上海・杭州。本書はその見聞記であるが、文化大革命を中心にした生きた人間の行動が主に描かれている。この書名は、武漢で通訳の女性に「花を見ればだれだって美しいと思うでしょう」と質問したのに対し、「花に思想がありますか、毛思想がありますか」と反論されたところからとっている。中国滞在の間、徹底的に毛思想というものを学習しようと考えた著者は、「毛沢東思想とはいったい何か」という質問を到る所でしたが、その平民的次元での回答は、「人民に奉仕せよ」「愚公山を移す」「バチューンを記念する」この三つのことだった。結論として著者は、毛沢東思想による文化大革命とは、文化を否定する文化革命であり、いったい人間がどこまで単純になり得るかということの大きな実験であるが、今一つのはっきりした文化大革命の狙いには、革命の後継者を養成しておきたいという、現在の指導者達の考え方が反映していると述べている。

## 天安門炎上す：毛沢東革命の内幕／大森実著

東京 潮出版社 1966（昭和 41） 327 頁 〔7423〕

中国の文化大革命の実地見聞記。著者は毎日新聞記者として活躍した人。現在は独立して評論家。1966 年 9 月 10 日から 24 日まで、著者は世界の関心を集めている文化大革命の実体をとらえるため、大宅壮一らのいわゆる大宅考察組の一人として中国各地をまわった。ちょうど

紅衛兵の激しい行動が各都市で進められている時期である。短時間ではあるが精力的に広州・上海・無錫・南京・天津・北京・武漢とめぐり歩き、各地に現われた革命の様相の見聞、紅衛兵達との会見、様々な情報の入手など、ジャーナリストとしての著者の観察・思考を縦横に働かせて、この革命の本質を解明しようとしている。本書では中国共産党上層部の対立抗争という著者の解釈をもとにして、現在この革命の起された原因、現象の推移、将来の見通しなどを、国内及び国際的な観点からも眺めわたして説明している。

#### 中共を視察して／大宅壮一〔述〕

出版地・出版者不明 1966 年（昭和 41） 54 頁 〔Q2052〕

大宅壮一を団長に大森実、三鬼陽之助、藤原弘達、梶山季之らノンフィクションライターで組織された中国視察団の経験を、大宅が警視庁警務部で語った講演録（財団法人自警会の雑誌『自警』第 48 巻第 11 号、1961 年 11 月に同タイトル・ほぼ同内容の講演要旨あり）。大宅らは日中旅行社に 60 万円を払って視察を実施したが、これに対し「ソ連の倍くらい」で「暴力をむさぼっておるわけです」と手厳しい。一行には「通訳と称するのが」についており、中国入国後、最初に睨まれたのは移動の自動車の中で「支那の夜」を歌った藤原弘達であった。まもなく大宅自身も「毛沢東の説教」に辟易して発した「毛沢東はモウタクサンダ」との発言で、通訳より嚴重抗議を受ける。「あの国は外国に対して非常な憎しみというのを持っており、その憎しみがあの国の原動力になつている」という指摘や、文革についての「文化とは何のかかわりもない。文化の名において文化を破壊する。〔中略〕一種のクーデターです」との説明は、いわゆる「親中派」の見方とは一線を画する。よく知られる「砂利革命」についても触れ、「一番活発な発言をするのは中学生から高校生〔中略〕しかも中学生、高校生の中で猛烈に強いのは女です。女の砂利です。そういう者をうまくおだてているわけです」と紅衛兵の文革における役割を明快に説明する。さらに映画に現れた毛沢東を見て、「老境というよりももうろくに近い。一節によると脳軟化症にかかっているという説もある」と、最後まで大宅ならではの批判精神溢れる視察記録となっている。（関智英）

#### 新中国の生活指導／小川太郎編

東京 明治図書出版 1966（昭和 41） 222 頁 〔7231〕

本書は、中国の少年先鋒隊の活動、学校・施設・家庭における児童の指導、青年・成人の意識の変革に関する実践報告を翻訳、編纂したものである。その附録に「最近の中国の教育をめぐって」と題して、編者が 1964（昭和 39）年 10 月～11 月の 1 ヶ月間、訪中学術代表団の一員として中国を訪れた時の報告を収めている。教育と労働の結合という観点から中国の教育の特徴を把握し、人民公社立の農業中学、工場の「半工半読」の学校に強い関心を示している。また「自力更生」「比学趕帮」「又紅又專」という言葉の実践の中にみられる精神を、教育のあり方の面からとらえている。

#### 中共雑観／小坂善太郎〔述〕

出版地不明 内外情勢調査会 出版年不明 57 頁 〔Q2037〕

1966 年 8 月末から約 1 か月中国を訪問した衆議院議員の講演記録である。著者は自民党内のいわゆるハト派議員であり、1972 年の日中国交正常化の際は、日中国交正常化協議会会長と

して、田中角栄首相訪中の環境づくりにも貢献した。本書では、文化大革命が始まったばかりの時期に広州－北京－洛陽－武漢－上海－杭州を訪れた著者の見聞や印象が語られる。小見出しを順に掲げると、「毛一色の中に入る」「一闘、二批、三改」「大革命への三つの原因」「人間第一、人海戦術が中心」「紅衛兵の五つの要求」「非常に貧しい民情」「強調される精神面」「積極的な産児制限」「都市と農村の格差」「徹底した均衡財政」「まず国内引き締め」「根本は憎しみの哲学」「日中人事交流にちゃんとしたルートを」「白眼をもって見ず、青眼をもって見よ」。産児制限について、著者が「一般の産児制限の器具を使うほかに、晩婚の奨励をやっている。二十五歳ぐらいまでは女の子も独りである。法律は十八歳からだそうですが、男は三十ぐらいまで晩婚でがんばれということだそうです」と述べるのは、文革が産児制限を緩めたとの通説に照らして、やや意外である。また、経済の専門家に対し、財政について詳しく説明してほしいと苦言を呈したところ、わきにいた人が「いま、われわれはねらわれているのだ。みんなから攻められようとしているときに、内輪のことはあんまりいえませんよ。日本だって戦争のときはそうだったでしょう」と発言するくだりは、文革初期の緊迫した雰囲気伝える。

(村田雄二郎)

#### 見てきた文化大革命／小坂善太郎〔述〕

東京 新財政研究会 1966 (昭和 41) 50 頁 [Q2031]

本書は、小坂善太郎 (自由民主党衆議院議員) が川野 (参議院議員) と約 4 週間訪中し、帰国後翌日の 1966 年 9 月 26 日に文化大革命の現状について語った記録である。王曉雲らの出迎えをうけた訪中行程は深圳－広州－北京－洛陽－武漢－上海－杭州－広州というルートで、北京では周恩来・陳毅・郭沫若・廖承志らと接見している (毛沢東と林彪には会う機会がなかった)。小坂らは、文化大革命が発動された理由はベトナム戦争によるのではないかと推測している。また、この訪中で中国側が具体的に述べた数字は「1965 年の穀物の総生産が 2 億トン」だということと「人口が昨年で 7 億」だということだけだったとも述べている。さらに、中国側は佐藤首相が政経不可分の原則を支持して国交回復することはあり得ないと見立てている、とも記している。

(中村元哉)

#### 中国・東南アジア：世界の旅 9／座右宝刊行会編

東京 小学館 1966 (昭和 41) 175 頁 [7597]

多数のカラー写真が収められた中国・東南アジア旅行のガイドブック。中国と東南アジア各国旅行の印象記が本書の半ばを占めるが、中国は山本健吉「中国紀行」と、阿部徹雄「新中国の近況」の 2 編。山本は 1957 (昭和 32) 年 10 月末から 11 月末にかけて日本文学代表団の一員として訪中したもので、同行者は中野重治・井上靖・本多秋五・堀田善衛・十返肇・多田裕計等。著者が訪れた都市のうち杭州・蘇州・広州の印象を述べている。阿部は毎日新聞元写真部長で 1965 年 5 月から 6 月にかけて中国を観光旅行した。広州・上海・北京・杭州等を訪れ、都市の市場・工場や、工場労働者住宅地を見学している。本書には旅行記ではないが 1963 年、1964 年と 2 度にわたり訪中した岡山大学法学部教授河野通博の手になる中国の政治・経済・文化・社会一般に関する概説がのせられている。巻末に地図・国歌・日常会話が収められている。

## 教師の見た中国：社会主義建設をめざす七億の躍動／清水正行著

長野 長野県高等学校教職員組合 1966（昭和 41） 152 頁 〔Q2032〕

著者は長野県高等学校教職員組合執行委員長で、日本高等学校教職員組合第 1 次訪中代表団の秘書長。この訪中国の一行は、団長の小笠原和夫（日高教中央執行委員長）以下 4 名。期間は 1965（昭和 40）年 7 月 22 日～8 月 23 日。経路は東京－香港－広州－北京－西安－延安－西安－南京－上海－杭州－上海－瀋陽－鞍山－撫順－瀋陽－北京－広州－香港－東京。広州では中山大学、北京では清華大学・第二紡績工場内幼稚園小学校、南京では無線電工業学校・師範学院附属中学校、上海では労働者文化宮・少年文化宮・上海機器製造学校、瀋陽では遼寧省実験中学校・瀋陽農学院を訪れ、また各地で教育関係者と懇談する。

本書はこの旅行報告で 4 部からなる。〈七億人民の動き〉は、反米・反修正主義闘争、社会主義建設、人民公社などを記す。〈教育事情はどうなっているか〉が主要部分で、訪中で得た見聞をもとに、教育の果たすべき役割、教育の内容と方法、教育体制、教師の生活などを述べる。その他〈人民の生活〉と〈余録〉があり、後者では、平頂山事件と糞尿汲取労働者で人民代表となった時伝祥のことを記す。

## 新中国有心／杉村武著

東京 朝日新聞社 1966（昭和 41） 275 頁 〔7277〕

著者は朝日新聞社論説委員。1965（昭和 40）年春、3 週間の中国旅行での印象記。広州・長沙・武漢・蘇州・南京・万里長城などを訪れて感じた、さまざまな細かいことに目をとめている。例えば、旅行中生水を飲めなくて苦勞した話。中国伝統手工芸が、解放後の中国でいかに温存と向上をはかられているか。昔から有名な中国の菓子、酒、茶、おみやげ品について。園芸、植樹、造園について。京劇の現代化について。旅行中、著者の世話をした 3 人の工作員との交りについて、など。著者は、本書の中で、新中国の詩情を描き出そうとしたと述べている。著者自身の作による漢詩も多く収録されている。

## 経営者の見た共産主義国・中国／鈴木伝六著

東京 日本生産性本部 1966（昭和 41） 348 頁 〔7379〕

著者は製菓会社社長で山形県県会議員。日本国際貿易地方議員連盟の訪中団の一員として、1966（昭和 41）年 4 月末から 1 ヶ月間中国を旅行した。広州・北京・ハルビン・長春・瀋陽・鞍山・天津・杭州・上海・蘇州を訪れ、旅行日程に従って毎日の見聞を詳しく記している。人民公社・各種工場・名勝旧蹟見学の様子のほか、特に経済面の観察が細かく、人民公社員や工員、元資本家らの給料、かれらの住居、商品の値段などにもふれていて、企業経営者らしい目を感じられる。筆者撮影の写真が豊富に収められている。なお、本書の後半は、筆者が 1960 年に東南アジアを訪れた時の記録である。

## 今日のチベット／高野好久著

東京 新日本出版社 1966（昭和 41） 215 頁 〔7566〕

著者は北京駐在『赤旗』特派員。『人民日報』のチベット取材記者団の一員として 1965（昭和 40）年 7 月から 8 月の 1 ヶ月間、自治区成立直前のチベットを旅行した。記者団は外国人記者 7 名、中国側記者 5 名の計 12 名よりなり、日本人は著者の他に『赤旗』特派員の田村茂

と日本電波ニュース社北京特派員の大小島嘉一が参加した。本書は『赤旗』日曜版 1965 年 10 月 3 日から 12 月 26 日まで 13 回にわたって連載されたその時の見聞記に加筆してまとめたものである。ラサの寺院，市民生活，ラサ郊外の工場，労働者の生活，人民公社，人民解放軍，山南専区の農業互助組の現状を伝えながら 1959 年ダライ・ラマの反乱平定後始った，チベットの“偉大な変革”の姿を知らせようとしている。巻末に資料として「チベット平和解放の諸方策にかんする中央人民政府とチベット地方政府との協定」全文，1965 年 9 月 1 日チベット自治区第 1 期人民代表大会第 1 回会議での謝富治演説の摘要と張国華自治区第 1 書記報告の要旨，自治区成立をつげる『北京週報』のニュースが収録されている。所収の写真は田村茂撮影のものである。

### **700,000,000：中国 30 日の旅／高橋恭男著**

**長野 長野県農村文化協会 1966（昭和 41） 258 頁 [9079]**

著者は長野県議会議員。小林良雄（京都府議会議員）を団長とする国際貿易促進地方議員連盟秋季代表団の一員として訪中する。一行 20 名は，1965（昭和 40）年 9 月 29 日広州に入っ  
て，北京に 13 日間滞在，さらに武漢・南京・蘇州・上海・杭州とまわり，ちょうど 1 ヶ月して広州を去る。

本書はこの訪中記録。まず「羽田から北京まで」で 20 数年前幼年兵として中国にいた時の  
ころを思いながら，訪中の第一印象を綴る。ついで「国慶節」の項では，その前後のころの北  
京，式典のことを記し，「日中貿易の将来と工業展」では，北京で開かれた日本工業展覧会  
のこと，日中貿易の焦点となる天津港のこと，広州見本市のことを述べる。「自立の道を拓いた  
中国の工業」では，北京の国綿第二工場，蘇州の絹織物工場，南京の化学肥料工場，上海の廟  
行工業地帯，武漢の鉄鋼コンビナートのこと，「中国建設の柱」では，盧溝橋の中国ルーマニ  
ア友好人民公社，南京郊外の十月人民公社のこと，「文盲追放と新中国の教育」では，武漢実  
験学校，清華大学，北京の京劇，蘇州の刺繍研究所，上海の美術研究所・少年宮のことを書く。

「中国文化の歴史」は，天壇・十三陵や棲霞寺・寒山寺など，名勝旧蹟の訪問記。「中国共産  
党と民族資本家」は，上海の 4 人の民族資本家や南漢宸（中国国際貿易促進委員会主席）・廖  
承志（中日友好協会会長）との会見記。最後の「新しい中国」は，北京の街の光景や北京から  
広州までの旅を描く。

### **新中国の医学：中西医合作の近況／高橋真太郎著**

**大阪 浪速社 1966（昭和 41） 179 頁 [7925]**

中華医学会が日本学術会議に寄せた招待により，6 名の医学者，薬学者が 1962（昭和 37）  
年 11 月 15 日から 12 月 7 日まで中国を訪問した。広州・鄭州・北京・上海・杭州の各地をま  
わり，主に病院や研究所，医科大学を見学した。また，日本の研究の近況を講演することが訪  
中の目的であったので，中華医学会総会で団員おのおのの専門分野別にこれを行った。本書で  
は，名所見物の記事は殆ど割愛され，各病院の規模，機構，医療方法，研究機関における研究  
状況，医学教育の体制など，中国の医学の現状が報告されている。とくに著者の専門が生薬材  
料学であるので，中国の漢薬，漢方に関心を寄せ，巻末には，「中西医合作の路線が確立され  
るまで」「中国における漢薬の基礎研究の進歩」などが別稿として収められている。団員は著  
者（阪大）のほか次の 5 名である。稗田憲太郎（久留米組織再生研究所長，団長），武田勝男



(北大, 病理学), 入江英雄 (九大, 放射線治療学), 山口富雄 (徳大, 寄生虫病学), 竹本常松 (東北大, 生薬化学)。

#### **革命のなかの中国：1965／第三回訪中法律家代表团**

**東京 労働旬報社 1966 (昭和 41) 327 頁 [7795]**

日本の国際法律家連絡協会が組織した第三次訪中代表团 25 名は、中国政治法律学会の招きで、1965 (昭和 40) 年 8 月 15 日から 9 月 11 日まで中国を訪れた。一行は、広州・北京・瀋陽・鞍山・天津・南京・上海・杭州の各地を旅行し、法律関係の諸機関、工場や人民公社、集団住宅、名所旧蹟などを見学した。本書の第 1 部では、社会主義建設の基本路線、プロレタリア独裁と大衆路線、中国における法の意義と役割、現代修正主義批判、社会主義変革と法、といった理論的諸問題を、第 2 部では具体的な見学記を、団員が分担執筆している。いずれも法律専門家の眼で細かに観察されているのが特徴である。

#### **学生参観団中国を行く／第 2 次訪中・学生友好参観団**

**東京 斉了会 1966 (昭和 41) 86 頁 [7588]**

1966 (昭和 41) 年 7 月 21 日から 8 月 5 日まで、1965 年にひき続いて、118 名の学生が第 2 次訪中学生友好参観団として、広州・杭州・上海・北京を訪問した。帰国後、学生達が自分の目で見、肌に感じ、考えたことを少しでも数多くの人に知ってもらいたいという願いから、編集したもの。この旅行が紅衛兵出現の以前であったためか、本書には文化大革命に関する記述はない。殆んどどの学生が、第 1 次訪中学生参観団の時と同じように、中国人が彼等に示した親切的な歓迎に感激し、その純粋な人間性にうたれている。

#### **東風の中を行く／西浜二男著**

**東京 真誠書店 1966 (昭和 41) 172, 16 頁 [Q2033]**

著者は訪中当時、目黒区議会議員 (社会党) で国際貿易促進議員連盟の目黒区議会事務局長を務めていた。本書は、訪中日本友好視察団第五団員の一人として、1965 年 10 月 22 日から 11 月 19 日まで香港－広州－武漢－北京－南京－蘇州－上海－広州を巡った際の旅行記である。北京で廖承志、西園寺公一らに面会したほか、人民公社、鉄鋼コンビナート、小学校などを見学する定番コースであった。「大地に立つ——四千年の歴史のあとに」「百聞は一見に如かず——その見たまま、感じたまま」「明日を探る」の見出しの下に、訪中時の見聞や感想が記され、著者による旅先のスケッチも所々にはさまれる。著者の観察は、蠅やネズミがいない、忘れ物がもれなく届けられる、泥棒がいないなど、革命後の大きな社会変化に賛嘆する、この時期の訪中団に特徴的な紋切り型の観察である。「解放」後の中国社会の安定、民生の向上、衛生の改善、経済の発展、教育の普及などが肯定的に紹介され、最後に日中の友好増進と早期の国交回復が説かれる。

(村田雄二郎)

#### **新中国あんない／日中友好代表团**

**京都 法蔵館 1966 (昭和 41) 215 頁 [7230]**

比較的容易に中国旅行ができるようになり、適当な案内書を求める人が多い。これに応ずるべく編纂されたのが本書である。従って、前篇では初めての中国旅行者を対象にして、旅行の

準備や中国でのエチケット、見学場所、秦～清に至る日中友好史について簡単な説明があり、また参考書目もあげられている。後篇は、日中友好訪中京都府代表団が 1965（昭和 40）年 4 月 8 日から 5 月 8 日迄、中日友好協会の招きで中国を訪問した時の団員の報告と感想である。一行は舞鶴市長以下、京都府会議員、市会議員、労働組合代表、仏教界代表ら 10 名より成る。広州・北京・西安・延安・杭州・上海を訪れた。各地での見聞が団員各々の職業と専門に基き、以下のテーマにまとめられている。婦人労働者、労働組合と労働者の生活、人民公社、上海の市政、青少年と革命の継承、各所に掲げられているスローガン、仏教のあり方。

#### **新中国視察報告書：1966／日本乾電池工業会編**

**東京 日本乾電池工業会 1966（昭和 41） 112 頁 〔Q2040〕**

中国最近の乾電池の生産事情およびその需要背景を知るために組織された乾電池及び関連企業の代表 13 名からなる視察団の記録。団長は日本乾電池工業会会長の藤室益三（東洋乾電池取締役社長）。日程は 4 月 11 日に羽田を発ち、香港－広州－上海－南京－天津－北京－広州を経て、4 月 25 日に帰国した。滞在は短期だったものの「従来全く知られていなかった中国における乾電池工業の概要」を明らかにした点は「決して小さな収穫ではなかった」と自賛しており、その報告である「中国における乾電池事情」は専門的な内容もふくめ簡潔にまとめられている。参加者による「中国の化学肥料工場見学記」「新中国北京電池廠参観感想」なども興味深い。団長の「諸設備や、その技術そのものが、あまり感心するものではなかったが〔中略〕従業員達の真剣さには大いに打たれるものがあった」との感想は、中国の産業事情の核心をついているように思われる。何よりも面白いのは口絵で収められている「中華人民共和国製乾電池」一覧表で、今では失われてしまったであろう、全国の各地の乾電池の図柄を色刷りで見ることができる。（関智英）

#### **私の中国旅行：革命・自衛・再建・自力更生の中国／山口清一著**

**大阪 現代理論社 1966（昭和 41） 193 頁 〔15641〕**

和歌山県新宮教会長老も務めた山口清一が、山崎利雄団長ら総勢 20 名で構成された日中友好協会旅行団（第 3 回 203 団、1965 年 4 月 27 日出発）に参加した際の旅行記である。香港－広州－北京－南京－蘇州－上海－杭州－広州とまわって帰路についている。北京では、周恩来首相、南漢宸中国国際貿易促進委員主席、楚図南中国人民对外文化協会会長ら以外にも、趙安博・楊温玉・勇龍貴らと会談している。著者は中国の専門家ではなく、一人の日本人の視点から当時の中国をあるがままに記述している。（中村元哉）

#### **中国語研究者教育者代表団訪中報告書**

**名古屋 采華書林 1966（昭和 41） 81 頁 〔7402〕**

5 名の中国語研究者教育者の中国旅行記。5 名とは藤堂明保、香坂順一、伊地智善継、芝田稔、長谷川良一で、「中国語教育研究者日中交流懇談会」から選ばれたもの。1966（昭和 41）年 4 月 27 日、日本を去って、5 月 21 日に帰国。この間、北京に 12 日間滞在するほか、西安・蘇州・上海・杭州・広州を見物している。本書はその旅行記。博物館、劇場、工場、人民公社などの見聞のほか、各機関、学校で開かれた座談会のことや、何其芳、楼棲、趙安博氏らの講

話の概要が記されている。附録に、藤堂が文字改革委員会で行った「日本の文字改革」と題する講演要旨が載せられている。

## 1967

**アパート天国・魔法ビン文化：ソ連・中共カメラ旅行／石山四郎著**

**東京 ダイヤモンド社 1967（昭和 42） 191 頁 [7544]**

著者はダイヤモンド社副社長。1965 年に 55 日間に亘ってソ連と東欧を、翌 1966（昭和 41）年には中国を 16 日間旅行した。本書はその共産圏見たままの記である。また現地消息通から聞いた話も随所にはさんである。この「アパート天国・魔法ビン文化」という書名は、現在ソ連では全国どこの都市へ行ってもアパートの建設がすごいスピードで進められている、ということと、生水が飲めない中国では、魔法ビンが生活必需品になっていてよく普及している、いふなれば、中国は目下魔法ビン文化の段階である、ということからつけたのである。本書には、著者の撮った写真がたくさん掲載されている。

**モスクワの雪・北京の月：女学者ひとり中ソを行く／漆原隆子著**

**東京 恒文社 1967（昭和 42） 230 頁 [7853]**

著者は、日ソ学院から派遣された留学生として 1963 年 8 月から 1 年間モスクワ大学で学び、帰途中国に立寄り、1964（昭和 39）年 8 月から 10 月まで、北京に約 1 ヶ月、上海に半月程滞在した。本書はその時の見聞記である。北京では名勝旧跡のほか、幼稚園、中学、高校、大学、綿紡工場、人民公社を、上海では団地と文化宮・青年宮・少年宮を見学して、政治思想教育を重視する中国の教育事情や、労働者・農民の生活に関心を払っている。ちょうど中ソ論争が激しく展開されている時であり、著者は、ソ連では中国の悪口を、中国ではソ連修正主義批判を聞かされる。従って中国に入ってから著者の目は、おのずと両者の比較をしているが、読者にも中ソのお国ぶりの違いをいろいろと感じさせてくれる。

**北京を追われて／江頭数馬著**

**毎日新聞社 1967（昭和 42） 190 頁 [7694]**

著者の江頭数馬は、『毎日新聞』北京支局長として 1967 年 4 月 20 日から 9 月 14 日まで文化大革命中の中国を体感した。著者は、唐突に国外退去を言い渡され、「世界の注視をあびた北京特派員から一転“特務（スパイ）”と呼ばれかねないどん底に突き落とされ」（まえがき）た。本書は、わずか 5 ヶ月ほどの中国記録ではあるが、相手のことを正しく伝えたいというジャーナリズム精神に貫かれている。 （中村元哉）

**中国見たまま／小坂善太郎著**

**東京 鹿島研究所出版会 1967（昭和 42） 169 頁 [7583]**

文化大革命開始後間もない 1966（昭和 41）年 9 月、自由民主党訪中議員団の一員として、4 週間に亘って、著者は北京・洛陽・上海・杭州・広州を訪れた。北京には約 2 週間滞在し、周恩来・陳毅・廖承志・郭沫若等と会見。著者は、日本は現在のアメリカと友好国であるという現実を踏まえたうえで日中友好への道を探り出すべきであり、そのためには、米中間のトゲ

トゲしい相互不信感に基づく対立関係を緩和するための努力を日本がすべきであると考え、中国大陸旅行の印象や経験をアメリカの要路の人々に話し、少しでも米中間の和解に資することができれば、と願って同年の 11 月にはアメリカを訪問した。本書は帰国後、方々で講演した記録の中から、中国についての代表的なものをまとめたものである。従ってその内容は重複する部分が多い。

#### 中国の旅から／小山一平著

長野 長野県中国研究会 1967 (昭和 42) 232 頁 [Q2034]

中国人民外交協会の招きで、日本地方自治代表団の一員として訪中した際の記録。著者は当時、長野県上田市市長。旅程は 1965 年 4 月 28 日より 6 月 3 日まで、北京－ハルビン－長春－瀋陽－撫順－武漢－南京－蘇州－上海－杭州－広州－仏山を歴訪するものであった。北京では人民大会堂で開かれたメーデーの前夜祭に参列し、周恩来総理の茶会に招かれた。このとき同席した日本人の中には、滝沢修を団長とする新劇関係者や大松博文率いるバレエ選手団などの顔もあった。人民大会堂では郭沫若とも懇談している。著者は社会主義中国に対して、物質的・消費的欲望を是認する日本社会と「全く異なった思想、倫理によって、新しい経済、社会機構の国家と個人生活を創造しようとしている」、「幼少の頃から徹底的に行われている政治思想教育は、それを可能にするための人間づくりの教育である」、「毛沢東主席と中国共産党の指導にたいする全面的信頼のもとに、六億五千万が一致団結して国家建設に邁進している姿は、驚くべきものがあり、社会主義建設は成功裡にすすめられて、着々と、強大にしてゆるぎなき国家が築かれつつある」と肯定的な眼差しを向けている。(村田雄二郎)

#### 中国文化大革命／菅沼正久著

東京 三一書房 1967 (昭和 42) 245 頁 [7545]

著者は東京農大講師、中国研究所所員。中国科学院哲学社会科学部が招待し、日中友好協会正統本部が派遣した訪中日本社会科学学術代表団の一員として、1966 (昭和 41) 年 11 月 24 日から 12 月 25 日までの 1 ヶ月を中国旅行した。団長は馬場克三。著者達は北京大学、5 つの人民公社 (北京郊外の紅旗人民公社、瀋陽郊外の二一三人民公社、杭州の西湖人民公社、吉安郊外の紅旗人民公社、南京の十月人民公社)、10 の国営企業 (鞍山製鋼公司、上海の国営第二綿紡織工場、北京百貨店等) を見学している。本書は著者がこの時の見聞で確かめた事を基として、社会主義社会における文化革命の理論を述べたものである。著者は 1958 年の「社会主義建設の総路線」にはじまりプロレタリア文化大革命へと発展した中国社会主義社会の変革の本質をとらえるには、中国共産党の社会主義社会の理論 (社会主義社会を共産主義社会にいたる過渡的社会としてとらえ、依然として階級対立、上部構造と下部構造の矛盾が存在する社会であり、上部構造にすくうブルジョア・イデオロギーと激しい闘争を行って、精神労働者による文化の占有を打破する文化革命を遂行しなければならないとする) を理解し、この理論が文化大革命全体を貫徹しているのを見なければならないと説いている。

#### 真紅の太陽：文化大革命下の中国を行く／第三次訪中学生友好参観団

東京 1967 (昭和 42) 77 頁 [7745]

1965 年にはじめて組織された学生の訪中参観団は、毎回、帰国后感想文集を出しており、これは、その第 3 次参観団のもの。総勢 117 名が、1967（昭和 42）年 8 月 6 日から 22 日迄、広州・上海・北京・済南の各地を訪れ、人民公社・工場・人民解放軍・大学などを見学して紅衛兵と交流をはかった。劉少奇打倒を激しく叫び、毛沢東の偉大さを高らかにうたいあげ、日本の学生達の質問に毛沢東語録の朗読で答える紅衛兵達。この、実際に目で見た文化大革命とそこに営まれる人々の生活について、驚いたこと、感激したこと、疑問に思ったことなどを率直に語った文章が 31 篇収められている。特に、多くの者が、国家建設の意気に燃える中国の青年達の明るさ、純朴さに強くうたれている。

#### 文化大革命下の上海、南京において：華中方面視察報告／高碕事務所編

出版地不明 高碕事務所 1967（昭和 42） 41 頁〔Q2045〕

高碕（達之助）事務所が 1967 年 4 月 10 日から 8 日間、北京駐在連絡事務所の野口一郎、内田禎夫、東京本部の宗像善俊、須田生三の 4 名を華中に視察させた際の出張報告書である。彼ら 4 名の目的は、文化大革命下での南京・蘇州・上海の工場施設や人民公社の現状を視察し、あわせて 1967 年初頭に上海で発生した文化大革命の動向を分析することだった。この報告書には、学術研究にとって興味深い記述が散見される。その一例を抜粋すると、次のとおりである。「造反派や紅衛兵との会話を通じて、今回の文化〔大〕革命に関し、その主観的に追求する目標＝理想が現実が生じた大きな混乱と犠牲の代価を支払ってもなお価値あると考えられる程度に本当に実現可能なかどうか、といった点には依然として大きな疑問が残る。そして、人心の末端に至るまで極端な形で浸透しつつある毛沢東主席に対する個人崇拜については、問題があるのではなかろうか」、「今日の日本のラジオ工場などに比べると、技術的に相当遅れていることは明らかだが、賃金コストの低さから考えれば、労働集約的技術は十分にその基盤をもっているわけであり、これでもう少し能率が上がってくれば、確かに東南アジア等への輸出市場では日本製品の脅威になるかも知れない」。（中村元哉）

#### 紅衛兵：赤い人間像を追う／高木健夫著

東京 合同出版 1967（昭和 42） 284 頁〔7550〕

本書は、1966（昭和 41）年 11 月頃中国を訪れ、紅衛兵の活躍するさまを見てきた著者が、「紅衛兵の発生とその伝統と本質を考えること」が「中国そのもの」を考えることであるとの見解により、いろいろの側面から紅衛兵をとらえ、まとめたものである。すなわち、著者がじかに接したり、周囲の大人たちの話から得た紅衛兵の姿、人民日報等に掲載された記事、台湾の出版物にのった脱走者の話、ソ連の見方、日本の高校生の見方等が紹介されている。その他、文化大革命全般について、1966 年 8 月 8 日の中共中央委員会の決定、人民日報社説、1967 年 2 月迄の経過をのせている。

#### 新しき長城／高橋和巳著

東京 河出書房 1967（昭和 42） 339 頁〔7782〕

本書は、「新しき長城」と題する中国旅行記を含む評論集。著者は、1967（昭和 42）年 4 月 11 日から 2 週間、『朝日ジャーナル』の特派員として、広州・上海・南京・天津・北京の各地をまわってきた。その目的は、中国文学研究者である著者が、これまで心に描いてきた中国の

風物や生活と、進行中の文化大革命の実態をみることであった。著者の見聞きした文化大革命として、上海の時計工場における造反の例、上海の上級中学と北京の鉱業大学の紅衛兵達から聞いた教育の現状、北京に革命委員会が成立した日の街の様子、バレエ「白毛女」のことなどが語られている。そして、劉少奇批判のあり方、芸術における集団創造と個人の表現意欲、毛沢東の個人崇拜問題に疑問を呈しながらも、文化大革命のもつ大きな意義を認めている。一方、遺跡や人民公社を訪れて美しい風景を眼にするや、すぐに古典の詩を思い浮べる著者は、現在の中国において自然と人間のかかわり方のもつ意味を考え直している。

#### 揚子江のほとり：中国とその人間学／武田泰淳著

東京 芳賀書店 1967（昭和 42） 429 頁 〔7573〕

新聞、雑誌にこれまで発表してきた中国に関する文章を集めたもの。内容は主として中国文学を論じたものと中国旅行を描いた紀行的なものである。著者が中国を訪れたのは戦争中以来 5 回に及ぶが、そのうち新中国になってからは、1961、64、67 年の 3 回で、いずれも文学者として迎えられた。旅行記は 3 回がまとめて収められてあるが、訪中の折々の印象を随筆風に記した断片的なものである。いずれも比較的短いが、それぞれの時期の中国の事情が読みとれる。また著者は文学者としての訪問であるから、中国の文学関係者と会うことが多く、老舎・巴金・謝冰心・曹禺などよく知られた作家達の姿がうかがわれる。

#### 激動する中国を行く／棚辺四郎著

東京 家の光協会 1967（昭和 42） 249 頁 〔8401〕

著者は福島県農協五連会長で、第 2 次訪中全購連代表団の一員。この一行は、団長の土肥大四郎（全購連専務理事）以下 9 名。期間は 1966（昭和 41）年 11 月 19 日～12 月 14 日。経路は東京－香港－広州－北京－瀋陽－鞍山－撫順－北京－上海－長沙（韶山）－広州－香港－東京。

本書はその視察記で、〈日記編〉〈中国農業編〉〈記録編〉の 3 編から成る。著者は〈はしがき〉のなかで

世界注視の的となっている中国の姿、また、生産協同体としての供銷合作社、人民公社の実情にふれ、あわせて商工業関係の躍動ぶりにも接しようというのが、私たちの当初の目的であった。

ところが、ご承知のように「東洋の赤い民族の爆発」ともいわれる紅衛兵の文化大革命が突発し、視察訪問する相手国は、期せずして激動下にさらされるという実情におかれるにいたった。私たちの視察行程である広州・北京・瀋陽（旧奉天）・上海・長沙等では、ふんだんに紅衛兵に取り囲まれ、毛沢東語録が朗唱され、多くの中国人民から文化大革命の真髄を、いやというほど聞かされたのであった。

というが、この状態は日記風の旅行記〈日記編〉で詳しく知られる。それでも著者たちは農業の視察につとめたのであって、〈中国農業編〉はその報告である。ここでは人民公社の仕組・機構や所有権の問題、その性格を述べ、さらに具体的に中越人民公社（北京）、八一人民公社（瀋陽）、羅店人民公社（上海）、花山人民公社（広州）について記す。また供銷合作社についても、その組織や発展の状態を述べるほか、十三陵供銷合作社、八一人民公社供銷合作社、花山供銷合作社について記し、全国総社の紅衛兵との会見記も載せる。〈記録編〉は、視察団

員の所感報告、日中農業協同組合貿易促進のための訪中中の話合い、著者による福島民友新聞、福島民報への報道記事を集める。

#### 杜甫周辺記／土岐善麿著

東京 春秋社 1967（昭和 37） 292 頁 〔7753〕

杜甫に関する随想集とでもいうべき本書は、その第 4 部に、著者が 1964（昭和 39）年 10 月、日中文化交流協会代表団の一員として訪中した時の印象記と、その際もらった「毛主席詩詞三十七首」を解釈した小文を取めている。旅行全体のことは本書ではわからず、北京で建国 15 周年に湧きたつ国慶節を参観したあと訪れた西安・洛陽のことだけが記されている。著者は、新しい景観を示す歴史の都に古い時代のおもかげをさぐり、同時に、工場の掲示板に見出した労働者の詩を解釈して感想を述べたりもしている。

#### 不滅の延安：プロレタリア文化大革命の新中国紀行〈第一部〉／豊田正子著

東京 五同産業出版部 1967（昭和 42） 240 頁 〔7631〕

著者は、戦前「綴方教室」で名をはせた作家。夫で、同じく作家の江馬修と共に、中国作家協会の招待で 1967（昭和 42）年 1 月 13 日から 2 月末まで中国を訪れた。本書は、その旅行記の第一部で、西安と延安へ旅行した時のことを扱っている。著者は、延安訪問の目的を「革命の源泉……をたずねて、革命の新しいいのちを汲みとる」ことにおいている。西安では、連日の如く劉・鄧反動路線打倒を叫ぶ大衆集会が開かれ、デモが続き、トンガリ帽子をかぶせられた人たちが公衆の中を連れられている風景が見られた。西安から車で延安へ向う途中、幾組もの紅衛兵長征隊に出会い、沿路の町や村のあちこちに文化大革命関係のスローガンをみかけた。延安では、革命紀念館、毛沢東、林彪、朱徳らの住居跡、抗日軍政大学 30 周年記念の歴史展覧会、中共中央の事務所など、中共延安時代の旧跡と柳林人民公社を訪れた。著者は、これらの見学、見聞を非常な感動をもって記していて、本書は一つの毛沢東思想、文化大革命讃歌である。なお、このあと、第二部、北京滞在（23 日間）中の見聞記、第三部、上海の 1 月革命、最後に杭州と広東、と続く予定らしい。

#### 若い眼でみた文化大革命／日中友好協会（正統）第 5 次訪中青年代表団

東京 青年出版社 1967（昭和 42） 222 頁 〔7700〕

日中友好運動に参加している青年達の代表 24 名は、中華全国青年聯合会の招待をうけて、1967（昭和 42）年 5 月 28 日から 45 日間、広州・北京・太原・上海・南昌・井崗山・韶山・長沙の各地を旅行した。人民公社・工場・人民解放軍・学校などを見学するとともに、そこで紅衛兵や造反派の労働者・指導的幹部・農村青年・工作員らと交流して、かれらの闘争体験をきいた。特に日本からは初めて大寨人民公社を訪問して、党書記の陳永貴から話をきいている。また、広州の人民公社に泊って農作業を手伝ったり、北京の紡績工場では、食堂で職員の列に加わって食事をとったり、他の訪中団にはみられない体験をしている。巻末に、岩村三千夫の解説「造反・奪権・大批判——文化大革命の経過と基本路線」が付されている。

#### プロレタリア文化大革命の中国を訪ねて／日中友好協会（正統）本部第三次訪中婦人代表団

東京 1967（昭和 42） 62 頁 〔7699〕

日中友好協会（正統）本部訪中婦人代表团 17 名が、中華人民共和国全国婦人聯合会の招待を受けて 1967（昭和 42）年 3 月下旬から 2 ヶ月間中国を訪問した時の団員の報告集。行程は、広州・北京・唐山・西安・延安・瀋陽・撫順・鞍山・上海・杭州・長沙・韶山と、文化大革命下の訪中国には珍しく旅行範囲が広い。一行は各地で工場、学校、人民公社生産隊、解放軍、発電所、革命遺跡を見学し、中国の人々から解放前及び解放後、現在に至るかれらの生活と闘いについて話を聞き、それを深く心にとめているようである。5 月 1 日にはメーデーに参列し、北京市委員会が成立（4 月 20 日）して文化大革命が有利な情勢のうちに進行しているさまを、ところかまわず貼られた大字報、街頭をゆくデモ行進、毛沢東思想宣伝隊などにとらえている。

#### 共産国東と西／林健太郎著

東京 新潮社 1967（昭和 42） 191 頁 [7543]

著者は、1966 年 8 月から 9 月にはソ連・東欧を、1967（昭和 42）年 1 月 21 日から 2 月 3 日までは中国を旅行し、帰国後雑誌や新聞に旅行記を発表した。本書は、それら 6 篇と新たな書き下し 1 篇より成る。うち 2 篇が中国に関するもので、印象記と理論的考察に分れる。村松暎（慶應大教授）、土井章（昭和同人会）ら 10 人のグループで、広州・武漢・北京・上海・杭州をまわって、各地で見た文化大革命の様相を記している。深圳駅では毛沢東をたたえる歌と踊りの歓迎を受け、武漢で「人民裁判」を目撃した。また、閉鎖された北京の宮殿や歴史博物館、詳細な説明を受けた杭州の人民英雄を記念する博物館、その他いたるところにみかける紅衛兵や壁新聞等につき、著者は疑問を抱き乍らその感想を記している。そして理論的には、社会主義社会における階級闘争、上海の一月革命とパリ・コミューンの関係等を中心に、日本の思想界にうけ入れられた文化大革命について著者の見解を述べている。本書では、「自由化」の途をすすむソ連・東欧諸国と革命渦中の中国を比較できる点が面白い。

#### 世界の骨董遍歴／広田不孤斎著

東京 朝日新聞社 1967（昭和 42） 272 頁 [7854]

著者は若年より古美術商を営み、大正中期より敗戦までの 30 年近く、東京と北京を往来して中国の名品を日本にもたらした。戦後 20 年たって、中国美術コレクションの視察にヨーロッパと南北アメリカの各地をまわり、さらに新中国へも出かけた。本書は、それらの旅行記をまとめたものである。中国を訪れたのは、1966（昭和 41）年 5 月 20 日から約 1 ヶ月、中国美術観光団の一員としてである。広州・杭州・上海・蘇州・洛陽・北京の各都市で博物館・美術館や古代の遺跡を見学し、さらには骨董商をものぞいて、現在中国の持っている古美術品を丹念に見て歩いている、また、すっかり様子の変ってしまった琉璃廠や戦前の取引の思い出話などもおり込まれている。同行者に、小倉遊亀（日本画家）、竹田道太郎（美術評論家）の名がみえる。

#### 毛沢東の焦慮と孤独／村松暎著

東京 中央公論社 1967（昭和 42） 224 頁 [7599]

近世中国文学研究者である著者は、1966 年 4 月になされた郭沫若の自己批判に仰天して、文化大革命を調べているうちに、中国の文化が現在存亡の危機にあると感じ、1 年間文化大革命について考えてきた。その著者が 1967（昭和 42）年 1 月 21 日から 2 月 3 日まで毎日新聞



社の文化大革命特派視察団（団員は、土井章・林健太郎・荒巻万佐行と著者の4氏）の一員として、日中平和観光社の観光旅行団に混じって訪中した。訪問先は、武漢・北京・上海・杭州・広州。本書は3章に分かれている。第1章は、「文化大革命を考える」と題して、文化大革命に関する論文2篇。第2章は、「文化大革命を見る」で、訪中の際の日記と帰国後毎日新聞に連載したもの。第3章は、「文化大革命の評価をめぐって」と題して、文化大革命の性格から考えて、新しい文化の成立が可能であるかどうか、を論じている。著者は今度の文化大革命が、非論理、不合理の精神に基づくものであり、毛沢東思想は闘争すなわち破壊の論理のみが大きく前面に乗り出し、創造の論理は著しく稀薄になっているため、大衆は毛沢東の恣意のままに混乱の中に投げ込まれ、中国の過去における輝やかな文化は葬られ、また将来の芽さえも摘みとられようとしている、とみて、現在行われている革命は、中国にとっては余りにも高価な徒労になるであろう、と結論している。巻末に現代中国史年表が附されている。

**一橋東亜倶楽部学生の渡支旅行記／守田藤之助著**

**東京 一橋大学太平洋倶楽部 1967（昭和42） 28頁 [7591]**

『東亜時論』1966年10月号以下に連載された守田藤之助「中国三代に生きる」の第1編清朝時代の第一話「一橋学生の支那旅行」を一冊にまとめたもの。著者は東京高等商業学校本科2年生のとき、1907（明治40、光緒33）年6月中旬、単身で門司を発って、香港・澳門・広東・上海・杭州・蘇州・南京・大冶・漢口・駐馬店（河南省）・北京・天津・芝罘・大連・旅順・營口・奉天・長春・寛城子・撫順・草河口・安東とまわり、韓国を経て、10月末門司にもどる。本書はこの旅行の回想録。

**揚子江をさかのぼる：中国・激動のなかの民衆と生活／吉岡秀夫著**

**東京 大光社 1967（昭和42） 300頁 [7462]**

1966（昭和41）年4月から4ヶ月にわたって揚子江沿岸の都市を中心に、新中国の建設のありさま、民衆の生活取材した朝日テレビニュース社中国取材班の一人である著者の見聞記。各地の見聞を記した断片的な文章が、上海・杭州・蘇州・南京・武漢・廬山・九江・南昌・井崗山・長沙・北京と揚子江をさかのぼって各所を訪れた道程をおって場所ごとにまとめられている。ちょうど文化大革命の激動の始まった時期にあたり、そのさきがけを示す場面も描かれていて、毛沢東思想が民衆の間によく滲透している様子が各所にみられる。図版が豊富に挿入されている。

**1968**

**国際政治と中共／石川忠雄著**

**東京 有信堂 1968（昭和43） 180頁 [7956]**

本書は、「Ⅰ．国際政治と中共・日本・ベトナム」「Ⅱ．毛沢東の国」「Ⅲ．文化大革命と大衆動員方式」の3部から成る。Ⅱが中国旅行記で、1967（昭和42）年4月の広州・上海・南京・天津・北京における文化大革命視察記である。著者は、見るもの、聞くものが毛沢東一色に塗りつぶされており、反対に実権派の劉少奇、鄧小平らの打倒が激烈であるとの印象をうけている。そして各地での見聞を実権派の実態、実権派攻撃を材料にした大衆教育、従来の共

産主義国の党内闘争とのちがい、革命派内部の対立、人民解放軍の役割、学校教育の実情、生産意欲、中国人の世界像などの諸点にまとめている。

#### 講談師中国をゆく／大谷竹山著

東京 青年出版社 1968（昭和 43） 185 頁 [8129]

「講談の定席本牧亭出演の講談師として、革命中国の実情をしかと、この目と耳でとらえて、それを講談や怪しげな雑文で一人でも多くの日本人につたえたい」との目的で、著者は中国共産党と対立していた日本共産党を離党して、1967（昭和 42）年 11 月 1 日から 1 ヶ月余り中国を旅行してきた。全体は旅程にそった記述ではなく、中国の人々が毛沢東思想をいかに活学活用しているか、あちこちで見聞した話をそれぞれ 1 篇ずつにまとめている。すなわち、上海の 1 月革命、高級中学卒業後人民解放軍の豚の飼育係になった男の話、済南の鉛筆工場の歴史、河南省遵化県の人民公社生産大隊の自力更生の話、京劇とバレエの改革、文化大革命における解放軍の文芸工作、上海の三輪車ひきのおじさんの身上話、紅衛兵団体との交流のことなどである。文章は平易で、講談の語り口を思わせるようなところもある。

#### 中国から帰って／岡崎嘉平太〔述〕

東京 国民政治研究会 1968（昭和 43） 51 頁 [Q2046]

日中総合貿易連絡協議会会長の岡崎嘉平太が 1968 年 2 月 1 日から 3 月 9 日まで北京を訪問した際の記録である。日本側の参加者は古井喜実（団長）・岡崎嘉平太・田川誠一、中国側の参加者は劉希文・王曉雲・孫平化であり、LT 貿易から MT 貿易へと切り替わる際の日中間の交渉過程の一端が記されている。この記録が興味深いのは、「文化大革命は收拾の段階にある」との認識が示されていることである。現在の文革研究も 1967 年から 1968 年にかけて一旦収束に向かいつつあったと評価していることから、この点に限定していえば、妥当な中国認識が示されていると言えよう。なお、26 頁以降は、対話形式となっている。（中村元哉）

#### 北京この一年／紺野純一著

東京 新日本出版社 1968（昭和 43） 237 頁 [7862]

『赤旗』の北京特派員として 1966 年 8 月から北京に駐在し、およそ 1 年にわたって現地で取材活動にあたった著者による見聞記。この頃の中国は、文化大革命が混乱を深め、解放軍が参入して「内戦」の状態を呈する激動期にあった。取材活動が制限される中で、著者は繁華街に張り出される壁新聞を見て歩き、紅衛兵発行の新聞を入手し、それらを材料に革命の推移を克明に記録する。流血事件や武闘のデータも載せている。日本共産党が 66 年春に中国共産党と袂を分かったことから、著者は、壁新聞による批判や北京空港で「日中紅衛兵」による暴行を受けるなど、身心ともに過酷な環境にさらされる。そのため本書には憤怒の情が横溢し、文化大革命にみる毛沢東思想の矛盾や幹部が激しく浮沈する革命の支離滅裂な状況に、著者は舌鋒鋭い批判を浴びせている。ほかにも、著者らの駐在が『人民日報』の招聘で、同社から担当記者が付けられていたことなど、当時の外国人プレスを取り巻く状況も伝えている。巻末の資料編には大字報に書かれた革命関係の提綱や通達が収録されている。（辻直美）

#### プロレタリア文化大革命下の中国を訪ねて：1968 年 8 月／第 4 次訪中教育事情視察団

**東京 1968（昭和 43） 76 頁 [8126]**

文化大革命で大きく改革・再編成されつつある中国の教育事情を視察したいという教員たちが、1966 年 8 月（111 名）、1967 年 8 月（54 名）、1968 年 4 月（14 名）と過去 3 回、教育事情視察団として中国を訪問した。本書は、1968（昭和 43）年 8 月 6 日から 3 週間にわたって中国を旅行してきた第 4 次視察団（37 名）の報告・感想文を集めたものである。今回は特に、旅程の半分を井岡山・韶山・茅坪などのかつての革命根拠地見学にあてており、そこに示される中国革命の歴史や当時の革命精神に多くの者が感動している。そのほか、上海・北京に滞在して、大学・高校・中学、工場、人民公社、人民解放軍を訪問し、文化大革命の全面勝利の状況や教育革命について見聞したことが報告されている。

**東洋とは何か／仁井田陞著**

**東京 東京大学出版会 1968（昭和 43） 331 頁 [7962]**

本書は、1966 年に逝去した中国法学者である著者の第二遺稿集である。第一遺稿集である『中国の法と社会と歴史』が専門的なものであったのに対して、本書は一般的なものが中心となっている。戦後のいろいろな時期にいろいろな場所に発表されたものから選んで、次のように内容別に分類、配列してある。Ⅰ．東洋とは何か、Ⅱ．新しい中国、Ⅲ．法史夜話、Ⅳ．研究回想、Ⅴ．書評。新中国旅行記は、Ⅱの 2 に 2 篇が収められている。著者は、1959（昭和 34）年 8 月 7 日から 9 月 4 日まで、中国政治法律学会の招待により日本法律家代表団の一員として中国を訪れた。はじめの 1 篇は、広州・北京・瀋陽・鞍山・武漢・上海とまわった行程にそって、旅の印象が記されている。解放前 5 回も中国を訪れている著者は、昔とはすっかり変わり、清潔になった街や人々に目を向けている。とくに泥棒が毎年減少していることに関心を払い、これに関連して、他の 1 篇「上海のごろつき退治」には、遊民改造座談会で上海の民政局社会福利処長から聞いた話をまとめている。さらに、この旅行の見聞にもとづいて著者の感じた新中国の法と道徳について、「中国の新しい法と道徳」「法と倫理」の 2 篇も収められている。

**北京暖冬／北条秀司著**

**東京 青蛙房 1968（昭和 43） 265 頁 [8174]**

本書は、劇作家である著者の随筆集で、最初の一編が「北京暖冬」と題して、1957（昭和 32）年 12 月 5 日から 21 日までの中国訪問日記である。一行は、著者のほか、久保田万太郎、喜多村緑郎夫妻、金子洋文、吉田謙吉、穴沢喜美男、宮口精二、倉林誠一郎ら演劇関係者で、その旅程もほとんど北京に滞在して各種演劇の鑑賞と劇界の人々との交流にあてられている。毎夜の如く、京劇、評劇や現代劇を観て、それらの演出方法や舞台装置に注意をはらい、また観客の態度にも眼をくばっている。昼間は、中央戲劇学院や京劇院など演劇・舞踊関係の学校を訪れて、俳優たちの演技指導や訓練の様子を見学したり、北京周辺の名勝旧蹟に足を運んでいる。そのほか、梅蘭芳、欧陽予倩らと親しく話し合ったり、自由時間に北京の娯楽街を歩いて大衆演芸を楽しんだことなどが、軽い筆致で語られている。

**未来への問い：中国の試み／山田慶児著**

**東京 筑摩書房 1968（昭和 43） 274 頁 [8083]**

本書は、著者が 1966 年から 68 年にかけて『世界』『思想』『現代の理論』『展望』などに

発表した論文を、Ⅰ．思想の実験、Ⅱ．造反有理、Ⅲ．科学と技術の3部に編集してまとめたもの。著者は中国科学史の研究者であるが、この2年間は、中国の科学技術開発への対処の仕方、その推進の方向、文化大革命との関連などの諸点の解明を課題としてきた。当初、中国のトップ・レベルの科学者・技術者が書いた諸論文を通して得た著者の結論は、「すくなくとも基礎的ないし先端的な科学技術の研究開発に中国独自の論理など存在」せず、「大躍進運動に象徴されるような大衆運動の形成は、単なる妨害要因」である、ということだった。しかし、1967（昭和42）年5月下旬から1ヶ月間の中国旅行は、著者に「価値の座標転換」の必要性を悟らせた。その旅行記録としては、第2部に3篇の文章が収められている。上海・北京・西安・延安・無錫・長沙・広州の各地を訪れ、革命委員会成立のこと、造反派の生れた過程とその純粋な体现者である紅衛兵のこと、人民解放軍の役割などについてその見聞を語っている。とくに、上海でインシュリン研究グループ、1万2千トン水圧プレスをつくった技術者たち、復旦大学の労働者出身の科学者・蔡祖泉に会い、そこに現在の中国で90%以上を占める科学・技術者の姿を発見したことが、著者には大きな意味をもつこととなったのである。その後著者は、科学・技術の研究開発における中国独自の道が、工場の中に、また民衆の中に芽生えていることを理解した。こうして、解放後の中国における科学技術開発と工業化の途上につねに存在した、二つ路線の対立を跡づけ、そこから、大躍進運動は資本主義諸国やソ連にみられるテクノクラート社会への最初の挑戦であり、文化大革命はこれを継承し、発展させたものであると結論している。科学技術の発展が専門の一層の細分化、分業の発達を生んでいる現代において、文化大革命は、テクノクラシーと人間の疎外の状況を変革しようとする偉大な試みであり、ここに最大の意義があることを認めながら、同時に、なおかつ群衆運動が終熄した時に逆戻りの可能性があることも危惧している。

## 1969

### 中国美術雑稿／安藤更生著

東京 二玄社 1969（昭和44） 251頁 [8234]

本書は表題のとおり、中国の美術に関する随筆や時評を集めたもので、その中の二、三篇が、旅行記と呼べるほどのものではないが、新中国訪問にふれている。著者は1963（昭和38）年10月、鑑真和上円寂千二百年記念の祭典に招かれて、日本の文化界代表として井上靖、宮川寅雄らと中国を訪れた。全旅程については不明で、琉璃廠のことと周作人訪問のことが記されている。琉璃廠は、古書店、古美術商、文房具店などが軒を並べた北京の特殊な町で、戦前著者が北京に住んでいた頃、毎日のように足を運んだ場所である。しかし現在、昔のおもかげは全くなく、由緒ある老舗は殆ど転業または閉店しており、著者はその「荒廃ぶり」を嘆いている。ただ僅かに一店が公私合営となって残り、そこで非常にすぐれた木版の複製画をみつけて、その技術の優秀さに敬意を表している。周作人については、著者は三十年に涉って教えをうけた師として、戦後もずっと気にとめてきたので、この訪中に際しては無理に頼んでその手筈をととのえてもらった。こうして訪れた周作人の家は荒れかたがひどく、近況話からも解放後の不遇がしのばれ、著者は懷しさ以上に苦しさで胸をふさがれている。

### アジアの挑戦／川田侃著

**東京 東京大学出版会 1969（昭和 44） 200 頁 [8175]**

本書は、アジア諸国の経済情勢を中心に扱った論文集で、その中の 1 章が中国にあてられている。この章は、著者が 1967（昭和 42）年 4 月 22 日から 5 月 9 日まで、広州・上海・蘇州・北京・洛陽・鄭州を旅行した時の記録である。ここでも著者が最も主眼をおいているのは現中国の経済状態で、これを農業、工業の両方面から観察している。各地で著者が訪れた人民公社や工場の概況を報告したのち、農業は着実に発展していることは否みがたいが、人口増加との関連が将来の問題であろうし、工業は、1980 年代後半には現在の日本の水準に達するであろうが、そうなった時に中国の対内外政策も変化するのではないかとの意見が述べられている。そのほか、毛沢東に対する人々の敬愛の深さ、教育の普及とその改革、婦人の進出、反帝・反修の激しい憎悪などにもふれている。そして「文化大革命の本番は、まさに今年（1967 年）にはいつてからはじまった」のであり、「全国的な奪権闘争の前途にはまだ多くの問題が山積し」ているが、まもなくそれを乗り切るだろうとの見通しも述べている。

**古都北京：中国美術の旅Ⅰ／北川桃雄著**

**東京 中央公論美術出版 1969（昭和 44） 189 頁 [8293]**

美術史家である北川桃雄の中国紀行文集。北川は 1956（昭和 31）年、中国の雪舟「記念典」に日本美術代表団として画家の山口蓬春・橋本明治両夫妻とともに、1960 年には日本画家代表団として前田青邨・吉岡堅二・岩橋英遠・西山英雄らと一緒に、さらに 1965 年には日本工芸美術家代表団として松本権六・加藤土師萌とともに中国を訪れている。

本書は、この 3 回に及ぶ中国訪問の紀行文中、北京およびその周辺に関する紀行文 16 編を収める。その篇名は次の通り。

古都北京（北京と京都）、故宮風景、銅鼎と美人俑（故宮博物院の芸術Ⅰ）、漱芳齋観画（故宮博物院の芸術Ⅱ）、中国歴史博物館にて、紅衣の舞女（埋れていた古代芸術から）、北海散策、碧瑠璃の甕（天壇の印象）、大理石の舫（万寿山風景）、法海寺の壁画、明の十三陵にて、定陵（地下宮殿）、万里長城、徐悲鴻紀念館、「人民芸術家」齊白石、古代文化の蘇生（新中国における古文化財の保管）。

なお、著者撮影の写真と著者のスケッチのほか、前田青邨「故宮全景」、山口蓬春「唐の美人俑」、岩橋英遠「天壇皇穹宇」、橋本明治「明の十三陵」、吉岡堅二「定陵地下宮殿」、西山英雄「八達嶺」のスケッチが挿入されている。

**大同の古寺：中国美術の旅Ⅱ／北川桃雄著**

**東京 中央公論美術出版 1969（昭和 44） 176 頁 [8292]**

前著の下巻ともいうべきもの。著者の 1956・1960・1965 年の 3 回に及ぶ中国訪問の紀行文中、西安・大同・洛陽・南京・蘇州・杭州・南昌に関する 14 篇を集める。その篇名は次の通り。

古都西安、慈恩寺の大雁塔、永泰公主の墓、古都大同、大同の古寺、雲崗の石窟、洛陽今昔、岩壁の祈りと美（龍門の石窟群）、南京旅情、棲霞古寺（南京旅情Ⅱ）、枯野の石獸、庭の都（蘇州）、西湖の古寺、青雲譜行（八大山人紀念館）。

著者撮影の写真、著者のスケッチのほか、前田青邨「李爽墓壁画」、西山英雄「龍門石窟」、橋本明治「大同にて」、吉岡堅二「大同古寺」、山口蓬春「雲崗石窟」、岩橋英遠「蘇州の民

家」のスケッチが挿入されている。

なお、この 14 篇は、著者がさらに加筆するはずのものであったが、それを果たさずして死亡してしまったもので、いわば遺稿である。したがって遺稿集ともいべき本書の末尾には、著者の著作目録が掲げられている。

#### 海の男の日中友好／須藤浩著

東京 青年出版社 1969（昭和 44） 61 頁〔8581〕

著者の須藤浩は、東京商科大学を卒業し、海運業を生業としていた。本書のあとがきで須藤は、「海運事業をつうじて中国認識を深め、日中両国人民の友好促進につとめたいと考えながら日常仕事をしている」と述べている。須藤は文化大革命が始まった 1966 年、北京に滞在したが、本書は中国で見聞したことを体系的に記したものではない。毛沢東思想の説明に比較的多くの頁が割かれているように、須藤自身の視点から当時の中国の政治情勢や日中関係が論じられている点に本書の特徴がある。 (吉見崇)

#### 井岡山の轟き／第 4 次訪中学生友好参観団——斉了会

東京 1969（昭和 44） 78 頁〔8142〕

総勢 110 名からなる訪中学生団が例年どおり、3 週間の中国訪問をした。本書は、その感想文集。旅行日程は、上記【プロレタリア文化大革命の中国を訪ねて／日中友好協会（正統）本部第三次訪中婦人代表团〔8126〕】の教育事情視察団と殆ど同じ。文化大革命下の中国に対する共感や感動、あるいは反発や批判、日中友好のことなど、それぞれの立場からの中国観が率直に語られている。

#### 書とともに／村上三島著

東京 木耳社 1969（昭和 44） 343 頁〔8434〕

著者は書家。本書の前半は 39 篇の随筆を集め、後半が 1965（昭和 40）年の中国旅行記「新中国の旅」。著者は 1958 年にも中国に行っており、したがってこれは第 2 回目の中国旅行ということになる。但し、公式の団体訪問ではなく、夫妻だけの個人的な旅行であった。10 月 28 日羽田を発ち、香港・広州・北京・上海・蘇州・杭州・広州とまわって、11 月 24 日香港に出る。個人的な旅行だけに、人に会うことは少く、それだけゆっくりと自然や文化財を見、人情・風俗に触れ、料理や釣りさえ楽しむことができたという。「新中国の旅」は、このような点に重きをおいて、毎日つけていた手記を集めたもの。特に書家だけに、肇慶市美術工芸廠や上海工芸美術研究所で端溪の硯をつくるのをみたり、故宮博物院や上海博物館では書画を賞で、西湖では「三潭印月」「花港観魚」の字碑に見入り、広州では文徳書苑、北京の琉璃廠では榮宝齋・萃文閣・戴月軒・胡開文などを訪れて、筆・墨・硯や印材・臘箋を求めるなど、書に関する記事が珍しい。料理や民衆の生活のありさまも、比較的くわしい。

## 1970

#### 新中国を歩く：松村訪中団員の非公開記録／川崎秀二著

東京 仙石出版社 1970（昭和 45） 314 頁〔8503〕

著者は 1970（昭和 45）年の松村謙三を団長とするいわゆる松村訪中国一行 9 名のなかの 1 人で、本書はその 3 月 21 日から 4 月 22 日までの訪中記録。滞在地はほとんどが北京で、他は行き返りの広州だけ。

(1)6 年ぶりの中国、(2)周恩来首相との会見、(3)不倒翁・周恩来、(4)中国各地の鼓動、(5)覚書交渉の苦心、(6)新中国の生活風俗、(7)北京からみた世界、の 7 章から成る。もともと松村訪中国の派遣は、北京での古井喜実の覚書貿易延長交渉をスムーズにするためのものであったから、いきおいこの訪中記録においても政治の面がわりあい多く、第 2・3 章では周恩来との会見、周恩来の横顔を述べ、第 5 章では覚書貿易交渉の苦心を説き、第 7 章では中国をめぐる国際関係、周恩来の平壤訪問について記し、また古井喜実（日中覚書貿易事務所代表）と劉希文（中国中日備忘録貿易辦事処代表）との名で出された「日中共同コミュニケ」および中国・北朝鮮両政府間に結ばれた共同コミュニケの全文を付録している。

しかしそれだけではない。著者は 1964 年には北村徳太郎（元大蔵大臣）を団長とする訪中国の副団長として訪中しているが、第 1 章では、この 6 年前の中国と今みる中国との差の大きさに驚き、第 4 章では、覚書貿易協定の成立（4 月 19 日）を待つ間に視察した第 1・第 3 聾啞学校、第二十三中学、北京市第 3 紡績工場、朝陽区ラジオ工場、四季青人民公社、密雲ダムにみる活況をつたえ、第 6 章では、王府井、延安路、西单街、北海公園、天橋劇場、首都体育館などを歩き訪れてみた新しい北京の生活風俗を描いている。

#### 日中友好・日中国交回復国民大連合／佐々木訪中友好使節団

東京 総合政経懇話会 1970（昭和 45） 119 頁 [8544]

日本社会党の佐々木訪中友好使節団の報告書。一行は佐々木更三（衆議院議員）団長以下 8 名。1970（昭和 45）年 8 月 11 日羽田を発って広州に入り、北京に 12 日間滞在、8 月 26 日広州を発って、羽田に帰る。この間、中日友好協会代表（喬冠華・王曉雲ら）と数次にわたり会談して、当面するアジアの政治、経済情勢と、日中間の諸問題について意見を交換したのち、周恩来総理と会談して、相互理解を深め、またカンボジア王国シアヌーク元首をはじめ南ベトナム共和国臨時革命政府・朝鮮民主主義人民共和国・ベトナム民主共和国の各駐華大使を訪問し、反米統一戦線について階級的相互連帯を強めた。

本書はこの訪中の報告書。第 1 部は「報告篇」で、周恩来総理との会談要録、佐々木訪中友好使節団会談合意メモ、シアヌーク元首、ベトナム民主共和国駐華大使ら訪問記のほか、木村禎八郎「見たままの中国経済と生活」、山本敬一「周四条件の背景と日中貿易今後の見透し」、山崎昇「躍動する中国の表情」、篠原文治「プロ文革後の工場管理」などの印象記がある。第 2 部は「資料篇」で、「日本国際貿易促進協会など七団体と中国国際貿易促進委員会との共同声明」（1970.4.14）、「日本日中覚書貿易事務所代表・中国中日備忘録貿易弁事処代表の会談コミュニケ」（1970.4.19）などが収められている。

#### 延安・井岡山／第 5 次訪中学生友好参観団

東京 斉了会 1970（昭和 45） 229 頁 [8421]

第 5 次訪中学生友好参観団の訪中報告書。一行は 6 班に分けられ、旅行期間は 1969（昭和 44）年 8 月 11 日～9 月 3 日。経路は途中から 2 路に分かれる。1, 2, 3 班は延安コースで、東京－香港－広州－長沙（韶山）－株州－上海－西安－延安－西安－北京－広州－香港、4, 5,

6 班は井岡山コースで、東京－香港－広州－長沙（韶山）－永新－寧崗－井岡山－吉安－南昌－上海－北京－広州－香港－東京。

本書の主要部分は班別の報告であるが、その大部分は感想文。まとまった報告ともいうべきものは、1 班の毛沢東思想について、3 班の人民解放戦争について、4 班のプロレタリア文化大革命、文芸路線について、5 班の新しい中国の音楽、江西共産主義労働大学、人民解放軍についてなどである。なお旅行の大概は 1 班の「中国随感記」でうかがえる。

各班の報告のほか、抗日戦争から文化大革命までの、聞一多・田漢らの詩 11 篇が邦訳掲載され、また巻末の〈資料編〉には、宋子文（湖南省革命委員会）の講話「1920 年代、毛主席の湖南省における活動」、井岡山時代の毛沢東についての鄒文楷・余振坤・袁文才の妻の話、上海市革命委員会の王洪文・王承龍の講話、延安洞窟での雷さんの話、郭沫若との会見記が載録されている。

### 中国・朝鮮音楽調査紀行／田辺尚雄著

東京 音楽之友社 1970（昭和 45） 473 頁 〔8512〕

『東洋音楽選書』の第 11 巻。同選書第 5 巻の『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』の姉妹篇。前半の 218 頁までは朝鮮旅行記で、後半が中国旅行記。中国旅行記は 4 部に分れる。

第 1 部は 1923（大正 12）年の旅行で、長崎から船で 4 月 19 日上海に着き、杭州・南京・武漢を経て北京に到り、5 月 19 日北京を発って、奉天・釜山を経て帰国する。その旅行目的は、(1)著者が研究調査した中国の古代音楽に関する学説と資料とを中国に紹介し、中国人研究者の意見を聞く。(2)孔子廟その他、中国古代からの儀礼に関する音楽は今日どうなっているかを調べる。(3)古代音楽に関する書籍を調査し、できるだけその多くを蒐集する。(1)の目的のためには、北京大学をはじめ随所で講演し、中国の学者と意見を交換し、琴の名手馮汝玖や名優の欧陽予倩らと親交を結ぶ端を開いた。(2)の目的のためには、上海・南京・奉天などの孔子廟を調査し、特に北京ではその楽器類を調査し、宗人府の楽人らの雅楽を聞いた。(3)の目的のためには、各地の書店を訪れ、北京の古書店から多くの楽書を入手し、また北京の京師図書館で多くの楽書を調査した。本書ではこの調査旅行を日記風に記している。そのほか旅行中に見た名優——李吉瑞・馮子和・陳德琳・郝寿臣・梅蘭芳——の演技や欧陽予倩邸の晩餐会のこと、杭州の西湖・雷峰塔・靈隠寺、南京の下関・秦淮、武漢の黃鶴樓・彈琴台、北京の天壇・万寿山・北京大学・琉璃廠などのこと、音楽とは全く関係のない、京漢線の汽車に乗って土匪の襲撃にあったこと、両替の興味なども述べている。また物売りの呼び声や乞食の哀音に音楽的なひびきを感じているのも面白い。

第 2 部は 1938（昭和 13）年の南京旅行記。旅行記というよりも、日本軍が南京を占領、その地下室宝物庫にあった乾隆御製の金鐘の調査報告。

第 3 部は 1940（昭和 15）年の満洲調査旅行日記。朝鮮を経て、9 月 1 日奉天に入り、錦州・承德・新京（長春）・吉林とまわって、9 月 19 日奉天にもどり、故宮などを見学して帰国する。奉天では故宮・博物館、錦州では孔子廟・大広濟寺の楽器、承德では離宮の雅楽、文廟・ラマ寺の音楽、吉林では明の雅楽（宴楽）、シャーマンの音楽を調査し、新京では孔子廟の祭典を見、音楽院を訪れる。なおこの旅行の前史として、1924 年の満洲講演旅行の日記をのせる。3 月 19 日、神戸から船で大連に着き、まず三弦の調査をし、旅順では博物館の楽器を調べ、奉天では軍楽隊を訪れ、4 月 2 日奉天を発って朝鮮に向かう。



第4部は1956（昭和31）年の旅行日記。これまでのが音楽調査旅行であったのに対し、これは日本文化人訪中団の団長として、中国の招待による国賓待遇をうけての観光旅行。一行は石井漠（舞踊）・草野心平（詩人）・中村汀女（俳人）・藤森成吉（作家）ら21名。旅行期間は9月22日～11月7日。経路は、東京－香港－広州－漢口－北京－天津－西安－重慶－成都－三峡の險－漢口－上海－杭州－広州－香港－東京。観光旅行ではあるが、本書には音楽関係の記事が多い。北京では民族音楽研究所・民族学院を訪れ、中国古典音楽演奏会に赴き、天津では中央音楽学院、重慶では西南師範学院音楽学部、成都では民族学院、上海では中央音楽学院分院を訪れる。また京劇・四川劇・漢劇・粵劇などを観賞、その内容をかなり詳しく報じている。

#### 中国見たまゝきいたまゝ／内藤誉三郎著

出版地・出版者・出版年不明 48頁 〔Q2036〕

著者は1970年3月、古井喜実・田川誠一らの日中覚書貿易代表団に加わり北京を訪問した。団長松村謙三（松村は5度目の訪中）に随行するかたちでの初めての訪中であった。帰国後、著者が『読売新聞』『毎日新聞』に掲載した文章をまとめたのが本書である。「中国見たまゝ」「中国の教育を見て」のほか、「周総理と松村訪中団との会見における周総理発言要旨メモ」「日本側の周総理会談メモに対する中国側の訂正意見」を収める。著者の当時の肩書は、参議院文教委員会委員、自民党文教制度調査会副会長、自民党神奈川県連顧問、大妻女子大学学長。文革期中国に対する著者の観察・印象は概して好意的で肯定的なものである。曰く「服装は質素ではあるが、洗たくがよくゆきとどいて、小ざっぱりしている。自分さえよければ他人にはどんな迷惑をかけても構わない、人を押しのけても自分だけは出世したい、金持ちになりたい、楽をしたいという、いわゆるマイホーム・エゴイズムの風潮は影をひそめている」（9頁）。

（村田雄二郎）

#### 70年代の日中友好／日中友好活動家学習訪中団

東京 青年出版社 1970（昭和45） 157頁 （日中友好シリーズ3） 〔8541〕

日本中国友好協会（正統）派遣活動家学習訪中団の訪中報告書。一行は中島正夫団長以下16名。旅行期間は1970（昭和45）年4月27日～5月19日。訪問地は北京・南京・上海・長沙・広州。上海造船廠・南京車輛工場など6工場、北京郊外の黄土崗人民公社、広州の新華人民公社、北京師範大学第二付属中学校、北京聾啞学校、上海市第一医学大学付属華山病院、上海郊外の労働者住宅彭浦新村などを視察し、韶山の毛主席生家などの革命史蹟を見学し、革命的バレエ「白毛女」「女性第二中隊」、革命的現代京劇「海港」などを観賞した。また、国際情勢や日中友好運動の意義について中日友好協会と懇談し、長江大橋の建設労働者と懇談するなど、随所で労働者・農民や医療関係者らと会談した。本書はこれらの視察・参観・懇談のことを記したものである。

#### 人民に奉仕する／日本社会党活動家訪中代表団

東京 1970（昭和45） 102頁 〔8580〕

黒田寿男を団長とする日本社会党活動家訪中代表団の報告集。一行は12名。中国滞在期間は1970（昭和45）年9月6日～9月25日。滞在地は、広州・北京往復の途、上海空港にたち

より、また帰りに広州に1泊したほかは、専ら北京。

本書には、前半に、周恩来総理との会見記録、カンボジア国家元首シアヌーク殿下・ベトナム南部共和臨時革命政府駐中国代理大使・郭沫若中日友好協会名誉会長の挨拶、団員による「反米帝・反帝国主義の統一戦線について」「国際情勢について」の討論のまとめがあり、後半には、北京市広安門貨物駅、北京市人民機器工場、清華大学、人民解放軍、五・七幹部学校、北京市31中学校、北京皮革製品工場、中医（漢方医）専門の病院、および中朝友好人民公社の見学記がある。

#### 水野・山下訪中報告／水野清，山下徳夫〔述〕

出版地不明 アジア国会議員連合 出版年不明 25頁 〔Q2048〕

衆議院議員水野清と同議員山下徳夫の訪中記録である。日本側の団長は川崎秀二、中国側の参加者は王曉雲・呉曙東・許宗茂と通訳の関氏（女性）であり、訪中期間中に周恩来総理、王国権らとも意見交換している様子が分かる。文中に「昨年の佐藤・ニクソン会談後の共同声明」、「韓国と台湾を昔のように植民地化して自分達の勢力範囲に引込もうとしている」とあることから、この訪中は1970年、出版された年も1970年と推測される。主要な話題は、日本の軍国主義復活の可能性、中国の賠償請求の可能性などについてであった。興味深いのは、周恩来総理が「蒋介石の悪口を言わな」かったことに対して、「今迄と比較して変化であります」と記していることである。なお、「ニクソンがやって来ることを末端にも徹底して説明しているようでした」と記されている点は、やや不可解である。（中村元哉）

### 1971

#### 新しい中国：写真集／「新しい中国」編集委員会編

東京 総評資料頒布会 1971（昭和46） 472頁 〔Q2054〕

前半は当時の中国の様子を伝える写真（主に白黒）で、これが全体の約85%を占める。総評（日本労働組合総評議会）の刊行物ということもあり、田英夫ら社会党・公明党関係者の交流の写真が複数掲載されている。前総評事務局長で日中国交回復国民会議事務総長の岩井章による「発刊のごあいさつ」によれば、本写真集は「過去の歴史を知り、未来に備えるという願いを込めた労作」とされるが、過去の歴史に関する写真はあまりなく、主要年表の範囲も1971年1月から10月と限定されている。いずれの写真も中国が外に見せたかったであろう側面を切り取り、写真によっては毛沢東語録の一節がキャプションに付されている。ただ操車場の写真（198頁）に写り込んだ客車の側面には何らかの標語が書かれ、車両がかなり傷んでいることがわかる。巻末「資料編」には中国の政治機構や承認国一覧、各種声明文に続き、「私の見た中国」と題して岩井章・市川雄一（公明党機関紙局長）など6名のエッセイ、330ほどの友好商社の一覧表（社名・所在地・電話番号）が掲載されている。（関智英）

#### 新しい中国・新しい人間／岩井章編

東京 労働文庫 144頁 〔9083〕

日本労働者訪中代表団の訪中メモ。一行は、岩井章（日中国交回復国民会議事務総長）団長、兼田富太郎（総評副議長）副団長以下12名。期間は、1971（昭和46）年6月29日～7月18

日。経路は、東京－香港－広州－北京－上海－広州－香港－東京。

本書は 2 部にわかれる。第 1 部は日記風の旅行メモで、特に北京においては、第一聾啞学校・内燃機総廠・五七幹部学校・北京市師範附属中学・二七機車車輛修理工廠、楊村の人民解放軍陸軍第 196 師団のこと、ベトナム南方共和国・人民共和国両大使館訪問のこと、周恩来総理との会談のことを、上海においては、曹楊新村や港灣荷役現場のことを記す。第 2 部は団員 11 人の報告と感想。

### **米中ソを歩く：中国はいつ国連に復帰するか／川崎秀二著**

**東京 仙石出版社 1971（昭和 46） 290 頁 [8640]**

本書は、川崎秀二『新中国を歩く：松村訪中団員の非公開記録』（仙石出版社、1970 年）とセットで併読されるべきものである。本書は、訪中記録として意味があるのではなく、米中ソのすべてを観察した稀有な人物による中国観察という点に意味がある。（中村元哉）

### **自民党議員がみた中国／川崎訪中団**

**東京 仙石出版社 1971（昭和 46） 267 頁 [8788]**

川崎秀二を団長とする自民党新人議員団の訪中記録。1971（昭和 46）年 9 月 2 日東京を出発し、香港・広州を経て北京に約 3 週間滞在して、9 月 23 日東京に帰る。

本書は一行 9 名の団員が帰国後に語ったところを国会担当記者の丹羽石根がまとめたもので、(1)未知の国への不安、(2)政治会談で応酬、(3)中国の生活と文化、(4)徹底した毛思想の 4 章から成る。第 1 章では、訪中にいたるまでの経緯、中国側の態度、広州に足をふみいれた最初の印象を記す。第 2 章は周恩来総理との会談を含む 5 回の政治会談について述べる。第 3 章では、北京滞在中に見学した古美術・史蹟や市民の生活、安い物価などについて記し、第 4 章では、観賞した映画「紅色娘子軍」や視察した清華大学、北京市郊外の石油化学工場・木材工場、双橋中古（キューバ）友好人民公社について書く。そのほか巻末には団長の川崎秀二が中国旅行の大略とその印象を、また 8 人の団員が簡単な感想を述べ、随行した読売新聞政治部の中村慶一郎記者が訪中団の印象を描く。なお一行が帰国して間もなく中国の国連復帰が承認されたので、その間の事情もあわせ叙述されている。

### **中国を訪れて／基地で闘う日本婦人代表团**

**東京 侵略＝差別と闘うアジア婦人会議 1971（昭和 46） 100 頁 [8705]**

基地で闘う日本婦人代表団の訪中報告。一行は団長の松岡洋子以下 10 名。期間は 1970（昭和 45）年 12 月 25 日～1971 年 1 月 22 日。経路は東京－香港－広州－北京－延安－北京－上海－長沙（韶山）－広州－香港－東京。

本書は 2 部からなる。第 1 部は日記風の報告で、北京における手工芸美術工場・紅星中朝人民公社・北京第 3 聾啞学校・解放軍陸軍第 196 師団・西城区半導体設備第一工場・清華大学、延安における革命陳列館・抗日軍政大学、上海における工業展・バレエ学校・江鎮人民公社・彭浦労働者新村・上海第六病院・上海発電所、長沙における第一師範学校・韶山陳列館、広州における紅火炬小学校のことを記すほか、各地における婦人との交流のこと、周恩来・郭沫若・シアヌーク殿下との会見のことを記す。

第 2 部は団員の感想文。

## 中国・台湾やきものの旅／小山富士夫著

東京 芸艸堂 1971（昭和 46） 263 頁 [8704]

著者は著名な陶磁研究家で、本書は中国・台湾におけるその調査旅行記。4 章から成る。

第 1 章は 1941（昭和 16）年の調査。3 月 6 日から 5 月 14 日まで、北京を根拠として、北京および華北一帯で、博物館・骨董屋を訪れたり、新窯・古窯址をたずねて、陶磁器の調査をし、たくさんの写真をとってくるほか、民芸陶器を含めて数千点の陶片を持ち帰った。この間、4 回にわたり地方旅行に出かけている。第 1 回は、3 月 12 日～24 日。調査地は太原・泌県・潞安・沢州・清化鎮・新郷・開封・定県。第 2 回は、4 月 5 日～12 日。専ら定窯址の調査。第 3 回は、4 月 25 日～29 日。大同・厚和・包頭の観光で、調査ではない。第 4 回は、5 月 1 日～10 日、磁州・鉅鹿を主目標とする京漢線沿線の調査旅行で、磁州窯址を発見し、邢州窯址と伝えられるものの疑わしいことを知る。

第 2 章は 1965（昭和 40）年の調査。旅行期間は 4 月 15 日～5 月 19 日。北京・鄭州・湯陰・安陽・上海・杭州・南昌・広州の諸都市をまわって、各地の博物館や古窯址を訪れ、陶磁器の調査を行う。訪問した主な施設は、北京では歴史博物館、故宮の歴代芸術館・陶瓷館・漱芳齋や定陵博物館、鄭州では河南省博物館・河南省文化局文化工作隊、湯陰では鶴壁集工人村にある古窯址、安陽では殷墟博物館、上海では上海博物館、杭州では浙江省博物館、南昌では江西省博物館、景德鎮では陶瓷館・紅星瓷廠・高級美術瓷廠・国营景德鎮瓷廠・陶瓷科学研究所や楊梅亭・湖田の古窯址、広州では広東省博物館・陳族祠、仏山の石湾窯・石湾美術陶瓷廠など。

第 3 章は 1966（昭和 41）年の視察で、白石凡団長以下 9 名からなる中国美術史研究日本学術代表団の一員として、中国を旅行する。旅行期間は 5 月 18 日～6 月 15 日。訪問地は広州・北京・西安・洛陽・南京・蘇州・上海・杭州。各地の博物館や龍門石窟のような名勝旧蹟のほか、広州では近郊の石湾美術瓷廠、北京では民族文化宮・中央工芸美術学院・古人類脊椎動物研究所、故宮の歴代芸術館・陶瓷館などを訪れ、また故宮の漱芳齋では「清明上河図」を見る。当時開催中の収租院泥塑展にも足を運ぶ。

第 4 章は 3 回にわたる台湾旅行記。第 1 回は 1968（昭和 43）年で、マニラからの帰途台湾により、3 月 25 日から 29 日まで台北に滞在し、故宮博物院の所蔵品を見、また中国陶磁討論会に参加する。第 2 回は 1969（昭和 44）年で、9 月 19 日から 25 日まで台北に滞在し、専ら北宋の汝官窯を調査する。第 3 回は 1970（昭和 45）年で、故宮博物院の新館落成記念に招かれたもので、3 月 22 日から 29 日まで台北に滞在し、記念講演をしたり見学をする。

陶磁器の写真が豊富にある。

## 青春の北京 北京留学の十年／西園寺一晃著

東京 中央公論社 1971（昭和 46） 272 頁 [8629]

著者は、「民間大使」として国交回復前の日中交流に重きをなした西園寺公一の長男で、1958 年、中学 3 年生の折に家族とともに北京に渡り、67 年までの約 10 年間で現地で過ごした。本書はその間の回顧録で、自らの「総括」として記されたもの。特殊な家庭環境に生まれた少年時代の著者は、家族の団欒に恵まれることがなかった。ゆえに、一外国人青年を受け入れ、仲間とみなしてくれた中国の同級生との世界が自らの居場所となった。そして、中国に地縁のない外国人ならではの特殊な立ち位置もあいまって、政治思想にのめりこみ、革命の闘争に加わ

っていく。東交民巷の一角に解放軍の護衛付住居に暮らし、大躍進後の食糧不足の時代にも十分な食料が提供される西園寺家の境遇に葛藤を覚え、ささやかな抵抗を試みる。今日から見れば著者の「政治」への傾倒ぶりは極端だと感じる部分はあるものの、一人の人間には政治的な顔と親しむべき人間の顔が同居する。著者がこだわる中国への想いとは、その政治への心酔以上に、個々の中国の人々に対する親しみや信頼が根底にあると言えるだろう。（辻直美）

#### 中国の農村と日本の農村／菅沼正久編著

東京 田畑書店 1971（昭和46） 293頁 〔8637〕

著者は、3人の農村活動家、新潟県の常山昇・佐々木博一、岡山県の宮本繁とともに、1970年11月26日に羽田を発って、約1ヶ月にわたり、広州・北京・武漢・長沙・韶山・広州とまわり、〔北京〕河北省遵化県の沙石峪人民公社・健明人民公社、東方紅五七幹部学校、北京大学、北京郊外の温榆河水利工事、〔武漢〕武漢大学、武漢医学院、〔長沙〕高塘嶺人民公社、長沙農業機械工場、〔安源〕安源炭鉱、〔広州〕中山医学院、第一農機具修理製造工場などを見学する。

本書はこの旅行における見聞をまとめた報告書で、7章から成る。第1章「減反の農村から革命の中国へ」は、日本の農民運動が、独立・民主の新しい国家をうち立てる日本革命の一翼をになうべきものならば、反帝反封建の革命に勝利し社会主義革命をたたかっている中国の農民運動の経験に大いに学ぶべきところがあるとして、訪中の目的を明かにする。第2章「1970年12月の中国」は、文化大革命下の中国の実情を記したもので、毛沢東哲学著作の学習活動がさかんで、毛思想を活学活用することが政治経済建設の基本であること、経済発展が、農工業その他あらゆる面において、独立自主・自力更生をモットーとし、人海戦術ではかられていること、労働に対する報酬は、貨幣の高においてではなく物量において平等がはかられていることなどを指摘する。第3章「中国の農村と日本の農村」は、まず見学した人民公社を紹介しながら、それを自力更生・独立自主の成果であるとし、また農村に下放したはだしの医者、ハリ治療のこと、それが麻酔の領域に入ったこと、幹部は常に身体と精神をともに大衆の中においていること、農民は農業だけでなく工業をにぎり、これによって収入をふやし農村の前途をきりひらいていること、学校は大学に至るまで貧農・労働者および兵士のものとなったことを指摘する。

第4章は周恩来総理と著者の6時間に及ぶ問答を記録し、第5章は長沙における宋志雲（人民解放軍湖南軍区宣伝処副処長）の「中国の民主主義革命における農民運動の基本的経験」と題する講演を載録する。第6章は訪中の結果をふまえた著者の「中国と日本の農民運動」という論文、第7章は、帰国後行われた4人と新潟の農村活動家八木一郎を加えた「日本農民運動の底辺と原点」という座談会の記録。

#### 下定決心不怕犠牲：第六次訪中学生友好参観団七〇年夏訪中報告集／第六次訪中学生友好参観団訪中報告書編集委員会編

東京 斉了会：第六次訪中学生友好参観団 1971（昭和46） 111頁 〔Q57〕

斉了会（ちいらかい）とは、1965年から始まった訪中学生友好参観団の別称で、1972年の第8回まで毎年組織された。訪中した団員は総計800名に上る。会の名称は、通訳の発する「みな集まりましたか（斉了嗎？）」が団員の記憶に強く残ったことに由来する。本書は、1970

年8月7日から8月30日まで訪中した第6回訪中学生友好参観団の記録である。編集委員会代表は若林正文。書名の「決意を固め、犠牲を恐れず」は、文化大革命の当時広く唱えられた毛沢東語録の一つで、「万難を排して勝利をつかみ取る（排除万難，去争取勝利）」と続く。参観団の訪問地は、広州－長沙－韶山－萍郷－寧崗－井崗山－吉安－南昌－上海－北京というように、中国革命の足跡をたどる旅であった。また、北京では首都紅衛兵の歓迎を受けて、人民公社を見学し、清華大学では革命委員・学生・労働者と座談会を開き、さらに夜は「革命的現代京劇」を見るなど、プロレタリア文化大革命を実地に体験する記録集となっている。学生の見聞記の中には、中国で進められていた「教育革命」を日本の学生運動のあり方と結びつけて理解するような記述も見られる。革命による社会の大きな変化に対する賛辞や社会主義への共鳴をかくさぬ字句も、随所にあらわれる。「ホテルでも鍵をかける必要がなく、落とし物をしてもし必ず届けてくれるし、役人風を吹かす人もなく、社会主義国だから企業間の過酷な競争や、不当表示、着色剤などを用いる商品もない。嘘とか生存競争といった言葉はおよそこの国には相応しくない。また礼儀などもすべてに四角張らず、簡素に、心をこめて行うのが今の中国である」（5～6頁）。資料編には、広州で面会した郭沫若の談話、および北京で面会した徐明の談話を収録する。

なお、斉了会の歴史に関しては、関係者の回想など綴った『斉了会の50年 訪中学生友好参観団の軌跡 1965年～2015年』（斉了会編，2015年）がある。（村田雄二郎）

#### 友好海運訪中代表団報告書／日本国際貿易促進協会友好海運訪中代表団

1971（昭和46） 119頁 〔Q652〕

海運業界の代表11名から成る友好海運訪中団は、この業界としては1964年以来7年ぶりに、1971（昭和46）年4月2日から28日まで中国を訪れ、北京・天津・上海・南京・長沙・広東をまわるとともに、業務問題の話し合いをおこなった。一行は、各地で工場、人民公社、学校などを視察したほか、北京では地下鉄と収租院、上海では工業展覽館、長沙・韶山では毛沢東に関係ある場所、広州では農民運動講習所も見学した。

本書は、「郭沫若先生との会見メモ」「挨拶の部」「参観の部」「海運実務問題の部」「団員感想」の各章より成っている。「郭沫若先生との会見メモ」は、4月15日におこなわれた会見の一問一答の記録である。「挨拶の部」は、中国外輪代理会社をはじめ海運関係諸会社の代表と日本側代表との挨拶を収録している。「参観の部」は、日程をおって、見学した諸施設について各所でうけた説明と眼にふれた事柄を記している。「海運実務問題の部」は、1968～69年以来配船上の問題となっていた実務上の諸事項について中国滞在中5回にわたっておこなわれた懇談の要旨を、一覧表にしてまとめている。

#### 訪中報告（第1集）／民族民主教育学習訪中団

山口 民族民主教育学習訪中団派遣山口県実行委員会 1971（昭和46） 62頁  
〔10287〕

民族民主教育学習訪中団の訪中報告。一行は山口県の教員が中心となり、東京・神奈川・茨城・大阪・石川などの教員を加えた24名で、団長は森脇保（山口県教組書記長）。旅行期間は1971（昭和46）年7月23日～8月15日。訪問地は長沙・韶山・上海・南京・西安・延安・北京・広州。

本書は、旅行中に見聞したところを、中国の人民、革命の歴史、教育革命、社会主義建設（工場・労働者住宅・人民公社など）に分けて記す。終りに、張春橋（中国共産党中央政治局委員）・姚文元（同前）・郭沫若（中日友好協会名誉会長）らとの北京における会見記録がある。

#### **東方の紅：ありのままの中国／山口和子著**

**東京 第三文明社 1971（昭和 46） 270 頁 〔8737〕**

旅行記というよりは、同時代中国についての案内書。著者は、中国や中国の人を理解するために、北京放送や中国の刊行物から得られる情報を収集・整理して記録を書いてきた。本書はその記録をまとめあげたものである。著者は 1919 年に中国の鉄嶺で生まれ、1936 年に奉天商業学校を卒業。終戦で日本に引き揚げて、1953 年から NHK に勤務し、中国問題を担当することとなった。主な仕事は北京放送の受信であり、本書にはこの過程で得られた情報・経験が生かされている。（久保茉莉子）

#### **中国：1971 年秋／吉田実著**

**東京 ニュー・サイエンス社 1971（昭和 46） 250 頁 〔8791〕**

著者は川崎秀二を団長とする 9 名の代議士からなる川崎訪中国の一員。旅行期間は 1971（昭和 46）年 9 月 3 日～9 月 22 日。訪問地は広州・北京・上海。

本書はその訪中記録。広州では 25 年ぶりに踏む中国の土に感慨無量、農民運動講習所・中山医学院を、仏山では石湾美術陶器工場などを見学し、北京では、頤和園・万里の長城・紫竹院・紫禁城・天壇公園・動物園に遊び琉璃廠を巡るほか、第三聾啞学校・双橋中古友好人民公社・故宮博物院・石油化工総廠・清華大学・木材廠などを視察して、これらの見学記を中心に、広州・北京を描く。また北京の物価と賃銀について詳しい。つぎに北京における 4 回の政治会談と周恩来との 3 時間に及ぶ会見のことを記す。さらに上海については、文化大革命のこと、工業展覽館のことを述べ、最後に上海から広州に至る車窓の風景を描く。このほか訪中報告のまとめとして、教育革命、農工結合経済、国家の成り立ち、1970 年の国慶節の映画のことを載録する。

## **1972**

#### **中国の現実／新井宝雄著**

**東京 毎日新聞社 1972（昭和 47） 277 頁 〔Q1987〕**

著者は毎日新聞社の特派員として、1966 年文化大革命のはじまるころまで約 1 年間、北京に滞在した。その間に見聞した新しい中国を古い中国と比較して書いたのが、前著の『中国の素顔』（毎日新聞社刊）である。それから 6 年振りに、1972（昭和 47）年の晩春から夏にかけて約 2 ヶ月、中国を旅し、北京・西安・延安・鄭州・安陽・林県・大寨・上海・杭州・長沙・韶山・広州をまわって、大小の工場・人民公社・病院・学校、その他の施設・機関などを訪れ、多くの人々といろいろな問題について話しあった。

本書は、この中国訪問で得られた中国の姿を、6 年前に北京特派員として中国に滞在したときの経験と比べて書いたものである。まず「文革はどうして起きたか」「毛主席は具体的にどのような措置をとったか」などの質問を文革の洗礼をうけた中国人に浴びせて、そのなまの声を

写す。ついで指導者がますます大衆的になり人民に奉仕する気の強くなったこと、それらの幹部やその後継者の育てかたを、廖承志の振舞いや五七指示、五七幹部学校・北京大学・中央民族学院やその他視察した小中学校の状態などから記す。また農村や工場で、個人主義的傾向を助長したソ連式の奨励金制度や点数制度が廃止され、社会のために働く農民や労働者にふさわしい分配制度がとられるようになったこと、不可能を可能にしたハリ治療のこと、自然と壮絶な闘いをくりひろげて人間が作りあげた大寨の人民公社や林県の紅旗用水路のことを述べる。そして最後に、中国および中国人は歴史の中に生きていること、中国の政策は歴史の教訓に導かれていることを叙し、日中問題の歴史をたどって、冷戦論理の崩壊していく姿を描く。

## 第二・中国通信／安藤彦太郎著

東京 亜紀書房 1972 (昭和 47) 275 頁 [8832]

著者の安藤彦太郎は、早稲田大学卒の日中関係史研究者であり、本書の執筆時は早稲田大学教授を務めていた。安藤は、孫文『三民主義』を翻訳したことでも知られている。本書は2部構成となっており、前者は1967年7月から10月にかけて、後者は1971年9月から10月にかけて、それぞれ安藤が文化大革命下の中国に滞在した時の記録である。(吉見崇)

## 満蒙紀行／飯塚浩二著

東京 筑摩書房 1972 (昭和 47) 295 頁 [Q2002]

人文地理学者であった著者は、日本の敗戦直前、1945 (昭和 20) 年2～6月に日本の支配・占領下にあった満洲・蒙疆・華北を旅行して、フィールド・ノートともいうべき詳しい記録を採り、戦後18年経ってからこの旅行ノートを『東洋文化研究所紀要』に7回に分けて発表した。著者の死(1970)後、これを旅程の順に整理し、さらに未発表のノートから北京滞在中の部分の採録を加えて、1冊にまとめられたのが本書である。

記述は、「日記の形式をそのまま生か」しており、それは2月3日の東京出発に始まり、6月26日、家族の疎開先に帰り着くところまでを収めている。著者は朝鮮を経て満洲へ入り、新京で旅行の手配をしてもらう満鉄などとの連絡を終えたのち、まず2月26日まで南満各地をまわった。撫順炭鉱、大連の埠頭と油房、金州の内外綿工場、鞍山製鉄所を訪れ、おもに労務管理・労働事情に関して見学したことを記している。3月4、5日には亡命白系露人の村である北満のロマノフカ村へ行き、かれらの生活状態を報告しつつ、日本の開拓団との相違も指摘している。3月10日から4月20日までは北京に滞在。ただしこの間3月18日から4月6日まで張家口、厚和(帰綏)、包頭、大同とまわった。包頭では西北哥老会の本部を訪ねて頭目から哥老会の組織のことなどを聞き、張家口では肅親王の一族やモンゴル系の青年たちに会っている。4月22～24日には熱河、5月2～13日には興安地区、5月14～20日にはダライノール・ホロンバイル地区へと出かけ、ラマ教や包【バオ】のことなど蒙古人の生活形態を詳しく調べている。5月21日から6月12日には再び北満へ行き、国境の町黒河を見たあと、阿城県の開拓村である大谷村と八紘村とを訪ねた。著者は、両村の満人社会へのとけこみ方に相違のあることに目を向けており、そして、最小の権限を最大に生かして「牧民官」として働く日系の同県副県長の施政状況を詳しく紹介している。

以上にふれたほかにも著者の訪れた土地、会った人々は多く、またとりあげている話題も多岐にわたっていて簡単にまとめることはできない。このように、著者が目で見、耳で聞いた事



柄を細かく書き留めたことによって、「あらゆる指標は〈斬り死に覚悟〉のその日が差し迫りつつあることを示していた」時期の、日本の植民地支配・占領地支配のさまざまな側面を、事実を以て語らせている点で、本書は貴重な資料になっていると同時に、我々に多くの問題を提起した書となっている。

**オラが見た中国：三里塚農民の“隣り村”訪問記／石井武・小川たけ共著**

**東京 主婦と生活社 1972（昭和 47） 276 頁 （21 世紀ブックス）〔Q1633〕**

三里塚芝山連合空港反対同盟訪中代表団の訪問記。団長は戸村一作委員長。旅行の期間は、1972（昭和 47）年 3 月 17 日～4 月 10 日。経路は三里塚－香港－広州－北京－沙石峪－北京－延安－北京－上海－韶山－長沙－広州－香港－三里塚。

この訪問は中国政府の招待によるものだが、その目的は、(1)中国の民衆に対して日本人の犯罪行為をわびること、(2)中国の民衆が自らの力で民衆自身の国土を建設していく姿をつぶさに見て現在の三里塚の闘いに対する教訓を得ること、(3)中国人に三里塚の闘いを報告し、それについての忌憚のない意見と批判を聞くこと、(4)農業経営の実態を見学すること、にあり、また結果的には、三里塚闘争に大きな勇気と確信とが与えられたという。

本書はその旅行記で、空からみた中国農村地帯、周恩来総理会見記、中国人民解放軍見学記、毛主席誕生の地と延安への旅、上海への汽車の旅と華山病院、三里塚闘争の報告集会、教育改革の実態、沙石峪人民公社、中国農業の一断面、あとがきにかえて、の 10 章から成る。前述の目的からもうかがえるように、この訪中団が常に三里塚で闘う農民としての意識のもとに、闘争との関連において中国を観察していることは、〈はしがき〉のなかで、

招待してもらったからといって相手の国のことをあることないことほめたたえることはかえって失礼であろう。「中国にはハエ一匹いない」と聞いて行ったが、やはりそれはウソで、ハエも蚊もちゃんといた。それだけに中国は私たちにとって決して遠い国ではなく、すごく身近に感じられるし、地図にあるようにすぐそばの「隣り村」である。といっているような見方とともに、本書の特色である。

**新しい中国の顔：文化大革命後の見聞／尾崎秀樹著**

**東京 講談社 1972（昭和 47） 254 頁 〔Q1497〕**

本書は著者が新聞や雑誌に発表した中国に関する文章を集めたもので、第 1 部には 1971 年夏の、第 2 部には 1967 年春の訪中見聞記を収めている。

本文とは順序が逆になるが、1967（昭和 42）年の旅からみていこう。武田泰淳・杉森久英・永井路子らと共に中国作家協会に招待されて、4 月から 5 月にかけて広州・北京・西安・上海・杭州・長沙などをまわった。当時の中国は文化大革命の最中で、「毛沢東語録」と大字報に埋まる町の様子、西安の労働者が語った反ソ感情、沙石峪人民公社で実感をもって理解した「愚公移山」の挿話の意味、身体障害の労働者が話した毛沢東への感謝の気持など、多くの断片的な見聞が文化大革命下の雰囲気을伝えている。また、一行を案内してくれたのが胡万春であったことや老舍の消息がつかめなかったことなど、文学界の状況にも多少ふれている。さらに鲁迅には著者は特別の関心を抱いており、かれの故郷の紹興と広州の鲁迅記念館を訪ねた時のことを感慨深く述べている。同時に、旅行記ではないが、著者の兄・尾崎秀実と鲁迅との交渉を通してみた著者の鲁迅観を語る一文も収録されている。

2 回目の 1971 年には、6 月から 7 月にかけて中国を訪れた。今回は、白石凡・宮川寅雄・藤堂明保・野村浩一・および著者をメンバーとする日本文化界代表団が、中国側の文化界各ジャンルの専門家と文化界の現状を話し合うことを目的としていた。文芸評論家である著者は、その話し合いのなかから文芸に関する話だけを取りあげている。作家協会は解散され、作家たちは幹部学校や職場で再教育中で誰とも接触できず、文学方面に関して応待に出たのは、かつての「紅樓夢」論争で知られた李希凡であった。著者はかれに作家たちの消息を尋ねたが、十分に話がきけず遺憾に思っている。美術については、応待に出た劉春華の経歴やかれの油絵「毛主席安源へ行く」の制作過程など、かれから聞いた話を報告することにより、中国美術界の新しい方向を伝えようとしている。一行は周恩来と 2 回会った。席上周は日本の軍国主義復活を厳しく批判したが、それに関連してとりあげられた日本の戦争映画についての発言に著者は興味をひかれ、これを詳しく語っている。

こうして意見交換が主目的であったため、一行は北京にもっとも長く滞在し、そのほかに広州・太原・延安・西安をまわったそうであるが、ここでは 3 日間の延安滞在中の見聞だけが述べられている。

#### 中国のバカ：日本のバカ／葛西純一著

東京 太陽社 1972（昭和 47） 264 頁 【Q1848】

奥付によれば、著者は 1922 年に宮城県子牛田町に生まれ、1940 年に満鉄社員、43 年に関東軍兵士になったという。1945 年に八路軍（後の人民解放軍）に入り助理軍医と通訳を務め、1953 年に帰国した。文中から察するに、林彪率いる第四野戦軍に属していたようだ。「中国には「定価」（原則）と「交渉」（人間関係）の間には「幅」があって、その幅は日本よりはるかに大である」「要は、中国には「裏」と「表」があり、日本のように「表」だけではない」（112 頁）という著者は、中国の「裏」を事情通よろしく、個人の体験談やエピソードを交えて、かなり露悪的に語る。下ネタ話も頻出し、辞書にはない中国人の罵り言葉をこれでもかと列挙する筆調からは、日中友好人士に冷水を浴びせたいとの著者の狙いが垣間見える。短編のエッセイのほかに、「未帰還者」と題する自伝的小説、また「中共軍従軍句集」があり、とくに後者は一定の資料的価値がある。さらに付録として「中国語学校一覧表」、「中国関係団体」、「満蒙関係団体名簿」（「満蒙同胞援護会資料に基づく」）を収める。（村田雄二郎）

#### 私の見た中国と婦人たち／甲藤将恵著

出版地・出版者不明 1972（昭和 47）序 36 頁 【9080】

著者は全日本自治団体労働組合婦人部長。1972（昭和 47）年 6 月 12 日から 7 月 6 日まで、日中友好婦人訪中国の副団長として中国を訪れた。広州・長沙・杭州・上海・南京・北京などの各地をまわって、学校・人民公社・工場・病院、その他の施設を見学したが、本訪中国の性格から婦人労働者との交流や婦人の指導者との会見の機会を何回かもったのが、旅程の特徴である。そして、著者の報告も中国の婦人について語るのが中心になっている。すなわち、まず、広州で超高压線作業に従事する婦人労働者、上海計器部品工場で働く盲、聾の婦人労働者たち、上海郊外の彭浦労働者新村の婦人たちの様子を紹介し、そして彼女たちの労働条件、労働保護について報告している。さらに、広州市革命委員会の常務委員をしている女性の体験談も記録されている。このほか、日常生活・医療・教育などについても、女性の立場から観察している

事柄が多い。

**ペンとカメラの北京・東北紀行：荒野に開発された大慶油田／西園寺公一著 南村志郎撮影  
東京 読売新聞社 1972（昭和 47） 216 頁 〔Q2021〕**

西園寺公一はカメラマン南村志郎とともに、1971（昭和 46）年 9 月 24 日羽田を発ち、広州を経て、9 月 26 日北京に入り、国慶節の祝典に参加し、10 月 7 日から 3 週間、哈爾濱・長春・大慶・鞍山・撫順・瀋陽など、東北の都市をまわって北京にもどり帰国する。

本書はその旅行記で、まず 1 年ぶりに訪れた国慶節前後の北京を描く。ついで東北旅行にうつるが、最初の訪問地哈爾濱は文化大革命のはじまったばかりのときに訪れており、5 年の歳月を経た「動力の町」哈爾濱の変貌を明かにし、また郊外の香坊にある省営実験農場では、都市の知識青年 3 人がここで働きながら毛思想を学ぶ姿をうつす。つぎに参観した長春の第一汽車製造廠、大慶の油田については、自力更生による技術革新、二つの路線の厳しい闘争のあとをたどり、特に大慶油田については、その開発の功労者王進喜のことを述べながら、探鉱から今日にいたるまでの歩みを明かにする。鞍山鋼鉄公司については、毛主席が労働者に示した社会主義企業運営の基本原則「鞍鋼憲法」にまで筆が及び、撫順炭鉱では、日本軍国主義の犠牲となり生き地獄にあえいだ物語をその体験者から聞き、各所の万人坑・烈霊碑や平頂山殉難同胞記念碑を見てその実感を得る。また瀋陽では、医学院で群霊碑を見て、日本軍が細菌兵器製造の実験に使った動物の霊は慰めながら、生体実験の犠牲となった中国人に対しては動物に対するほどの慰めさえ与えなかった残忍さを思い、これと対照的に、中国解放軍の兵士が自らに生体実験を行って鍼による聾啞治療の端を開いた話を伝える。最後の大連では、紅衛小学校の防空壕、遼寧賓館（旧ヤマトホテル）の地下道を見、大連の地下全体が食堂・商店・銀行・郵便局から診療所まで備える一大地下街であることを知って、その防空に対する真剣さを感じる。

北京に帰ってから、北京二七機車車輛廠・北京大学などを見学する。前者については、清末以来の変遷、特に解放前後、文革前後の差異を記し、後者については文化大革命を経て脱皮した姿を描く。

本書のいちじるしい特色は、珍しいきれいな写真がたくさんあることと、いたるところで革命委員会や工場・人民公社の人たちから話を聞き、それを軸に見聞が記されていることにある。

**杏の街かどから：中国の主婦として二十九年／佐々木ハル子著  
東京 光風社書店 1972（昭和 47） 231 頁 〔Q1991〕**

著者は岩手県気仙郡世田米町の出身で、1942 年チチハルにわたり、満鉄病院に務めた看護婦である。敗戦後は中国に残留し、戦後の混乱の中でチチハル、長春、そして天津へと移り、都合 29 年間中国に居住して 1971 年に帰国した。本書はその半生の回想記である。チチハルではソ連兵の略奪、長春では国共内戦を経験した著者は、中華人民共和国成立後、天津市立工人医院に勤務しつつ、中国人の夫との間にもうけた一人娘を育てた。集団化時代の中国を留用日本人として生き抜いたエピソードの数々が淡々と綴られる。66 年の毛沢東の長江遊泳を機に天津で水泳がブームになったこと、71 年のシアヌーク訪問の際に女性のスカートが復活したことなど、日常を淡々と記す筆致は時代の証言として一定の価値がある。生活必需品の値段や配給品の量も細かに記され、社会主義時代の労働者の家計の状況がよくわかる。（村田雄二郎）

## 未来を開く新中国／渋谷昇次著

東京 R 出版 1972 (昭和 47) 再版 226 頁 [8893]

日本漁業組合副会長を経て、1946 年に社会党から出馬して衆議院議員を 1 期、1963 年からは静岡県大井川町長を 5 期つとめた著者による「新中国」の紹介。二度の訪中 (1956 年と 1971 年) をもとに執筆されているが、どこまでが実際の見聞に基づくかは不明瞭。一度目の訪中は 1956 年で、河野一郎らと日ソ漁業条約締結のためソ連を訪問した後、日本平和委員会代表団の一員として北京入りし、1 か月をかけて中国各地を視察した。この時は東北部や西北部を巡ったようで、鞍山市の鉱山、ハルビンのボイラー工場、大連港、柴達木 (ツァイダム) 油田、韶山の灌漑排水事業など、各地の国家建設事業の躍進ぶり、人々の生活の向上の様子が、日本占領時代の悲惨な状況と対比されながら紹介される。二度目の訪中は 1971 年秋で、広州や上海で、病院や託児所を視察している。著者は、人民公社や国営企業による集団体制は、合理的かつ生活を飛躍的に改善するシステムで、「飢餓、貧困、病気、失業というみじめな情景は、今はまったくなくなった」と、中国の社会制度を理想的であるとみなす。だが、興味・関心の対象は、中国の社会主義制度による革新的な開発事業あるいは制度改革にあったと見られる。1941 年に訪れたという「満洲国」については、「どこへ行っても異臭がし、ゴミでいっぱいだった。列車に乗っても臭くて、中国人と一緒に乗ることは困難だった」と回顧している。

著者は戦前、パラオに本社を置く南興水産の嘱託として調査部を担当し、興南協会参事等を兼任していた。『南太平洋諸島：地政治史的研究』(先生書店、1943 年) という著書もある。戦後、漁業組合や革新政治に情熱を傾けた経緯は不明だが、町長時代の渋谷は地元大井川町営港の建設工事に力を注ぎ、半農半漁の貧しい町に一躍近代的な港を建設した手腕は町民の間に広く評価された。が、その権力の大きさゆえに、建設工事をめぐる汚職で逮捕されている (『読売新聞』夕刊 1976 年 9 月 14 日、2 頁)。(辻直美)

## 北京日記／嶋倉民生著

東京 日本経済新聞社 1972 (昭和 47) 319 頁 [Q1996]

著者は 1969 年から 1972 年まで日中貿易貿易事務所の所員として北京に滞在した。主に滞在中の日常、毛沢東、周恩来など指導者に関する散文、社会主義建設に関する見聞、MT 貿易業務に関わる話題からなる。人民公社の視察を通じて中国の優れた点として生産隊ごとに保健担当者がある医療制度を挙げ、古井喜実の希望で人民解放軍を視察した際には食糧などの自給率の高さが印象深かったとしている。清華大学や五・七幹部学校など社会主義の現状を視察するほか、北京の大柵欄街地下壕も見学した。全長 2 キロ、最高深度 8 メートル、通風管、照明、電話、有線放送、WC、食糧倉庫、炊事場、休憩室、会議室があり、有事の際には 1 万人が宿泊できるという。仕事の面では自身の造語で「MT 四原則」なるものを掲げている。第一は「運動の原則」で貿易によって日中友好を拡大すること、第二は「ノンボリの原則」で日中友好の目標の障害物 (具体的には中国敵視政策) を除去すること、第三は「社会主義理解の原則」、第四は「中国指向の原則」で脱亜入欧論的な人物には中国を本当には理解できないとするものである。言論の自由や社会制度の違いについて議論したり、家永教科書裁判の話題から日本における司法権の独立について説明して理解を得られなかったりと、中国人と率直に対話する機会もあった。地下壕を掘っている現場を不用意に撮影して群衆に囲まれたり、壁の毛語録スローガンが塗り潰されたりしているのを見て文革の下火を実感するなど、時勢を肌で感じとった

記述も多い。

(池田尚広)

**新しい中国／菅沼不二男，飯島篤著**

**大阪 保育社 1972 (昭和 47) 153 頁 [Q2023]**

直近 2, 3 年に訪中した友人から集めた写真をもとに当時の中国各地の特徴を記す。名所旧跡に関するごく一般的な記述も多いが、市民の生活に根付く時代の特徴を捉えたところも少なくない。北京駅は母子専用の待合室や映写設備をもつ小待合室など設備が充実。交通の要路であった西単にはトロリーバスが行き交い朝夕には夥しい自転車の流れが出現。路傍では人民公社から来た安くて新鮮な果物が並ぶ。天津の塘沽新港には日本からの貨客船、北欧からの船がみられ国際色豊かである。上海の蘇州河以南の市街地にある瑞金劇場には大きな毛沢東の肖像が掲げられており、本文中では、映画・演劇は単なる娯楽ではなく「延安文芸座談会での講話」に示されたように社会主義建設推進の上で文化戦線の一端を担う重要な地位を占めている、と説明される。託児所は毎日連れ帰る日託と月曜から土曜まで預ける週託があり、託児費は月額 10 元 (1,400 円) 以内。広州市内を貫流していた珠江の江岸にはアパートが立ち並び、かつての水上生活者の姿はもはやみられない。巻末は北京周辺、上海周辺、地方都市、革命の史跡に分けて 16 都市を紹介しているほか、「工場と人民公社と文化」と題して文化大革命、工農一体の生産体制、大慶油田、文芸路線などについて概説している。「相互の理解と友好のために」と題した文章では、国交正常化を果たし自由な人的往来が活発化するであろうことを見越して、訪中にあたっては社会体制の違い、歴史の再認識、中国人民の毛沢東への敬愛、中国人民の生活水準について注意すべきだと述べている。

(池田尚広)

**中国見たまま／杉森久英著**

**東京 文藝春秋 1972 (昭和 47) 240 頁 [Q2016]**

著者は出版社勤務を経て文筆業に入った作家で、同業の武田泰淳・永井路子・尾崎秀樹および日中文化交流協会の木村菊雄〔菊男〕と 1967 年 4～5 月に中国を巡った際の旅行記である。武田泰淳はこのときの訪中経験をもとに、『揚子江のほとり 中国とその人間学』（芳賀書店 1967 年）を著しているが、本書は訪中から 4 年を経て、『諸君』連載の所論を一書にまとめたものである。一行の訪問地は、広州－長沙－北京－西安－上海－杭州－紹興。北京では許広平、趙安博・郭沫若らと会見し、また上海では作家協会の杜宣らと会談した。

著者は画一的な革命宣伝の空疎さに辟易し、経済や技術の遅れと停滞、極度に政治化した文学芸術のつまらなさに対して、忌憚のない批判を繰り返している。珍しい外国の賓客を取り囲む野次馬の群衆に対しても、著者は何度もつきはなした見方をしている。「そのしまりのない口もとや、無気力な目つきは、そのままこの人たちの精神内容の空虚を物語っているとは思えない。中華人民共和国の人たちは、機会のあるごとに、革命によって中国人民は過去の悲惨な状態から救われ、前途に希望を見出して、建設にいそしんでいるというけれど、それはごく一部で、何億という人口の大部分は、まだ新政の恩恵に浴していないのではないかとしか思えない。」 (179-180 頁)

(村田雄二郎)

**素顔の中国／聖教新聞社編**

**東京 聖教新聞社 1972 (昭和 47) 226 頁 [Q1979]**

岩村三千夫・西村忠郎・高田富佐雄・菅栄一・山田礼三・野村浩一・宮川寅雄・藤堂明保・香坂順一・山口一郎・新井宝雄がそれぞれ中国について書いている。『聖教新聞』1971年1月から12月まで連載されたものが書籍化された。高田富佐雄は1964年4月、松村謙三の第三次訪中に同行した。四川省の新民人民公社で現地の基本的な事柄を聴取する一方、かつては地主の所有物であった豪華な紫檀の寝台で寝る人民公社社長の姿は「革命がもたらす人間の変化を、痛烈に印象づけるとりあわせであった」。翌1965年にはかつて学んだ同文書院のあった上海を訪れ、中国人街半淞園の変化を目の当たりにした。菅栄一は1964年9月から1966年10月まで北京に滞在した。第一印象は「伝えられるよりも、はるかに物が出回っている」ことで、特に食糧事情に杞憂がないことを述べる。滞在中はよく民衆のデモ行進や集会を目にしたが、総じて規律正しく整然と行われていると感想を述べ、「文化大革命のなかで紅衛兵が登場したのも、このような大衆運動でつちかわれた基盤があったからだ、いえるのでは」としている。宮川寅雄・野村浩一は1971年6月、日本文化界訪中国で白石凡・藤堂明保・尾崎秀樹らと訪中した。周恩来と会見し、郭沫若の案内で故宮博物院を見学したほか、大学や中学校などの教育現場や「崇文区五・七幹部学校」を訪問している。宮川は北京大学の視察において、哲学系の研究対象に「実験論、生産力論、人生論の三つの毒草に対する批判」があることに注目し「現代修正主義に対する闘争という政治的要求に結びついたもので、当然、中国人民の世界観の変革に役立つものであろう」と肯定的な感想を述べている。同年10月に訪中した香坂順一は、広州の中山大学で針麻酔による甲状腺腫瘍と腎盂結石の手術を見学した。ここに毛沢東が提唱した「古為今用、洋為中用」を見るとともに、この姿勢が現代京劇、現代バレエにも表現されているとの感想を記す。また1966、67年にも訪中した経験から、文革前後の変革の軸となっているものは「階級観点の徹底的な確立である」と述べている。（池田尚広）

## 訪中報告書（第2集）／第二次民族民主教育学習訪中団

山口 第二次民族民主教育学習訪中団派遣実行委員会 1972（昭和47） 59頁  
〔10288〕

第2回目の民族民主教育学習訪中団の訪中報告。一行は、山口県の教員が中心となり、東京・神奈川・静岡・茨城・愛知・大阪・兵庫の教員を加えた23名で、団長は黒川謙治（山口県）。1972（昭和47）年7月25日から約3週間、広州・北京・西安・延安・南京・上海などの都市を訪れる。

本書はその訪中報告で、旅行中に見聞したところを、中国の人民、子供、婦人、革命の歴史、歴史文物、教育、医療、社会主義建設（公害・労働・家庭生活や大寨など）に分けて記す。

## 松村謙三と中国／田川誠一著

東京 読売新聞社 1972（昭和47） 246頁 〔Q1567〕

本書は、日中国交正常化に取り組んだ政治家・松村謙三の評伝であり、詳細な松村の訪中記録を収める。著者の田川誠一は、松村の秘書を経て衆議院議員となり、松村同様、日中国交正常化に取り組んだことで知られる。そのため本書には、国交正常化前の田川自身の訪中や、1971年に松村の葬儀参列のため王国権が来日した時の様子（いわゆる王国権旋風）についての記述もあり、興味深い。（吉見崇）

## 写真集・中国の大地を行く／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 (昭和 47) 151 頁 [Q2005]

名古屋テレビ報道部『僕らと隣あう 8 億の友だち』の姉妹編で、同報道部 6 人による共同構成。写真の多くは万里の長城・天安門などポピュラーな中国紹介の写真だが、一部にカラー写真があり貴重である。故宮暢音閣、天安門、前門、人民大会堂、新華門、北京飯店、頤和園仏香閣から臨む昆明湖、定陵、自転車置き場、自動車「上海号」、燎原日夜百貨店、列車員（深圳～広州）、中国出国商品交易会、葵芸工場、ハリ麻酔手術、韶山広場、八路軍辦事処（西安）、紅旗広場（瀋陽）、大寨、上海（市内、上海大廈からの鳥瞰、外灘遠景、魯迅紀念館、魯迅旧居、578 連隊第 2 中隊、587 連隊半自動小銃訓練、196 師団戦車連隊、中国製 59 式戦車など）。白黒写真の「軍民憶苦会」「政治学習（『矛盾論』を読む小学校 5 年生）」なども興味深いものである。（関智英）

## 僕らと隣あう 8 億の友だち：世界の焦点・新生中国のすべて／名古屋テレビ報道部

東京 青年書館 1972 (昭和 47) 190 頁 [Q2004]

名古屋テレビ報道部の 7 名による共同執筆。詳細な時期は不明だが 1971 年から 72 年にかけて中国各地を取材した際の記事 77 篇と座談会「日本人が遠くしている中国」を収める。取材班の訪問地は北から撫順－瀋陽－鞍山－大石橋－北京－武清－太原－大寨－西安－延安－上海－杭州－長沙－韶山－広州－新開（ママ、新会の誤記か）。各記事はいずれも見開き 2 頁で完結しており、「文盲の帽子を脱ぐ」「文化大革命と子どもたち」「織機のボルトをつくる小学生」「人民解放軍一百発百中、闇夜の鉄砲」「必需品は安く、ぜいたく品は高く」「昼間にビールをのむ話」「下戸のヨッパライ」「人民の「いい湯」」といった記事を収める。「日本軍国主義」とは植民地型収奪機構」「日本人のひとりひとりが中国人を虐殺した」といった記事の表題からもわかるように、日本の侵略を反省し、中国の発展を賞賛する立場をもとに執筆されている。姉妹編として『写真集・中国の大地を行く』がある。（関智英）

## ぼくの北京留学：バレエと文革と青春／林道紀著

東京 講談社 1972 (昭和 47) 204 頁 [Q1634]

著者は 1965 年 11 月から 1969 年 9 月まで北京芭蕾舞学校でバレエを学んだ。父親は友好商社である日本景徳鎮株式会社の代表、父方の祖父は林弘吉、母方の祖父は画家陳包一である。入学後まもなく文化大革命が始まる。当初は外国人であるため蚊帳の外に置かれるが「「紅色娘子軍」「白毛女」は、民族的で革命的なバレエだ。これからも創作されると思う」「ぼくも同学、中国人といっしょに文化大革命を闘いぬこうと、一人で決心している」というように文革が芸術活動に与えた影響の中で感化される著者の感想が印象的である。革命運動への参加が許されると、周口店で学校の集団下放を 2 週間経験したり、紅衛兵とともに毛沢東、周恩来の接見にも参加したりするなど、自らが「革命師生」になった自覚と感動を述べている。学校内は井崗山公社派と毛沢東主義陣線派に分かれ、著者は前者に属す。両派が一時統一されると直後のバレエ公演「白毛女」では悪役の家丁を演じた。上海にある祖父母の墓がブルジョアに属すとして破壊されたことに不満を持ったこともあるが、著者は基本的に一貫して革命運動を中心とする中国の現状に賛同しながら勉学と稽古に励み、1969 年 3 月に卒業してからも帰国を半年遅らせた。1971 年に松山バレエ団の訪中公演の一員として再度訪中。広州、北京で公演を

行い、延安も訪れた。公演は周恩来・郭沫若・廖承志・王国権も観劇した。断片的ではあるが留学中は西園寺公一に会ったことにも触れている。(池田尚広)

「ニイハオ」の国(ルポ)：中国の民衆の中に入って／古川万太郎著

東京 現代史資料センター出版会 1972(昭和47) 270頁 [8829]

著者は朝日新聞の政治部記者。1971(昭和46)年6月から7月にかけて1ヶ月半ほど、本多勝一とともに中国取材旅行に出かけ、北京・瀋陽・撫順・鞍山・南京・上海・長沙・広州とまわる。本多の取材目的が、かつての日本軍が中国で何をしたかを、中国人の視点から知ることにあったのに対し、古川のそれは、日中関係打開のカギを探ることと、文化大革命後の中国の実情をつぶさに知ることだった。

本書は古川の中国取材旅行記である。最初に、北京の町に見る民衆の姿を描き、ついで北京大学の視察記、故宮・明の十三陵・万里の長城などの史蹟の見学記、郭沫若(全国人民代表大会常務委員会副委員長)との会見記を載せる。また南京の江蘇新民学院第二付属病院、上海人民第六病院を視察して、ハリ療法にとりくんでいるありさまを伝え、北京の東城区五七幹部学校を見学して、幹部が労働参加という形で思想の再教育をされていることを知る。農村において大寨精神がどんな形で発揮されているかを、瀋陽郊外の紅医站五三人民公社、南京郊外の仁寧県銅井人民公社、河北省遵化県の岳各庄人民公社を訪れて明かにし、文革闘争を経て生産活動にうちこむ労働者の態度や、人使いのひどかった日本人経営者とは対照的に働く労働者の立場に立つ新しい幹部のことを、瀋陽の小型トラクター工場・二一三電気工場・第一工作機械工場、撫順の露天掘り炭鉱、鞍山の鉄鋼コンビナートを見て学ぶ。終りに、古くて新しい上海、長沙・韶山の毛主席関係史蹟や田園風景、長沙から広州への汽車の旅を述べ、その車中でニクソン訪中取決めの中国政府発表を知ったこと、旅行中に接した中国の民衆のだれもが親切だったことを記して、筆をおく。

中国の旅／本多勝一著

東京 朝日新聞社 1972(昭和47) 10,348,10頁 [Q1451]

朝日新聞の記者である著者は、「戦争中の中国における日本軍の行動を、中国側の視点から明らかに」したいと考え、その取材のために1971(昭和46)年6月3日から7月18日まで中国を訪れて関係各地をまわった。同僚の古川万太郎と一緒に中国へ入ったが、2人は取材目的を異にしたので行動は別になることが多く、本書では最初の北京から瀋陽まで同行したこと以外には不明である。著者の取材方法は、各訪問先でまずその地の責任者から概括的な説明を聞き、その後そこに語られた典型的な事件について現場へ行って体験者の話をきく、という順序であった。この方法で著者が本書で報告している日本軍・日本人の残虐行為は以下の通りである。

瀋陽——旧住友(現瀋陽大型工作機械工場)の労働者虐待、「思想輔導矯正院」のこと、満洲医科大学(現瀋陽医院)の生体実験。

撫順——撫順炭鉱の労働者虐待、平頂山事件、防疫の名目による住民虐殺。

鞍山——久保田鑄造(現鉄管鑄造工場)の労働者虐待。

大石橋——マグネサイト鉱山の万人坑。

北京市南方の太子務生産大隊——盧溝橋事件の頃、村へ来た日本軍の行為、この村から日本



へ強制連行された人の話。

上海——同市西郊の虹橋人民公社の2女性が語る日中戦争時に上海にいた日本軍の行為、上海港第5作業場で聞いた労働者虐待。

江蘇省淮陰県馬路湖村——村にきた日本軍の〈討伐隊〉の実態。

南京——南京事件。

唐山東北方の潘家峪——三光作戦。

著者は、これら過去の話とともに聞いた現況も記しているが、きわめて簡単である。

本書は1977年に『本多勝一著作集』第10巻〔10211〕として再刊されているが、それには、著者の『戦争を起こされる側の論理』に書いた「中国の旅から」も収録している。この部分は教育、労働者、農民に重点を置いた現在の中国事情を述べたものである。

**document 中国：三留理男・写真報告／三留理男著 栗津潔，神戸明編**

**東京 主婦と生活社 1972（昭和47） 288頁 〔Q2022〕**

著者の最初の訪中は日中文化交流協会代表団に加わった1971年9月。2度目は1972年から6月末から8月まで単身で訪中した。広州－北京－西安－延安－上海－南京のほか東北各地の工業地帯，革命の地井崗山一帯，各地の人民公社を取材した。取材目的は「一つには文革後の新しい中国にふれること，特に中国の人びとが何を考えているかを知ることであり，第二には東北地方における日本侵略軍の爪あとを，自分の目でたどること」である。軍事訓練に励む10代の民兵や延安の農村で出会った清華大学の学生，溶接工場の女工といった若い力。高層ビルが立ち並ぶ北京，上海やトロリーバスに自転車の群れ。市場や団地，住宅地に映る人民の衣食住。こういった生活風景も去ることながら，病院の脳外科手術まで見学しているのが珍しい。東北は工場の写真が中心だが，一部に女性労働者に焦点をあてているところがある。瀋陽の変圧器工場は労働者5,050名のうち女性が1,200名おり，別の鉄鋼工場の女性労働者（19歳）は夜になると革命劇「紅灯記」のヒロインを演じるという。他にも体育学校の授業，「白毛女」「紅色娘子軍」などの革命劇，美術工芸品の生産現場，少年宮や学校の青少年，人民公社の農業，生活，医療などの中にも目を引く写真が少なくない。（池田尚広）

**時代は変わった——東京婦人活動家友好訪中団：1972年3月～4月中国訪問記**

**東京 1972（昭和47） 108頁 〔8900〕**

長島陽子を団長とする13名の東京婦人活動家友好訪中団の訪中報告書。旅行期間は1972（昭和47）年3月18日～4月6日。訪問地は広州・上海・北京・長沙。

本書には19篇の報告がおさめられているが，いかにも婦人の訪中団らしく，プロレタリア文化大革命を闘った上海の3人の婦人労働者（紡績労働者・昼夜商店員・薬屋の店員）の経験談，働く婦人の日本語通訳胡さんのこと，抗日戦争以来の革命を闘いぬいた2人の婦人（蘇明・張敏東）の談話が載っている。また家庭婦人がパートで働く上海の烽火木箱工場や，女性ばかりで構成された超高压電線の作業班である広州の三八活線作業班の見学記は珍しく，その他，訪れた箇所も婦人らしく，広東省南海県平州人民公社では幼稚園，上海市曹楊工人新村では託児所・幼稚園や中学を視察し，上海では国際和平婦嬰保健院を訪れ，また各所で子供や労働者の歌や踊りを見聞して楽しんでいる。その他，主な見学箇所は，広州の聾啞学校，上海の幸福村小学校・盲聾啞工場，北京の第五十一中学校・清華大学・五七幹部学校・地下壕など。また

郭沫若との会見記もある。最後には、団員 12 人による座談会記事がある。

## 1973

### 三色の大地／朝日放送産業人友好訪中団

大阪 朝日放送 1973（昭和 48） 160 頁 〔9258〕

朝日放送が産業人代表で組織した朝日放送産業人友好訪中団の訪中記録。旅行期間は 1972（昭和 47）年 2 月 10 日～3 月 2 日。訪問地は広州・長沙・上海・南京・天津・北京。

本書の「三色の大地」という紀行文は、原清（朝日放送社長）団長の執筆したもので、中国の何処にいても満ちあふれている紅色（スローガンの看板）・紺色（人民服）・草色（人民解放軍の軍服）の 3 色，姿を一変した中国，全力投入する食糧・農業生産，徹底した政治教育・思想教育，明るく朗かな群集，独立自主のシンボル——長江大橋などのこと，劉希文（中国国際貿易促進委員会責任者）・廖承志（中日友好協会副会長）などとの会談のことを記す。

全文 160 頁のうち 72 頁は色刷りの写真集で，その写真は朝日放送の伊藤直報道部員が撮影したもの，写真説明は田尻泰正報道局長（訪中団秘書長）がつける。このほか訪中団に参加した 12 人の産業人の印象記がある。

### 中国の芸と芸人／岡本文弥著

東京 三月書房 1973（昭和 48） 310 頁 〔9235〕

著者は新内の芸人。1964（昭和 39）年 10 月 24 日，民族芸能代表団の副団長として，団長の小生夢坊，浪曲の木村重松，講談の一龍斎貞花，本牧亭主人の石井英子，『文化評論』の田村栄とともに，中国を訪問，広州・北京・南京・蘇州・上海・杭州・広州とまわって，11 月 19 日帰国する。この間，北京では中国曲芸工作者協会・中国戯曲学校，南京では南京曲芸学校，上海では曲芸工作者協会・上海人民評彈団などを訪れ，曲芸の演者や関係者と懇談するほか，中国側の好意で演ぜられる侯宝林・李潤傑・良少楼女士・王麗堂女士・徐雲志・王鷹女士らの名人芸を楽しんだ。また，浅草六区を思わせる北京の天橋，上海の大娯楽殿堂「大世界」・仙楽劇場・工人文化宮や蘇州書場（書場とは寄席のこと）にも足を運んで曲芸を聞いている。ちなみに曲芸とは，民間演芸，大衆芸能ともいうべきもので，評彈（三絃の弾き唄い，浪曲に似ている）・評話（講談）・相声（漫才）・快板（四つの竹風の楽器を両手にもってカチカチパンパンうち鳴らしながら歌い語る）・京韻大鼓・河南墜子などの総称である。著者は 1966（昭和 41）年にも同じような中国旅行を試みている。

本書は著者が第 1 回の訪中後，訪中随筆を集めて出した『曲芸』の改題新装版である。『曲芸』の随筆 21 篇のほか，『芸人ふぜい帖』（同成社刊），『芸流し人生流し』（中央公論社刊）の中から，2 回の訪中随筆 10 篇をおさめている。第 1 回の訪中随筆のうち，「あとのまつり」は『曲芸』の編集後記，「日日短信」は旅行中，毎日自宅に送った手紙を集めたもので，いわば旅行日誌，「曲芸晩会控え帖」は各処で代表団のために特に催された曲芸演芸会の演題・演者などを記し，「“曲芸”聞書抄」は中国曲芸工作者協会主席周巍峙・協会機関誌『曲芸』副主編張克夫らの語る曲芸のあり方を伝え，「発言抄」は帰国後ひらかれた『文化評論』の座談会における著者の発言を抄録する。この順序に読んでいくとわかりいいように思う。最後の「新中国音曲案内」もはじめに読むといい。

## 中国紀行 30 日／河野健二編

東京 朝日新聞社 1973 (昭和 48) 185 頁 [9211]

河野健二を団長とする京都大学人文科学研究所代表団の訪中記録。一行は 1973 (昭和 48) 年 3 月下旬から 1 ヶ月、広州・長沙・韶山・北京・延安・西安・洛陽・南京・蘇州・上海・杭州・南昌などの都市を訪問する。その目的は、(1)学術交流をすすめる、(2)歴史的遺跡とか中国革命のプロセスを理解するために必要な施設を見学する、(3)社会主義建設の現状について理解する。

本書は 2 部に分れる。第 1 部「中国を考える」は、第 1、第 3 の目的に関する団員座談会の記録で、北京大学での学術交流についての討議、実際に行った学術交流の内容、文化大革命以後の教育革命、伝統と革命、公と私、農と工、婦人解放運動、共同体、マルクスの歴史法則などに関して話し合う。出席者は、井上清 (日本近代・現代史)・上山春平 (哲学)・小野和子 (中国婦人解放史)・河野健二 (西洋経済・思想史)・島田虔次 (中国近世史)・林巳奈夫 (中国考古学)・林屋辰三郎 (日本史・日本文化)・福永光司 (中国古代・中世哲学史) の 8 人。第 2 部「中国を歩く」は第 2 の目的に関する座談会の記録で、各地で参観した革命を含む歴史的な遺跡・遺物や歴史そのものについて話し合う。出席者は、上山・小野・河野・島田・林屋・福永の 6 人。

## 私のみた中国医学：奇蹟は真実だった／近藤宏二著

東京 社会保険出版社 1973 (昭和 48) 399 頁 [8950]

著者はラジオ・ドクター、テレビ・ドクターとしても活躍する内科医。医師・針灸師 10 名から成る訪中医学代表団の一員として、1972 (昭和 47) 年 5 月 28 日から 6 月 25 日まで広州・北京・瀋陽・天津・上海の各地を訪れた。本書は 2 部と附録から成る。第 1 部「中国の医学と医療」は、招待者の中日友好協会と中華医学会の手配で各地の医療機関を視察した報告である。代表団の訪れた病院は、広東省人民医院・広州郊外の人民公社の病院・北京医学院第三附属医院・北京工農医院・瀋陽医学院第一医院・天津医院・天津市南海医院・上海第六医院であった。これらの病院における手術や治療の見学と院内の視察から得た知見が、「針麻酔」「断肢再植」「骨折の非手術的治療」「急性腹症の非手術的治療」の 4 章にまとめられている。また、「聾啞の針治療」の章では、広州市聾啞学校と瀋陽市鎮西区聾啞学校での見聞が、「中薬治療の近況」の章では、広州人民中医学院、瀋陽市の中医学院、上海市中医医学院研究所でうけた説明が述べられている。医学教育については、広州市の中医学院と北京医学院を訪れて話を聞き、医療機器についても上海医療機械工場を見学した。以上の記述はいずれも専門家の目で見、耳で聞いたことを具体的な事例をあげて報告したものであるが、最後に「医療制度について」の 1 章をもうけてまとめをしている。

第 2 部「私の中国入門」は、医学関係以外の諸施設訪問と旅の印象を語ったものである。魯迅のこと、郭沫若のこと、北京市東北区革命指導学院のこと、上海少年宮のこと、「毛主席語録」のことなどがまとまった話題であるが、著者を含めて同行者の病気のことにもふれている。

附録には、帰国直後に新聞・雑誌に書いた報告と講演会やラジオでの講演を収録している。

## 中国を知る：探訪アルバム／名古屋テレビ報道部

**東京 青年書館 1973 (昭和 48) 299 頁 [9120]**

本書は、文化大革命下の中国のさまざまなトピックについて、名古屋テレビの記者たちが取材で得た知見に基づき、一般向けに書かれたものである。あわせて記者たちが撮った中国各地の写真を多く掲載している。なお、本書の巻頭には、ジャーナリストの西園寺一晃や、むのたけじが推薦のこたばを寄せている。(吉見崇)

**天の半分をささえる婦人たち：1973 年 3～4 月訪中レポート／日中友好婦人代表团**

**1973 (昭和 48) 87 頁 [9393]**

日中友好婦人代表团は 1973 (昭和 48) 年 3 月 9 日から 4 月 5 日まで広州・北京・南京・蘇州・上海の各地を訪問した。代表团は、各種婦人団体の代表と報道出版関係の仕事にたずさわる婦人たちの一行 16 名であった。訪中期間が 1 ヶ月近くと長かったので見学した施設も多いが、ここに報告されているのは以下のとおりである。

〈農村〉上海と杭州の 2 つの人民公社訪問記。〈家族・暮らし〉北京に住む 2 世帯の労働者家庭の生活、3 人の婦人記者の話、上海の曹楊新村の老人たちのようす、中国人の食生活、燃料事情とゴミ処理の方法、など。〈教育・子ども〉北京の幼稚園、上海の少年宮、清華大学、上海の機械工場の中に設けられている工科大学、南京の小学校と中学校、の見学記。〈労働〉北京のゴム工場と綿紡工場、上海の機械工作工場、蘇州の製糸工場、杭州の錦織工場を訪ね、働く身体障害者のようすと婦人の労働事情を聞いている。このほか、北京婦産院と首都医院を見学し、南京と上海での座談会などを通して知り得た医療保健の事情、食料品の価格・流通についても報告している。

**1974**

**中国の人間革命／池田大作著**

**東京 毎日新聞社 1974 (昭和 49) 259 頁 [9629]**

創価学会会長の最初の訪中記。旅行期間は 1974 (昭和 49) 年 5 月 29 日～6 月 16 日。訪問地は北京・西安・鄭州・上海・杭州・広州。北京では、故宮・万里の長城・定陵博物館・十三陵ダム・少年宮・新華小学校・北京大学・紅星中朝友好人民公社・トランジスタ設備第一工場などを視察し、労働人民文化宮の国際児童節に出席する。西安では、国営西北第四綿紡工場・八路軍西安辦事処紀念館・陝西省博物館、上海では、光明電気メッキ工場・曹楊新村・虹橋人民公社・上海展覽館・少年宮、杭州では錦織工場、広州では農民運動講習所などを見学する。この間、副総理の李先念、中日友好協会副会長の張香山、秘書長の孫平化、中国仏教協会責任者の趙樸初や、北京大学の教師・学生たちと懇談する。

本書は著者が帰国後、新聞・雑誌に発表した印象記・感想文を集めたもので、それを結論して、次のようにいう。「なによりも中国の民衆全員が一人残らず十分食べられるようになっただけでも、中国数千年の歴史になかった革命的なことと言わなければならない。泥棒の心配もなく、忘れ物でもすると飛行機に乗ってまで返しにくる誠実な人民の姿勢へと変転していった事実。——この事実そのものを私はまず直視したい。更にその根底にあるものは、新しい人間の誠意、あるいは一つの『人間革命』とも言うべき信念の道があるように思えてならない」。

## 大寨に学ぶもの：実感的中国レポート／大島清著

東京 御茶の水書房 1974（昭和 49） 283 頁 〔9646〕

著者は法政大学教授であるが、かつて満鉄調査部におり、中国農村経済の調査研究に従事したことがある。本書はその著者が、1973（昭和 48）年の春には約 1 ヶ月、日中農業農民交流訪中団（団長・栗原俊夫）の一員として、1974 年の春には約 10 日、日中農業農民交流協会の八百板正会長とともに、中国を訪問したときの報告である。訪問地は、広州・北京・延安・西安・大寨・上海。

報告は 10 篇に分れる。「新中国への第一歩」は香港から広州についたときの印象を述べ、「人民公社の経済と生活」は西安の烽火生産大隊を、「教育革命と経済学の課題」は北京大学を、「友好第一・競争第二」は上海の第三十一紡績工場を、「中国社会主義建設の原型」は大寨人民公社を、「発酵飼料とハリ麻酔」は北京の南苑人民公社、西安の烽火人民公社、広州の国営農場、上海の龍華医院を、見学して書いたもので、また「中国の青少年たち」は、延安の知識青年と上海の少年宮のことを記している。

以上は 1973 年の訪中報告であるが、1974 年の報告としては、「深く穴を掘り、食糧を貯え」「人民公社の批林批孔運動」の 2 篇がある。前者は北京の地下壕のこと、後者は北京の四季青人民公社、広州の新滘人民公社のこと、これらの公社や北京の市街で見聞した批林批孔運動のことを記す。最後の「中国から何を学ぶか」は 2 回の訪中報告の総まとめともいうべきもので、訪中の体験をふまえながら日本農業と中国農業の異同を考える。

末尾に付録されている 3 篇のうち、最初の「中国農業と農村人民公社」は陳宗烈（農林部農業局副局長）が 1973 年の訪中団の質問に答えるという形でされた報告、「科学的農耕を語る」は陳永貴（中国共産党大寨生産大隊支部書記）の論文、「前進する大寨人民公社」は中国共産党の大寨人民公社委員会・昔陽県委員会・晋中地方委員会の連合調査班および山西人民放送局・『山西日報』の記者によって書かれた『大寨步步高』（1972 年、山西人民出版社）の翻訳である。

## 中国の人とところ：中国回想旅行／鹿島宗二郎著

東京 古今書院 1974（昭和 49） 216 頁 〔9410〕

著者は、1936（昭和 11）年から敗戦後帰国するまで 10 余年間中国で暮し、日中戦争中は上海申報社の論説委員をつとめていた。戦後もこれまでに現代中国に関する数点の著作を公刊するなど、中国にかかわり続けてきた。そして、中共支配下の中国人が現在の政治に満足しているかどうか、またかつての中国がどう変ったか、を見たいと思い、1965（昭和 40）年 8 月 21 日から 9 月 2 日まで日中平和観光旅行社の募集した観光団に加わって中国を旅行した。旅程は、広州－杭州－上海－北京－広州であった。

著者は、どこの街も清潔になったことに感心し、かつて上海に多かった浮浪児と売春婦がいなくなったことは中共の功績であると評価する。しかし一面では、工場の林立する工業都市に変容した杭州の町、夜はうす暗く人通りも少い上海の中心街、かつての猥雑さを失った「北京の浅草」ともいふべき天橋などに、一抹のさびしさを感じているようでもある。また、北京滞在中のある夜行った清華園浴池（トルコ風呂）に中国の伝統的な風俗がそのまま残っていて、入浴を楽しみつつ不思議がっている。しかし全般的には著者の観察は批判的である。上海の申新紡績工場を訪れた時、今は経営のパートナーである元資本家が「党代表らしい人のほうを

気にしながら」話すのに皮肉な質問をしたり、広州の農民運動講習所の説明員の話に反論したりしている。また、北京で雇った三輪車の車夫が人目のない所ではチップを受取ることや、旧友と一緒にいった一膳めし屋にかつての賑やかな談笑がなかったことから、人々の生活がある種の「監視」下にあると考えている。広州の和平中阿友好人民公社では話には出たが実際には農業機械を見せてもらえず、旅行中見かけたのは原始的な農具であり、象牙細工の工場でも設備が時代遅れであったとも指摘している。政策上のことで著者が評価するのは、広州の自由市場に食料品が豊富に出ていたことで、1962 年頃の大飢饉からの回復ぶりに驚いている。また、上記の人民公社の養豚場や養鴨場には設備の大きさにもかかわらず豚やあひるが少ししかいなかったことから、多くは自留地で飼われているのだらうと推測している。

以上のような見聞と感想に加えて、本書には、著者が香港の難民から聞いた話や、個人の利益と公共の利益に関して『中国青年』誌上でやりとりされた意見を紹介して、1960 年前後の中国事情を語っている。さらに帰途の香港の様子も述べながら、著者は、現在の中国が「これまでの政権のなかで一番能率的に国民生活を改善しつつあるすばらしい国家ではあるが、……〈言論の自由〉を経験した人々には、ながく生活することのできない」国である、と結論を出している。

#### 中国の旅：木村伊兵衛写真集／木村伊兵衛著

東京 朝日新聞社 1974 (昭和 49) 図 192 頁, 27 頁 [9570]

日本を代表する写真家木村伊兵衛の中国を題材にした写真集である。木村は戦後、5 回中国を訪問したが、本写真集には 1963 年の初訪問から最後の訪問にあたる 1973 年までに撮影された写真が収められている。1963 年の訪問では、写真家代表団の一員として渡辺義雄・芳賀日出男らと約 3 週間にわたり各地を巡った。翌年 1964 年には慶祝国慶 15 周年日中文化交流協会代表団の一員として、1965 年には第 2 回写真家代表団の団長として、1971 年には慶祝国慶 22 周年日中文化交流協会代表団の一員として、1973 年には日中友好撮影訪中国の団長として訪中した。木村が主に撮影したのは、「中国の人々の生活や顔」であり、1973 年の訪中時には、廖承志から「たとえ工作人員がまずいというようなところでも遠慮なしに写して、日本人々に真実の姿を伝えて欲しい」という言葉を受け取っている。写真集には、路上の木を伐採する様子、市場で女性が働く様子、人々が木陰に腰掛け休息する姿など、人々の日々の情景が収められている。

(山口早苗)

#### 満洲昭和十五年：桑原甲子雄写真集／桑原甲子雄著

東京 晶文社 1974 (昭和 49) 221 頁 [9653]

著者は 1940 (昭和 15) 年、満鉄弘報課の招待をうけて、浜谷浩ら 5, 6 人の写真家と「満洲」撮影の旅に出る。旅行期間は 6 月 2 日～28 日、訪問地は奉天・新京・吉林・ハルピン・松花江・佳木斯・牡丹江・寧安・撫順・大連・旅順。

本書はこのとき著者が撮影した写真を集めたもの。164 枚の写真がどういうものかは、著者が「あとがき」の中で、「私が満洲で見たのは、中国人の大群衆であり、ハルビンやロマノフカで見た西欧的な白系露人たちであり、広闊な大自然の風景であった。そして開拓地にある日本人の悲しい生きる手だてだった」といっていることで明かであろう。なお写真のあとに、春名徹の書いた『あの夕陽——「満洲」小史』と著者の『「満洲」旅行のあとさき』が付録され

ている。

### 農民哲学の中国を行く／近藤康男著

東京 農村統計協会 1974 (昭和 49) 293 頁 (農林統計叢書 2) [9619]

著者は 1973 (昭和 48) 年 3 月から 4 月にかけて、日本中国農業農民交流協会代表第 2 回訪中団 (団長は全日農の栗原俊夫、総員 14 名) の一員として、北京・延安・西安・大寨・北京・上海とまわる。

本書はこのときの旅行報告で、全体が経済・哲学・教育の 3 章から成る。経済の章では、16 年振りに中国を訪れて、自動車の数、デパートや地下鉄の出現、琉璃廠のさびれ方に今昔の差を感じ、また中国が農業を基礎として工業を導き手とし、地域経済の自立性がはかられていることに注意する。ついで北京大学マルクス主義研究室において、中国側から李克剛 (経済)・施德福 (哲学)・方連慶 (国際政治)、日本側から大島清・一楽照雄と著者が出て、マルクス主義研究者がどんな姿勢でどんな課題にとりくんでいるか、人民公社で収穫物の配分をどうすることが一番いいか、労働者と農民の間、地域の間にある収益格差はどういう順序でなくすことができるか、などについて話しあい、中国において、現実問題に解決を与える鍵を求めてマルクス・レーニン主義の基礎文献が研究されていることを知る。さらに人民公社における生産関係に注目しながら、北京市南苑人民公社を視察し、西北畑作地帯の人民公社として、西安郊外の烽火人民公社を訪れ、社会主義商品流通組織の能率性を、上海市と彭浦人民公社との野菜供給契約、三角地菜場 (生鮮食品市場) の中に見る。

哲学の章では、人工平原をつくり出した大寨生産隊の精神に驚き、「農業は大寨に学ぶ」の実践を昔陽の李家荘人民公社石坪生産大隊に見、「友誼第一、競争第二」の実践を、上海第三十一紡績工場に見る。また中国が公害問題を「変廢為宝」、すなわち廃物利用で解決しようとしていることを、北京ビニロン工場の汚水処理、上海燎原化工廠の三廢処理で知る。また広東省順徳県の靚流人民公社では、養蚕と養魚とをうまくくみあわせているのに感心する。

教育の章では、知識青年の下放が、かれらの思想改造とともに、おくれた地域の思想改造も考えられているのではないかと、延安に来ている 4 人の知識青年に会って感じ、五七幹部学校や北京大学を視察して、新しい中国における教育革命を知り、広州の農民運動講習所、延安の歴史博物館、西安の陝西省博物館や大寨展覧会に、歴史をつくったのは英雄ではなく大衆であるという自覚を促す政治教育の実際を見る。

### 中国を歩き日本を考える／佐藤藤三郎著

東京 筑摩書房 1974 (昭和 49) 219 頁 [9414]

著者は、日本農村活動家訪中団 (団長・菅沼正久) の一員として、1972 (昭和 47) 年 11 月下旬から 1 ヶ月間中国を訪れた。広州・上海・韶山・武漢・北京・大寨をまわって、各地で人民公社、工場、学校、病院など各種の施設や組織を見学した。本書はその際の見聞と著者の感想を綴ったものである。

山形県の山村で農業に従事する著者の報告は、おのずと農業に関してもっとも詳しい。「農業を基礎として工業を導き手とする」という方針の下で、たとえば人民公社における農機具生産にみられるように、国民の一人一人が自力更生の精神で生き生きと働いている姿に感動しつつ、著者は、稲作、畜産、果樹・野菜栽培や人民公社の組織などにわたって、中国の農業事情

を紹介している。同時に、稲作における品種改良の必要性、機械化が進んだ場合に起こってくる生産拡大か労働時間の短縮かの問題に解答のないこと、など疑問を感じた問題点も卒直に提起している。

工業に関しては、著者は素人であると断って、鉄鋼、ディーゼルエンジン、食品の工場でうけた説明をそのまま報告している。教育関係では、農民運動講習所、大学、中学、幼稚園、五・七幹部学校と、社会教育と学校教育との両面にわたって、文化大革命で始められた新制度下の状況を述べている。著者がもっとも感激したのは少年宮を訪れた時で、礼儀正しくかつしっかりした子供たちに心を奪われた著者の気持が伝わってくるような記述である。このほか、風邪と下痢で診察をうけた著者の経験も含めての医療のこと、芸術や人々の余暇についてもふれている。

本書の特徴は、見聞した事柄について中国の状況と比べつつ日本の状況をもふりかえっていること、中国の長所と短所について感じたままを綴っていること、そして訪中国内部の意見の対立についても語っていることであり、さらに、これらを通して主体性を失わない著者自身をもさらけ出していることである。

#### 子々孫々世々代々／第一次北海道学生訪中国

1974（昭和49） 79頁 〔9583〕

第一次北海道学生訪中国は新井田裕（北海道学園大学工学部）以下10名。旅行期間は1972（昭和47）年12月20日～1973年1月13日。訪問地は広州・長沙・韶山・株州・杭州・上海・北京。本書には次のような施設の見学記がある。〔広州〕中山医学院・聾啞学校、〔長沙〕湖南大学、〔杭州〕絹織物工場・紅山人民公社、〔上海〕少年宮・工作機械工場・七二一労働者大学・烽火木箱工場・燎原化学工場・鳳城工人新村、〔北京〕北京大学・第二十六中学校・五七幹部学校・中国アルバニア友好人民公社および庄焦戸（北京郊外にある小さな農村、その歴史）。このほか団員6人の座談会記録、北京でおこなった張香山（中日友好協会副会長）の談話抄録がある。

#### 北京留学生の中国東北の旅：報告文集／北京語言学院第一期留学生

北京 1974（昭和49） 64頁 〔10289〕

日中友好協会（正統）が北京語言学院に派遣した第一期留学生の東北旅行記。旅行期間は1974（昭和49）年7月24日～8月9日。訪問地は瀋陽・鞍山・大慶・ハルビン・長春・吉林。瀋陽では重型機械工場・変圧器工場、鞍山では湯崗子温泉療養院・鋼管工場・鞍鋼大孤山鉄山、大慶では油田、ハルビンでは防洪勝利記念塔・亜麻紡績工場・工芸美術工場・新発人民公社、長春では第一自動車工場とその労働者の家庭、時計工場・トランジスター工場・長春映画製作所、吉林では油脂工場・龍深山鹿飼育場などを見学する。

本書はその旅行報告集。はじめに参観地の説明があり、ついで各人が訪問先についての見学記、感想文を書く。

#### 中国の旅／労働者教職員訪中国

東京 基層の会 63頁 〔10538〕

労働者教職員訪中国の訪中報告書。一行は名越礼子（大学職員）団長以下20名、中には中



学・高校・大学の教職員が多く、そのほか工員・会社員・記者・カメラマンを含む。旅行期間は1974（昭和49）年8月2日～8月17日。訪問地は広州・北京・天津・上海。教育機関では、北京師範学院・天津河東第一中心小学校・上海第六中学校、工場では、北京の外文出版印刷工場、上海の光明電気メッキ工場・電気機械工場・彭浦新村、人民公社では、北京郊外の中羅友好人民公社、広州郊外の羅崗人民公社、そのほかの施設としては、北京の地下壕、天津の財貿五七幹部学校・養老院・重光金属工場（盲人主体）、上海図書館などを参観する。

本書はこの訪中記録で、上記の諸施設・諸機関で見聞したところを基に、教育・工業・人民公社・労働条件などを語るほか、中国における婦人の活躍、天津市婦女聯合会、3人の婦人労働者の話、日本軍の残虐行為に関する中国人の証言、それにも拘らず日本との連帯を求める中国人について記す。

## 1975

### 新中国への旅：革命社会の暮らしを訪ねて／宇治敏彦著

東京 平河出版社 1975（昭和50） 285頁〔9750〕

著者は、『中日新聞』『東京新聞』の記者。自民党日中国交正常化協議会の訪中代表団に随行して、1972（昭和47）年9月14日から20日まで中国を訪れ、さらに1974年には、自民党の大平派訪中団に同行して9月2日から20日まで、北京・上海・西安・杭州・広州・桂林などを見てまわった。そして、日中間の友好関係をいっそう発展させるには、中国人民の日常生活と考え方を日本人が理解することが必要であると考え、そうした視点から、第2回目の訪中での見聞を主に、第1回目の際のエピソードをも織りまぜつつまとめたのが、本書である。

中国人民の日常生活ぶりを示すために著者がとりあげた話題は、衣食住のこと、恋愛と結婚、生活のなかの楽しみや、各地の町中で目にふれたさまざまな事柄などである。衣食住については、北京の市場や食堂の様子、上海の労働者から聞き出した毎月の生活費、北京郊外の人民公社でみた農民の生活、百貨店の買物風景、各地の工場の賃金制度と労働時間のことなどを語っている。恋愛と結婚に関しては、通訳の人々から聞き出した話を伝え、中国人の楽しみにしていることとしては、家族づれで公園に出かけることや、記念写真をとりたがること、労働を終えた人々がいっぱい上海の飲み屋の様子、観劇などにふれている。このほか、自転車をもつ交通事情や、「ハデ」といわれる上海の街、衛生思想の徹底した喫茶店やホテルの様子も語っている。

また、中国人の思想に関連して、各地で見た大字報から「自由」について考え、北京の地下壕を見学して中国の国際情勢観について考えを述べている。さらに、かつて紅衛兵だった通訳の話や、上海の少年宮で見た政治教育などを通して、政治に密着して育つ子供たちのことにもふれている。

なお、最後に、2回の訪中にいたる経過と著者の日中問題についての立場を明らかにした章が附されている。

### 訪中三たび：池田会長とともに／大原照久著

東京 第三文明社 1975（昭和50） 225頁〔9959〕

著者は『聖教新聞』の記者で、池田大作創価学会会長にしたがって3回中国を訪問する。第

1 回は 1974（昭和 49）年 5 月 30 日から 6 月 15 日まで、東京から香港・広州を経て、北京・上海・西安・鄭州・広州などの都市を訪問する。第 2 回は、会長が北京大学に寄贈した 5,000 冊の日本語書籍の贈呈式に招かれ、空路、上海を経て北京に赴き、12 月 2 日から 6 日まで滞在する。第 3 回は 1975 年 4 月 14 日から 4 月 22 日まで、北京・武漢・上海を訪れる。

本書は、池田会長の思想と行動とを、会長に随行した訪中の記録を中心に書いたもので、3 分の 2 は会長の主張や信念を述べる。訪中記においても、周恩来総理・鄧小平副総理・張香山中日友好協会副会長・孫平化中日友好協会秘書長など、中国要人との会見、交歓に関する記事が多い。また会長の関心が人間教育に深いところから、見学箇所も教育施設が主で、その視察や、教育者・学生との対談に関する記事が豊富である。

#### **訪中記／京浜労働者訪中団**

**東京 1975（昭和 50） 92 頁 〔10162〕**

京浜労働者訪中団の訪中報告。一行は永田信行（技術者）団長以下 15 名。旅行期間は 1974（昭和 49）年 9 月 15 日～10 月 2 日。経路は東京－香港－広州－長沙－韶山－株州－上海－北京－上海－東京。

本書には、広州での文化公園・第七中学校、上海での電機工場・控江新村・少年宮・工業展覽館、北京での人民英雄紀念碑・故宮・南苑人民公社・電気部品工場の参観報告があり、また建国 25 周年を祝う国慶節、控江新村で訪れた幸せな老夫妻、医療のこと、婦人のこと、韶山訪問記をかねた毛沢東の青年時代のことなども記されている。このほか団員全員がそれぞれ 1 篇の感想文を書いている。

#### **中国・ニイハオの旅／日中友好協会（正統）北海道本部**

**札幌 1975（昭和 50） 215 頁 〔10285〕**

北海道労働者訪中団の訪中記録。執筆は合田一道（北海道新聞記者）。一行は五十嵐泰（王子製紙労働組合苫小牧支部組合員）団長以下 17 名。旅行期間は 1975（昭和 50）年 7 月 15 日～8 月 1 日。訪問地は長春・吉林・鞍山・撫順・瀋陽・北京。

本書は全体で 6 章から成る。第 1 章では、飛行機で北京について得た中国の第一印象を述べ、第 2 章では、訪問地の市街、働く婦人や、見学した瀋陽の吉林大学、吉林師範付属中学、長春第一自動車工場・付属第一小学校・託児所・労働者アパート、吉林の泥塑収租院展覽館、鞍山の鞍鋼製鉄所、瀋陽の高花人民公社、北京の五七幹部学校・大柵欄地下壕などから感ずる新生中国の息吹きを記す。第 3 章では、庶民の衣・食・住の生活、物価・税金・賃金・貯金のこと、第 4 章では、飲み屋、アイスキャンディー、太極拳、雑技、映画、入場料、北京の観光ルートなど、庶民の趣味・娯楽のことを述べ、第 5 章では、恋愛・結婚・老後のことを記す。第 6 章では、しばしば利用した鉄道、見学した吉林の豊満ダム、瀋陽の大型工作機械工場・老瓜堡子小学校・瀋陽医学院、鞍山の鞍鋼製鉄所、撫順の露天掘り・平頂山殉難同胞遺骨館から、日本侵略のあとをかえりみる。

#### **女 16 人中国の旅／日中友好第 2 次婦人代表団**

**東京 1975（昭和 50） 72 頁 〔10290〕**

日中友好第 2 次婦人代表団の訪中報告。一行は、団長の小林時枝（日本婦人有権者同盟組織

部長) 以下 16 名。期間は、1974 (昭和 49) 年 2 月 25 日～3 月 17 日。経路は、東京－香港－広州－北京－南京－無錫－上海－広州－香港－東京。

本書は 6 部にわかれる。〈婦人〉では、訪中の見聞をまとめて、働く中国の婦人、婦人解放、家族計画などを記し、〈暮らし〉では、北京の西単菜市場、無錫の河埭人民公社生産大隊などの視察をもとに、人民の生活、家庭、物価を述べる。また〈教育〉では、学校生活、教育革命、南京市師範学院、北京中央民族学院、広州市第 4 五・七幹部学校、〈子ども〉では、北京市第五幼稚園、上海市少年宮、〈医療〉では、北京市児童病院、無錫市太湖労働者療養病院の見学をもとに、人民のための医療、ハリ、はだしの医者、労働者病院のことを記す。そのほか〈こぼればなし〉として、美容院、民族衣装、雑技などのことを述べる。

#### 出版人のみた現代中国／日本“出版・書店”友好訪中団

東京 日本中国出版友好交流懇話会 1975 (昭和 50) 50 頁 [10280]

1973 年、日本の出版社・取次店・書店 52 社は、日本・中国間の出版文化交流を通じ両国間の友好親善を促進するため、日本中国出版友好交流懇話会を組織した。本書は、この懇話会がその事業の一つとして中国に派遣した第 1 回日本“出版・書店”友好訪中団の報告書。一行は杉浦俊介 (日本出版販売) 団長以下 17 名。旅行期間は 1974 (昭和 49) 年 7 月 30 日～8 月 13 日。滞在地は上海・南京・揚州・西安・広州。普通の訪中団と同じように、上海では少年宮・魯迅紀念館・天山工人新村・長征人民公社・龍華書院【医院】、南京では歴史博物館・太平天国博物館、揚州では玉器庁・漆器庁、西安では陝西師範大学・博物館・第二十二中学校、広州では農民運動講習所などを訪れるほか、上海南京路新華書店・上海書画社・上海人民出版社・江蘇省新華書店・南京外文書店・西安人民出版社・西安外文書店など珍しい箇所を訪れている。

本書には大山茂 (満江紅) 「新中国の出版・発行事業について」、平賀忠夫 (雄鶏社) 「上海人民出版社について」のほか、各団員がそれぞれ感想文を書いている。

#### 批林批孔下の中国を訪ねて：1974・夏／日本ジャーナリスト友好訪中代表団

東京 日本ジャーナリスト同盟 1975 (昭和 50) 78 頁 [10002]

日本ジャーナリスト同盟の関係者 6 名と読売・共同など新聞・通信社からの 5 名は、日本ジャーナリスト訪中代表団として中国の首都新聞界の招待をうけて、1974 (昭和 49) 年 5 月 30 日から 6 月 26 日まで中国を訪れた。一行は 4 人の新華社社員の同行を得て、北京・大慶・ハルビン・大寨・太原・延安・西安・洛陽・鄭州・長沙・上海・広州の各地をまわり、工場・人民公社・教育施設・革命史跡などを訪問した。本書は、以下のような各団員の報告集である。

甲斐静馬「訪中報告」——団長として旅の全般にわたって。佐藤重雄「国際情勢をどのように把握するか」——訪中団との会見の席で語った鄧小平副総理の発言に基いて、「三つの世界論」について述べる。菅栄一「みてきた批林批孔運動」——批林批孔をおこなう理由と工場などの現場で聞いた林彪路線に対する批判を記す。飯岡邦輔「社会主義をおしすすめる中国人民」——批林批孔のこと、ソ連修正主義のこと。横井雄一「新しい飛躍にわき立つ大慶」——大慶油田での見聞。山下龍三「食糧大豊作の根底にあるもの」——水稻は北方でも栽培でき、小麦は南方でも栽培できるようになった農業事情について記す。角田栄一「思想の革命化」——西安市南泥湾五・七幹部学校訪問記。最後の 4 篇 (刀根浩一郎・林雄一郎・景山真次・金重紘) は雑感を綴る。

### 新中国考古の旅／宮川寅雄著

東京 秋田書店 1975（昭和 50） 254 頁 〔9819〕

本書は 1974 年 7 月 30 日から 8 月 19 日に訪中した日本考古学者代表团による記録である。この代表团は和光大学教授であった宮川寅雄ほか考古学者や美術史研究家計 8 名で構成され、招聘に当たったのは中国科学院考古研究所であった。代表团は北京に入ったのち、河南省に移動し、安陽・鄭州・洛陽の古跡を見学後、西安、上海、杭州を巡り、最終的に広州から日本へと帰国した。本書は代表团団長であった宮川が編者となり、参加したメンバーがそれぞれ感想を寄せる形で構成されている。

考古学研究者らによる訪問であったため、主要な見学先は河南省や洛陽など各地域の博物館のほか、龍門石窟や馬王堆遺跡などの遺跡であった。特に馬王堆遺跡は訪問前年に二号墓の発掘作業が開始されたばかりで、参加者らの目を引いたようだ。訪中した 1974 年は文化大革命の最中であり、代表团は故宮博物院などでこの文革期間中に発掘された文物を見学した。またこうした遺跡や文化財の調査と別個に、人民公社や工場なども参観ルートに組み込まれており、労働者から直接、批林批孔の実践について話を聞く機会が設けられた。（山口早苗）

### 中国美術紀行／宮川寅雄著

東京 講談社 1975（昭和 50） 374 頁 〔9825〕

本書は美術史家で日中文化交流協会でも活躍した宮川寅雄の中国訪問時に記した論考・紀行・随筆を採録した著作である。戦後、宮川は 1962 年ごろから断続的に 13 回中国を訪問したが、1974 年の訪問時の記録が『新中国考古の旅』（秋田書店、1975 年）である。本書には、著者の専門である美術史や考古学に関する論考が多く収録され、特に当時の中国考古学について、「考古学という学問の現実的、政治的意義の、中国でのとらえ方は、この国のすべてに通ずるもので、われわれにとっても、これを体制のちがいとして彼岸視することでは済されぬものがある」としてその貢献を重視している。このほか、鑑真と唐招提寺について、中国の考古学者である王冶秋、夏鼐との交流について、魯迅や毛沢東についてなど、さまざまなテーマで執筆されたエッセイが並ぶ。（山口早苗）

### 中国の街角に立つ／民間中国語学習者訪中団

東京 1975（昭和 50） 104 頁 〔9798〕

民間中国語学習者訪中団の訪中報告書。一行は合田栄子（大泉中国語教室）団長以下 35 名。旅行期間は 1974（昭和 49）年 10 月 30 日～11 月 13 日。訪問地は北京・南京・上海。北京では、万里の長城・故宮・北京大学・北京師範大学付属第二中学・首都鋼鉄公司・印染工場を見学し、北京放送局・人民中国・北京週報・外文出版社の人々と座談会をもつ。南京では、南京師範学院・成賢街小学校・江蘇省工人医院・化纖工場、上海では、盲人・ろうあ者を主体とする上海儀器零件工場、婦人を主体とする烽火半導体器件工場、燎原化学工場、控工工人新村、松江县城東人民公社、魯迅の旧居などを見学し、バレエ劇「沂蒙頌」を観賞し、帰国直前には日本語を学習している人々との交流会をもつ。

本書は団員それぞれが書いた感想文、印象記を集める。上記のような視察した機関・施設を見聞き感じたところを書いているが、団の性質から当然ながら、中国語に関する記事が目立つ。

町の空気や家庭生活，婦人労働のことを記すものも比較的多い。

### 訪中日本青年社員連合会見聞記

1975（昭和 50） 79 頁 〔10733〕

訪中日本青年社員連合会の訪中報告。但しこれがどういう団体か明かでない。執筆者も参加した T-335 氏とあるだけで不明。旅行期間は 1975（昭和 50）年 2 月 19 日～3 月 5 日。訪問地は北京・西安・洛陽・鄭州・上海。北京の首都鋼鉄公司石景山廠区，洛陽の東方紅トラクター製造廠・ボールベアリング廠，鄭州の第三国営綿紡廠，上海の工業展覽館・塘湾人民公社・天山新村・中華印刷廠に関する記述が比較的くわしい。

## 1976

### 大瀧村と中国／秋田県八郎瀧入植農民友好訪中団

秋田県南秋田郡大瀧村 1976（昭和 51） 72 頁 〔10095〕

秋田県八郎瀧入植農民友好訪中団の報告記。一行は団長の小沢健二（第 1 次入植者）以下 20 名。期間は 1975（昭和 50）年 8 月 11 日～8 月 26 日。経路は東京－北京－大寨－石家荘－鄭州－上海－東京。人民公社に対する関心が強く，その見学は 7 ヶ所に及んでいる。

本書は，はじめに旅行の概要を述べるほか，訪問した諸施設のうち，北京郊外の紅星人民公社，大寨の生産大隊，石家荘の海河展覽館と白求恩国際平和病院，上海の静安第一小学校，石家荘の人民公社小学校について特に記している。

### 中国農村の素顔／関西農民友好訪中団

東京 富民協会 1976（昭和 51） 250 頁 〔10039〕

日本中国農業農民交流大阪府協会が結成されたのを機会に，近畿各府県の農業関係者から成る訪中団が，中国の農業事情視察に派遣された。一行は，1975（昭和 50）年 9 月 8 日から 23 日まで上海・西安・大寨・北京の各地をまわり，人民公社のほか，工場や学校，病院などを見学し，さらに名勝旧蹟もいくつか見物した。本書は，その視察記録であるが，各章は見聞した事実の記録を軸として，これに団員個々の感想や意見を附すという構成をとっている。内容上からいえば，報告の半分が農業事情にあてられ，加えて，巻頭に中国農学会理事・欧維中の講演，巻末に同学会との質疑応答が掲載されている。

一行は，大寨人民公社の大寨，南塢生産大隊，これに隣接する李家荘人民公社の石坪生産大隊，および上海近郊の黄渡人民公社と北京近郊の四季青人民公社を訪れ，大寨の段々畑，石坪の水道，黄渡の多角経営，四季青の野菜栽培といった各地の特徴ある農業を報告している。そして，これら人民公社や生産大隊における農作物の種類，作付け状況，農民の個人収入，住宅などにもふれて，報告はきわめて具体的である。さらに，三級所有制，治山治水事業，農業技術，食糧増産といった全般的な問題についても，見聞した事例をまじえてまとめている。

後半では，都市と農村の格差の問題，医療と老人問題，教育問題，反面教師の教材としての文化遺産，思想教育の場としての文化活動と芸術，婦人問題について，それぞれ章を分けて説明している。

なお，本書には多数のスナップ写真が挿入されており，とくに農機具や田畑，農村風景がよ

く紹介されている。

#### 長安から北京へ／司馬遼太郎著

東京 中央公論社 1976（昭和 51） 293 頁 〔10077〕

著者は、井上靖を団長とする日本作家代表団の一員として、1975（昭和 50）年 5 月 8 日から 27 日まで中国各地を旅行した。同行した他のメンバーは、戸川幸夫・水上勉・庄野潤三・小田切進・福田宏年らで、訪問地は、北京・上海・無錫・西安・洛陽・延安などであった。

本書の特色は、著者が各所での見聞を伝えるだけでなく、その時々を考えたり感じたりしたことを多く語っていることで、著者は、さまざまな場面で中国の歴史をふりかえり、あわせて同時代の日本の歴史を思い浮べ、それらを通して現在の中国を理解しようとしている。したがって、旅程に沿った記述はなされておらず、著者がおもにとりあげているのは、北京では万暦帝の墓（定陵）・中央民族学院・北京大学・北京図書館を、上海では少年宮を訪れた時のことであり、また西安の驪山・華清池、洛陽の隋唐時代の穀物倉庫（窖）、延安の毛沢東の旧居と革命記念館などを見学した時のことである。

著者は、万暦帝の墓の豪華さに驚きあきれつつ、死後の世界を具体的に考えた中国の墳墓思想の伝統について考えている。また、延安では洞窟の住居（窑房）に関心を寄せたり、長征に思いを馳せて中国に着いた日に会った廖承志のことを語っている。洛陽の穀物倉庫見学から著者が考えたことは、首都長安に対する副首都洛陽の役割が長安への食糧補給地であったということで、同地の博物館の立派な陳列品に触発されて語っているのは、古代の鉄のことである。北京図書館では、稀覯本が収蔵されている地下書庫に案内され四庫全書を見せられて、その編纂から現在に至るそれらの書物の運命を述べるとともに、「伝国の書物」の保存によせる中国人の熱意にもふれている。

現在の中国に関しては、拙速主義をとらない工業化政策と国防の問題、批孔と儒教のこと、少数民族政策のことなどについて考えを述べている。著者は、江南の河川に浮ぶ舟がエンジンを使用していないことや、自転車と馬車が有効な交通手段であることをみて、また北京の地下壕と上海の少年宮での射撃遊戯を見学して、中国の政府が工業化とそれに基く軍事力の増強に拙速主義をとっていないことを実感し、その理由は「人民に食べさせること」が全政策の根幹になっているからだと論じる。ついで儒教について考えており、儒教は中国人の皮膚の一部になっていたのであるからこれを剥ぐことは容易でなく、著者が上海の少年宮で孔丘の首を撃つゲームを見て感じた物凄さも、その困難な作業の故であろうと理解する。同時にその教育方法の具体性に驚き、西安の捉蔣亭での係員の説明にも同様の感想を抱いて、人民に対する原理の教育が徹底していると指摘している。しかし儒教の礼は、たとえば訪中団員に対する序列に従った待遇などに秩序感覚のリズムとして残っている、という。ともかく、公私にわたる原理であった儒教が否定されて、これに代るものとして人々は「毛沢東語録」を唱和しているのだ、とみている。少数民族については、北京－上海間の列車内でウイグル族の音楽が流れ続けていたこと、上海の保育園で漢族の子供たちが朝鮮族の衣装で踊っていたこと、延安で観たモンゴル人の踊り、中央民族学院訪問などから、少数民族に対する配慮が相当なものだと感じている。以上のような現在の問題を語るについても、著者はたえず過去にさかのぼって歴史的に考えており、こうした点から本書は、紀行と歴史随想を織りまぜた書であるといえよう。

## 中国：その思想と現実／全国電気通信労働組合友好訪中団

東京 1976（昭和 51） 108 頁 〔10277〕

労働組合友好訪中団の報告書。一行は及川一夫（中央執行委員長）団長以下 15 名。旅行期間は 1976（昭和 51）年 3 月 11 日～3 月 23 日。訪問地は北京・南京・無錫・上海。

本書ははじめに訪中の目的、中国電気通信労働者との交流、および韓西雅（中国共産党対外連絡部関係方面責任者）の国際情勢に関する談話、これに対する日本側の質疑が載せられる。ついで清華大学、五・七幹部学校、七・二一労働大学、上海郊外の彭浦人民公社、無錫の太湖工人療養院、上海の第一医学院中山病院などの見学記を中心に、教育革命、人民公社、医療のことを記す。最後には 13 人の団員がそれぞれ訪中の感想を述べている。

## 中国を訪ねて／高野勇一著

東京 1976（昭和 51） 36 頁 〔10283〕

著者は渋谷区民訪中代表団 29 名の一員として、1976 年 5 月 4 日から 5 月 18 日まで中国を訪問する。羽田から上海を経て北京に飛び、北京およびその周辺を見学し、天津・済南・上海を経て帰国する。天津およびその周辺では、大港油田・天津市退職者養老院、済南では、自動車製造工場・済南第三十中学校・解放映画劇場・山東省人民医院・済南市少年宮などを訪れる。本書はその旅行記。

## 百聞百読は一見にしかず／第一次中国三誌読者友好の翼代表団

1976（昭和 51） 36 頁 〔10278〕

安井正幸を団長とする第 1 回の「中国三誌（人民中国・北京週報・中国画報）読者友好の翼」代表団の訪中報告。旅行期間は 1976（昭和 51）年 3 月 22 日～4 月 2 日。訪問地は上海・南京・北京。

本書には、訪中の日程、張香山（中日友好協会副会長）の談話、各地で接待された中国人の姓名・所属機関名、団員 43 人のきわめて簡単な感想文がおさめられている。

## 自力更生の中国：一衣帯水の新中国を見る／第一次東京都教育界友好訪中団

1976（昭和 51） 137 頁 〔10096〕

日中友好協会（正統）東京都本部派遣の第一次東京都教育界友好訪中団の訪中報告書。一行は伊藤昇（東京都教育委員）団長以下 30 名。団員の中には、現場の教師（小学校から大学まで）あり、教育管理者あり、教育研究家あり、年齢的にも 24 歳から 68 歳までのものを含み、なかなかバラエティに富んでいる。旅行期間は 1976（昭和 51）年 7 月 26 日～8 月 9 日。訪問地は上海・鄭州・新郷・洛陽・西安・北京。主な見学先は、〔上海〕工作機械工場・七・二一工人大学・長楽路第三小学校・鳳城新村・華山病院・少年宮・魯迅記念館、〔鄭州〕黄河邙山揚水站、〔新郷〕七里営人民公社・愚公泉灌区、〔洛陽〕龍門石窟・回郭鎮人民公社・労働者文化宮、〔西安〕交通大学・戸県農民画展示館、〔北京〕労働者文化宮など。

本書はこれらの見学記を、教育、農業・工業、建設・生活、文芸・歴史の部門に分類集録する。見学記のほか、交通大学、西安市第三十・二十二中学、回郭鎮人民公社の教師との教育懇談会の記事も含まれている。このほか団員のうち 28 人が 36 篇の感想文を書いている。

**中国への翼：“接班人を育てる”——教育革命に学ぶ／第一次日中友好教職員の翼実行委員会  
東京 日本中国友好協会（正統）東京都本部 1976（昭和 51） 87 頁 〔10230〕**

日本中国友好協会（正統）東京都本部と教育事情研究会の共同事業として中国に派遣された「第一次日中友好教職員の翼」の訪中記録。一行は柘植条次郎（日中友好協会〔正統〕東京都本部副会長）団長以下 133 名。旅行期間は 1976（昭和 51）年 3 月 23 日～4 月 1 日。訪問地は北京・天津・上海。

本書は都市別に各施設の参観記を載せる。その参観施設は次の通り。

〔北京〕北京大学・清華大学・中央民族学院・大柵欄地下壕・故宮・歴史博物館・十三陵、〔天津〕第四十二中学校・河東区第一中心小学校・南開中学校・東方紅中学校・和平区鞍山道小学校・第二中学校・第十六中学校・大港油田、〔上海〕虹橋人民公社・体育館・上海少年宮・第九化学纖維工場・虹口区街道（労働者住宅街）・華山医院・魯迅の墓・上海市虹口区聾哑学校。

**日本科学技術訪中代表団工場・公社等参観記録：1976.6.8～6.29／日中経済協会編  
出版地不明 日中経済協会 1976（昭和 51） 59 頁 〔10944〕**

近藤次郎（東京大学工学部長）ほか各界の専門家 9 名で構成された日本科学技術訪中代表団が、1976 年 6 月 8 日から 6 月 29 日まで、中国の工場や人民公社などを視察した。本書はその参観記録の一部を抜粋したものであり、通産省通商政策局北アジア課の「中国経済関係調査」の参考資料として作成されたものでもある。項目は「工業関係」「農業関係」「教育関係」に分けられ、各項目の主要な機関の歴史と現状がコンパクトに紹介されている。とりわけ、1949 年前後の状況を記す記述が興味深い。たとえば、「教育関係」の清華大学の欄には次のような記述がある。「解放前の大学は英米の教育制度をとっていたが、劉少奇はソ連の制度をそのままとり入れたのである。1953 年以前、制度、教材、試験科目等は英米のものであったが、53 年に新しく採用したものは、教材、試験制度、教育計画等すべてソ連そのままのものであった。だが、その本質は以前のもと同じであった。それは、プロレタリアの政治から離れ、工農兵大衆から離れ、実際の生産労働から離れた、三離脱の教育制度であった。（中略）〔劉少奇は〕プロレタリアの政治抜きで、専門知識だけを追求し、学生をブルジョアの方向へもってゆこうとしたのである。（中略）理科知識を身につけさえすればよいとの考えをひろめ、国家の前途、世界革命の命運に無関心にさせ、政治から離れさせ、工農兵大衆から離れさせ、ブルジョア的権利を拡大させた」。

（中村元哉）

**中国を旅して：われわれは今なにをしようとしているのか／日中農交農業青年友好訪中団  
東京 1976（昭和 51） 87 頁 〔10174〕**

日中農交農業青年友好訪中団の訪中報告。一行は大川健嗣（日中農交県協会理事・山形大学助教授）以下 28 名。うち 22 名は実際に農業に従事している。旅行期間は 1976（昭和 51）年 5 月 31 日～6 月 15 日。訪問地は、北京・大寨（昔陽）・西安・南京・上海。見学場所は、農民を主とする訪中団にふさわしく、大寨大隊、李家荘人民公社、西安の魚化寨人民公社、南京の秣陵人民公社、昔陽の西水東調工事・郭荘ダム・トラクター工場、西安の棉紡織国営工場、南京の江蘇省農業科学研究所、上海の彭浦新村など。

本書は 2 部に分れる。第 1 部は訪中報告で、25 名の団員がそれぞれ見学記・感想文を載せ



る。また中国農学会との座談会で中国側が述べた「中国農業の将来」とこれに対する質疑応答が記される。第2部は、訪中経験を生かしての団員による「日本農業を考える」という座談会の記録。

#### **革命の鼓動をきいて／日中友好教職員の翼第1班**

**東京 1976（昭和51） 28頁 〔10229〕**

日中友好教職員の翼第1班の訪中報告。一行は団長の柘植桑次郎（日中友好協会〔正統〕常任理事）以下19名。期間は1976（昭和51）年3月23日～4月1日。経路は東京－北京－天津－北京－上海－大阪。北京では清華大学・大柵欄防空洞、天津では天津市第四十二中学・大港油田、上海では彭浦人民公社・盲聾哑工場・鳳城新村などを訪れる。

本書は団員の所感集で、革命と教育、北京、天津、上海の4部にわかれる。

#### **您好：訪中見聞記／日中友好渋谷区民代表訪中団**

**1976（昭和51） 103頁 〔10094〕**

さまざまな職業をもつ渋谷区民28名は、1976（昭和51）年5月4日から18日まで日中友好渋谷区民代表訪中団として区長のメッセージを携えて北京・天津・済南・上海の各都市を訪れた。一行は各地で多くの施設を見学・参観したが、本書では、以下に示すように、そのうちの主なものについて見聞を記録している。すなわち、〔文化〕天安門・故宮・万里の長城・頤和園・大明湖・明の十三陵、〔教育〕天津の第一中心小学校、済南の第三十中学校と少年宮・中央民族学院、上海の虹口聾哑学校、〔農工業〕北京の第三紡績工場と建築機械工場、済南の自動車工場、上海の益民食品工場と七一人民公社、黄河用水ステーション、天津の大港油田、〔福祉〕済南の山東省人民医院、天津の総工会と定年退職者養老院、上海の四平新村である。これらの記録に織りまぜて、各団員の感想を収めている。それらの多くは旅行を通じて中国に親しみをもち、親切なもてなしをうけたことに感謝の意を表わすとともに、それぞれの職業や立場に応じて関心を寄せた問題について感想を述べている。

#### **赤い中国 見たまま聞いたまま／横尾正二著**

**東京 蝸牛社 1976（昭和51） 230頁 〔XI-6-B-d-63〕**

本書は佐賀県日中友好視察団が5月27日から6月11日までの15日間に北京・西安・南京・上海の四都市を訪れた際の記録である。著者の横尾は佐賀県食糧株式会社社長を経て、佐賀県議会議員を務めた人物。戦中には1938年の南京陥落後、1カ月余り上海・杭州・蘇州などの地を巡ったことがあり、訪中したのは2度目であった。中国での見学場所は、事前に決まっておらず、北京に到着後に初めて中国国際旅行社の人々と打ち合わせをする機会があったという。希望を出した結果、滞在中には中日友好協会会長の廖承志と面会することができた。

著者は中国経済に関心があり、食料品、衣料品や電化製品の価格について詳しいメモを残しているほか、中国企業の経営についても雑感を書き記している。このメモから、当時は電気洗濯機、電気掃除機、冷蔵庫やカラーテレビは一般家庭には普及しておらず携帯ラジオなども高級品であったことがうかがえる。著者は「小型の白黒テレビは、中国では収入が多いとされている工場労働者でも、月給の7カ月分、ミシンは一年分以上の月給を出さねば買えない。まさに貴重品である」と感想を書き記している。さらに訪問後には、「言葉のあや」に恐さを感じ

たと述べ、中国側のいう「解放」には「苦しみから救ってやる」という語感があるにもかかわらず、実際には中国共産党は独裁的で、国民が自由を失い昏迷しているとして当時の中国の政治状況には批判的な態度をとっている。  
(山口早苗)

## 1977

チベットの旅／秋岡家栄著 平山郁夫絵

東京 佼成出版社 1977 (昭和 52) 235 頁 [10235]

著者は朝日新聞東京本社編集委員。日中友好協会正統本部の機関紙『日本と中国』の代表団(団長・島田政雄)の一員として、1977 (昭和 52) 年春、北京・成都を経てチベットに入る。

本書はこのときのチベット旅行記で、7 章から成る。第 1 章「ラサの春」は、成都からラサへの空の旅、あこがれのラサの第一印象を述べ、第 2 章「高原の人々(1)」では、革命展覧館で見、パサン女史(チベット自治区革命委員会副主任)から聞いた、苦しかった昔の生活や厳しかった闘争の過程を記す。第 3 章「チベットへの道」では、16 年前、著者が朝日新聞社ニューデリー支局長をしていたとき、はじめシッキムを、のちにネパールを通過してラサに入ろうとして失敗したことを回想し、第 4 章「黄金のポタラ宮・大昭寺」はこれらを見学して、チベットの古い歴史と文化をしのぶ。その古いチベットに 1950 年、人民解放軍が進撃し、ダライ・ラマが逃亡し、反乱し、そしてやがてチベットに解放がもたらされるのであるが、その過程は第 5 章「進軍、反乱そして解放」で述べられる。第 6 章「高原の人々(2)」は解放された新しい中国における人々の暮らしを明かにしようとしたもので、食生活、家の構造、結婚式、躍進小学校、ラサ第一小学校、烏葬、医療のことを書き、第 7 章「建設のつち音」は、視察したトンガ人民公社、農業科学研究所、カーペット工場、七・一農機具工場、工業基地林芝県、ラサ市文工団のことを記す。

別章「チベット画帖より」は同行した平山郁夫画伯が、東河人民公社、伝統衣装、ポタラ宮、大昭寺の仏像、小学生の画をその画帖からぬき出し、それに文をそえたもの。このほか平山画伯の 7 点の画が、カラー写真とともに本書に含まれている。

友好の旅：中国訪問／いわき市各界友好訪中国

いわき市 1977 (昭和 52) 128 頁 [10284]

いわき市各界友好訪中国の訪中報告。一行は田畑金光(いわき市長)以下 24 名。1977 (昭和 52) 年 1 月 11 日、羽田を発って、北京・大連・瀋陽・撫順・瀋陽・済南・上海とまわって、1 月 25 日、羽田に帰る。この間、大連には 3 泊して、大連港・機関車車輛工場・ガラス工場・工人療養院・太陽昇地下街・育紅小学校・水仙小学校・第十六中学など、瀋陽には 4 泊して、工業展覧館・中医学院・重型機械工場や、郊外の五・三人民公社、撫順の炭鉱・石油コンビナートなどを見学する。

本書には団員それぞれが書いたリポート 23 篇のほか、北京における廖承志(中日友好協会会長)との会談記事、中国の『人民日報』やいわきの地元新聞にみえる訪中国に関する報道記事がおさめられている。

北京の四年：回想の中国／小川平四郎著

**東京 サイマル出版会 1977（昭和 52） 271 頁 [10220]**

日中国交正常化後の大使交換にあたって 1973（昭和 48）年 3 月に初代日本大使として中国に赴任した著者が、4 年余りの駐在生活を回顧する。著者は、38 年に外務省に入局後、39 年から 41 年まで在外研究員として北京に留学し、戦後は香港総領事・アジア局長・中国大使などを歴任した「中国通」である。父親の小川平吉も戦前、近衛文麿の政治的後見人として蒋介石との和平工作に関わったことで知られる。

「職務上経験した機微なことには触れていない」と「まえがき」に断わりを述べつつも、中国政治の慣例や外交の特色、周恩来・鄧小平・李先念・呉徳ら要人の風貌、知日派の構成などを独自の観察眼で描写する。外交の現場や現地社会を実際に見聞した者にしか知りえない具体的かつ冷静な記述は史料として価値が高く、特に周恩来の死から第一次天安門事件の勃発、唐山大地震後の混乱、毛沢東の死から四人組逮捕にいたる激動の年である 76 年の記述は出色である。四人組逮捕という政変を目のあたりにして、「四人は何か特別な神通力をもっていたにちがいない。その神通力が何であったか、私には推測できるが、しかしこの謎はいずれ将来、中国人自身の手で解いてもらった方がよいと思う」と記している。（辻直美）

**躍動する中国／旧友会第三次訪中代表团**

**東京 旧友会 1977（昭和 52） 167 頁 [10194]**

旧友会の第 3 回訪中代表団の訪中記録集。旧友会とは、笠時乗（もと北支方面軍参謀）を会長とする、日中不戦、永久友好をうたう陸士出身者の集り。一行の旅行期間は 1976（昭和 51）年 5 月 20 日～6 月 11 日。訪問地は北京・大寨・哈爾浜・大慶・瀋陽・南京・上海。

本書は、はじめに日記風の旅行記を載せ、つぎに訪中から学んだところを、政治・思想・軍事・教育・産業・保健・衛生・生活に分けて述べる。これらのなかに各施設の見学記も入っているが、次のものについて比較的詳しい。北京海淀区四季青人民公社・大寨人民公社・大慶油田・南京市動力学院・南京陸軍第 179 師団・南京中興元絹織物工場・上海光学儀器廠・上海市龍華人民公社。

**遙かなるモンゴル：内蒙古紀行／小池秋羊著**

**東京 シルクロード 1977（昭和 52） 165 頁 [10248]**

著者は蒙疆文芸懇話会に所属していた人。1943 年の内蒙古シリントール盟踏査記。蒙古人の団長と通訳 1 名、映画撮影班、映写班、2 名の画家、護衛、駐蒙軍の兵隊 3 名（3 台のトラック運転手）とともに、5 月 18 日張家口を発って、張北、徳化、西スニト、東スニト、アバカ貝子廟、ダイラマハイ廟、ダブス・ノール、ラマクレ、バイン・ホショウ廟、東ウヂムチン、インチゲン廟、西ウヂムチン、東ホチト、貝子廟、ハンベン廟、西アバア、西スニト、徳化、張北とまわって、6 月 24 日張家口に帰る。

本書はこの旅行記で、全体がアート紙、その半分ほどは著者が撮影したきれいな写真である。なお末尾に、1942 年、陰山山脈中の学問寺五当召を訪れたときの紀行文と写真が付録されている。

**中国への道／小孫由太郎著**

**東京 紀元社 1977（昭和 52） 262 頁 [10161]**

著者は東京築地の株式会社海老の大丸の取締役社長。1974（昭和 49）年商談のため北京に赴いたのを皮切りに、広州交易会に 3 回参加、1976 年には技術交流ミッションに参加して青島・天津の水産工場を見学しており、前後 5 回中国を訪れている。

本書は全体で 20 章から成るが、終りの 5 章は自分のこと商売のことで、他の 15 章が中国旅行記にあたる。そのうちはじめの 8 章は 1974 年の北京商談のときの旅行記で、商談に行くことになった経緯、北京における商談の様様、北京およびその周辺の名所旧蹟、北京の生活・労働・社会のことが記されている。次の 5 章は 1975 年の広州交易会に参加したときの旅行記。広州交易会のこと、交易会における商談のこと、宿舎となった広州賓館のこと、広州の町のことなどが記されている。他の 2 章は毛沢東の死に対する感懐と著者が感銘をうけた言葉と規律とを書く。

### 楊柳芽ぐむ中国の春／数原貢著

東京 楽游書房 1977（昭和 52） 288 頁 〔11768〕

著者は 1976 年に訪中した日中農交友好訪中団 26 名の副団長、静岡県信用農協連専務理事。同年 3 月 15 日から 30 日まで上海－南京－揚州－西安－大寨－北京を訪問した際の記録である。訪中の目的は友好交流であり調査が主ではないとしながら、各地で郭莊ダム、江都水利工程管理区などの水利施設、上海の馬陸人民公社、西安の魚化寨人民公社、昔陽県の大寨人民公社などを訪問した際の見聞を仔細にメモしている。その内容は農業生産と規模、農業用機械、作物と作付け、農業生産による所得配分、農家の税負担や個人の生活、住宅事情などを含む。社会主義についての一般的な事柄にも関心を持っていた著者は「農業生産に関しては、確かに、私有と自由をめぐることは社会主義である。しかし生活についてのものは、食糧、住宅あるいは電気水道の施設などは社会主義的な取り扱いの中でこなされている。社会主義、社会主義と言っているともなるほどそうかと注意を引くものは少ない」としている。農業の現場以外では、上海の紡績工場、揚州の漆器工場、昔陽県の農機具工場などを視察したほか、北京の清華大学、南京の魯迅中学などで教育事情も視察した。鍼麻醉や医療保険の事情などにも関心を寄せている。（池田尚広）

### 漁協労働者中国に行く：友好第一の日中漁業／全国漁協労働組合協議会友好訪中団

東京 1977（昭和 52） 122 頁 〔10247〕

全国漁協労働組合協議会友好訪中団の報告書。一行は団長の谷川洋司（全漁連）以下 16 名。期間は 1976（昭和 51）年 7 月 23 日～8 月 6 日。経路は東京－北京－大連－瀋陽－北京－青島－北京－上海－東京。

本書は 2 章から成る。第 1 章「新しい中国」では、訪中で得た見聞・体験を、政治、経済、医療、工場労働者、教育、少数民族、大連市地下太陽昇商店街、女性、北京の史蹟、華北大地震に分けて叙述し、第 2 章「中国の漁業」では、まず鮑光宗（中国漁業協会副会長）の中国漁業に関する説明を掲載し、ついで見聞した国営企業による漁業、人民公社による漁業や水産教育について記す。末尾に、「日本国と中華人民共和国との間の漁業に関する協定」と「中国の水産資源保護条令」とを付録する。

### 二千年を駆ける友誼／第一次中国三誌読者友好の翼第四班

## 1977（昭和 52） 99 頁 〔10138〕

『北京週報』『人民中国』『人民画報』の読者 139 人は、1976（昭和 51 年 3 月 22 日から 4 月 2 日まで上海・南京・北京を訪問した。本書はこの友好の翼の第 4 班 17 人が綴った感想文集である。訪問・見学先は以下のとおり。〔上海〕中共一全大会会場址、魯迅の墓、上海工業展覽会、永嘉街道新村、人民医院、少年宮、彭浦人民公社。〔南京〕長江大橋、博物館、長江路小学校、中山陵など。〔北京〕頤和園、歴史博物館、地下壕、清華大学、重型電機工場、故宮、長城、定陵。また日帰りで揚州へ行き、水利センター、玉器や漆器の工場、果樹園などを見学した。

## 第二次中国三誌友好の翼／第二次中国三誌友好の翼代表団

### 1977（昭和 52） 122 頁 〔10292〕

第 2 回目の「中国三誌（北京週報・人民中国・中国画報）読者友好の翼」代表団の訪中記録。一行は宮下忠雄（近畿大学教授）団長以下 132 名。旅行期間は 1977 年 10 月 18 日～11 月 1 日。訪問先は〔北京〕北京大学・師範大学・積水潭病院・朝陽病院・東北旺農業人民公社・大柵欄地下壕、〔大寨〕大寨生産隊、〔杭州〕絹・錦織物工場・銭江療養院・学軍中学校、〔上海〕少年宮・工業展覽館・華山病院・龍華病院・控江新村・長白新村・天山新村・天山中学・光明メッキ工場・英雄万年筆工場・魯迅記念館など。

本書の冒頭には、団長の挨拶と北京における張香山（中日友好協会副会長）談話の要旨があり、ついで団員中の 78 人が感想文を書いている。内容は、前記諸施設の見学記が多いが、そのほか、ホテル・飲食物・物価のこと、個人的に行った民家訪問のこと、杭州郊外の水稲調査のこと、上海の華東病院で診察してもらったことなども記されている。

## 自力更生の中国（第 2 集）：11 全人代大会勝利と 4 つの現代化／第 2 次東京都教育界友好訪中団

### 東京 日本中国友好協会（正統）東京都本部 1977（昭和 52） 32 頁 〔10279〕

日本中国友好協会（正統）東京都本部が派遣した第 2 次東京都教育界友好訪中団の訪中報告集。一行は貞閑晴（東京都世田谷区教育委員長代理）団長以下 32 人。1977（昭和 52）年 8 月 22 日、第 11 回全国人民代表大会の勝利にわく上海に到着、上海から鄭州・新郷・石家荘・昔陽・北京とまわって、9 月 5 日、北京から成田に帰る。その間、次のような施設を見学する。

〔上海〕工業展覽館・魯迅記念館・少年宮・黄浦区崑崙路街道居民委員会、〔鄭州〕黄河展覽館・黄河邙山揚水站・鄭州大学、〔新郷〕七里營人民公社・錦織廠・工人大学、〔石家荘〕第一中学・白求恩記念病院・擁軍小学校、〔昔陽〕大寨人民公社・閻荘人民公社・李家荘人民公社、〔北京〕大柵欄防空壕・東城区五・七幹部学校・歴史博物館・北京師範大学など。

本書は上記の旅行報告を、「農業は大寨に学ぶ」「教育」「社会主義の建設と現代化」「日常生活」「歴史と文化」の 5 部門にわけてしるし、末尾は団員の座談会の記録をのせる。

## 革命に生きる：中国人民の世界観にふれて／第 2 次日中友好教職員の翼第 6 班

### 東京 1977（昭和 52） 123 頁 〔10258〕

第 2 次日中友好教職員の翼第 6 班の訪中報告書。一行は桜井秀三（都立城北高校教諭）以下 18 名。期間は 1977（昭和 52）年 3 月 25 日～4 月 5 日。経路は東京－上海－南京－揚州－南

京－北京－東京。

本書は6部からなる。最初の「政治」では、4人組と覇権問題を中心にした中国の現状に関する張香山（中日友好協会副会長）の説明と、上海漫画展の漫画8点を載せる。「進みゆく教育革命」では、はじめに肖敬若（北京市普及教育局）の中国教育に関する説明を載せ、ついで視察した南京の東方紅中学、北京の師範学院・中央民族学院、上海の少年宮について記す。「革命のあしあと」は、上海博物館、揚州、万里の長城、太平天国歴史陳列記念館、中山陵、魯迅記念館、梅園新村、南京、故宮、天安門の、「生産と生活をめぐって」は、上海の朱橋人民公社・長白新村、南京の工人病院・長江大橋、青山の果樹園、揚州の自動車工場、北京の建築機械工場地下壕などの見学記。「文芸」では、上海の雑技と南京で見た紅小兵文芸の夕のことを記し、「中国で見たこと考えたこと」では、班員15人が訪中の感想を述べる。

#### “四つの現代化”に進む中国：四人組を粉碎して／中国旅行読者の会第二次訪中団

東京 中国旅行読者の会 1977（昭和52） 206頁 [10246]

中国旅行読者の会の日中友好第2次訪中の訪中報告。一行は青山良道（中野区教育委員会委員長）団長以下31名。旅行期間は1977（昭和52）年9月5日～9月21日。訪問地は上海・杭州・南昌・広州・桂林。

本書には団員それぞれが書いた紀行・感想文33篇がある。それらは、上海の農業展覽館・第一百貨店・師範大学、南昌のトラクター工場、広州の中山医学院、三元里人民抗英闘争記念館、そのほか見学した人民公社・工場・労働者村・学校・病院などや、訪問した都市の街道から学んだ、新しい中国の都市・農村・農業・工業・政治・労働・教育・文化・医療・生活・女性・子供について語る。

#### 目を世界にひらく：75・10、中国の旅／東京婦人活動家代表団

1977（昭和52） 70頁 [10291]

婦人団体や労働組合で活動する女性たち15名から成る東京婦人活動家代表団は、中日友好協会の招きで、1975（昭和50）年10月14日から28日まで北京・大慶・太原・大寨・上海を訪れた。これら訪問地のなかで、とくに大慶・大寨という工業と農業の全国モデルになっている地域をあわせて訪問できたことに、一同は感激した。また、本代表団は、中国の婦人解放の歴史に学ぶことと日中両国の婦人の団結をかためることを訪中の主たる目的としていたので、各地で婦人の指導者と交流したり、婦人の労働事情に重点をおいて視察している。

このような特徴をもった旅について、本書では、「大寨」「大慶」「社会に進出する婦人」「教育」「福祉」の5項目にまとめて報告されている。大寨と大慶については、それぞれの歴史と現状が述べられているが、とくに大慶の報告が詳しい。そこには、女子採油隊や労働者の90%が既婚女性という被服工場のことも語られている。「社会に進出する婦人」の項では、太原重型機械工場をはじめ、北京の綿紡績工場、上海の低圧電気部品工場、大慶油田で機械を動かすクレーンを運転して、「男の仕事」の分野に進出した婦人労働者たちの状況が述べられている。「教育」の項は北京の長椿街学校見学記である。そして「福祉」の項では、上海の低圧電気部品工場で働く盲・聾啞者と身体障害者のこと、北京の興化西里居民委員会で地域活動に従事する婦人たちのこと、北京婦産院での見聞などが語られている。

最後に、北京市婦女聯合会副主任・徐光の「婦人解放運動について」、および対外人民友好

協会常任委員・欧棠亮の「中国の社会主義建設と国際情勢について」の講演を収める。

### 中国の風：北京・洛陽・西安・上海の旅／桐朋学園教職員友好訪華団

調布 桐朋教育研究所 1977（昭和 52） 158 頁 〔10281〕

1976（昭和 51）年 12 月 27 日から 1977 年 1 月 10 日まで北京・洛陽・西安・上海を訪れた桐朋学園教職員友好訪華団（22 名）の旅の報告書。報告は、日程に従うのではなく、以下に示すような分野にまとめたうえ、それぞれの訪問先について解放後の経過と現状を記録し、団員の感想を附している。

〔教育〕新華小学校（北京）、西安市第八十三中学校、北京大学、中央民族学院、上海市静安区少年宮。最初の 2 つの学校ではいくつかの学科の授業を参観したが、団員のほとんどが中学・高校の教師であるだけに観察はこまかく、感想文の記述は具体的である。

〔農業〕南村生産大隊（洛陽）、魚化寨人民公社（西安）。機械に頼らず自分たちの手で田畑を耕し、灌漑施設を作りあげるのを見て、「自力更生」の方針がもつ意味を考えている。

〔工業〕北京第二綿紡績工場、洛陽建築機械工場、西安計測器工場、西安特殊工藝美術工場、上海工業展覽館。工業や工場に対して団員はいずれも素人であるから感想も表面的であるが、女性の労働者に注意を向けている。

〔歴史〕万里の長城をはじめ 16 ヶ所。各地の博物館も含まれる。感想より歴史的説明が詳しく、歴史教育の参考資料として有用である。

〔生活〕4 つの都市の印象を語っている。

挿入されている写真も豊富で、きわめてゆきとどいた旅の記録である。

### 新時代を迎えた中国：婦女頂着半边天（女性は天の半分をささえている）／日中友好三結合訪中団

東京 中国旅行読者の会 1977（昭和 52） 138 頁 〔10197〕

「中国旅行読者の会」日中友好三結合訪中団の訪中報告書。一行は青山良道（中野区教育委員長）以下 24 名。団員の年齢は 19 歳から 76 歳まで、中には主婦あり、看護婦あり、学生あり、大学教授ありといった工合に各界各層の人を含んでいる。旅行期間は 1976（昭和 51）年 11 月 16 日～11 月 29 日。香港を経て、広州から汽車で進み、武漢では長江大橋を見、武漢大学・紅小兵小学校を見学、長沙では、毛沢東の生家（韶山）を訪れるほか、農業用水路・長沙第一中学校・第一師範学校を視察、桂林の景勝をめでて、広州に帰り、重型機械工場・中山医学院・花県人民公社を見学する。

本書には、団員がそれぞれ専門の立場から（例えば近畿大学の宮下忠雄が人民幣について、東京都政策室の青山侑が物価と流通について述べるが如き）見学記・感想文を書き、それを政治・経済・労働・教育・文化に分けて集録する。

なお巻頭には広州で聞いた朱一明（広州分社経理）の「四人組の犯罪行為について」という特別講話を載せている。

### 見てきた中国：小記者レポート／日中友好小記者訪中団編

東京 日中友好小記者交歓会 1977（昭和 52） 144 頁 〔10271〕

小中高生からなる「小記者」訪中団の記録。学校新聞研究会で活動する教師らの要望で組織

され、団長は当時東京都渋谷区立松濤中学校長の鈴木英男が務めた。主要部分の小記者が記す行程紹介や手書きの新聞、感想文で構成される。訪中国は1976年3月に第1次（21名／うち小記者14名）、77年3月に第2次（21名／同小記者15名）が派遣され、訪問順は異なるものの、北京・西安・南京・揚州・上海を巡り、名所旧跡や博物館、中学校や聾学校、人民公社、工場などを参観した。小記者らは、中国側の熱烈な歓迎に友好の情を高め、人民奉仕・男女平等・理論と実践・自力更生といった政治スローガンも素直に受け入れ肯定していく。今日から見れば、小記者らはあくまで友好の舞台に「上せられた」存在だった。1次と2次の間に、中国では毛沢東の死、四人組失脚という大きな政治変動があった。2次訪中国は四人組をさんざんに批判する劇や漫画展に案内される一方で、知識青年下放の精神を聞き、紅衛兵や紅少兵と交流している。結果的に中国社会の大きな変化を目にした小記者であった。（辻直美）

### 燃ゆる大地／日中友好東京都民の翼訪中国

98頁　〔10256〕

東京都民の翼訪中国は、1977（昭和52）年4月5日から15日まで中国を訪れ、北京・杭州・上海の3都市をまわった。一行128名は7班に分れて、各地で学校、人民公社、工場、病院や名勝旧蹟を見学した。報告書は班毎にまとめられている。第1班は医療関係者で編成されており、新華医院訪問記や医療問題の報告が専門家によって書かれている。おもに民間会社の重役や社員から成る第2班の報告には、上海港第9積下作業区と盧溝橋人民公社を訪ねて受けた説明が収録されている。都議会や区議会の議員から成る第5、6班は、合同で北京市の要人と都市問題についての座談会をもった。その際に聞いた北京市の人口・住宅・交通問題を含む都市計画の話がまとめられている。第7班は婦人ばかりの班で、北京市婦女聯合会副主任・徐光の婦人問題についての話を収めるほか、中央民族学院、工農兵医院（北京）、控江新村（上海）の視察について述べている。また、一部単独行動を許された人々の報告として、製本会社社長の上海新華印刷所訪問記、営団地下鉄理事の北京地下鉄試乗記があり、上野動物園園長も北京動物園と上海動物園へ単独訪問したことを報告に含めている。なお、本書は報告文に比して写真が多いことが特徴である。

### チベット素描集／平山郁夫著

東京 朝日新聞社 1977（昭和52） 112, 21頁　〔10219〕

著者は1977（昭和52）年4月から5月にかけて、日中友好協会（正統）中央本部派遣『日本と中国』紙代表団の一員として、解放後、日本人としてはじめてチベット自治区を訪問する。

本書はこの旅行中に画いた素描を集める。カラー53点、単色17点。ほかにチベット以外の中国各地の素描、カラー5点、単色29点があり、また巻末に著者のチベット紀行文と略年譜とがある。

### 現代の中国：東大教授訪中国報告／福武直編

東京 東京大学出版会 1977（昭和52） 384頁　〔10192〕

東京大学教授第1次友好訪中国の報告書。一行は団長の福武直（東大文学部教授）以下12名。旅行期間は1976（昭和51）年12月14日～12月28日。経路は東京－北京－西安－上海－蘇州－上海－東京。



本書は団員がそれぞれ専攻の立場（人名後の括弧内は専攻分野）から中国で得た見聞を報告し、また所感を述べたもの。〈訪中報告〉は、坂野正高（中国政治外交史）「毛主席逝去後の政局」、大内力（農業経済学）「人民公社と農業」、隅谷三喜男（工業経済学）「工業労働者と工場」、西嶋定生（中国経済史）「歴史・文物見聞記」の4篇。〈訪中所感〉は、玉野井芳郎（経済学）「中国の自然と社会」、斎藤真（米国政治外交史）「中国訪問、断想」、椎名重明（西洋農業史）「中国における経済学批判」、岡田与好（西洋経済史）「プロレタリア文化大革命についてのひとつの感想」、宇沢弘文（理論経済学）「『毛思想』の実践をみる」、福武直（農村社会学）「中国農村の今昔」、坂野正高「『副団長』の経験」、滋賀秀三（中国法制史）「中国の魅力」の8篇。

このほか、巻頭に福武直「友好訪中の旅」、巻末に阪本楠彦（農業経済学）「四度び中国にわたって」がある。前者は今回の旅行の大概を記し、後者は今回までの著者と中国との関わりあい、3回の訪中の所感を述べる。

### 日中人民連帯の旅：反覇権の共同の闘いへ／北方領土返還運動活動家訪中団

1977（昭和52） 58頁〔10286〕

日本の各地で北方領土返還を要求して活動する15人（団長・坂本徳松）が、1977年（昭和52）年8月9日から29日まで中日友好協会の招きで中国を訪問した。かれらは、「ソ連の覇権主義に反対」して闘う仲間として中国から迎えられた。すなわち、一行が北京に滞在中、北京市総工会等3団体の主催によってかれらの運動を支持する集会が開かれ、1,300人が集まって代表団の報告に支持を表明した。また、紀登奎副総理が会見して、かれらを激励した。本書には、紀登奎の談話の要旨、北京市総工会副主任の集会での演説と日本側の2人の報告を収録している。

一行は、北京のほか大慶・ハルビン・長沙・韶山・上海の各地をまわって、人民解放軍・油田・工場・人民公社・学校・革命史跡などを参観した。その見聞は、本書後半の各団員の感想に記されているが、なかには、ハルビンで中国共産党第11回大会を祝うデモに参加した体験も語られている。

### 日中友好大学教員友好訪中団文集（日中学術懇談会派遣）

出版地・出版者・出版年不明 28頁〔14585〕

日中友好協会（正統）と日中学術懇談会が共同派遣した「日中友好大学教員友好訪中団」に参加した団員らによる文集。訪中団は、中国からの留学生を受け入れている大学を主とした15大学の教員23人によって構成され、1977年3月18日から4月1日までの約2週間、上海－鄭州－西安－延安－北京の各地を回り、大学・人民公社・名勝旧跡・博物館・劇場等の文化施設を訪問したほか、中日友好協会会長の廖承志や日本に留学経験を持つ学生との交流を行った。文集の前半には廖承志による代表団に対する講話内容が掲載され、廖は、当面の国際情勢について、「中国は二つの超大国に反対するが、とりわけソ連の帝国主義に反対する」、国内情勢については「四人組粉碎後、華国鋒体制のもとで四つの現代化実現を目指す」という方針を語っている。後半には、訪中団に参加した池田温・緒方一男・川勝義雄・清水茂・山根幸夫・依田憲家・針生誠吉・山口和子の訪中記が掲載される。廖の講話が政治色濃厚であるのに対して、中国の文物、教育、歴史観、文学など、日本側団員の興味・関心は各人各様である。巻末に、

## 1978

### 西域をゆく／井上靖・司馬遼太郎共著

東京 潮出版社 1978 (昭和 53) 236 頁 [10457]

両名の著者が 1977 (昭和 52) 年 8 月から 9 月にかけて約 3 週間、中島健蔵・宮川寅雄・東山魁夷・藤堂明保・団伊玖磨らとともに西域 (新疆ウイグル自治区) に赴き、ウルムチ・イリ・トルファン・ホータンを廻ったときの旅行記。もっとも旅行記といっても、いわゆる紀行文らしいものは、両名が撮影した巻頭のカラー・グラビアの説明を中心にした短文がそれぞれによってもなされているだけで、大半は両名の対談という形をとっている。

最初の対談「西域への夢」は旅行前にされたもので、両名の西域への関心と旅行への抱負が述べられる。次の「西域をゆく」が本書の中心で、今回の旅行のことが両名によって話され、「西域を語る」においては、両名のほかに東洋史学者の藤枝晃、考古学者の樋口隆康を加えて、4 者によって西域のことが、大谷探険隊にはじまり、勿論今回の旅行のことを含めて、広く語られる。

最後の対談「敦煌への旅」は井上靖が 1978 年 5 月に約 1 週間敦煌を訪れて後になされたもので、司馬遼太郎が専ら聞き役になって、井上靖に敦煌の旅のことを語らせている。

### 新・中国取材記 I：民衆生活の素顔／NHK取材班

東京 日本放送出版協会 1978 (昭和 53) 304 頁 [10341]

本書はNHK取材班 (桜井健・細根勇・塩島俊雄・永森治) が、1977 (昭和 52) 年 5 月 31 日から 7 月 8 日まで、北京・洛陽・西安・長沙・韶山・上海・南京、そして内モンゴル自治区を、テレビのルポルタージュ番組を製作するため回った 39 日間の取材記で、4 人組追放以後の新風吹く中国、その中国における民衆の生活を描く。

全体が 8 章から成る。第 1 章では、北京飯店、天安門前広場、毛主席紀念堂・大柵欄地下壕や北京の街頭、北京の市民生活を、第 2 章では、巡訪した洛陽・西安・長沙・南京の古都を、歴史との関連において記す。第 3・4 章はそれぞれ長沙・上海の訪問記で、長沙では毛沢東の故郷や生家、華国鋒が指揮して作った韶山灌区の用水路、郊外の高塘嶺人民公社のこと、上海では黄浦江の景色、旧市街と新たに建設された郊外の工業地帯の対照、上海第二ミシン工場、その工場の女性労働者の家庭生活、少年宮、上海港のことを記す。第 5 章は、南京の人民解放軍第 179 師団の取材記で、軍の訪問記としては詳しい。第 6 章は、内モンゴル自治区の訪問記。交易の街から工業都市に生まれ変わったフフホトの現状を、その歴史とともに記し、フフホトの町を見て感じた中国の少数民族政策を述べ、さらにシリンドル草原の中心都市シリンボト、その南西 20 キロにあるダブシルト人民公社、その一つの包【パオ】における生活を描く。

第 7 章は、取材旅行を通じて知った 4 人組追放以後の新しい政治動向——華国鋒体制、4 人組批判、動き出した近代化路線——を述べ、第 8 章では、毛沢東思想の継承されていく姿を、毛沢東主席旧居陳列館における男女中学生との会話、北京師範大学付属第二中学校・西安烽火生産大隊小中学校の見学を通じて記す。NHK取材班の取材記だけに写真は豊富である。また普通の訪中団の行けないようなところを訪れていることが、全体的に歴史との関連において記

されている点とともに本書の特色である。これらの特色は、後に述べる『新・中国取材記』のⅡ・Ⅲについても同じである。

#### 新・中国取材記Ⅱ：文明と風土／NHK取材班

東京 日本放送出版協会 1978（昭和 53） 273 頁 [10341]

本書はNHK取材班（田川純三・高橋秀・鈴木肇・本間克治・吉川研・小原雅夫）が、1977年8月31日から10月12日まで、都合43日間、北京・揚州・鎮江・桂林（漓江および陽朔を含む）・南京・上海を、打合せ・下見・取材に訪れた時の記録である。

全体が6章から成る。第1章は、12年前に取材したときと比較しながら、北京市街の風景を描き、第2章は、居庸関を中心にした万里の長城の歴史と現状を語り、第3章は、国慶節の日の中山公園・頤和園・故宮・天安門前について述べる。第4章は、大運河と長江についてであって、北京から揚州に至る鉄道沿線の風景、揚州の町、その付近の長江、揚州から北に向かう江北大運河、大運河の歴史を叙して、これを通ったはずの鑑真や遣唐使の昔をしのぶ。第5章は長江流域についてであって、揚州対岸の鎮江、その郊外に工事中の諫壁揚水ポンプセンター、揚州郊外の江都水利センター、湾頭人民公社のことを記し、さらに長江をさかのぼって武漢の盤龍城の遺跡について述べ、長江流域の文明を華北のそれと比較する。第6章では、はるか南方の桂林の町、桂林から下って陽朔にいたる漓江の景勝を描き、その風光に山水画をおもい、蘇軾をしのび、山水画こそ中国の文明と風土をつらぬくものという。

なお末尾に付録した終章では、4人組批判が文化の面にどのようにあらわれているかを、見学した魯迅記念館の陳列品の変化、この取材直後の1978年1月1日夜の北京人民劇場で経験した旧京劇の復活から考える。

#### 片雲の風：私の東西紀行／大岡信著

東京 講談社 1978（昭和 52） 235 頁 [10433]

本書は、サブ・タイトルが示すように、著者が新聞・雑誌に発表したヨーロッパ・中国・日本旅行記を集めたもので、全体の3分の1が中国紀行である。著者は日本作家代表団の一員として1976年11月29日から12月15日まで中国を訪れた。一行は中国人民対外友好協会から招かれたもので、井上靖を団長に、著者の他、巖谷大四・伊藤桂一・清岡卓行・辻邦生・秦恒平らがメンバーであった。北京・大同・杭州・紹興・蘇州・上海とまわったが、北京にはもっとも長く9日間滞在した。東西・南北の交錯する要所に門があり、歴史的な都城の姿を残している一方、路上には自転車やバスがせわしく行き交い、人々は車道にあふれ、馬・驢馬も通り、そして政治的緊張が感じられる、と著者は北京を描いている。故宮・八達嶺・定陵などを見物すると同時に、北京では、王冶秋国家文物事業局長、作家の劉白羽、孫平化中日友好協会秘書長との会見があった。話題の中心は「四人組」の問題で著者は白紙答案事件や江青の文芸界に対する干与の幾例かを記しながら、毛沢東が何故それを阻めなかったかと疑問を呈している。

大同では雲崗の石窟を見学し、その保存問題について聞いた説明を伝えている。南へ下って、西湖湖畔の逍遙、白壁と小川の美しい紹興の町の散策などに「江南の春」という言葉が実感されるおだやかな風光を楽しんださまを語っている。このほか、一行についた通訳の人たちとかわしたさまざまな会話を記していて、そこからは一行の旅の雰囲気伝わってくるようである。

### 新生中国に招かれて／小串靖夫著

東京 家の光出版サービス 1978 (昭和 53) 167, 28 頁〔11985〕

1977 年 7 月下旬、全国農協による訪中国一行 8 名が、中国農学会の招請で中国を 2 週間にわたり訪問した際の記録。訪問地は北京－上海－広州－桂林。北京では紅星人民公社、人民日報社、遺伝研究所を視察したほか、農業に関する座談会に参加した。座談会で説明にあたったのは、農業局副局長の張琪瑞、農学会副理事長の沈其益で、中国農業の生産状況、中国農業の路線・政策・方針、「農業は大寨に学ぶ」、中国農業の前途などについて説明された。要人では中日友好協会会長廖承志、全人代常務副委員長の譚震林などと会見した。反覇権条項をめぐる日中平和友好条約の調印、全国の農業の状況と発展などについて主に記録されている。上海では上海師範大学、普陀区少年宮を見学し、上海市農業科学院などを視察した。広州では郊外の羅崗人民公社のほか、かつて毛沢東が所長を務めた農民運動講習所を視察している。中国滞在中に訪問したいずれの場所でも現地で聴取した概要説明と併せて日本側の質問が記録されている。また視察した二つの人民公社に他の資料を併せた「人民公社の収支と農民の所得」も収録される。(池田尚広)

### 司馬遷の地平線／川野辺明著

大宮 李杜書房 1978 (昭和 53) 257 頁〔10582〕

著者は三省堂書店の人。大学時代には中国古代史を修め、1977 年には 10 月 18 日から 11 月 1 日まで「中国三誌（北京週報・人民中国・中国画報）読者友好の翼訪中国」130 名の一員として中国を旅行し、北京・大寨・杭州・上海を訪れている。

本書は 2 部に分れる。第 1 部は主として学生時代に書いた司馬遷・李陵・魯迅に関する 5 篇の論説を収め、第 2 部は 1977 年訪中の際の紀行文 15 篇を集める。この紀行文に記されるところは、万里の長城、琉璃廠、頤和園、大柵欄防空壕、大寨、杭州、上海など、普通に誰でもが訪れるところばかりであるが、如何にも歴史を専攻した人らしく、歴史との関連において訪問した都市、見学した施設を描写している。例えば、杭州を描いては、南宋の都臨安の昔を偲ぶほか、司馬遷・魯迅との関わりあいを語り、上海を写しては茅盾の『子夜』、魯迅の詩「三義塔を題す」を思うが如きである。また各地のホテルのことがよく書かれているが、北京の友誼賓館を述べては、その建設者の父、梁啓超のことに言及している。

### 北京・新疆紀行：革命と民衆を訪ねて／菊地昌典・山本満共著

東京 筑摩書房 1978 (昭和 53) 206 頁〔10380〕

日中友好国民協議会第 5 次訪中国（12 名）は、中日友好協会の招きで 1977 (昭和 52) 年 7 月から 8 月にかけての 3 週間、新疆ウイグル自治区訪問を中心にその前後に北京、上海へも立寄る旅をした。本書の著者 2 人はこの訪中国のメンバーで、ほかには蠟山道雄・岡崎敬・佐藤昇・河部利夫の名が記されている。

本書は 2 部より成る。第 1 部は菊地の「北京」であるが、これは正確には旅行記とはいえない。著者は 1967 年にはじめて中国を訪れたのち、73 年からは毎年訪中しており、その間、文化大革命から「四人組」支配まで「継続革命」路線下の中国社会主義のありようを観察してきた。そして今回 77 年には、中国滞在中、「四人組」に焦点をしばって質問をし続けた、とい

う。こうした 10 年にわたる見聞と考察に基いて著者の中国社会主義論をまとめたのが第 1 部である。

第 2 部は、国際関係論を講ずる法政大学法学部教授・山本満の新疆ウイグル自治区訪問記である。新疆には 8 月 4 日から 15 日まで滞在した。首都ウルムチでは綿紡織工場・博物館・八路軍新疆駐在辦事処跡、トルファンでは 2 つの人民公社と高昌城址、石河子ではディーゼル・エンジンの工場と国営農場などを見学した。さらに、3 泊 4 日の日程で中ソ国境に近いイリ地区へも行き、皮靴工場・えり巻きとネッカチーフを作る工場・人民公社などのほか、山中のセイリム湖畔にあるカザフ遊牧民の包を訪ねて非常な歓待をうけた。著者はこれら訪問先での見聞を詳しく記すとともに、この旅の前後に読んだ多くの関係文献から得た知識を加えて、漢族と 12 の少数民族が住み、かつソ連との国境問題を抱える新疆の過去と現在を簡明に描いている。

### 芸術的な握手：中国旅行の回想／清岡卓行著

東京 文藝春秋 1978 (昭和 53) 358 頁 [10385]

詩人・小説家である著者が、生れ故郷である大連への郷愁を抱きつつ、日本作家代表団の一員として 1976 (昭和 51) 年 11 月 29 日から 12 月 15 日まで中国を訪れた時の旅行記。代表団は井上靖を団長に、巖谷大四、伊藤桂一、辻邦生、大岡信、秦恒平ら 10 名より成り、訪問地は北京・大同・杭州・紹興・蘇州・上海であった。著者は、ほぼこの旅程に沿って見聞と感想を綴っている。定陵の地下宮殿・雲崗炭鉱・北京の地下壕を「三つの地下の世界」として語り、紹興で乗った烏篷船につながるイメージを「短篇小説を試み」る形で描くなど、いずれの見聞も文学者らしく情感豊かに表現している。また著者は、著者の会った多くの人について語っており、鄧穎超をはじめ、劉白羽ら文学界の人たち、さらには代表団一行についた通訳の人たちのプロフィールをさまざまなエピソードで捉えている。そして通訳の女性の一人が大連生まれと知り、特別な親近感を抱いたことも語っている。さらに中国人だけでなく同行の代表団員たちについてもかれらの旅行中の姿を伝えている。本書は、風物と人々が織りなす旅のさまを丁寧に語った優れた紀行である。

### 中国の旅／小林素三郎著

名古屋 正文館 1978 (昭和 53) 138 頁 [XI-6-B-d-64]

著者は早稲田大学文学部を卒業後、戦後は愛知淑徳高等女学校教諭を経て、同学校理事長、大学学長を歴任した人物。戦時中は、1940 年から 42 年まで日本陸軍第三師団小隊長として中国の京漢線沿線西方に駐屯しており、自身の中国再訪の理由について「新中国を視察することも意義のあることであるが、それ以上に古戦場を訪れ、戦死した英霊の冥福を祈りたいほうに心は傾いていたから、鎮魂の旅でもある」と語っている。

この訪問は全国私学経営者協会にて計画されたもので、大阪や京都、兵庫、愛知、静岡、福井の関係者ら 38 名が参加した。愛知からはほかに、享栄学園・相山学園・愛知学院・桜花学園・石田学園の理事長ら合計 7 名が参加した。スケジュールはすべて中国国際旅行社が立て、農業・工業・教育・文化・医療など多方面から中国を知ることができるよう計画され、通訳も 10 名に 1 人の割合で配属された。事前に訪中の心得が共有され、「観光旅行ではなく、相互理解と友好促進のために招待されたことを忘れぬこと」、「戦前の用語、地名など使用しないこ

と」などの項目を守ることが求められた。

具体的な見学場所として、まず上海にて上海工業展覧会や魯迅故居や市内の小学校を巡り、次に長沙にて第一師範学校や馬王堆漢墓を訪れた。著者の悲願であった古戦場の見学は実現しなかったようだが、戦前に訪れたことのある長沙にて戦時の思い出が蘇り、心の中で戦友らの霊に黙とうを捧げている。長沙に続き、桂林にて漓江の舟下りを体験し、広州では人民公社や中山大学を訪れ、広州から帰国した。（山口早苗）

## 人民中国を訪ねて／全国農業協同組合役職員連盟第二次友好訪中国

東京 1978（昭和 53） 117 頁 〔10388〕

全国農業協同組合役職員連盟第 2 次友好訪中国の報告書。一行は宮川清（愛知県農協中央会常務理事）団長以下 26 名。旅行期間は 1977（昭和 52）年 9 月 26 日～10 月 10 日。訪問地は上海・鄭州・輝県・新郷・西安・北京。

本書の主要部分は、旅行中に訪れた下記機関の見学記。〔上海〕虹橋人民公社・中医学院付属龍華病院・泗塘新村、〔鄭州〕河南省博物館・黄河展覧館・邙山揚水ステーション、〔輝県〕黄水人民公社・石門ダム・東大方揚水ステーション、〔新郷〕七里營人民公社、〔西安〕西北国営棉紡績第三工場・陝西省博物館・半坡博物館、〔北京〕西城区五・七幹部学校・北京師範大学・毛主席記念堂・西单菜市場。また鄭州における国慶節の様子が記されている。

このほか、帰国後に行われた宮川団長ほか 3 人による座談会、北京での馬凌（中国農学会秘書長）の「四つの近代化と中国農業」という講演の要旨、および 19 人の団員の感想文がある。

## 静と動に触れて：北海道文化界訪中国報告／第一次北海道文化界訪中国

札幌 北海道日中文化交流懇話会 1978（昭和 53） 188 頁 〔XI-6-B-d-60〕

本訪中国の団長となったのは、北海道で北方領土の返還運動に尽力していた高倉新一郎（北方領土返還促進会）で、高倉が道内の文化人を誘う形で北海道文化界代表団を組織し、1976 年 12 月 7 日から 2 週間中国を訪問した。同行した文化人には詩人更科源蔵、陶芸家山岡三秋、北海道大学理学部教授増淵法之ら 8 名がおり、加えて日本中国文化交流協会の事務局次長であった村岡久平が秘書長として参加し、計 10 名での渡航となった。滞在中の費用は中国人民対外友好協会が負担したという。こうした一地域で各方面の文化人を集めて訪中するのははじめてのことだった、と高倉は書き残している。

一行は北京に到着後、ハルビン、西安、上海を巡り、上海から帰国した。旅程のうち興味深いのは、本代表団が北方領土返還に関係していたために、「ソ連社会帝国主義の現状と過程」についてソ連研究家から話を聞く機会が設けられたほか、「北方領土問題」に関する懇談会や中国の国境問題についての学習会にも出席する機会があった点である。代表団は「いたるところで、日本の北方領土返還運動を中国人民は絶対に支持する」という励ましを受けたとし、団長の高倉は「中国に招かれて、北方領土問題が単にわが国の北方に起りつつある小さな島々、海域の問題ではないことを知るとともに、国際間にも大きな問題であることが知らされ、急に視界が著しく拡大されたのを感じた」と記している。訪問中、中国の著名な詩人張光年と面会の機会が設けられたが、その際に張から北方領土返還運動を励ます「北海風濤歌」という詩歌が贈られ、本書にはその全文が掲載されている。また本書には、あとがきの後ろに「日程表」が付してあり、詳しい旅程を知ることができる。（山口早苗）

### 第三回中国三誌友好の翼／『第三回中国三誌友好の翼』代表团

東京 1978（昭和 53） 151 頁 〔10505〕

第 3 次中国 3 誌（『北京週報』『人民中国』『中国画報』）読者友好の翼訪中団の訪中報告書。一行は中村璋八団長以下 103 名。滞中期間は 1978（昭和 53）年 8 月 6 日～8 月 19 日。訪問地は北京・長春・瀋陽・撫順・鞍山。北京では、町の人民公社ともいえるべき朝陽門街・西長安街などの街道委員会や大柵欄地下壕、3 誌の印刷工場などを見学し、また張香山（中日友好協会副会長）から、4 つの現代化に向かっている中国国内の状況や対ソ・対ベトナムなどの国際問題についての話を聞いた。長春では、日中平和条約締結の報を聞き、吉林大学や「紅旗」の自動車工場などを見学し、また瀋陽では、中国医科大学・中医学院・五三人民公社・八一人民公社・工作機械工場など、鞍山では、鉄鋼コンビナート、撫順では、露天掘炭鉱などを視察した。

本書はこの訪中団員 81 人の感想文を集めたもの。ほかに北京における張香山の講演要旨が収められている。

### 友好と連帯をめざして／第三次日本学生友好訪中団

東京 日本学生友好訪中団事務局 1978（昭和 53） 79 頁 〔10588〕

第 3 次日本学生友好訪中団（31 名）は、1978（昭和 53）年 3 月 27 日から 4 月 11 日まで上海・南昌・長沙・韶山・北京を訪れた。一行の最大の関心事は教育にあったので、以下の諸学校を参観して中国教育の現状の一端を報告している。すなわち、半労半学の江西省共産主義労働大学、復旦大学・清華大学、上海市静安区第一中心小学校、9 年制の韶山小学校、上海市市西中学校の 6 ヲ所である。このほか、中国共産党第 1 次全国代表大会会址、上海盧湾区計器部品工場、龍華精神病防治院、中央民族学院、江西トラクター工場、虹橋人民公社、北京友誼医院にも行っている。一行は訪問先での質問事項をあらかじめよく準備しており、したがって上記の学校・工場・病院・人民公社などについての報告は、中国側の概況説明とともに質疑応答を詳しく記している。

### 你好／第 2 次中国三誌友好の翼第 2 班

1978（昭和 53） 42 頁 〔10392〕

1977（昭和 52）年 10 月 18 日から 11 月 1 日まで中国を訪れた第 2 次三誌友好の翼第 2 班 19 名の感想文集。訪問地は北京・大寨・杭州・上海。北京ではまず北京大学を訪問し日本語科の学生と懇談したが、席上、団員からは大学入学前に労働従事が義務づけられなくなった教育制度に対して感想を求めたり、日本語専攻と就職との関係を尋ねたりしたこと、またかつての紅衛兵は当時のことを話したがらなかったことが報告されている。ついで完成したばかりの毛主席記念堂を訪れ遺体を拝したが、その時の感動を 2 人が語っている。北京ではこのほか動物園・地下壕・長城など数ヶ所を参観した。大寨の報告のなかでは、公社員の高層アパートが関心をひいている。杭州では西湖遊覧、絹織物工場、人民公社などを見学した。上海では、少年宮・魯迅の墓および故居・中山故宮・小学校、ほか数ヶ所を参観したが、感想文にはかつての上海と比べつつ街の様子を述べたものが目立っている。

## 西域紀行：シルクロードの歴史と旅／藤堂明保著

東京 日本経済新聞社 1978（昭和 53） 238 頁 [10374]

本書は 2 部に分れている。第 1 部の「西域学への招待」では、基本知識として殷から漢代までの西域の歴史を概観している。第 2 部が「シルクロードの十字路を行く」と題する旅行記に当たる部分で全体の 3 分の 2 があてられているが、ここでも紀行文の間に、第 1 部に続く六朝以後の西域史と歴史的エピソードを多く織りまぜて西域の過去と現在を語っている。

著者らは、日中友好文化交流協会の訪中国として 1977（昭和 52）年 8 月 15 日から 27 日まで新疆ウイグル自治区を訪れた。一行は中島健蔵（団長）・宮川寅雄・井上靖・東山魁夷・国伊玖磨・司馬遼太郎で、中国側は中日友好協会秘書長の孫平化が案内責任者をつとめた。

日本を発ったその日のうちに北京を経て新疆ウイグル自治区の中心市であるウルムチに着き、以後 10 日間、同市をベースにしてイリ地区、トルファン、ホータンと、天山山脈・タクラマカン沙漠の南北に足をのばした。まず、天山北路の上を飛行機で飛んで同自治区の西の端、イリ地区へ赴いた。イリ・ハザック自治州の中心市である伊寧で、絨氈・毛織物工場、皮革工場、パンジン人民公社を見学したのち、その北方にあるセリム湖畔にハザック族の包を訪ね、女民兵と小学校生徒の射撃やハザックの競馬を見せてもらって歓迎をうけた。ついで、ウルムチからトルファンまでは炎熱の中を 180 キロメートル車を走らせた。ブドウ人民公社と五星人民公社を訪ねて接待をうけたほか、交河古城、高昌故城、アスターナ古墳群、ベズクリク千仏洞を見学した。最後に、天山山脈とタクラマカン沙漠を北から南へ飛びこえてホータン（和田）をおとずれた。ここでは、玉の原石を集めて全国に送り出している手工業辦事処と白玉がとれたという白玉河を見に行った。そして旅の最終日に、天山山脈の中腹にある天池に出かけて、その清冽な風景に旅の名残りを惜しんだ。

## 中国ノート／中山千夏著

東京 話の特集 1978（昭和 53） 262 頁 [10523]

本書は、才気煥発ぶりで知られるテレビ・タレントであり革新自由連合代表でもある（旅行団の名簿では著述業）著者が、その特性を発揮して綴った中国旅行記である。著者は、第 2 次東京婦人活動者友好訪中国（17 名）に加わって 1978（昭和 53）年 7 月 31 日から 8 月 15 日まで香港・広州・北京・長春・瀋陽・上海の各地を訪れ、工場、人民公社、史跡、映画製作所、労働者団地や、撫順の露天掘炭坑などを見学した。本書の前半では旅の日程に沿って、後半では教育、生理用品、便所、人々、ホテルなど項目に分けて、見聞と感想が語られている。著者の感想は常に粹にとらわれない卒直なものであるが、とくに女性問題に示す関心は深い。社会の男性支配を覆そうとする立場に立つ著者は、現在の中国の女性解放が男性支配の体制下のものであるとみて、「天の半分」をどう支えるかが問題であると指摘している。旅全般については、中国側の用意した所へ行き、用意した人々にしか会えないことに不満を抱いている。それでも、場所によって物事のありようが少しずつ違っていることに気づき、これを、中央集権制の内部に流動性をもたせている「中国のすごさ」と感じとっている。また、「四つの近代化」に励む中国の姿を「社員一同一丸となり、愛社精神に満ちて発展を目ざす貧しい会社」と表現し、そのような中国で「金持ちの日本人」の一人である著者は「面白くて居心地悪い」心境になっている。白紙の状態で中国へ行った著者の結論は、中国が「地獄でも天国でもなく、人間の国だった」ということであった。



### 東北三省の農業：水田・ハウス・機械化を中心に／日中農交代表訪中団

東京 日本中国農業農民交流協会 1978（昭和 53） 116 頁 〔10585〕

日本中国農業農民交流協会代表訪中団の訪中報告。一行は日中農交理事のほか、大学・農林中央金庫・全国農協連合会・全国森林組合連合会の人たち。旅行期間は 1978（昭和 53）年 4 月 25 日～5 月 16 日。訪問地は、北京・大連・大慶・ハルビン・長春・公主嶺・瀋陽など。農業だけでなく、工場・学校・病院・文化遺産など広い範囲にわたり視察したが、主力は農業におかれ、また各地で現地の技術専門家と意見を交換した。各地で視察した主な農業およびそれに関連する施設機関は次の通り。

〔北京〕紅星中朝友好人民公社・朝内菜市場，〔大連〕宮城市人民公社，〔ハルビン〕新発人民公社・香坊実験農場・黒龍江省農業科学院・東北林学院，〔長春〕鳳鳴人民公社・淨月潭実験林場，〔公主嶺〕吉林省農業科学院，〔瀋陽〕渾河站人民公社・小型トラクター工場。

本書はこの東北視察報告。経済全般について、教育文化についての記述もあるが、農業に関する視察報告が主で、農業の機械化、稲作、水利事業と寒冷地果樹、ハウス栽培、林業、畜産、全国供銷合作総社、婦人労働についての記述がある。

### 130 人の見た中国：1977 年訪中報告／日中農交友好の翼

東京 日本中国農業農民交流協会 1978（昭和 53） 292 頁 〔10586〕

「日中農交友好の翼」訪中団の訪中報告。一行は、八百板正（日中農交会長・衆議院議員）団長以下 130 名。旅行期間は、1977（昭和 52）年 8 月 2 日～8 月 16 日。訪問地は、北京・大寨・南京・揚州・上海。

本書のはじめには、団長の「あいさつ」のほか、北京における譚震林（全国人民代表大会常務委員会副委員長）との会見記、張琪瑞（中国農学会理事）の「中国農業の現況」と題する講演、訪中団秘書長の堀江真一郎（日中農交常任理事）の所感を載せる。ついで見学した諸施設を 8 部門に分けて、これについて報告する。それらの諸施設は、人民公社については、上海郊外の馬陸人民公社・黄渡人民公社・城東人民公社・城西人民公社・馬橋人民公社・塘湾人民公社・七一人民公社、揚州郊外の湾頭人民公社、大寨人民公社、李家莊人民公社、農業研究施設については、南京の江蘇省農業科学研究所・南京市林産工業学院・華東水利学院・南京土壤研究所、農業施設については、江都水利センター、上海の三角地市場、労働者新村については、上海の曹楊新村・蕃瓜弄・長白新村、教育施設については、北京の第 4 幼稚園・第 5 幼稚園、南京の小宮小学校・秦淮小学校・東方紅中学校、上海の上海市少年宮・上海市普陀区少年宮、病院については、北京の工農兵病院、南京の鉄路病院、名所と旧蹟については、故宮、万里の長城、明の十三陵、南京の長江大橋、揚州の鑑真記念堂、上海の工業展覽館などである。このほか大寨生産大隊で行った交流座談会の記録もある。終りに、日程、団員名簿、度量衡早見表を付ける。

### 若者は行く：握手と拍手の中国の旅／日中友好赤い鳥の会

1978（昭和 53） 81 頁 〔10510〕

本書は、1978（昭和 53）年 3 月 20 日から 29 日まで中国を訪れた東京高校生友好訪中団（21 名）の旅の記録と感想をまとめたものである。訪問地は上海・南京・無錫。上海では天山中学

校と徐匯少年体育学校、南京では南京小營小学校と魯迅中学校、無錫では梅村中学校を訪れて、中国の同世代の生徒たちと交流した。かれらは、授業を参観して真面目な授業態度に驚き、またグループに分れての話し合いや「言葉は通じないが心が通じた」1対1の会話を通して中国の生徒たちの考え方を知り、明るく生き生きと将来を語る姿に強く印象づけられている。さらに、上海の鳳城工人新村、無錫の梅村人民公社とセメント船工場などでは、中国の人々の暮らしぶりや働く姿の一端にふれている。このほか、上海の魯迅の墓と旧居、南京の雨花台・太平天国記念館・中山陵なども見学している。一行のなかには、夜、上海の町中へ出て大衆食堂へ入って餃子を食べた者、理髪店で散髪してもらった者もいて、感想文にはその時の興奮がそのままに語られている。

#### 中国見聞記／日中友好東京都婦人訪中団

東京 日中友好協会東京都本部 1978（昭和 53） 24 頁 〔10587〕

日中友好東京都婦人訪中国の訪中報告。一行は小林時枝団長以下 25 名。旅行期間は 1978（昭和 53）年 9 月 4 日～9 月 17 日。訪問地は北京・大同・太原・石家荘。北京では、毛主席紀念堂・万里の長城・王府井、大同では、雲崗石窟・北村人民公社・大同第十八小学校・煤峪口炭鉱、太原では少年宮、石家荘では、綿紡績工場幼稚園・ベチューン病院・河北省五七幹部学校などを見学する。

本書にはこれらの施設の見学記のほか、中国の女性のこと、再刊された『中国婦女』のこと、映画・演劇のことや、婦女聯合会第 4 回大会での康克清女史の報告なども記されている。

#### ひとたばのわら／農村婦人友好訪中団

東京 1978（昭和 53） 56 頁 〔10387〕

農村婦人友好訪中国の訪中報告。一行は団長の安井弥生（日本婦人会議旭川支部監事）以下 21 名。旅行期間は 1977（昭和 52）年 11 月 18 日～12 月 2 日。訪問地は香港・広州・仏山・長沙・韶山・杭州・上海。

本書は日記風に見学先のことを書いているが、特に広州の羅崗人民公社、杭州の絹織工場、上海の控江労働者新村、龍華病院、七一人民公社、この公社での中国婦人との交流会の記事が比較的くわしい。

#### 中国の女たちを訪ねて：1977 年夏／働く婦人の友好訪中団

1978（昭和 53） 74 頁 〔10430〕

学生 4 人を含む働く婦人の訪中団は、1977（昭和 52）年 8 月 3 日から 17 日まで北京・済南・無錫・蘇州・上海の各地を訪れ、工場・人民公社・病院・学校・名勝旧蹟などを見学した。本書では、これら諸施設での見聞と団員の感想を、〔社会と暮し〕〔革命と教育〕〔紅と専〕〔女と解放〕〔街と人〕の 6 項目に分けてまとめている。

この訪中国の訪中動機は中国女性の労働と生活を実際に見たいという点にあったので、団員の観察も鋭い。女性が男性の仕事の分野にも進出している一方、たとえば、人民公社で軽作業を婦人が分担していたり、特別な技能をもたない中高年婦人を地域活動に組織していることなどに、性による分業が肯定されている側面を見て、こだわりを感じた人々もいた。済南では済南市婦女聯合会を訪ね、懇談の機会をもったが、この機関が党の指示を婦人に徹底させる所で

あるのを残念に思った人もいた。

**燕京佳信：船津輪助の北京通信 明治三十五年～三十六年／船津輪助著**

**鳩ヶ谷 船津喜助 1978（昭和 53） 276 頁 〔10511〕**

著者の船津輪助は 1902 年 9 月初めから 1903 年 6 月初めまで北京に滞在し、北京東文学社に勤め中国人に日本語を教えていた人物である。北京東文学社は 1901 年 3 月に中島裁之が師である呉汝綸及び戸部郎中であつた廉泉と共に創つた教育機関であつた。本書は船津が北京滞在中に実父と岳父に書き送った書簡をまとめたもので、東京都足立区の船津家に残されていた書簡を長男の喜助が散逸を恐れてコピーを取り、輪助の孫にあたる小川博が全文を原稿化し、詳しい注を付け、1978 年に刊行された。本書の末尾には小川による「船津輪助のこと」という解説も付されており、船津の経歴が整理されている。

船津が北京で関心をもったのは、「寺刹道観、古跡の探訪と市中の風俗習慣の観察」であり、清末北京の風俗について多く言及がある。この点から、本書は当時の北京の風俗を知るための貴重な資料と言えるだろう。また船津は北京近郊を旅行することはあっても、中国各地を巡ることはなかったようである。（山口早苗）

**社会主義中国みたまま：ソ連邦と対比して／山木茂著**

**出版地不明 山新 1978（昭和 53） 27 頁 〔10393〕**

著者の山木茂は広島県で社会運動に従事した人物で、『広島県社会運動史』（労働旬報社、1970 年）などの著作がある。山木は学習連絡会議の副団長として、1977 年 10 月 4 日から 18 日までの 2 週間、北京・大寒・石家荘・鄭州・上海などを視察した。本書はタイトルからわかる通り、ソ連と中国の現状を比較したもので、ソ連に 1959 年、1966 年の 2 度訪問した著者の経験をもとに書かれている。

著者が「私の今次の旅行の最大関心事の一つは、中国では政治的自由＝言論、出版、結社の自由はどうなっているかということでありました」というように、中国国内の民衆の行動の自由度に注意を払っていた。実際に旅行中に見聞きしたことから「文化面でも百花齊放―百家争鳴すべき自由」もあり、「非黨員でも多く書いている」という点からその自由度をある程度評価している。さらに、自由度をソ連と比較してみると、特に公安では中国が「逮捕、監禁して労働改造」を重視しているのに対し、ソ連ではそうした方法が取られていないとして中国を評価するなど、中国の政策を肯定的にとらえている。（山口早苗）

**1979**

**誰も書かない中国の戦中・戦後：ああ北京に、再び！／赤間英夫著**

**東京 本郷出版社 1979（昭和 54） 258 頁 〔10851〕**

著者は「日中友好市川市民の翼訪中国」（団長は市川市長高橋国雄）の一員として、1978（昭和 53）年 11 月 8 日成田を発って、北京・上海・広州・香港とまわり、11 月 18 日成田に帰る。

本書はこの旅行記。著者は学生時代に中国語を学び、1935、36 年の夏には中国を訪れ、1938 年以降は北京に住んで、朝日新聞の北京支局にも勤務、また現地で応召し、1945 年 5 月内地転属となるまで中国にいた。したがって古い中国に親しみ深く、本書においても常に古い中国

と対比しながら、訪問した諸都市のこと、見学した諸施設（北京では故宮・長城や四季青人民公社、上海では紡織機械工場・交通大学・四平工人新村、広州では広州貿易会・農民運動講習所など）のこと、王府井・琉璃廠や胡同・新村にうかがえる民衆の生活のことを記している。そしてこの種の訪中団員の旅行記には珍しく、「中国農村の公社化は果たして本当に農民を幸福にする道だったのであろうか」などと、中国の現状に対し批判的で、それは「老北京の中国観」と題する印象記で最も鮮明である。

なお後記として、訪中時に開かれていた中共 3 中全会にすることが記されている。

### 新中国の素顔／阿部徹雄著

東京 求龍堂 1979（昭和 54） 141 頁 [10564]

著者の阿部徹雄は 1936 年に東京高等工芸学校を卒業後、毎日新聞東京本社に入社し、戦前は特派員として南寧や広州に滞在した経験のある人物である。本書は写真集であり、阿部が撮影した北京・上海・蘇州・南京・杭州・桂林・南寧・広州の写真が収められている。収録された写真は「じっくり見ていただくため」にほとんどが白黒で印刷され、刷り色も純黒のインキにするなど、こだわりが見られる。その理由は、「一色もので中国の現状を報道する場合、すべての面において、厳しさをもって貫かれているので、温黒調は適切ではない」からだという。具体的な滞在年は不明だが、「解放後の十年間に、四度出かけております」と述べており、戦後複数回にわたって訪中したことがうかがえる。

著者の中国への思いは「まえがき」にも表れており、日本人は「中国が希望する線にそって、お手伝いすべき」であり、それは「八年間も中国を戦場にした呵責の念からも、当然援助すべき」だと主張する。興味深いのは中国と日本の関係を本家と分家に例え、日本人が中国を訪問する様子を「都会に出た分家の男が、田舎の本家に帰ってきた感じ」と表現している個所で、分家は「ちょっぴり金もうけ」をしたが、「心を鎮める、きれいな静寂を失ってしまった」として中国の静けさと日本の騒々しさを対比的に描写している。（山口早苗）

### 有吉佐和子の中国レポート／有吉佐和子著

東京 新潮社 1979（昭和 54） 252 頁 [10591]

著者は人民公社で三同生活（農民と同じ家に寝て、同じ食事を取り、同じ労働をする）をすることを目的に、1978（昭和 53）年 6 月 12 日から 7 月初旬まで中国を訪れた。著者の強い希望が入れられて、河北省遵化県の西舗生産大隊と沙石峪生産大隊、旅大市郊外の後牧生産大隊、蘇州の長青人民公社に 4、5 日ずつ滞在することができた。ただし蘇州では人民公社内に泊めてもらえず、近くのホテルから毎日通った。さらに瀋陽、広州、上海でも 1 日だけではあったが人民公社を訪ねることができた。著者は、先年発表した小説『複合汚染』執筆の際に得た知識を生かして、どこの人民公社でも農薬と化学肥料の使用状況についてつっこんだ質問を浴びせかけ、その問答を詳しく記している。もう一つ著者が強い関心をもったのは人民の監督下に労働をしている旧地主の現況で、2 ヶ所で著者の会うことができた旧地主との会見の模様と著者の印象とを語っている。このほかにも人民公社でのさまざまな見聞・体験を述べていて、本書は中国の農村と農業についての実質的内容をもったレポートとなっている。

著者はまた、旅の始めと終りに、北京と上海で旧知の文芸界の人たちの訪問をうけた。そして劉白羽・周揚・胡絮青（老舎の未亡人）・杜宣・巴金と十数年ぶりの再会を喜びあい、かれ

らの語った文化大革命時の状況を報告している。

#### 北京便り／安藤彦太郎著

東京 玉川大学出版部 1979（昭和 54） 168 頁 [10783]

早稲田大学教授で中国研究者の安藤彦太郎が在外研究のため家族を連れて 1976 年 5 月から 1978 年 10 月までの約 2 年半の間、北京に滞在した際に記したエッセイである。安藤にとって北京での在外研究は 2 度目で、その前は 1964 年 7 月から 1966 年 8 月までの 2 年間滞在していた。

本書は、『中国通信』『第二中国通信』に書き送った原稿をまとめる形で構成された。著者は滞在した約 2 年半の間に様々な経験をしている。それは、唐山大地震（1976 年 7 月）、毛沢東の死去（1976 年 9 月）、文革終結に伴う四人組の打倒（1976 年 10 月）、鄧小平の復活（1977 年 3 月）、日中平和友好条約の締結（1978 年 8 月）などで、著者はそれぞれについて見聞きしたことをまとめている。

文革について、訪問前には「文化大革命は近代社会で形成された文化的な諸価値を洗い直し、新しい文化創造のための条件をつくりだす」ものとして肯定していた著者であったが、実際に中国に行ってみると、熱気は感じられず「学者たちの意気上がらず」の状態であったと述べる。これについて文革が四人組によって「途中から妙な形にねじまげられてしまった」として文革の未完成を残念がる様子がうかがえる。（山口早苗）

#### 現代中国の生活・住居・街／石東直子著

東京 龍溪書舎 1979（昭和 54） [10816]

執筆当時、著者は市浦都市開発建築コンサルタツの職員であった。具体的には、「生活空間を整備する計画」の仕事に携わっており、その関係で、1976 年 8 月と 1977 年 12 月の 2 回、約 1 か月間中国を旅行した。1 度目の旅は「見るもの聞くもの多くに感動し、とくに女性の生き生きとした瞳と自信あふれる生きざまに感動」し、2 度目の旅は「ふるさとに帰ったようななつかしさがあった」と回顧する。1976～77 年という時期は、周恩来や朱徳、毛沢東の死去、第 1 次天安門事件、唐山大地震など、多くの重大事件が起きた「激動の時期」であったが、「外来者」の著者の目から見て、街にあふれる人々の表情に変化は見つけられなかったという（「はじめに」5～8 頁）。著者は、上海、西安、洛陽、長沙、武漢、北京の各地を訪問。観光地に加え、工場や病院、公園、商店街、住宅地なども訪れ、人々の日常生活に強い関心を持ち、細かく記録している。本書にはその記録とともに多くの写真が掲載されている。著者は「新中国の顔」として、工人新村、人民公社、女性に着目した。そのうえで、上海の彭浦新村や泗塘新村、塘湾人民公社を見学したり、上海市婦女聯合会と懇談したりすることを通し、中国に対する理解を深めた。（久保茉莉子）

#### 新・中国取材記Ⅲ：ハルビン・瀋陽・大連／NHK取材班

東京 日本放送出版協会 1979（昭和 54） 318 頁 [10341]

本書はNHK取材班（郷治光義・四之宮脩浩・井上孝利・高橋秀・松本忠・武石昌晴）が、1978（昭和 53）年 8 月 3 日、北京を発って 9 月 1 日まで、中国の東北地方をテレビ番組の取材のため訪れた際の記録である。取材地は、東部中ソ国境地帯の 853 国営農場や、チャムス近

郊・ハルビン・大慶・長春・瀋陽・撫順・鞍山，それに旅大の内の大連区域などであるが，特に注目されるのは中国最北端の 853 国営農場を訪れたことである。

本書では，まず北京からチャムスまでの汽車・ジープでの旅を，綏化に近い双河人民公社を訪れた時のことを含めて記し，ついでチャムスから自動車を訪れた中ソ国境の 853 国営農場のことをかなり詳しく述べる。ついで訪問都市を結ぶ鉄道のこと，各都市のことが日本の支配下にあった時代と関連させながら記され，大連ではなおこの地に残っている日本女性のことが述べられる。なお各都市の一般的状況のほか，チャムス郊外では松花江の水運，樺川県人民公社，蘇木河国営農場，ハルビンでは山の手にあたる道里区，下町にあたる道外区，名物の児童列車，黒龍江省雑技団，松花江，対岸太陽島の国営療養所，大慶では油田，油井掘削隊長だった王進喜の事跡展覧館，長春では吉林医科大学臨床学院（旧國務院），地質宮広場（旧皇帝府建設予定地），人民広場（旧大同広場），長春映画製作所，「紅旗」「解放号」などの第一汽車製造廠，瀋陽では故宮を中心とした旧城市，旧満鉄附属地を含む中心街，鉄道西側に発達した鉄西工業地帯，撫順では露天掘炭鉱，鞍山では鉄鋼コンビナート，大連では大連賓館（旧ヤマトホテル），大連港，新大連港，西郊の新工業地帯，大連貝彫廠，地下壕に造られた友誼商店のことなどが記されている。

#### 西湖のほとり／尾崎秀樹著

東京 有斐閣 1979（昭和 54） 233 頁 [10919]

著者の尾崎秀樹は，ゾルゲ事件で死刑となった尾崎秀実の異母弟である。文芸評論家となった尾崎は，文化大革命下の 1967 年と 1971 年に訪中し，その記録を『新しい中国の顔』としてまとめていたが，本書は 1978 年に再び訪中した際に見聞したことをまとめたものである。1978 年の訪中は，井上靖を団長とする作家代表団の一員としての訪中であつた。尾崎はこの訪中において，茅盾，周揚，夏衍といった中国の名だたる文学者たちや，文化大革命中に亡くなった老舎の未亡人にも面会している。「私にとって中国とは」の問いかけなくしては，中国への理解は生まれない」という尾崎が訪中を通じて得た所感は，今日も色褪せることはないだろう。

（吉見崇）

#### 中国考古見聞／関西文物保護青年職員友好訪中団編

京都 関西文物保護青年職員友好訪中団 1979（昭和 54） 90，13 頁 [10910]

1978 年 7 月 5 日から 7 月 21 日まで北京－安陽－洛陽－西安－広州などを訪問した関西文物保護青年職員友好訪中団一行 26 名の記録である。団長は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第一室長の町田章。関西 2 府 4 県の教育委員会に所属する埋蔵文化財専門職員と研究機関職員を基本に組織され，中国国際旅行社への申請を通じて実施された。北京の頤和園，天壇公園，万里の長城，故宮博物院，安陽の殷墟，洛陽の漢魏洛陽城，西安の永泰公主墓，乾陵，大雁塔など各地の史跡や博物館を訪問した見聞を団員各氏が綴っている。文化財に限らず，北京市師範学院の視察報告や各地で見られた植物の一覧も含まれている。現地視察のほか国家文物局関係者との交流会も行われ，陳滋徳文物處處長，蔡学昌文物保護科学技術研究所副所長らとのやり取りでは，中国における文物保護の組織機構や専門家養成，人員不足，発掘における人的配置といった日中で共通して課題となっている事柄について意見交換を行った。巻末には訪中団の詳細な旅程が付される。

（池田尚広）

### 近藤康男の訪中ノート／近藤康男著

東京 農山漁村文化協会 1979（昭和 54） 312 頁 〔10850〕

著者は前後 5 回、中国農学会から招かれて中国を訪問している。第 1 回は 1957 年で、『新中国のあしおと』はその旅行報告。第 2 回は 1973 年で、『農民哲学の中国に行く』がその旅行報告。第 3 回は 1975 年 10 月、第 4 回は 1976 年 5 月で、何れも友好訪問。最後の第 5 回は 1978 年 11 月で、果樹技術代表団員として、浙江・広東などのみかん産地を訪問する。

本書は、この 5 回の訪問を総合して、6 部に分けて視察結果を報告したもので、中国の農業を知るに恰好の書である。第 1 部「工場を訪ねて」は北京ベニロン工場、西安の陝西第一毛紡織工場のこと、第 2 部「人びとの生活」は上海の瑞金病院、北京の紅星人民公社の医療のこと、第 3 部「人民公社を訪ねて」は瀋陽の八一人民公社、山西の大寨生産大隊のこと、第 4 部「大都市の農業」は上海の農業展覧館、彭浦人民公社、六里人民公社、陝西北路菜場のこと、第 5 部「革命の遺跡と観光」は広州の農民運動講習所、桂林の景勝、江南（浙江）の農村風景のこと、第 6 部「柑橘の旅」は浙江・広東の人民公社におけるみかん栽培、広東・湖南の国営農場におけるみかん栽培のことを記す。

### 中国の幼稚園：幼児教育者訪中記／清水驍著

東京 知能教材開発センター 1979（昭和 54） 170 頁 〔10875〕

著者の清水驍は 1926 年生まれで、1953 年に早稲田大学を卒業後、検定教科書の編集に従事し、その後 1972 年に英才教育研究所理事長、1976 年に知能教育学会会長となった。本書のほかに、著書として『知能教育の心得』や『アメリカの知能教育』がある。本書は 1979 年 5 月に、清水が幼児教育者友好訪中団の一行とともに、北京、桂林、南寧、武鳴（広西チワン族自治区）、広州にある 5 つの幼稚園を訪問した記録である。清水は、どの幼稚園を訪問した時も、「知育、徳育、体育を全面的に発展させ、社会主義的自覚を持つ勤労者を育てるということ、もう一つは婦人労働者の労働を軽減させるということ」の 2 つが園の目標として掲げられていたと記し、文化大革命終結後の幼稚園の様子が描出されている。（吉見崇）

### 中国紀行／下村非文監修

八尾 若林南山 1979（昭和 54） 144 頁 〔10848〕

監修者の下村非文（本名は下村利雄）は 1902 年生まれで、1926 年に東京帝国大学経済学部を卒業後、台湾銀行に入学し、広東、上海、南京の各支店で業務に従事した。第二次世界大戦終結後、下村は証券処理調整協議会大阪支所長などを務めた。下村の俳句歴は、1949 年に俳句雑誌『ホトトギス』の同人となり、1964 年には『山茶花』を主宰している。本書は、下村以下計 22 名が関西詩歌俳句友好訪中団として 1978 年に中国を訪問した記録である。なお、本書の発行人である若林南山（本名は若林輝夫）は、同訪中団の秘書長を務めた人物である。

（吉見崇）

### 新しい長征への息吹き：中国・東北地方を訪ねて／全国農業協同組合役職員連盟第 3 次友好訪中団

東京 1979（昭和 54） 105 頁 〔10663〕

全国農業協同組合役職員連盟第3次友好訪中団の報告書。一行は団長の細谷喜勝（静岡県農協役職員連盟委員長）以下22名。期間は1978（昭和53）年9月17日～10月4日。経路は成田－北京－哈爾濱－長春－吉林－永吉－撫順－瀋陽－北京－成田。

本書は4部からなる。「明けゆく中国・東北地方の表情」は旅行の概要。「各地にみる素顔の人民公社」では、旅行中に視察した北京の東北旺人民公社、黒龍江の国営香坊実験農場、長春の浄月人民公社、永吉の烏拉街人民公社阿拉底生産大隊、瀋陽の五三人民公社、「東北寸描」では旅行中に見学した北京の全国農業展覽館、瀋陽の遼寧省工業展覽館、東北の3つの宝といわれる鹿、テン（ミンク）、朝鮮人蔘を飼育栽培する吉林郊外の龍潭山養鹿場、農業以外での東北の躍進を象徴する長春の自動車工場、吉林の豊満ダム、撫順西の露天鉱について記す。最後の「見たまま感じたまま」は団員15人の訪中感想。ほかに巻頭に、団員5人による帰国後の座談会記事、旅行中に聞いた2つの講演——馬凌（中国農学会副秘書長）「中国農業の課題」、李振清（中国農学会黒龍江省分会秘書長）「変貌する黒龍江省の農業」——を載せる。

### 私たちの中国／全国図書館職員友好之翼訪中団三班

1979（昭和54） 52頁 〔10722〕

1978年6月3日から19日まで中国を旅行した図書館職員訪中団第3班18人（全員21人）の感想文とスナップ写真をまとめたもの。本班は専門図書館の職員を中心に編成されたようである。旅程は、上海・無錫・揚州・南京・鄭州・北京。この訪中団の主目的であった図書館見学については、上海図書館・南京図書館・北京図書館・北京大学図書館・清華大学図書館・中国科学院図書館を参観してその目的を果し、さらに、嘉定県馬陸人民公社の図書室、無錫ジーゼルエンジン工場の図書室をも見ている。このほか、博物館や史跡名勝の見学、人民公社・工場・病院の参観、観劇など、豊富な内容の旅行をしたようであるが、その半面、肝心の図書館見学の時間が不十分であったとの感想も述べられている。

なお、本書に寄せられた感想は全般的な旅の印象を綴ったもので、図書館についての詳細な報告は、『中国研究月報』367号にある。

### 中国旅行報告／滝川巖著

東京 滝川巖 1979（昭和54） 164頁 〔XI-6-B-d-62〕

著者の滝川巖は1913年生まれで、1939年に東京帝国大学医学部を卒業して海軍の軍医中尉となり、第二次世界大戦後は国立横浜病院などに勤務した。本書は、滝川が1979年1月に日中友好開業医師参観団の一員として訪中した記録である。滝川は広州、武漢、鄭州、開封、北京の各都市を巡った。（吉見崇）

### 十七人中国の旅／多摩地区中国語学習者訪中団

国立 日中友好協会国立支部 1979（昭和54） 40頁 〔10662〕

多摩地区中国語学習訪中団の訪中報告書。一行は金丸良子（荒川区役所）以下17名。団員の年齢・職業は雑多で、また中国語を学習していない人も混っている。旅行期間は1978（昭和53）年9月23日～10月6日。成田から香港を経て、広州・長沙・桂林・南寧を訪問、南寧では広西壮族自治区民族学院・南寧園芸場・武鳴県双橋人民公社を視察するほか、国慶節を祝っている。



本書は、団員の感想文 13 篇をおさめる。それらは各地の風光をめで、中国語のこと、女性のこと、街や建築のことを語り、また見学先の長沙の工農橋小学校、南寧の双橋人民公社、桂林・南寧の新華書店のことなどを記している。

#### 訪中日記／津坂忍著

津 津坂忍 1979（昭和 54） 152 頁 [XI-6-B-d-61]

著者の津坂忍は 1930 年生まれで、大連市伏見台小、大連一中、北京日本中学を経て、日本へ引き揚げた後、三重大学医学部を卒業し、本書の執筆時は津市で津坂内科眼科医院を開院していた。本書は大連出身の津坂が、1977 年に訪中し、上海、大連、瀋陽、撫順を巡った記録である。 (吉見崇)

#### 水墨画の世界：中国への旅／東山魁夷著（絵と文）

東京 新潮社 1979（昭和 54） 218 頁 [E-721.9-ヒカ 01-001]

著者である日本画家・東山魁夷は、艱難辛苦を乗り越えて日本にやってきた唐僧・鑑真への思いから、鑑真を開祖とする奈良・唐招提寺御影堂の障壁画制作に 10 年の歳月をかけて取りくんだ。本書は、東山の生涯を代表する大作となったこの障壁画の制作のため、3 度にわたって中国を旅し、各地の風景を取材した折の旅行記とスケッチ集である。初回の旅は 1976 年に「日本文化界代表団」に参加して北京－大寨－西安－南京－揚州－上海を巡ったのち、著者夫妻のみで太湖－桂林を旅した。2 度目は 77 年で、ウルムチー－ニンートルファンなど天山山脈の北と南を巡り、さらにタクラマカン砂漠を越えてホータンに到った。3 度目は、78 年に北京と瀋陽で著者の個展が開催されたのを機に洛陽－揚州を経て南京－黄山を旅している。いずれの旅も日中文化交流協会とその依頼を受けた中国人民対外友好協会の協力を得て実施され、各地での風物の写生には大きな便宜がはかられた。

旅の最中に著者は、若き日に留学したベルリンで目にした西域の壁画群を思い出し、シルクロードの民族歌舞に奈良の都を思い、アスターナ古墳壁画の彩色からは高松塚古墳壁画の顔料を連想する。著者の中国や鑑真に対する深い思いは古代の「交流」への理想の投映である。その信念の強さゆえに、中国で実見した光景の数々は著者の心象風景と結びつき、壮大な障壁画へと昇華されたといえよう。 (辻直美)

#### 現代化中国の旅：社会学者訪中団報告／福武直編

東京 東京大学出版会 1979（昭和 54） 200 頁 [10854]

日本の社会学者 25 名は福武直（東大教授）を団長として日本社会学者友好訪中団を結成、1979（昭和 54）年 3 月 17 日成田を発って、北京・武漢・九江・南昌・上海とまわり、4 月 2 日成田に帰る。

本書はその訪中報告。団員がそれぞれ、北京大学、武漢大学、武漢花山人民公社、上海七一人民公社、武漢鉄鋼コンビナート、江西トラクター工場、九江封缸酒工場、九江地区婦幼保健院、上海市精神病防治院、上海曹楊新村、北京市西城区月壇小学、上海市楊浦少年宮などの見学記を書く。なお巻頭には団長が旅行の大概を記し、巻末には同じく団長が中国の社会学について、その歴史と現状を語る。

## 中国紀行：第二集／早稲田大学教員学生友好訪中団編

東京 早稲田大学教員学生友好訪中団 1979（昭和 54） 83 頁〔10978〕

早稲田大学の教員と学生を中心に構成された訪中団の記録。同訪中団は 1976 年の早稲田大学中国研究青年友好訪中団を母体とし、1978 年 8 月 11～25 日の約 2 週間、香港経由で深圳から入り、広州－鄭州－開封－洛陽を訪問した。滞在中、故宮・頤和園・万里の長城・明の十三陵・龍門石窟などの有名な史跡のほか、広州農民運動講習所跡、鄭州の紡織工場付属の幼稚園、洛陽のベアリング工場などを訪れ、現地の人々と交流している。詳細な旅行記録というよりは団員の体験談・感想文集に近い。史跡訪問や交流体験のほか、人々の日常生活に注目した文章も多い。例えば、北京の街路や書店・百貨店、洛陽の映画・芝居鑑賞の場で見られた光景などが取り上げられている。日本と中国の人々の生活様式やマナーの違いに驚きつつも、そうした両国間の相違を柔軟に受け入れ、相手国を理解しようとする姿勢が見て取れる。ちなみに訪中団の構成員は以下の通り。団長・杉本達夫（文学部助教授）、副団長・上野理（文学部教授）、秘書長・矢作武（教育学部講師）、秘書・教育学部講師 2 名、修士課程院生 1 名。団員：教員 13 名、博士課程院生 1 名、修士課程院生 4 名、学部 4 年生 6 名、学部 3 年生 10 名。

（久保茉莉子）

## 1980

### 十億人の近代化／朝日新聞訪中記者団

東京 朝日新聞社 1980（昭和 55） 248 頁〔10881〕

朝日新聞訪中記者団は 1979 年 10 月から 11 月にかけて、中国各地を訪問した。このとき訪問したのは当時の渡辺誠毅社長以下、政治・経済・外報などの様々な分野の記者 9 名。彼らを招待したのは人民日報社で、訪日への答礼の意味があった。本書の最後には渡辺社長が胡績偉人民日報総編集や鄧小平副首相と行った対談の内容が収録されている。

興味深いのは、訪問中記者が目撃した「上訪人」と呼ばれる人々の描写である。ここでいう「上訪人」は、文革終結後に名誉回復や復職を目指して北京の中南海に「善処」を求め陳情にやってきた人々のことで、当時は毎日 5、6 千人もの人々が訪れた。記者と面会した最高人民検察院政策研究室主任も問題解決の難しさを素直に認めるなど、当時の大きな社会問題として認知されていた。これについて同記者は「文革で負った深い傷跡が、ここでもいやされず、はっきり口をあけているといえそうだ」と感想を述べている。本書の特徴は記者たちが自ら文革を目撃したことで浮かび上がった中国国内の諸問題を淡々と描写する筆致だといえよう。

（山口早苗）

### ふたつのビザ：新井聡の中国・アメリカ写真集／新井聡著

東京 新井聡写真集刊行会 1980（昭和 55） 1 冊〔10927〕

詩人の宗左近は、「新井さんには「わたくし」がない。それが、わたしにとっての強い魅力である」という文を本書に寄せている。本書は、写真家の新井聡が長期滞在したニューヨークと短期滞在した中国で撮った写真を合わせて編んだ写真集である。写真家の羽永光利は、本書の魅力は「別に両国の比較文明論といった風な片意地張ったレトリックは持たずに、自費出版

の、伸び伸びとした編集となっているのが良い」と評した（『出版ニュース』1187号、1980年）。（吉見崇）

**巨象を撫でる：新中国・見たり聞いたり考えたり／大久光著**

**東京 波書房 1980（昭和55） 280頁 [10906]**

著者はかつて戦前に中国で学び、満洲国に滞在した経験があり、戦後松下幸之助の伝記を書いたことで知られる作家。代表的な著作に『松下幸之助一事一言』などがある。1979年に訪中団の一員として中国を再訪し、北京や東北を訪れた。「あとがき」で著者が本書について、「ささやかな見聞を通してまとめあげた中国の印象記」であり、「群盲象を撫でるというのが、私の手も、その小さな一つだった。この巨大な対象を、それで捉えられたなどとは、とても思っていない。一旅行者の限られた見聞、印象から何かを読み取って戴ければ幸い」だと述べるように、訪中時に著者が感じた印象が記されている。参加した訪中団について名称などは示されないものの、参加者には「かつて青壮年の時代を中国大陆で過し、その土地や人間と浅からぬかかわりを持った人が少なかった」という。実際に満鉄社員や熱河で省公署に勤めていた人物などがいた。そうした訪中団の他のメンバーによる訪中の印象も本書には含まれている。

巻末には1979年の中国時刻表に基づき、著者が作成した「東北地方（旧満鉄当時の駅名付き）最新列車時刻表」という興味深い資料も付されている。（山口早苗）

**カメラルポ 中国と民衆／大村哲也著**

**東京 木村経済研究所 1980（昭和55） 90頁 [10911]**

著者は福島県いわき市出身で、法政大学を卒業後、いわき市議会議員を務めた人物。著者は本書刊行までに計4回訪中しており、本書は訪問中に撮りためた写真を掲載するカメラルポとして刊行された。4回の訪中はそれぞれ、日中農交労働活動家友好訪中団での訪問（1976年1月16日～29日、北京・大寨・南京・揚州・上海）、第1回いわき市各界友好訪中団での訪問（1977年1月11日～25日、北京・旅大〔旅順・大連〕・瀋陽・撫順・上海）、福島県民の翼友好訪中団での訪問（1978年8月22日～9月2日、北京・杭州・上海）、福島県下・議長会訪中団での訪問（1979年10月15日～28日、北京・鄭州・開封・邯鄲・洛陽）であった。本書にはこの4回の訪問中に撮影した中国の様々な地域の写真が収められており、当時の中国を知る資料としても有益だろう。

本書の狙いが「中国の庶民の生活を、私達同じ庶民の目で、ストレートに紹介しようということ」にあると言うように、著者が見た当時の中国の人々の姿が本書には映し出されている。例えば、公園で語り合う男女の姿、道端のブロマイド売り、床屋ではブロマイドを貼り出し「新式」の髪形を宣伝する様子などである。これ以外にも、文化大革命によって破壊された文化財の修復、復旧に当たる人々の姿、黄河周辺の山頂まで段々に耕された農地からは、文革後の社会の様子を垣間見ることができる。（山口早苗）

**シルクロードの旅：砂と緑と太陽と／共同通信社**

**東京 共同通信社 1980（昭和55） 200頁 [10887]**

本書は、西安から河西回廊、天山山脈の麓を通り、パミール高原の山塊までを旅した記録であり、古代の仏塔や寺院などが多数の写真を用いて紹介されている。（吉見崇）

## 同志！！僕に冷たいビールをくれ／草野大悟著

東京 講談社 1980（昭和 55） 245 頁 [10885]

著者は俳優で、映画『天平の叢』の撮影のため、上海－蘇州－揚州－大同－北京をめぐる。題名の「冷たいビール」とは、まずは文字通りの意味、すなわち中国で著者がしばしば注文した「氷啤酒」のことを表す。そしてもう一つ、この映画への出演が決まる以前、役者・夫・生活者として「枯れはてそうになっていた」著者の心が飲みたかった「冷たいビール」のことであり、映画の撮影を通してその「冷たいビール」を飲めたことへの感謝の思いが綴られている（244 頁）。

初めて訪れた中国について、著者は「実にいろんなものが入り乱れている国、新しい物を取り入れようとする一面と、数千年にわたって続いてきた習慣との落差が、正直に庶民の生活の中に反映している」と捉えている。本書の中では、撮影時のエピソードだけでなく、著者が中国滞在中に体験したことが率直な感想とともに語られている。まっすぐな道をたくさんの人と自転車が行き交い、車が警笛を鳴らし合う様子、歩行者と自転車との間で小さな交通事故が起きた際に「罵街」と呼ばれる中国式のけんかが繰り広げられていたことなど、著者は中国の人々の日常生活を興味深く観察し、記録している。

著者だけでなく、俳優やスタッフたちが撮影の合間に街へ出て、片言の中国語をつかってレストランや売店で注文をしたり、観光地までの道を尋ねたりと、積極的に現地の人々と交流していた様子がわかる。そうした交流の中で、著者は日本に対する中国の人々の複雑な感情を知り、日本人がそれにどう向き合うかということも考えている。ちなみに同じく映画『天平の叢』に出演した俳優の中村嘉律雄は、現地で自ら様々な風景や人々の様子を撮影しており、写真集『拝見 中国大陸』（東洋文庫〔10977〕）を刊行している。中村の説明によれば、中国ロケは 2 回実施され、1 回目は 1979 年 7～8 月に上海、蘇州、大同、北京を、2 回目は 1979 年 11～12 月に上海、西安・海南島・桂林をまわったという。（久保茉莉子）

## 上海、杭州、紹興の旅／黄浦朋友会友好訪中国

東京 黄浦朋友会友好訪中国連絡所 1980（昭和 55） 72 頁 [10879]

黄浦朋友会友好訪中国は戦前上海に滞在した人々を中心に構成され、第 1 班から第 7 班まで男性 69 名、女性 67 名の計 136 名という大規模な訪中国であった。団長は日本経済協会の岡崎嘉平太が務め、編集後記によれば参加者の平均年齢は 58 歳であった。本書には人名・職業・住所などが記された詳細な「団員名簿」とともに詳細な日程表が付され、訪中国の全容・全行程を知ることができる（1979 年 9 月 19 日～9 月 26 日までの訪問）。

上海市内を巡った後に、杭州・紹興を訪れるコースで、上海市内では魯迅記念館・魯迅の墓を訪問した後、対外友好協会上海市分会が主催する「内山完造先生逝去 20 周年記念式典」に参加した。大規模な旅行団であったためか、新村（労働者住宅団地）、人民公社の参観では班ごとに異なる訪問先を見学したほか、4 日目に第 1 班は上海工業展覽館、第 2 班は玉仏寺から豫園、第 3 班は黄浦港遊覧、第 4 班は上海紡績訪問、第 5 班は虹口巡り、第 6・7 班は自由行動、のように異なる訪問先が準備された。

興味深いのは、巻末に「黄浦朋友訪中会に参加して」というアンケートが付されている点である。旅程の改善点として多くの参加者が「自由時間が少ないこと」ことを挙げており、思い

出の地である上海をもっと自分の足で歩きたい、というのが参加者の本音だったのかもしれない。また、本書には見返しのページに漫画家である出光永によるイラスト地図が付され、訪問先の位置が一目でわかるようになっている。（山口早苗）

#### **現代中国の農業／阪本楠彦編**

**東京 東京大学出版会 1980（昭和 55） 298 頁 [10902]**

1979 年 6 月 21 日から 7 月 11 日まで北京・成都・重慶・武漢・上海などを訪問した日中農交農業経済代表团一行 10 名の記録。団長は阪本楠彦東京大学農学部教授，秘書長は中島常雄東京農業大学農学部教授。中国社会科学院からの要請による訪中である。第Ⅰ部は 5 つの人民公社と 1 つの水利施設での聞き取りの記録である。第Ⅱ部は中国社会科学院副院長于光遠の講演，農業経済研究所・北京農業大学・西南農学院・華中農学院の概要紹介と聞き取り内容である。第Ⅲ部では各団員が自身の研究内容に照らして視察結果をまとめており，報告のタイトルはそれぞれ次のとおりである。「人口政策の現状」（土屋圭造），「労働点数制と経済原則」（犬塚昭治），「労働組織と分配について」（今村奈良臣），「農業区画」と機械化の諸問題」（七戸長生），「価格政策と生産費」（梶井功），「市場と青果物流通」（中島常雄），「人民公社と集団経済」（照井信）。終章は，同年 8 月に阪本団長が「日中友好秋田県農業青年の翼」の顧問として訪中した際の記録をもとに大寨生産大隊について書かれている。巻末に付表「中国の度量衡」「農産物加工標準率」と代表団の旅程が収録されている。（池田尚広）

#### **中国経済の旅：壮大な実験に挑んだジレンマ／清水嘉健著**

**東京 情報センター出版局 1980（昭和 55） 261 頁 [10964]**

著者は 1938 年に長野県に生まれ，1941 年から 1945 年初めにかけて北京で過ごしたという経歴を持つ。1980 年，読売新聞社の記者として約 35 年ぶりに中国を訪れることとなった。読売新聞社の企画「30 歳の中国」という連載物の取材のため約 1 か月間中国に滞在し，北京－上海－南京－西安－鄭州－合肥などの各都市をめぐって当時の中国の実情を調査した。「社会主義の非効率的な面を大胆に捨て去る一方，資本主義のいい点を全面的に取り入れ（中略）壮大な経済実験に挑んでいる」中国の経済について，「思いのままにいささか偏見と独断もまじえて書きつらねた」（5 頁）ものであるという。著者が目にした光景や体験したことと関連づけながら，専門家へのインタビューや様々な資料から得られた情報に基づき，中国の歴史や地理・経済・社会問題を論じている。例えば，北京の市街地には日本のように深夜まで光り輝くネオンがないことはもちろん，車のライトやレストランの明かりも最小限であることに触れ，広すぎる国土ゆえに一人当たり発電量が日本に比べて非常に少ない中国の電力事情について分析する。また音楽会鑑賞後に劇場の外で若者たちのデモを目撃した体験を語り，「下放青年」の就職問題について説明している。こうした問題点ばかりではなく，都市建設に関して論じる部分では，北京や鄭州などで街路樹が立派であることをあげている。（久保茉莉子）

#### **10 億人の教育改革：現場の教師たちによる訪中レポート／末定征夫著**

**東京 第三文明社 1980（昭和 55） 198 頁 [10966]**

本書は創価学会教育部訪中団が 1979 年 8 月 24 日から 9 月 6 日まで北京・上海・瀋陽・ハルビンを訪れた際の旅行記である。編者の末定征夫は創価学会教育部長を務めた人物で，同訪

問は「国際教育交流の実施」の一環として企画された。このとき創価学会訪中団では、はじめて瀋陽・ハルビンを訪れたという。主に中国の学校教育の現状について団員たちが見聞きした情報がまとめられており、編者によれば「本書は友好・親善を主眼にした教育旅の「副産物」としてまとめられたレポート」だという。中国の幼稚園・小学校など様々な教育機関を訪れたが、最も多く訪問したのは大学で、滞在中には復旦大学・遼寧大学・吉林大学・ハルビン工業大学・北京大学の5つの大学を訪問した。

巻末には日中の小中学生に行った意識調査の結果が付されており、なかでも「将来の職業」についての質問では、日本では教師・医者・運動選手と答えた割合が多かったのに対し、中国では医者・軍人・研究者（科学者）・技師などに人気が集中していたことが示されており、当時の中国の状況をうかがうことができる興味深い資料となっている。（山口早苗）

**西域をあるく：ウルムチ，トルファン，蘭州，西安／全国地理教育研究会第二次友好訪中団  
東京 古今書院 1980（昭和55） 156頁 〔10981〕**

高校や中学の教員14人で構成された「全国地理教育研究会」による「西域」への旅行記。1979年8月初旬に成田を出発し、香港－広州経由でウルムチ・トルファン・蘭州・西安をめぐる。日中旅行社と中国国際旅行社の手配によるオーダーメイドの旅行で、「シルクロードとともに歩んできたトルファン、炳靈寺、蘭州、西安などの文物が何を語りかけるのか等々、限りない憧れを抱いて」の旅であった。一行は、交河故城、高昌故城、アスターナ古墳群、炳靈寺、陝西省博物館、碑林、秦の兵馬俑坑、大雁塔など、現地の遺跡や博物館を訪問したほか、ウイグル族の家庭訪問や、カザフ族の包（パオ）や騎馬演技の見学など、少数民族の風俗にも親しんだ。トルファンの招待所では偶然、作家の井上靖にも行き会っている。西域ブームをまきおこしたとされるNHK「シルクロード」シリーズの放映（1980年～）1年前の旅ではあるが、ブームにおいてステレオタイプとなるシルクロードへの憧憬や期待される観光地が、すでに確立しつつあるのが興味深い。（辻直美）

**佃実夫の中国紀行アルバム／佃実夫著**

**東京 日外アソシエーツ 1980（昭和55） 181頁 〔10935〕**

著者は文学者で、「日本文学者友好訪中団」（団長：尾崎秀樹，秘書長：滝沢直子，団員数：16名）の一員として1978年10月に訪中した。この団体は、日本中国文化交流協会による日本の文学者の12回目の訪中団であり、全額自費による初めての訪中団であったという。上海で幼少期を過ごした作家の生島治郎や安西篤子も団員として参加していた。主な訪問先は、北京の故宮・万里の長城・明の十三陵・中国歴史博物館、西安の半坡遺跡・大雁塔・陝西省博物館・華清池・乾陵、重慶の中美合作所集中營美蔣罪行展覽館、成都的都江堰・龍江路小学校・武侯祠、上海の魯迅故居・長寧区少年宮・上海図書館・復旦大学などである。また北京の対外友好協会事務所で中国人民対外友好協会副会長・全国文学芸術聯合会副会長の夏衍と面会するなど、現地の人々との交流も重視した旅となっている。本書は著者の急逝後、『思想の科学』1979年3・4月号掲載の紀行文「わが中国紀行 歴史と文学への旅」2編に加え、『徳島新聞』や『神奈川新聞』に掲載された連載、帰国後に行われた報告会の録音テープなど、様々な資料を採用して編集したものである。著者が残した資料は膨大で、23巻の録音テープと約2,000枚の写真の他、中国で購入した書籍、パンフレット類、煙草・酒・薬品・マッチ・弁当などの空

箱、劇場のプログラム、会食の献立表、乗車券、ホテルの便箋や封筒まであったという。紀行の部分では、参観場所（観光地・史跡・博物館）についての比較的詳細な解説と現地での人々との交流や体験談が述べられている。また「佃実男の中国昔話」と題するエッセイでは、著名な場所にまつわる歴史について紹介している。（久保茉莉子）

**（特派員の目）肌で感じた新中国／中野謙二著**

**東京 毎日新聞社 1980（昭和 55） 238 頁 [10883]**

著者の中野謙二はジャーナリストで、1976 年 3 月から 1979 年 4 月までの 3 年 2 ヶ月の間、毎日新聞社の海外特派員（北京支局長）を務めた人物。本書は著者が北京に特派員として滞在している期間に触れた、中国の政治・経済・社会の変化について体験記をまとめたもの。文革後期から四人組時代、華国鋒・鄧小平体制へと移る中で大きく変化した当時の中国社会を知るうえで役立つ書籍だろう。内容としては「激動の三年」「華・鄧体制の軌跡」のように中国政治を分析したものから、中国で生活する中で感じた違和感や、ウルムチ・トルファン・山東半島・廬山などを旅行した際の現地の様子、北京での生活風景などがざっくばらんに語られている。例えば、当時珍しかった自動ドアに中国の人々が驚く様子や政府の方針が緩和され犯罪が少しずつ報道されるようになったという記述から、当時の中国社会の変化をうかがえる。

（山口早苗）

**拝見 中国大陸 中村嘉葎雄写真集／中村嘉葎雄（写真と文）**

**東京 講談社 1980（昭和 55） 136 頁 [10977]**

歌舞伎役者の家に生まれ、俳優として舞台・映画・テレビの世界で活躍した著者は、中学時代にはすでに自分の暗室を持つようなカメラ狂であった。映画「天平の叢」への出演をきっかけに中国の自然に感銘を受け、また映画撮影への協力に感動した著者は、写真への熱意を再燃させ、ロケーションの行われた中国各地の光景を夢中で撮影した。本書には、1979 年 7 月から 8 月にかけて旅した上海－蘇州－大同－北京と同年 11 月初旬から 12 月にかけて旅した上海－西安－海南島－桂林の写真が収められている。清澄で穏やかな風景写真や市井に暮らす人々の表情をつぶさにとらえたスナップ写真の数々は、題材のうえでも構図のうえでも工夫が凝らされ、中国という場所とそこに生きる人々によせる著者の親近感と関心の高さを伝えている。（辻直美）

**知りたい隣の国・中国／那須宗一・高麗義久著、清水啓二（写真）**

**東京 社会保険広報社 1980（昭和 55） 231 頁 [XIII-6-B-e-8]**

著者はそれぞれ老人福祉の研究者、年金問題を扱う社会保険労務士、社会福祉をテーマに撮影をおこなう写真家で、中国の社会保障事情を視察する「社会福祉視察団」を組織して 1979 年 4 月 9 日から 22 日までの 2 週間、北京－長春－瀋陽（撫順）－天津の四都市を訪問した。本書は狭義の「旅行記」ではなく、この視察において見聞した 70 年代末の中国の庶民の暮らしぶりを物価や賃金・医療費・住居費・高齢人口比など具体的なデータをまじえながら解説したものである。当時の賃金は共働きで月 100 元、ホテルのコーヒーは一杯 80 銭で、天津の人民公社ではおよそ 1 年半分の年収で 1 軒の家を購入することができた。中国の社会は物価が安く、インフレも無いとみなされていた。

専門家である著者の観察眼は鋭い。生活費も無料の「天国」のような養老院（老人ホーム）では、生活臭のしない老人の部屋から「一定のルールに乗せられた参観」だったことを悟り、人口抑制策に対しては、「当面の問題としては理解できるが、その結果は、何十年後には日本よりもはげしい人口高齢化を迎えることになるはずだ」と疑問をさしはさんでいる。

とはいうものの、著者の根底には「日本は中国に対し明らかに歴史の罪を背負っている」という思いと、だからこそ中国人の生活に触れて友好のきずなを持ちたいとの願いがあった。「あとかぎ」には、瀋陽で見た夜間の日本語講座の熱気に対する感動が記される。（辻直美）

### **中国の河川：黄河・長江・珠江をめぐって・訪中レポート No.1／日本河川開発調査会**

**東京 日本河川開発調査会 1980（昭和 55） 177 頁 〔11035〕**

日本河川開発調査会訪中国は河川開発を行う土木技術者、研究者を中心とし、医学者やカメラマンを含んだ 28 名から構成された。大学関係者 5 名、建設省、都県の官庁技術者 11 名、民間研究機関及びコンサルタント 7 名の官民合体の編成で、1979 年 6 月 21 日から 7 月 4 日までの 13 日間、中国各地（北京・開封・鄭州・武漢・広州・香港）を巡った。この旅行は、中国旅行総社と近畿日本ツーリストの斡旋によって実現したという。

興味深いのは、通常の訪中団とは異なり、名所旧跡の見学を最小限にし、代わりに水利施設を中心に訪問の日程が組まれたことである。例えば、北京市郊外の十三陵ダムや開封市の黄河堤防、黄河展覽館、鄭州市の邙山揚水ステーション、漢口の長江大堤、水利施設を伴う花東人民公社などがそれである。また、土木の専門家が、中国国内の水利施設を見学するという目的のためか、本書にはほかの旅行記で見られるような訪中の感想はほとんど収録されておらず、訪問団の各メンバーが、滞在中に見学した施設や調査した内容を論文形式で寄せている。この点も本書がほかの旅行記と異なる特徴である。（山口早苗）

### **主婦の目でみた素顔の中国：創価学会婦人部第 1 次訪中団記録／八矢弓子編**

**東京 聖教新聞社 1980（昭和 55） 298 頁 〔10939〕**

創価学会婦人部第 1 次訪中団 55 名は 1979 年 10 月 22 日から 31 日まで上海・西安・北京を訪問した。中国側では鄧穎超が名誉主席を務める中華全国婦女聯合会が応接に当たった。創価学会では 1974 年に池田大作が団長を務めた訪中団が初めて訪中したが、この婦人部の訪問は創価学会では 4 度目の訪中に当たる。婦人団の訪問では工場や人民公社などのメジャーな見学先のほか、保育所や児童醫院など出産・教育に関わる施設に足を運んだ。なかでも産婦人科で医師を務める参加者は北京婦産院を参観した折に、婦人科の処置室や分娩室を見学し、計画出産について質問したほか、実際に針麻酔による帝王切開手術を見学し、中国医学の現状を綴っている。また、巻末には創価学会婦人部第一次訪中団一覧、中国側の交流会出席者一覧なども付されており、当時の訪中団体の全容を知るうえで一定の資料的価値があろう。（山口早苗）

### **わたしたちと中国のあいだがら／訪中記録の会**

**出版地不明 訪中記録の会 1980（昭和 55） 138 頁 〔11034〕**

本書は第三次「中国三刊日本読者友好の翼」と名付けられた訪中活動の記録である（1978 年 8 月 4 日から 16 日までの 15 日間）。三刊とは日本語雑誌『北京週報』『人民中国』『中国画報』の 3 誌のことで、雑誌読者から参加希望者を募集した。本書に寄稿したのは、訪中団に参



加したメンバーの中でも北海道、東北、北陸在住の 16 名で、それぞれ中国体験記を寄せたほか、対応に当たった中国側の関係者や中学生からの手紙などを収録している。参加者の職業は多様だが、中高の教員や大学教員が半数以上を占める。参加者は初めて訪中した者のほか、戦前中国に滞在した者、戦後に複数回中国に渡った者などさまざまであった。

同訪中国は、北京では天安門や歴史博物館、長春では吉林大学、第一自動車工場、平頂山惨案遺跡記念館、五三人民公社、中医学院などを巡った。(山口早苗)

#### 人民の沈黙：わたしの中国記／松井やより著

東京 すずさわ書店 1980 (昭和 55) 382 頁 [10961]

著者は当時朝日新聞社東京本社で編集委員を務めた人物で、外交官である夫の北京日本大使館への赴任につきそう形で中国に渡った。1975 年 8 月から翌年 1976 年 8 月まで約 1 年間滞在し、その後も半年ごとに前後 6 回にわたり、1978 年まで断続的に訪中した。本書は旅行記というよりも、正確には中国滞在記と考えてよいだろう。同時期は四人組失脚から華国鋒や鄧小平が政権を握る時期に当たり、中国社会が大きく変化した時期でもある。こうした中国社会の変化を伝えているという点で意義深い書籍だと言える。

北京滞在中に北京語言学院への入学を許された著者は「開門辦学（学校の外に出かけ、労働を行う教育活動）」に参加し、北京第二工作機械工場に 2 週間ほど実地研修に出かけている。また別の機会に人民公社へも実地研修に向い、実際に四季青人民公社を始め、北京郊外の黄土崗・南苑・中阿の三人民公社、瀋陽の五三人民公社、大寨生産大隊、延安の南泥湾国営農場などを訪問した。著者は末尾で、日本人の中国旅行者には中国の現実が見えていない、として次のように痛烈に批判している。「中国当局からの招待で入れ替わり立ち替わり北京にやってくる中国専門家や日中友好運動家たち」が「「老百姓」が日々の生活にどれほど悪戦苦闘しているかが見えないのである。だから筆をとればいいことづくめを書きつらね、「中国を正しく理解せよ」と説くのである」。当時の日中間の交流を知るうえで貴重な声であろう。(山口早苗)

#### 中国描きある記／森哲郎著

東京 盈進学園総合教育研究所出版局 1980 (昭和 55) 140 頁 [10945]

著者は漫画家で、大東文化大学教授の香坂順一を中心とする「中国研究会訪中国」（団員数：22 名）の一員として中国を訪れた。この旅行は 1979 年 10 月 26 日から 15 日間、広州・南寧・昆明・北京をめぐるというものであり、著者は各地で目にした壮麗な景色や人々の日常生活について、イラスト付きで解説している。主な訪問先は、広州仏山市の陶磁器工場、中山大学、南寧の絹紡織工場や百貨店、広西民族学院、昆明の石林・人民公社（双鳳生産大隊）、北京の友誼賓館・北京飯店・北京大学・天安門広場・頤和園・万里の長城・明の十三陵などである。著者は見学先の工場や大学について解説する際、それに関連して中国の賃金制度や進学状況などについても言及している。一方、北京中心街の交通混雑、女性たちの食事風景、公園でジョギングする人々、トランプゲームを楽しむ老人たちとそれを注意する警官など、日常生活の一コマ一コマも実に面白く描かれている。また「人民公社の子供たち」「中国の少年たち」「広州のおまわりさん」「列車服務員」「女の兵隊さん」などのイラストからは、中国で生きる様々な人々に対する著者の温かい眼差しがうかがえる。なおこの旅行には中日映画社のニュース映画班も同行し、著者たちの帰国後、11 月には中日ニュース「劇画で日中友好」が上映された。

中国中国中国／劉多鶴子著

東京 形象出版 1980 (昭和 55) 156 頁 [10995]

詩集。著者が中国で目にした光景や出会った人々と交わした言葉、中国や日本に対して抱いた率直な感情を綴っている。著者は中国で日本語学習のための教材が不足しているということを知り、「生きた感情のままの生きた言葉として日本語を掴んでいただきたい」(152 頁)という思いでこの詩集を作成した。例えば上海の黄浦江については「茶色の濁流は／夏の熱さに／プンと粘土の／匂いを漂わす／舳すれすれに行き交う船／ジャンク／客船／貨物船／砂利船／ごみ船／遊覧船／商船／タンカー／材木筏／白波を蹴たててフルスピードで上って来る」(65～66 頁)と表現している。また、「色々なものを見て来たので／優しい大きさをもつ老婦人／その中には戦争や革命をくぐり抜けて／晴々しい顔もあり／犠牲の感情の色もあった」(29 頁)、「中国の共産主義は／人民大衆のために／自分の力を尽くすことだ」(63 頁)など、著者の視点から中国社会について興味深い分析もなされている。帰国後に思いついたという詩では、「私は固く目をつぶる／私は遠くを見ている／遠く／遠く去って来た中国をみている／どの街にも通りにも／其処には／人間の顔をした人々がいたからだ／ああ／中国／中国／中国／中国／中国／東京に帰って来て／街を歩けば／私の胸はかなしくうづく／なんという淋しい街だろうと」(23～24 頁)と、帰国便で筆者が感じた中国に対する強い愛情が表されている。そのほか、旅行団についての「団長／副団長は／特権階級／遅れた時は／時間の方が従った／私は下っ端／遅刻すると／それでみんなにこづかれた」(55 頁)といった描写も面白い。著者は文化学院美術部卒業という経歴を持ち、杭州の西湖、上海の街並みや黄浦江、蘇州の虎丘の斜塔などのイラストも自ら描いている。

(久保茉莉子)

胸にささる中国：わが〈熱烈歓迎〉の旅／若槻泰雄著

東京 サイマル出版会 1980 (昭和 55) 268 頁 [10940]

著者の若槻泰雄は 1924 年山東省青島市で生まれ、1952 年に東京大学法学部を卒業後、農林中央金庫、日本海外協会連合会サンフランシスコ支部長を経て、玉川大学教授などを務めた人物で、『戦後引揚げの記録』(時事通信社、1991 年)などの著作がある。本訪問が 38 年ぶりの中国訪問であった。青島中学校の同窓会を中心として組まれた総勢 22 名の第 1 回友好訪中団は、1979 年 9 月 28 日から 10 月 13 日まで上海・済南・青島・北京を訪れた。

著者は中国滞在で得た印象を次のようにまとめている。「第一は、日本が中国で犯した悪行の再確認であり、第二は中国人の涙ぐましいばかりの努力への同情と共感」、「第三点は、中国共産党政府の大きな成果の評価」と「これに対する仮借のない批判であり、そして最後は、日中両国関係への甘い期待の否定である」。本書でたびたび批判的に語られるのが、中国国内での行動の不自由さである。中国各地を訪れても自由行動を制限しようとするガイドに不満をぶつけ、それを改善するよう求めている。故郷である青島を訪れた際には、思い出の地をもっと巡ってみたいと思うと同時に、「もう一刻も早く離れたい」と、相反する気持ちを抱く。著者はそれを「老いさらばえた昔の恋人、しかも人の妻になった恋人と会ったような気分」だと表現するが、思い出の地であった青島がすでに当時の青島とは異なっていることに幻滅、失望したようだ。ほかにも全体を通じて著者の感想が率直に記されている。

(山口早苗)

---

## LT/MT 貿易関係資料 旅行報告書 [参考 A/103]

### 華中方面出張報告書／高碕事務所

1967 年（昭和 42 年） 23 頁

北京駐在員の野口一郎，内田禎夫，東京本部の宗像善俊，須田生三が，1967 年 4 月 10 日から 17 日まで，南京，上海，蘇州，杭州を視察した記録である。訪問各都市の参観場所における見聞を概説的に記している。名所旧跡，革命関連地のほか，南京化肥廠，十月人民公社（南京），刺繡研究所（蘇州），宝山区彭浦人民公社（上海），上海市貨車製造廠，上海無線電三廠，上海音楽学院を訪問し，一部では座談会も行われている。別刷「文化大革命下の上海，南京において（華中方面視察報告）」と併せて参照されたい。（池田尚広）

### 文化大革命下の上海，南京において（華中方面視察報告）／高碕事務所

1967 年（昭和 42 年） 41 頁

前掲「華中方面出張報告書」の別刷である。「南京，蘇州，上海等の文化大革命下における工場，人民公社等の施設の状況およびその運営状況を視察し，又 1 月革命で有名な上海を中心に文化大革命の目的，その状況等について関係者と具に討論を行つた」（高碕事務所代表岡崎嘉平太「はしがき」より）。目次から抜粋すると以下の内容を含む。

「二 上海における文化大革命の状況」より，「外事関係造反隊員との座談会」「参観工場における文化革命運動の経緯」「上海音楽学院紅衛兵との座談会」。

「三 見学した産業施設の概要」より，「南京化肥廠」「10 月人民公社」「刺繡研究所」「彭浦人民公社」「上海貨車製造廠」「上海無線電三廠」。（池田尚広）

### 旅行報告書 西安・延安・長沙・韶山／日中覚書貿易事務所北京連絡事務所

1969 年（昭和 44 年） 33 頁

1969 年 9 月 9 日から 14 日まで西安，延安，9 月 18 日から 21 日まで長沙，韶山を旅行した記録である。旅行者は宗像善俊，田熊利忠，呂文忠である。中国側は中日備忘録事務所の手配，陝西省と湖南省の革命委員会の案内による。各地の人民公社，工場，名所旧跡における見聞が概説的に記されている。（池田尚広）

### 旅行報告書 上海・杭州・広東／滝川幸雄・嶋倉民生・呂文忠

1970 年（昭和 45 年） 17 頁

滝川幸雄，嶋倉民生の家族も含め計 9 名（大人 5 名，子ども 4 名）での旅行である。1970 年 5 月 7 日から 16 日まで上海，杭州，広州を訪問した。旅費概算が記されており，1 人あたり 533 元（＝79,800 円），10 日間で計 3,728 元（子どもは半額計算）とのことである。名所旧跡のほか，上海で英雄金筆廠，上海貨車製造廠，杭州で東方紅絹織物工場，西湖人民公社梅家塢大隊，杭州真空管工場，広州で広州機械工場，春季交易会を訪れている。（池田尚広）

**旅行報告書 上海・杭州／神谷和男・鈴木晃・小林二郎**

**1970 年（昭和 45 年） 17 頁**

5 月 16 日から 24 日まで上海、杭州を旅行した記録である。上海で英雄万年筆工場、彭浦新村、梅隴人民公社、上海港務局第五作業区、杭州で西湖人民公社龍井大隊、東方紅絹織物工場、杭州電子管工場を訪問しており、各地の概説が主である。（池田尚広）

**旅行報告書 南京・上海・杭州・広州／姫野瑛一・大久保勲**

**1971 年（昭和 46 年） 15 頁**

1971 年 3 月 4 日から 11 日まで、南京、上海、杭州、広州を訪問した記録である。覚書交渉のため北京を訪問していた藤山愛一郎一行より、岡崎嘉平太、古井喜実、河合良一、渡辺弥栄司、大久保任晴、片岡清一、安田佳三が旅行に参加した。北京事務所から姫野瑛一、大久保勲および常駐記者 3 名（朝日、日経、西日本）が同行したものである。名所旧跡のほか、上海機床廠、馬橋人民公社、西湖人民公社梅家塢生産大隊、東方紅絲績廠を訪問、見学している。（池田尚広）

**大寨見学報告／安田佳三・姫野瑛一・嶋倉民生 覚書貿易事務所北京連絡所**

**1971 年（昭和 46 年） 37 頁**

1971 年 10 月 23 日から 27 日まで行われた大寨人民公社視察旅行の記録である。覚書貿易事務所北京連絡所から大寨訪問は初めてであった。内容は、大寨田、大寨展覽館の見学や各生産大隊（武家坪、南堰、厚庄）責任者（陳永貴など）との会見などである。また、大寨人民公社をとりまく条件として、県営の土地造成、ダム管理、農業水利、セメント、肥料、農機具工場、農場の見学も行われた。見学を通じて「むすびに」では「文革はごく短期的には経済に悪影響を持ったかも知れないが、基本的には新しい躍進を生み出した」と、当時なりの印象が語られている。巻末に「大寨公社見学でお世話になった人々」「大寨旅費明細」「大寨見学日程」が付されている。（池田尚広）

**旅行報告書 西安・延安（含南泥湾）／小林二郎・浜口義曠・川嶋烈・平公明**

**1972 年（昭和 47 年） 27 頁**

1972 年 8 月 23 日から 31 日まで西安、延安を訪問した際の記録である。革命関連施設、名所旧跡を参観したほか、国営西北第四棉紡織廠、小新村人民公社、国立西安電機廠、陝西省第八十三中学校、延安で五・七幹部学校などを訪問している。西安の八一人民公社の訪問は雨天中止となった。訪問各地の概況が説明されているほか、革命委員会、共産党委員会から末端の生産小組までの管理体制や工場の生産体制、生産物の分配などについて簡潔な図やグラフを用いて記されている。（池田尚広）

**旅行報告書 瀋陽・鞍山・大連／古井喜実・田川誠一・松本俊一・金光貞治**

**1972 年（昭和 47 年） 7 頁**

1972 年 9 月 14 日から 19 日まで、「この東北旅行は、中国の「古い友人」古井喜実、田川誠一、松本俊一の各先生が日中国交回復を目前に控えて、中国側の招待によつて行つたもの」とされる。北京連絡所から姫野瑛一、大久保勲、寺西大三郎が随行した。瀋陽の工場、鞍山の

製鉄所、また大連の港や工場を訪問している。訪問各地の概況が簡潔に記されている。

(池田尚広)

**旅行報告書 杭州・上海・桂林・重慶・三峡・武漢・広州／1973年度覚書貿易協定交渉団  
1972年（昭和47年） 28頁**

1972年10月30日から11月11日まで、杭州、上海、桂林、重慶、三峡、武漢、広州を訪問したもの。訪中していた覚書貿易協定交渉団に北京事務所の一行が同行した。杭州で梅家塢人民公社、上海で上海電機工場、馬陸人民公社、重慶で東風機械工場、北碚玻璃器皿工場、ほか各地で名所旧跡、革命関連地を訪問、参観している。旅行者は、代表団から岡崎嘉平太、渡辺弥栄司、吉崎鴻造、大久保任晴、須田生三、飯島俊武、佐伯嘉彦、宮下春男、岡崎真、松村進、岡崎広太郎、加藤祐一、滝川幸雄ら15名、北京事務所から安田佳三、姫野瑛一、浜口義曠、大久保勲、平公明、川嶋烈、寺西大三郎ら12名、随行記者11名、駐在記者2名、日本国際貿易促進協会駐在員2名である。

(池田尚広)

**旅行報告書 長沙・韶山・武漢／井上・高向・孫**

**1972年（昭和47年） 10頁**

期間は1972年12月28日から1973年1月2日まで。短期間の旅行で、毛沢東旧居と周辺の革命関連施設の参観を中心に組まれたものと思われる。人民公社訪問は組まれておらず、工場も武漢鋼鉄公司のみである。毛沢東旧居のほかには、中国共産党湘区委員会旧址、韶山灌区展覽室、韶山陳列館などについて概況が記されている。

(池田尚広)

**旅行報告書 延安・西安／井上・大久保・高向・寺西・孫**

**1973年（昭和48年） 15頁**

1973年4月9日から15日まで、延安の革命関連施設、西安の名所旧跡を見学したものである。延安では革命博物館、4つの毛沢東旧居（鳳凰山麓、楊家嶺、棗園、王家坪）を参観し、現地の説明員や中国共産党の延安時代を知る人物から話を聞くなどしている。

(池田尚広)

**旅行報告書 広州・上海・蘇州・無錫・南京／第1班：安田、平、高向、孫 第2班：大久保勲・寺西大三郎**

**1973年（昭和48年） 15頁**

第1班は1973年4月23日から27日まで広州、上海、無錫、蘇州を、第2班は同年5月7日から14日まで上記都市に加えて南京を訪問した。広州交易会を参観し、日中双方の事務所で交易会の事情について懇談している。そのほかの日程は名所旧跡めぐりが主である。第2班は広州市から仏山市にも足を伸ばし、仏山民間芸術研究社などを参観している。（池田尚広）

**旅行報告書 長春・瀋陽・鞍山・旅大（大連）／平公明・宮下春男・高向巖・大背戸茂樹**

**1973年（昭和48年） 39頁**

旅行期間は1973年8月6日から15日である。旅行の目的は以下の3点に要約されている（一部省略）。

「過去の日本の侵略に対して、現在の東北地方の人々は日本にどのような感情を抱いているか、特に国交正常化した現状下で我々日本人をどんな感覚でみているかを知ること」

「中ソ国境に近いこの地方の対ソ戦略はどうか」

「中国における重要な重工業基地である東北の工業施設の水準を知ること」

主な参観先は次の通り。長春第一自動車廠、長春市新立城ダム、長春塘廠、瀋陽重型機械工場、瀋陽市変圧器工場、首山変電所、鞍山鉄鋼工場、大連貝彫工場、大連玻璃製品工場、大連港。  
(池田尚広)

#### **出張報告 鄭州・洛陽／大久保勲**

**1973 年（昭和 48 年） 23 頁**

期間は 1973 年 8 月 22 日から 26 日まで。現地説明者の解説を簡潔にまとめたものである。「鄭州の概況について」「河南省博物館見学」「二七大ストライキ記念塔（二七大罷工記念塔）見学」「鄭州市工芸美術試験工場（鄭州市工芸美術試験廠）」「黄河の概況について」「鄭州市郊区花園口人民公社」「洛陽について」「龍門石窟について」「洛陽市郊区工農公社南村生産大隊見学」「洛陽出土文物展覽」「洛陽東方紅拖拉機製造廠」、それぞれに説明者の所属、役職、氏名が記されている。  
(池田尚広)

#### **旅行報告書 武漢・長沙・韶山・南昌および井岡山／宮下晴男、大背戸茂樹**

**1973 年（昭和 48 年） 74 頁**

1973 年 9 月 15 日から 26 日まで、宮下晴男・登希子夫妻、大背戸茂樹の旅行記録である。毛沢東や中国共産党に関連する革命地訪問がテーマだったようである。武漢ではいくつか工場の視察もしている。各都市、各参観場所について現地説明者（所属、氏名あり）の解説に基づいて記録されており、頁数の多さからもわかるように各地の歴史、組織、細かい数字まで含め、かなり詳細である。  
(池田尚広)

#### **旅行報告書 雲南省昆明市／日本日中覚書貿易訪中代表团**

**1973 年（昭和 48 年） 9 頁**

「岡崎嘉平太会長を団長とする日本日中覚書貿易訪中代表团中国国内旅行の一環」として雲南省昆明市を訪れたもの。この期間以外にも西安、桂林を訪れたとある。旅行者は、代表团から岡崎嘉平太、松本俊一、大久保任晴、渡辺弥栄司、小堀治子、平原夫佐子、宮本治男、山口信義、羽石修三、金光貞治、長畑収。北京連絡所から安田智代子、大久保勲夫妻、宮下春男、高向巖、大背戸茂樹、瓦田栄三、日本大使館から加山泰。ほか随行記者 7 名、北京常駐記者 2 名である。市内で参観した工業展覽館、雲南省出土文物および石林について概況が記されている。  
(池田尚広)

\*本書は，東洋文庫学術情報レポジトリ／研究成果／現代中国研究班／中国旅行記プロジェクト ([https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom\\_sort&search\\_type=2&q=1695349315548](https://toyo-bunko.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=custom_sort&search_type=2&q=1695349315548)) にて PDF ファイルのかたちで全文公開している。

東洋文庫現代中国研究班編

『新編 明治以降日本人の中国旅行記（解題）』

---

2025年3月31日 発行 非売品

公益財団法人東洋文庫現代中国研究班

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-21

---